

城山北公園線都市計画街路事業に伴う 松江城下町遺跡発掘調査報告書 5

松江城下町遺跡

第16ブロック

武家屋敷

(南田町127-17外)・(南田町127-14外)・(南田町130-3外)

大橋家与力屋敷

(南田町132外)

二〇一五年三月

城山北公園線都市計画街路事業に伴う 松江城下町遺跡発掘調査報告書 5

松江城下町遺跡

第16ブロック

武家屋敷

(南田町127-17外)・(南田町127-14外)・(南田町130-3外)

大橋家与力屋敷

(南田町132外)



平成27(2015)年3月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団



大橋家与力屋敷出土の陶磁器（平成22～26年度調査）

巻頭図版 2



島状整地後の堀立柱建物跡2棟と素掘の屋敷境(北西から) [大橋家与力屋敷 第3遺構面]
奥の高まりが島状盛土部分とSB02(西侧半分)、手前がSB03、手前右の杭列付近が屋敷境 SW04



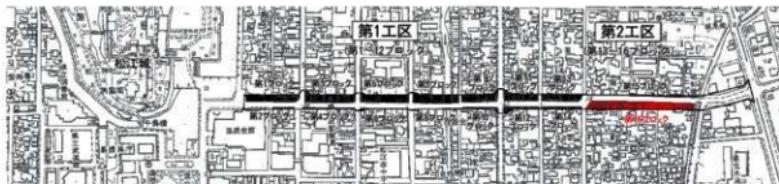
礎石建物跡と屋敷境石垣(北西から) [大橋家与力屋敷 第4遺構面]
手前が SB06(東側半分)、奥が屋敷境 SW01

例　　言

1. 本書は平成26年度に委託を受けた、城山北公園線（2工区）都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書（その2）作成事業の成果品である。
2. 本書で報告する発掘調査及び立会調査は、平成24年度から26年度にかけて島根県松江県土整備事務所から松江市教育委員会文化財課が依頼を受け、公益財團法人松江市スポーツ振興財團埋蔵文化財課が実施した調査である。
3. 遺跡名は、松江城下町遺跡の後に町名と代表番地を（カッコ）内に付記した呼称とする。
4. 立会調査は、本調査における「遺跡名」に続けて「MJR（松江城下町遺跡立会調査の略）+番号」を付加して表記する。
5. 各遺跡の詳細は以下のとおりである。なお、本書に掲載した「第16ブロック」は市道北田大橋線と田町川に挟まれた城山北公園線南側部分に位置する、東西225m×南北18m区間である。

（ブロック分け・調査区の設定については第1章第2節に詳述）

ブロック名	遺跡名	所在地	遺跡面積	本調査面積	旧調査区名	本報告
第16ブロック	松江城下町遺跡 (南田町127-17外)	松江市南田町 127番地17外	407.9m ²	261.4m ²	1-1区 1-2区	武家屋敷 調査区
	松江城下町遺跡 (南田町127-14外)	松江市南田町 127番地14外	196.4m ²	132.7m ²	2-1区	
	松江城下町遺跡 (南田町130-3外)	松江市南田町 130番地3外	199.9m ²	120.7m ²	2-2区	
	松江城下町遺跡 (南田町132外)	松江市南田町 132番地外	901.3m ²	582.1m ²	1区 2区 3区	



調査ブロック配置図(第1工区：第1～12ブロック・第2工区：第13～16ブロック)

6. 各年度の調査組織

〔平成24年度〕

調査主体者 松江市教育委員会 教育長 福島律子
事務局 松江市教育委員会文化財課 文化財課長 錦織慶樹、調査係長 赤澤秀則
専門企画員 曽田健（事務担当）、主任 川上昭一
実施者 財團法人松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課
理事長 松浦正敬
常務理事 松浦克司、事務局長 原成美
埋蔵文化財課長 藤原博、調査係長 古藤博昭、専門企画員 後藤哲男（事務担当）

〔平成25年度〕

調査主体者 松江市教育委員会 教育長 福島律子（～5月20日）、清水伸夫（5月21日～）
事務局 松江市教育委員会文化財課 文化財課長 錦織慶樹、調査係長 赤澤秀則
専門企画員 穴道元（事務担当）、主任 川上昭一
実施者 公益財團法人松江市スポーツ振興財團 埋蔵文化財課
理事長 福島律子（～5月31日）、清水伸夫（6月1日～）
常務理事 松浦克司、事務局長 原成美
埋蔵文化財課長 三島秀幸、調査係長 古藤博昭、後藤哲男（事務担当）

[平成26年度]

調査主体者 松江市教育委員会 教育長 清水伸夫
事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 安田憲司、文化財統括官 錦織慶樹
まちづくり文化財課 まちづくり文化財課長 永島真吾
埋蔵文化財調査室 調査室長 錦織慶樹、調査係長 赤澤秀則
専門企画員 穴道元（事務担当）、主任 川上昭一
実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 埋蔵文化財課
理事長 清水伸夫
常務理事 松浦克司、事務局長 原成美
埋蔵文化財課長 三島秀幸、調査係長 古藤博昭、後藤哲男（事務担当）
報告書作成業務

作成期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

調査主体者 松江市教育委員会 教育長 清水伸夫
事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 安田憲司、文化財統括官 錦織慶樹
まちづくり文化財課 まちづくり文化財課長 永島真吾

遺物指導 佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二
大田市教育委員会 教育部 石見銀山課 西尾克己
一般財団法人米子市文化財団 埋蔵文化財調査室 佐伯純也
実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 埋蔵文化財課
理事長 清水伸夫
常務理事 松浦克司、事務局長 原成美
埋蔵文化財課長 三島秀幸、調査係長 古藤博昭、後藤哲男（事務担当）
調査員 小山泰生、調査補助員 門脇祐介

7. 各遺跡・各年度の調査は以下のとおりである。

第16ブロック本調査

[平成25年度]

名 称 松江城下町遺跡（南田町127-17外、127-14外、130-3外）発掘調査
(本報告：武家屋敷調査区)
所 在 地 松江市南田町127番地17、南田町127番地7、南田町127番地14
南田町127番地15、南田町130番地3、南田町130番地10
調査期間 平成25年4月1日～平成25年9月30日
調査面積 514.8m²
調査指導 島根県教育委員会文化財課 調整監 植真治、企画幹 角田徳幸
実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 埋蔵文化財課
調査員 徳永桃代、調査補助員 渡邊真二
作業員 井川洋、犬山孝昭、岩成敏章、内田義、木村司、向村生人、中村慎市
中村道夫、中村第一、峯谷一雄
遺物整理員 金坂昇、藤原智美

[平成25～26年度]

名 称 松江城下町遺跡（南田町132外）発掘調査
(本報告：大橋家与力屋敷調査区)
所 在 地 松江市南田町132番地、南田町133番地、南田町134番地
調査期間 平成25年11月19日～平成26年7月11日
調査面積 582.1m²
調査指導 島根県教育委員会文化財課 企画幹 角田徳幸、主幹 深田浩
島根県立三瓶自然館サヒメル 企画員 中村唯史
実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 埋蔵文化財課
調査員 廣瀬貴子、調査補助員 門脇祐介（平成25年度）、原英吾（平成26年度）
作業員 岩成博美、大西正祺、加藤恵治、錦織勝美、福田紘治、船越律、和田章
遺物整理員 小原明美、坂本玲子

第16ブロック立会調査

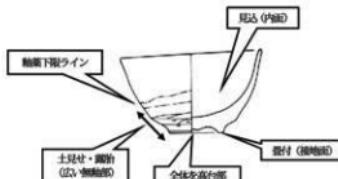
[平成24年度]

遺跡名 松江城下町遺跡（南田町130-3外地内西側）MJR312
調査期間 平成24年6月11日
調査面積 15.1m²
実施者 財團法人松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課
調査員 古藤博昭、調査補助員 清水初美

[平成26年度]

遺跡名 松江城下町遺跡（南田町132外隣接地）MJR381
調査期間 平成26年7月17日～平成26年7月22日
調査面積 141.2m²
実施者 松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室
赤澤秀則、川上昭一、徳永隆、小川真由美、高橋真紀子

8. このほか調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から多大な御指導、御教示、御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
- 大矢幸雄（松江絵図研究会）、勝浦康守（徳島市教育委員会）
乗岡実（岡山市教育委員会）、松尾信裕（大阪歴史博物館）
山根正明（元松江市文化財課史料編纂室）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）
9. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書・整理および遺構の浄書は、以下の者がおこなった。
千代田絵美、木村由希江、門脇祐介、小山泰生
10. 本書に記載した現場写真は各調査担当者、遺物写真は小山が撮影した。
11. 出土遺物のうち文字資料の判読は、内田文恵氏、和田美幸氏（松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課史料編纂室）の御教示を得た。
12. 本書の執筆は、第1・2・3・4・7章を小山が、第5章を門脇が執筆した。また、編集は松江市まちづくり文化財課の協力を得て小山がおこなった。
13. 本書における肥前陶磁器の区分・分類・編年は以下を参照した。
陶磁器編年：『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会 2000年
14. 本書における方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第三系の値である。また、レベル値は海拔標高を示す。
15. 本書における遺構記号は以下のとおりである。
SA=柵 SB=建物 SD=溝 SJ=土器埋設 SK=土坑 SL=炉 SN=壺 SP=柱穴 SS=礎石 SW=石垣 SX=不明遺構
遺構番号は調査時に設定したものを報告書作成にあたり、調査区毎に種別の番号を振り直した。
本書では本調査（武家屋敷調査区・大橋家与力屋敷調査区）及び立会調査を通して連番で表記している。
16. 本調査及び立会調査における「土層の色・質」
は、調査時の記載そのまま使用している。
17. 遺物の部位名称は、右記の図を参照。
18. 肥前陶磁器の時期区分は以下のとおりである。
I期 1580～1610年代
II期 1610～1650年代（磁器の場合は1610～）
III期 1650～1690年代
IV期 1690～1780年代
V期 1780～1860年代
19. 掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを明記した。掲載した遺物実測図の縮率は原則、陶磁器・土師器・ガラス製品は1/3、木製品・瓦は1/4、金属製品・石製品・錢貨は1/2とする。
陶器と磁器を区別するために磁器の断面は黒で塗色している。また、漆器は塗色し、陶磁器の施釉範囲（鉄釉・青磁釉）および土師器の油煙痕は網目で表現している。
20. 遺物組成表および本文中の遺物数は破片数を1点とカウントした数量である。
21. 出土遺物、実測図および写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。
22. 調査区平面図は、島根県松江県土整備事務所から提供された工事図面を浄書して使用した。



本文目次

例 言

第1章 序 言

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と概要	2
第3節 報告書の経過と作成	6

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 地理的環境	7
第2節 周辺の歴史的環境	8
第3節 城下町絵図に見る調査地とその周辺	15

第3章 武家屋敷の調査

第1節 調査手法と基本層序	19
第2節 城下町造成以前の旧地表面	22
第3節 第1遺構面	23
第4節 第2遺構面	31

第4章 大橋家与力屋敷の調査

第1節 調査手法と基本層序	43
第2節 旧地表面以下	46
第3節 城下町造成以前の旧地表面	47
第4節 第1遺構面	48
第5節 第2遺構面（竈跡）	53
第6節 第3遺構面（鍛冶炉・掘立柱建物跡・島状整地）	62
第7節 第4遺構面（礎石建物跡）	75
第8節 第5遺構面	82
第9節 第6遺構面	93

第5章 立会調査

第1節 MJR312	97
第2節 MJR381	99

第6章 自然科学分析

第1節 分析方法	101
第2節 分析結果	102
第3節 地層の乱れについて	104
第4節 柱材について	104
第5節 局地花粉帯の設定	105
第6節 古環境推定	108
第7節 小結	111

第7章 総 括

第1節 遺構の変遷	115
第2節 遺物組成 一大橋家与力屋敷（B屋敷）の出土遺物一	124
第3節 城下町造成以前の旧地表と造成後の地形	133
第4節 大橋家与力屋敷における建物基礎の地下構造（石材・柱材）	135
第5節 結語	141

遺物観察表

図 版

報告書抄録

挿図目次

島根県・松江市位置図			
第1図 調査地の位置	1	第65図 SB02 (B屋敷) 平面図・柱穴断面図	66
第2図 調査区配置図(調査ブロック)	2	第66図 SB03 (B屋敷) 平面図・柱穴断面図	67
第3図 調査区配置図(第16ブロック)	3	第67図 B屋敷平面地形測量図(島状整地)	68
第4図 松江城下町遺跡基本土層図	5	第68図 島状地土層断面図(南北横断面)	68
第5図 周辺の主な中世以降の城館跡・遺跡位置図	8	第69図 SD03平面図・断面図	69
第6図 富田城と松江城の位置	10	第70図 SA01平面図・断面図	69
第7図 松江藩主の系団と家紋	10	第71図 SS01平面図	70
第8図 城下町造成以前の松江	11	第72図 SK20平面図・断面図	70
第9図 堀尾朝松江下町下絵図	11	第73図 SK20出土遺物	70
第10図 堀尾朝松江下町下絵図	15	第74図 第3造構面(A・B屋敷) 遺構外出土遺物(1)	72
第11図 寛永年間松江城家敷町之図	15	第75図 第3造構面(A・B屋敷) 遺構外出土遺物(2)	73
第12図 出雲国松江城絵図	16	第76図 SB04・05 (C屋敷) 平面図・柱穴断面図	74
第13図 松江城絵図	16	第77図 大橋家与力屋敷第4造構面全体図	76
第14図 松平期松江城下町絵図	16	第78図 SW01平面図・立面図	77
第15図 松江市街図	17	第79図 SB06 (B屋敷) 平面図・礎石断面図	78
第16図 松江市都計画図	17	第80図 第4造構面(B屋敷) 遺構外出土遺物(1)	80
第17図 第16ブロック武家屋敷調査区配置図	19	第81図 第4造構面(B屋敷) 遺構外出土遺物(2)	81
第18図 武家屋敷基本土層図	21	第82図 大橋家与力屋敷第5造構面全体図	83
第19図 武家屋敷日面表面平面図	22	第83図 SW02平面図・立面図	84
第20図 武家屋敷第1造構面全体図	24	第84図 SA03平面図・断面図	84
第21図 SD01平面図・断面図	25	第85図 SB07 (B屋敷) 平面図・礎石断面図	85
第22図 柱穴平面図・断面図(1)	26	第86図 SK22・SJ01平面図・断面図	86
第23図 柱穴平面図・断面図(2)	27	第87図 SK22・SJ01出土遺物	86
第24図 SK01平面図・断面図	28	第88図 SK23平面図・断面図	87
第25図 SK01出土遺物	28	第89図 SK23出土遺物	87
第26図 SK02平面図・断面図	28	第90図 第5造構面(B屋敷) 遺構外出土遺物(1)	89
第27図 SK02出土遺物	28	第91図 第5造構面(B屋敷) 遺構外出土遺物(2)	90
第28図 SX01平面図	29	第92図 第5造構面(B屋敷) 遺構外出土遺物(3)	91
第29図 第1造構面遺構外出土遺物	30	第93図 第5造構面(B屋敷) 遺構外出土遺物(4)	92
第30図 武家屋敷第2造構面全体図	32	第94図 大橋家与力屋敷第6造構面全体図	93
第31図 SK07平面図・断面図	33	第95図 SS02平面図・断面図	94
第32図 SK07出土遺物(1)	34	第96図 第6造構面遺構外出土遺物	95
第33図 SK07出土遺物(2)	35	第97図 MJR312・381会調査地点位置図	97
第34図 SK08平面図・断面図	36	第98図 MJR312会調査地位位置図	97
第35図 SK08出土遺物(1)	37	第99図 SW03断面図(上図)・屋敷縫推定地点(下図)	98
第36図 SK08出土遺物(2)	38	第100図 MJR381会調査地位位置図	99
第37図 SK09平面図・断面図	39	第101図 MJR381西側土層断面図(東壁)	100
第38図 SK09出土遺物	39	第102図 調査地周辺の素掘の大溝検出地点と推定ライン	100
第39図 第2造構面遺構外出土遺物(1)	40	第103図 MJR381東側土層断面図(南壁)	100
第40図 第2造構面遺構外出土遺物(2)	41	第104図 調査区平面図及び試料採取地点	101
第41図 第2造構面遺構外出土遺物(3)	42	第105図 古文書写真観察結果	103
第42図 近現代の遺物	42	第106図 南田町T132地点第3造構面: B屋敷 柱材の分布	105
第43図 第16ブロック大橋家与力屋敷調査区配置図	43	第107図 花粉ダイアグラム(1)	106
第44図 大橋家与力屋敷基本土層図	45	第108図 花粉ダイアグラム(2)	107
第45図 旧地表面以下の土層断面図	46	第109図 植物珪酸体ダイアグラム	108
第46図 旧地表面以下及び直上の出土遺物	46	第110図 旧地表面(武家屋敷)	115
第47図 大橋家与力屋敷地表面平面図	47	第111図 第1造構面(武家屋敷)	116
第48図 大橋家与力屋敷第1造構面全体図	49	第112図 第2造構面(武家屋敷)	116
第49図 SB01平面図・柱穴断面図	50	第113図 旧地表面(大橋家与力屋敷)	117
第50図 SK13平面図・断面図	51	第114図 第1造構面(大橋家与力屋敷)	118
第51図 SK13出土遺物	51	第115図 第2造構面(大橋家与力屋敷)	119
第52図 第1造構面遺構外出土遺物	52	第116図 南田町内地内踏査状況	119
第53図 大橋家与力屋敷第2造構面全体図	54	第117図 第3造構面(大橋家与力屋敷)	120
第54図 岩跡SN01平面図・断面図(部分)	56	第118図 第4造構面(大橋家与力屋敷)	121
第55図 岩跡土層分析地点断面図(地点1・2)	56	第119図 第5造構面(大橋家与力屋敷)	122
第56図 SK17平面図・立面図・断面図	57	第120図 第6造構面(大橋家与力屋敷)	122
第57図 SK17出土遺物	57	第121図 松江開港都市計画図での比較地点	134
第58図 SK18平面図・立面図・断面図	57	第122図 城下町造成以前の旧地表と造成後の地形	134
第59図 SK19平面図・断面図	58	第123図 松江市周辺の主な石材産地分布図	135
第60図 SN01耕作土中出土遺物(1)	59	第124図 大橋家与力屋敷調査区第3造構面: B屋敷	
第61図 SN01耕作土中出土遺物(2)	60	柱材分析地点	137
第62図 SN01耕作土中出土遺物(3)	61	第125図 大橋家与力屋敷立柱建物跡出土柱材実測図(1)	137
第63図 大橋家与力屋敷第3造構面全体図	63	第126図 大橋家与力屋敷立柱建物跡出土柱材実測図(2)	138
第64図 SL01平面図・断面図	64	第127図 大橋家与力屋敷における建物地下構造模式図	140

挿表目次

表1 発掘調査報告書経過一覧	6	表17 大橋家与力屋敷（B屋敷）出土肥前磁器組成表	132
表2 主な中世山城の城主の変遷	9	表18 城下町造成以前の旧地表と造成後の地形標高一覧	134
表3 松江藩主の時期区分	13	表19 村社觀察表	137
表4 松江城下町の変遷を示す絵図	17	表20 武家屋敷（南田町127-17外・127-14外・130-3外）	
表5 武家屋敷・与力屋敷の屋敷地名義の変遷	18	表21 武家屋敷 跖貨觀察表	144
表6 松平家々譜並御帳写に記載のある 大橋家の人物名	18	表22 武家屋敷 金屬製品遺物觀察表	145
表7 樹種同定結果一覧	105	表23 武家屋敷 石製品遺物觀察表	145
表8 大橋家与力屋敷構面の時期一覧表	123	表24 武家屋敷 木製品遺物觀察表	145
表9 第1造構面出土陶磁器組成一覧表	125	表25 大橋家与力屋敷（南田町132外）	
表10 第2造構面出土陶磁器組成一覧表	126	陶磁器・土師器皿遺物觀察表	146
表11 第3造構面出土陶磁器組成一覧表	127	表26 大橋家与力屋敷 銭貨觀察表	148
表12 第4造構面出土陶磁器組成一覧表	128	表27 大橋家与力屋敷 金屬製品遺物觀察表	148
表13 第5造構面出土陶磁器組成一覧表	129	表28 大橋家与力屋敷 石製品遺物觀察表	148
表14 第6造構面出土陶磁器組成一覧表	130	表29 大橋家与力屋敷 土製品遺物觀察表	148
表15 大橋家与力屋敷（B屋敷）出土 土師器皿・陶磁器組成一覧	131	表30 大橋家与力屋敷 木製品遺物觀察表	148
表16 大橋家与力屋敷（B屋敷）出土 陶磁器产地別組成	131	表31 大橋家与力屋敷 瓦遺物觀察表	148

図版目次

卷頭図版 1 大橋家与力屋敷出土の陶磁器		図版14 第3造構面 鐵冶炉SL01	
卷頭図版 2 島状整地後の掘立柱建物跡2棟と素掘の屋敷境 礎石埋め跡と屋敷境石垣		鐵冶炉SL01断ち割り状況	
図版1 武家屋敷調査区(西側) 城下町造成以前の旧地表面 武家屋敷調査区(中央) 城下町造成以前の旧地表面		大橋家与力屋敷調査区(中央) 第3造構面 B屋敷：	
図版2 武家屋敷調査区(西側) 第1造構面(南東から) 武家屋敷調査区(西側) 第1造構面(南西から)		SB02(西側半分)、SB03、SD04	
図版3 武家屋敷調査区(中央) 第1造構面 武家屋敷調査区(東側) 第1造構面		B屋敷：SB02(東側半分)、SD03	
図版4 武家屋敷調査区(西側) 第1造構面 素掘溝SD01 城山北公園線道路の鉄型路とSD01 SD01土層断面		B屋敷：SB03	
SD01埋土中のシグ数き		島状整地：表口側の版築状土層堆積	
図版5 第1造構面 柱穴1、第1造構面 柱穴2		島状盛土部分台形状の土層断面	
第1造構面 柱穴3、第1造構面 柱穴4		第3造構面 SB02の北側柱穴SP03	
第1造構面 柱穴5、第1造構面 柱穴6		第3造構面 SB02の北側柱穴SP07	
第1造構面 柱穴7、第1造構面 柱穴8		第3造構面 SB02の南側柱穴SP15	
図版6 第1造構面 SK01		柱穴SP15断ち割り状況	
第1造構面 SK02		第3造構面 柱穴SP13の柱と礎盤石	
第1造構面 磬敷SX01		第3造構面 SK20	
図版7 武家屋敷調査区(西側) 第2造構面 武家屋敷調査区(中央) 第2造構面 武家屋敷調査区(東側) 第2造構面		第3造構面 屋敷境SD03	
図版8 第2造構面 SK05、第2造構面 SK06 武家屋敷調査区(東側) 第2造構面 SK07		屋敷境SD03素掘れ土層断面	
SK07出土 地隅切折敷板瓦		屋敷境SD03に付属する石列ISS01	
SK07出土 角型差込下駄		第3造構面 屋敷境SD04	
図版9 武家屋敷調査区(中央) 第2造構面 SK08		屋敷境SD04 溝東側脚部の杭列1	
SK08埋土中の木本・木片、SK08出土 陶器・木箱		屋敷境SD04 溝東側脚部の杭列2	
SK08現状調査 第2造構面 SK09		大橋家与力屋敷調査区(東側) 第4造構面 B屋敷：	
図版10 大橋家与力屋敷調査区(東側) 城下町造成以前の旧地表面 旧地表のミナ状堆積と盛り返される土層 旧地表と旧地表以下の土層堆積状況 旧地表面直上の植物相(地衣類) 旧地表面直上出土 陶器		SB06(東側半分)、SW01	
図版11 大橋家与力屋敷調査区(東側) 第1造構面 第1造構面 SK14		B屋敷：SB06(西側半分)	
第1造構面 SK16		第4造構面 屋敷境石垣SW01、屋敷境石垣SW01近景	
第1造構面出土 肥前陶器皿		大橋家与力屋敷調査区(東側) 第5造構面 B屋敷：	
第1造構面出土 潟戸・美濃陶器皿		SB07(東側半分)、SW02	
図版12 大橋家与力屋敷調査区(東側) 第2造構面 岩脉SN01 第2造構面 SN01號・欲闇溝		B屋敷：SB07(西側半分)	
図版13 第2造構面 埋籠SK17		第5造構面 磬敷SX02	
第2造構面 埋籠SK18		第5造構面 屋敷境石垣SW02	
		第5造構面 埋籠SK22、埋籠SK22完掘状況	
		第6造構面 石列SS02、石列SS02南側	
		図版20 立会調査 MJR312 SW03石垣近景	
		立会調査 MJR381 調査区西側土層断面	
		図版21~22 武家屋敷 第1造構面出土遺物	
		図版22~28 武家屋敷 第2造構面出土遺物	
		図版28 近現代遺物	
		図版29 大橋家与力屋敷 旧地表面以下、直上出土遺物	
		図版29 大橋家与力屋敷 第1造構面出土遺物	
		図版30~32 大橋家与力屋敷 第2造構面出土遺物	
		図版32~34 大橋家与力屋敷 第3造構面出土遺物	
		図版34~35 大橋家与力屋敷 第4造構面出土遺物	
		図版36~39 大橋家与力屋敷 第5造構面出土遺物	
		図版39~40 大橋家与力屋敷 第6造構面出土遺物	

第1章 序 言

第1節 調査に至る経緯

史跡松江城の南東に位置する大手前（殿町）から南田町に向かう城山北公園線（主要地方道松江鹿島美保関線の一部及び県道本庄福富松江線の一部、通称：大手前通り）は、現在すでに4車線化されている宍道湖大橋と国道485号線（通称：くにびき道路）を結ぶ松江市内循環線の一部として東西を連結させる重要な幹線となっている。現在の大手前通りは2車線あるものの、歩道が狭小で右折レーンが確保されていないなど、幹線として十分な機能が保たれていない。

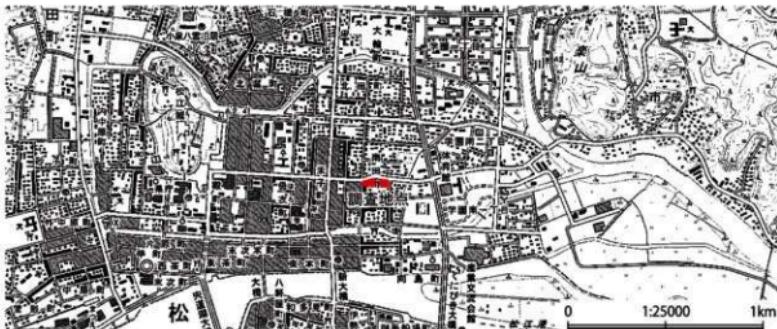
このため島根県では、殿町から学園南の国道485号線（くにびき道路交差点）までの東西1,040m区間を「3.3.30都市計画道路 城山北公園線」として、現在2車線の車道の4車線化と両側5mの歩道を整備し、交通渋滞の緩和と歩行者の安全確保を目的とした道路拡幅工事をおこなうことになった。

工事は、市道北田大手前線から市道南田南北線までの間を「第1工区」とし、市道南田南北線から国道485号線までの間を「第2工区」として実施している。工事範囲は、第1工区：東西全長620m、城山北公園線北側への拡張は10～13m・同線南側への拡張は4～7mで、第2工区：東西全長420m、城山北公園線北側への拡張は13m・同線南側への拡張は4～18mである。

道路拡幅範囲は、平成18年度から実施している松江城下町遺跡発掘調査成果から近世城下町遺跡の範疇にあたるものと考えられるため、松江市教育委員会は本工事に先立って用地買収の完了した地点から隨時試掘調査を実施し、遺跡を確認した地点については文化財調査をおこなうこととしている。

本報告での調査対象地は、第2工区内の市道北田大橋線から田町川西岸までの東西225m区間に該当する第16ブロックである。調査地の詳細は江戸時代の武家屋敷（松江藩直臣屋敷）に比定される第16ブロック西側：松江城下町遺跡（南田町127-17外・127-14外・130-3外）地点と、大橋家与力屋敷（松江藩陪臣屋敷）に比定される第16ブロック中央部：松江城下町遺跡（南田町132外）地点、第16ブロック地内で実施した立会調査（MJR312・MJR381）地点である（第1図）。

各調査区の設定については、本章第2節で詳述する。



第1図 調査地の位置

第2節 調査の方法と概要

1 調査区の設定（第2図）

第16ブロックは、市道北田大橋線から田町川に挟まれた城山北公園線沿いの南側部分、東西225.0m×南北18.0mの区画にある。

本報告で該当する調査地点は第16ブロック調査区のうち、平成25～26年度に調査を実施した調査区西側：松江城下町遺跡（南田町127-17外・127-14外・130-3外）の東西50.4m×18.0m区画と調査区中央部：松江城下町遺跡（南田町132外）の東西50.0m×18.0m区画を取り扱う。

現地調査時における調査区の設定は、第16ブロック調査区西側の松江城下町遺跡（南田町127-17外）では周辺民家の進入路や作業ヤードの確保等の必要性から東西に2分割して調査を実施し、松江城下町遺跡（南田町127-14外・130-3外）では分割せず1つの調査区で調査を実施している。第16ブロック調査区中央部の松江城下町遺跡（南田町132外）では東西に3分割して調査を実施している（各調査区の調査面積・調査期間の詳細は例言を参照）。

本報告では、絵図や文献⁽¹⁾から第16ブロック調査区西側は武家屋敷、中央部は大橋家与力屋敷に比定されることを根拠として、松江城下町遺跡（南田町127-17外・127-14外・130-3外）を「武家屋敷調査区」、松江城下町遺跡（南田町132外）を「大橋家与力屋敷調査区」と呼称し、第3章および第4章においてそれぞれの報告をおこなうこととした⁽²⁾。

遺構番号は調査時には遺構を検出した段階で任意に設定しているが、報告書作成の整理作業において2つの調査区および遺構面を通して連番に振り直した。遺構面数は、それぞれの調査区の試掘調査成果に基づき、現地調査時に人為的な整地層や遺構の掘り込み面をもとに認定した。また、本調査中の土層堆積状況を観察しながら遺構面の検出に努め、必要に応じて面数を追加している。

本調査の結果、武家屋敷調査区では旧地表面と2面の遺構面を検出し、大橋家与力屋敷調査区では旧地表面と6面の遺構面を検出した。遺構面は、調査時の段階では上層から検出した順に「第1遺構面」、「第2遺構面」…「第6遺構面」と呼称していたが、本報告では遺構面を最下層の旧地表面を始めとして、17世紀代初頭の時期から順に「第1遺構面」、「第2遺構面」…「第6遺構面」と呼称して取り扱い、古い順に記載する。



第2図 調査区配置図（調査ブロック）

2 調査の方法

調査地は建物が密集する中心市街地であり、調査には多くの制約を伴った。本発掘調査は基本的に矢板を打設せず、官民境界部分と車道との間に緩衝帯を設けて安全勾配45°を確保しながら掘り下げた。また、近隣住民の進入路や調査時における作業ヤードの確保及び廃土処理の必要などから、調査区を東西に大きく2~3分割して調査を実施した（第3図）。

調査は年度を跨いで実施した調査区もあり、遺構や土層の整合性が図れるかという点が懸念されたが、本報告書作成段階において遺構面の整合・遺構および土層の連続性の検証に努めた。

調査時の掘削は現地表下の搅乱層の除去はバックホーによる重機掘削をおこない、以下は人力により遺構面まで掘り下げて精査・遺構検出を実施した。遺構検出時の作業内容は、遺構検出状況写真撮影→遺構の半截→土層断面図化→土層観察→遺構の完掘→完掘写真撮影→平面図化→レベリング作業である。立会調査は遺構を検出した時点で工事を中断し、可能な限り遺構検出と土層観察をおこなって記録を取るよう努めた。遺物は重機で掘り上げられた土を選別しながら採取を実施した。

測量はトータルステーションを用い、必要に応じて遺り方測量・平板測量を併用した。遺物の取り上げや建物跡などの平面遺構測量においては、5m四方のグリッドを基準として測量をおこなった。

土層断面図はレベルを用いて手作業で測量をおこない、土色の注記は新版標準土色帖を使用した。方位については、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。

写真撮影は、35mm・120mmリバーサルフィルムとモノクロームフィルムおよび一眼レフデジタルカメラを用いておこなった。



第3図 調査区配置図（第16ブロック）



松江城と調査地（写真提供：島根県松江県土整備事務所）

3 本調査の概要

松江城下町遺跡の調査開始以前は、城下町遺跡が現在の中心市街地と重複していることから大部分が消滅していると考えられていた。しかし、平成18年度から本格的に始まった松江城下町遺跡発掘調査により、今回の調査地を含む城下町の地下には非常に良好な状態で遺跡が残っていることが明らかとなってきた。

調査地周辺の状況は、近年まで大手前通りに面して民家や店舗が建ち並んでいた。江戸時代においては絵図や文献史料を見ると侍町となっており、第16ブロック西側には堀尾氏の時代から幕末まで連續と続く武家屋敷が存在していた。武家屋敷以東から田町川西岸までの区間には、松平氏の時代から家老である大橋茂右衛門の与力屋敷となっていた^⑩。以下、調査地点ごとに概要を述べる。

(1) 武家屋敷（直臣屋敷）の調査

発掘調査では遺跡の大半が搅乱で消失していることから、旧地表面と2面の遺構面の検出に留まっている。城下町形成以前の旧地表面は、当地では自然状態のままの低湿地であることが判明した。

第1遺構面の主要な遺構として、調査区西端で検出した素掘溝（SD01）がある。その他に柱穴や土坑を多数検出しているが、建物跡などの明瞭な復元には至っていない。

第2遺構面の主要な遺構として、17世紀代中頃以降と考えられる柱穴や幕末～明治以降の大形庵衆土坑（SK07・08）がある。ただし、第2遺構面として扱った遺構は搅乱層を除去した段階で検出した遺構であり、一部に生活面が残っていることは否定しないが搅乱を免れた様々な時期の遺構を検出している可能性があり、厳密な意味での遺構面ではない。遺構面出土遺物として取り上げられている遺物の中には明らかに後世の遺物や混入品があり、遺物が示す年代も幅広く様々な時期のものが含まれているため、当遺跡の調査成果のみでの分類は難しい状況である。

(2) 大橋家与力屋敷（陪臣屋敷）の調査

発掘調査では旧地表面と6面の遺構面を検出している。ここでは遺構面として捉えていないが、自然堆積層（Ⅲ層）までのトレンチ調査を実施したところ、城下町形成以前の旧地表面以下の土層から15世紀代後半の中国白磁が1点出土した。この遺物が出土したことにより旧地表面である茶褐色有機質土（ラミナ層）は15世紀代後半を過らない可能性が考えられ、新たな知見が得られた。

城下町形成以前の旧地表面は、この地点でも自然状態のままの低湿地であることが判明し、自然流路（NR01）や一部で苔の痕跡を検出している。

第1遺構面の主要な遺構として、掘立柱建物跡1棟（SB01）、土坑7基（SK10～16）がある。

第2遺構面の主要な遺構として畠跡（SN01）がある。畠跡では畠や畠間の遺存状態が良く、畠は整然と並んだ状態で検出している。堀尾期・京極期絵図では屋敷地区画は描かかれているものの屋敷地名義は記載されておらず、空閑地となっていた状況が看取される事実とも呼応している。検出した畠跡は、当地東側に隣接する南田町134-11外・136-13外（松江城下町遺跡発掘報告書4：調査1区第2遺構面）で検出した畠跡と連続する遺構として捉えられる。この地点でも空閑地=畠地と想定出来る重要な調査所見が得られた。その他に埋籠2基（SK17・18）、土坑1基（SK19）を検出している。

第3～5遺構面では、検出した屋敷境を根拠として屋敷地区画が明らかとなつたため、調査区東側

から「A屋敷」、「B屋敷」、「C屋敷」と呼称する（与力屋敷の屋敷地名義の変遷は第2章第4節に詳述）。

第3遺構面の主要な遺構として鍛冶炉（SL01）、掘立柱建物跡4棟（SB02～05：B・C屋敷）、屋敷境溝2条（SD03・04）がある。屋敷境の検出によって与力屋敷の間口（表口）の復元が可能となっている。その他に屋敷地の造成手法として、島状整地が採用されている状況を確認した。

第4遺構面の主要な遺構として礎石建物跡1棟（SB06：B屋敷）、雨落溝1条（SD06）、屋敷境石垣（SW01）がある。礎石建物跡は良好な状態で遺存していたB屋敷のみの検出となつたが、建物の形態が掘立柱建物から礎石建物へと変化し、屋敷境の形態も素掘溝から石組へ変わることが判明している。

第5遺構面の主要な遺構として礎石建物跡1棟（SB07：B屋敷）、屋敷境石垣（SW02）、埋垣1基（SK22）、埋甕1基（SJ01）がある。建物跡は上層からの搅乱の影響を受け全容は不明だが、第4遺構面で検出した礎石と位置が重複していることから、建替えや増改築の可能性が考えられる。

第6遺構面は大半が搅乱により消失している。明瞭な建物跡などは遺存せず、石列（SS02）を検出した。ただし、第6遺構面として扱った遺構は搅乱層を除去した段階で検出した遺構であり、搅乱を免れた遺構を検出している可能性がある。

4 松江城下町遺跡の基本土層（第4図）

松江城下町は嵩上げ造成により現在の生活面の高さとなっており、現地表は松江城に近い殿町で標高2.00m、南田町で標高1.50mである。松江城下町遺跡の基本土層は、平成24年度の松江城下町遺跡検討会において城下町の層序を表す上で、下層からⅢ・Ⅱ・Ⅰ・A・B・C層の考え方方が示された^⑤。

以下、この提示に当てはめて松江城下町遺跡の基本的な層序を概観する。

C層：近現代の搅乱層（層厚は調査地点で異なる）

B層：江戸時代の造成土（層厚：1m前後）

B層は調査地点によって山土、砂屑、ゴミ層などがあり統一ができない。土層は数単位に細分可能であり、初期造成以後に少なくとも2～3回にわたる嵩上げ造成をおこなっている。

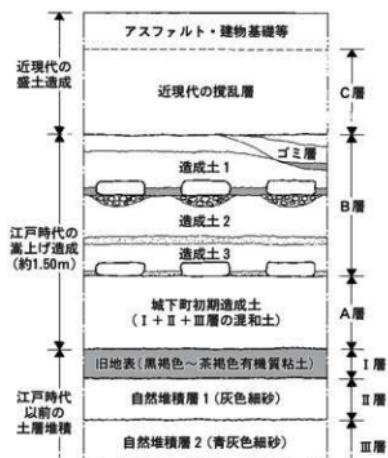
A層：城下町造成当初の盛土層（層厚：約0.3m）

A層は基本的にⅠ+Ⅱ+Ⅲ層の混和土で構成される。城下町造成以前の旧地表面（Ⅰ層）上に盛られていることを根拠に城下町初期造成土としている。

I層：城下町造成以前の旧地表（層厚：約0.1m）

I層はⅡ～Ⅲ層の上面にはほぼ均一の厚さで水平堆積している黒褐色～茶褐色有機質粘土である。松江城下町遺跡の広い範囲に同様の層序で検出されることがから鍵層としている。

II～III層：灰色～青灰色細砂の自然堆積層



第4図 松江城下町遺跡基本土層図

第3節 報告書の経過と作成

現地調査においては用地買収が完了した場所から調査を実施しているが、発掘調査の報告にあたっては近世松江城下町の屋敷配置等を考慮して、東西方向に横断する城山北公園線および南北方向に縦断する道路を軸にひとつの境界として便宜的にブロック分けをおこない、ブロックごとに報告書を刊行している。（第1工区＝第1～12ブロック、第2工区＝第13～16ブロック）

松江城下町遺跡の発掘調査報告書は、現在までに7冊⁽⁵⁾刊行され、そのうち城山北公園線都市計画街路事業に伴う報告書は前年度までに4冊刊行されている。

城山北公園線都市計画事業に伴う発掘調査報告書の経過は表1のとおりである。

表1 発掘調査報告書経過一覧

刊行年度	報告書名	工区	ブロック	調査地
平成23年度	松江城下町遺跡発掘調査報告書1	第1工区	第5ブロック	母衣町地内
			第11ブロック	南田町地内
平成24年度	松江城下町遺跡発掘調査報告書2	第1工区	第1ブロック(西側)	殿町地内
			第3ブロック	殿町・母衣町地内
平成25年度	松江城下町遺跡発掘調査報告書3	第1工区	第4ブロック	殿町・母衣町地内
			第1ブロック(東側)	殿町地内
			第6ブロック	母衣町地内
			第7ブロック	母衣町地内
			第8ブロック	母衣町地内
			第9ブロック	米子町地内
			第10ブロック	米子町地内
			第12ブロック	南田町地内
平成26年度	松江城下町遺跡発掘調査報告書4	第2工区	第16ブロック(東側)	南田町地内
	松江城下町遺跡発掘調査報告書5	第2工区	第16ブロック(西側・中央部)	南田町地内

本報告は平成25年度刊行の「松江城下町遺跡発掘調査報告書4」に引き続き、同ブロック内（第16ブロック）の報告となる。「松江城下町遺跡発掘調査報告書5」は、第16ブロックのうち西側の武家屋敷に比定される松江城下町遺跡（南田町127-17外・127-14外・130-3外）地点、中央部の大橋家与力屋敷に比定される松江城下町遺跡（南田町132外）地点、第16ブロック地内で実施した立会調査（MJR312・MJR381）地点の発掘調査報告である。

註

- 根拠とした絵図は「堀尾期松江城下町絵図」、「寛永年間松江城家敷町之図」、「松平期松江城下町絵図」である。文献は「松江藩列土録」、「雲藩職制」、「中国五県土地租税資料文庫のうち松江城下武家屋敷明細帳」を参考史料とした。
- 平成25年度に刊行した『松江城下町遺跡発掘調査報告書4』では、第16ブロック東側の松江城下町遺跡（南田町134-11外・136-13外）を調査1区、松江城下町遺跡（南田町137-13外）を調査2区と呼称して扱っている。報告書4との連動性を考慮した場合、「武家屋敷」とした地点は調査3区、「大橋家与力屋敷」とした地点は調査4区という呼称となる。
- 大橋茂右衛門の屋敷地内北側に設けられた大橋家直属の家臣屋敷である。松平期の絵図には8軒の与力屋敷が記載される。
- 松江城下町遺跡検討会（平成24年5月）で提示された城下町土層解釈の基準。このうちB層は遺跡の調査地点によって堆積状況が様々であり共通層ではない。現段階ではB層以外の土層について共通の認識ができ始めたという状況にある。
- 城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書以外のものは、『松江城下町遺跡（殿町287番地）（殿町279番地外）』、『松江城下町遺跡（母衣町100外）』、『松江城下町遺跡（母衣町127-2）（母衣町128）（母衣町198-1）』がある。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 地理的環境

松江城下町遺跡は、島根県東部の松江平野中央に位置する。松江平野の北には島根半島の山地、南には中国山地へ向かう高地が存在し、西には宍道湖、東には中海が広がる。

松江平野は、朝鶴川と中海・宍道湖を結ぶ大橋川の堆積作用で形成された東西約4.0km、南北約2.5km、標高1.0～3.0mの低湿な三角州平野である。宍道湖に面して小規模な砂州（末次砂州・白潟砂州）が形成されているため後背湿地が広い。

松江平野の基岩は、地下6～20mにある新生代新第三紀中新世の松江層であり、その上位に第四紀層（完新統～更新統）が分布する。松江層は、砂岩・泥岩・玄武岩・凝灰岩の互層からなる。

城下町形成以前の松江は低湿地とされており、低湿地の西にある荒賀丘陵から砂州が東に延び、宍道湖とその北の低湿地を区切っている。その砂州上には東西方向に末次の集落が展開していた。砂州の背後には低湿地が広がり、北には宇賀丘陵が南北方向に延び、その南端に亀田山が聳えている。現在の大橋川の南には南北方向の砂州が形成され、その砂州上には中町・白潟の集落が展開していた。

近世松江城下町は、標高約28mを測る亀田山に築かれた松江城を中心に、それを取り囲むように武家屋敷地が配置され、その外側に町人地や寺社地が展開している。武家屋敷については、城郭に近い位置に重臣・上級家臣屋敷が配置され、周辺部にいくほど中級・下級家臣の屋敷地となっている⁽¹⁾。

また、城下町が形成された松江平野は、大雨や河川の氾濫等に起因する洪水に幾度もみわれていたことが文献に見られる。近年の松江城下町遺跡発掘調査成果から、江戸時代を通して大規模な嵩上げ造成を起こなっていたことが明らかとなっている。



調査地周辺の航空写真（1947年11月3日撮影：国土地理院）

第2節 周辺の歴史的環境

本遺跡は、松江城本丸から東へ約1km離れた地点に位置する近世城下町遺跡である。さらに広域にみると、松江平野の北西部に位置している。この平野部には周知されている原始・古代の遺跡は少なく、ここでは周辺部を含めた中世の松江と中世～近世の城館跡について若干触れておく（第5図）。

1 中世の松江と主な城館跡

この頃の出雲国の政治・経済的中心地は、広瀬町（現：島根県安来市広瀬町）にあった。このため、広瀬町から約17kmも離れた松江に関する文献史料は少なく、よく分かっていない。

近世以前の松江は8世紀頃からあまり変化がなく、沼や浅い湖が残る湿地帯が広がっていた。中世になると宍道湖沿いの砂州上に「末次」「中町」「白潟」といった3つの町場が展開していたとされている。近世城下町が形成される直前の周辺一帯は「末次郷」と言われ、中原・黒田・奥谷・菅田・末次の5名（村）があり、城下町を造るために3000石ばかりの田地・屋敷地がつぶされたという^⑦。

戦国時代の「末次」は、末次氏が治めており、永禄12（1569）年の尼子再興戦では尼子・毛利両軍の争奪戦の舞台となった。また、永禄6（1563）年に末次氏が毛利氏から末次森分や市屋敷等をあてがわれていることから末次荘内に定期市が立ち、市場集落が形成されていたと思われる^⑧。

「白潟」は、中国の明代に著された『籌海図編』（明の嘉靖41年：1562年）の中に出雲地方の港湾のひとつとして「失嘲哈咲（白潟）」と記され、日本海から宍道湖内奥部に至る水運ルートの重要な港湾であったと考えられる。また、毛利氏が河村又三郎なる人物を白潟・末次・中町の磨師・塗師・鞘師の司に任じていることから、この地に商人・職人の集団が存在し町場が形成されていたと思われる^⑨。

周辺の中世以降の主な城館跡・遺跡

1. 松江城下町遺跡（第16ブロック）
2. 松江城（末次城） 3. 白鹿城跡
4. 真山城跡 5. 和久羅山城跡
6. 茶臼山城跡 7. 荒隈城跡 8. 満願寺城跡
9. 松江城下町遺跡（殿町287・279）
10. 荒隈城跡（小太郎地区）
11. 舎人遺跡 12. 商津殿山城跡
13. 高柳城跡 14. 海老山城跡
15. 大高丸跡 16. 高つぼ山城跡
17. 小白鹿城跡 18. コゴメダカ遺跡
19. 堂頭山城跡 20. 川津城跡
21. 稲葉山城跡 22. 二保山城跡
23. 城廻城跡 24. 城山城跡
25. 西城ノ前遺跡 26. 東城ノ前遺跡
27. 石台遺跡 28. 中竹矢遺跡
29. 天満谷遺跡 30. 市場遺跡
31. 黒田館跡 32. 下黒田遺跡
33. 黒田村遺跡 34. 出雲国造館跡
35. 布志名焼窯跡群 36. 布志名城山城跡



第5図 周辺の主な中世以降の城館跡・遺跡位置図

松江城(2)は松江平野の北西端部に位置する標高約28mの龜田山に築かれた輪郭連郭複合式平山城である。関ヶ原の戦い後、慶長5(1600)年に堀尾忠氏が出雲・隣岐両国24万石を拝領し、父吉晴と共に安来市広瀬町の富田城に入った後、慶長12~16(1607~11)年にかけて築いたとされている。繩張りは龜田山の最高所に本丸があり、五層六階の望楼式の複合天守をもち、本丸周縁には櫓を配置して高石垣をめぐらす。天守東側に二之丸、二之丸下ノ段、南側に三之丸、西側に腰郭を配置し、これらの外側に内堀をめぐらす。また、中世において龜田山には末次城があったとされる。

白鹿城跡(3)は松江城の北西約3kmのところに位置し、松江市街地北側にある北山山脈から派生する白鹿山に築かれた中世山城である。戦国時代には出雲の戦国大名尼子氏の重要な支城であり、安芸の戦国大名毛利氏との雲芸攻防戦の舞台となる。城は白鹿山頂上部の平坦地を主郭とし、険しい地形を活用し大小の郭を設置する。

真山城跡(4)は白鹿城跡の北隣に位置し、「雲陽軍実記」によると平安時代末期に築いたとの伝承がある。毛利元就が白鹿城を攻めた時に、元就の次男吉川元春が向城として陣を置き、白鹿城陥落後は毛利氏による周辺支配の拠点となる。その後、尼子再興戦では尼子軍の手に落ちるが、尼子氏の出雲出国後に再び毛利氏の手に戻り、江戸時代を迎えると破却される。城は尾根伝いに郭を築き、土塁や石積みも見られる。

和久羅山城跡(5)は松江城の東約5kmのところにある、標高約262mの和久羅山に築かれた中世山城である。城主は当初、尼子方の原田氏であったが、毛利氏の手に落ち、尼子再興戦の折には再び尼子方の羽倉氏が城主となり、尼子氏の出雲出国以後に再度毛利氏の手に帰した。城は中海・宍道湖をはじめ松江市街が一望できる和久羅山の最高所に4つの郭をもち、腰郭や虎口がある。

茶臼山城跡(6)は松江城の南東約6kmのところにある、標高約172mの茶臼山に築かれた中世山城である。築城年代や城主は定かではないが、「雲陽誌」には雲芸攻防戦の際に村上伯耆守が拠ったとされている。茶臼山の最高所に主郭を持ち、その東西を別の郭で囲まれ、さらにその外側の東西に尾根を遮断する堀切が掘られ、山の斜面には連続堅堀群がある。

荒隈城跡(7)は松江城の西約1.5kmのところにある荒隈山に築かれ、雲芸攻防戦における毛利軍の前線拠点として築かれた中世山城である。また、宍道湖北岸沿いに築かれたこの城は、宍道湖一帯の水運や流通機能を掌握して取り込んでいた。

満願寺城跡(8)は宍道湖北岸に接し、宍道湖の水運を握る水軍の拠点でもあった湯原氏の居城とされ、当初は尼子方に属していたが、毛利元就の出雲進出により毛利方に属した。また、雲芸攻防戦での争奪の舞台にもなる。城の主郭部分には横堀があり、宍道湖に面する斜面には階段状造構も認められる。

表2 主な中世山城の城主の変遷

城名	城主の移り変わり
白鹿城	尼子氏の居城(尼子十旗のひとつ)→毛利氏
真山城	吉川氏→毛利氏→尼子氏→毛利氏
和久羅山城	原田氏(尼子方)→毛利氏→羽倉氏(尼子方)→毛利氏
茶臼山城	城主不明
荒隈城	毛利氏の前線拠点
満願寺城	湯原氏(尼子方)→湯原氏(毛利方)

2 松江藩主の移り変わり 一堀尾氏・京極氏・松平氏の出雲国統治一

慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いで武功を上げた堀尾忠氏は徳川家康から出雲・隠岐両国24万石を拝領し、遠江国浜松（現：静岡県浜松市）から父吉晴と共に富田城に入った。

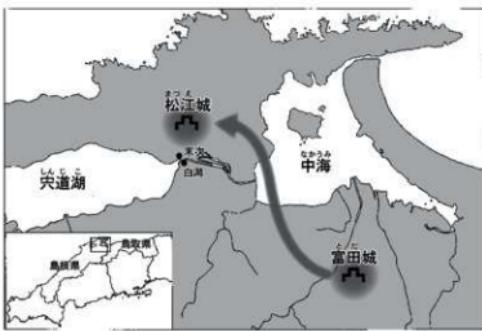
その後、最初に拠点とした富田城が出雲東部に偏り、城郭も急峻な山頂にあり城下が狭隘であったこと、軍事的観点、物資輸送の利便性など理由により城地移転を考えた⁽¹⁰⁾。

そして、領国支配のために出雲国の中心近く、城下が広くされ、海上輸送を掌握できる宍道湖岸の松江に新しい城地を求める（第6図）。

慶長12～16（1607～11）年、吉晴が早世した忠氏の遺志を受け継いで龜田山に松江城を築き、城下町を形成した⁽¹¹⁾。吉晴が孫忠晴や家臣と富田から松江へ移転したのは慶長13（1608）年とされる⁽¹²⁾。堀尾氏は33年間出雲・隠岐国を統治し、城下町建設の基礎を築くが嗣子無く二代で断絶となった。

続いて、寛永11（1634）年、徳川家光から出雲・隠岐両国26万4千2百石を拝領した京極忠高が、若狭国小浜（現：福井県小浜市）から出雲へ入国して松江藩主となるが、寛永14（1637）年に逝去、一代で断絶となる（半年後に播磨国龍野6万石で再興）。忠高は、わずか3年余りの統治であったが、その間に治水工事や殖産興業をおこなうなど、その治績は大きかった。

寛永15（1638）年、徳川家光から出雲国18万6千石（隠岐国は預り地）を拝領した松平直政が、信濃国松本（現：長野県松本市）から入国して松江藩主となる。明治時代を迎えて廃藩置県が実施されるまでの233年間、松平氏十代にわたり藩政が続いた（第7図）。



第6図 富田城と松江城の位置

堀尾家（外様）	京極家（外様）	雲州松平家（親藩）
 浜通松江國から ↓ 堀尾吉晴 ^ト 忠氏 ^ト 忠晴 ^ト  抱茗荷紋  分鏡(法馬)紋  六つ目結紋	 小若浜國から ↓ 京極忠高 ^ト 四つ目結紋	 松本直高 ^ト 松平直政 ^ト 忠勝 ^ト 近吉 ^ト 吉定 ^ト 定安 ^ト  五三柄紋

第7図 松江藩主の系図と家紋（藩史大辞典をもとに一部改変し作成）

3 松江城下町の立地と構造 一堀尾氏が目指した城下町建設—

(1) 城下町造成以前の松江（第8図）

城下町造成以前の松江は、宍道湖東岸に末次砂州と白潟砂州のT字状の微高地が存在し、その砂州上に末次・中町・白潟の3つの町場が展開していた。堀尾氏は慶長8（1603）年に幕府の許可をとって新城の建設に乗り出す。そこで注目したのが、宍道湖と中海の境にあり、本州と島根半島の地峡部に位置する宍道湖湖岸の地である。城地選定にあたり、堀尾吉晴・忠氏父子は宍道湖東岸の乃木村元山（現：松江市雜賀町と上乃木の境にある床几山）に登り、築城に適した場所を探したとの伝承がある。

堀尾氏は、宍道湖港湾の要所として栄えていた末次・中町・白潟に着目し、この3つの町場を取り込んだ城下町建設を目指した。



第8図 城下町造成以前の松江

(2) 松江城下町の構造（第9図）

松江城下町の全体構造は、北側に寺社や武家地が点在する丘陵地を背にし、松江城を中心に東西に武家地を配置して左右を固め、その南側に末次町の町人地を東西に展開させている。天然の堀となる大橋川で区切り、その南側に白潟町の町人地と寺社が展開し、さらに南側には町門を置いている。

松江城下町は松江城本丸がある亀田山を中心とし、城の東側には重臣が多く居住する殿町が広がり、さらに東に上級・中級家臣が居住する母衣町がある。城の西側には中級家臣が居住する内中原町がある。これらの武家地を外堀で囲み、外堀の東側に町人地である米子町、さらに東に下級家臣が居住する北田町・南田町が展開する。南田町の一角、城下町の南東端にあたる場所には重臣を配置して出城のような機能をもたせていた。外堀の西側には下級家臣が居住する外中原町があり、北側には町人地である北堀町、さらに北に武家屋敷や寺院が点在する奥谷町が展開する。



第9図 堀尾期松江城下町絵図(島根大学附属図書館所蔵)



階層別堀尾期絵図(トレイス図)

4 松江城下町の初期造成年代と時期区分

松江城下町の初期造成年代については従来、慶長12～16（1607～11）年と表記された論文や報告書も多く、あたかも史実であるように扱われているが、この年代の根拠については明治44（1911）年～昭和5（1930）年までの約20年をかけて編纂された『島根県史』の「子の忠氏亡きあと、松江に城を築くことを決めた吉晴は、慶長12（1607）年から城と城下町の建設に着手する。初年度は道路や侍屋敷の土地を整備し、二年目に本丸石垣や内堀工事に取り掛かり、三年目に天守・三の丸御殿の建造に着手。四年目に天守・堀・三の丸が竣工、五年目に侍屋敷がなり、家臣たちが富田から移り住み完成了。」という記載から来たものである。『続松江藩の時代「築城物語」』⁽¹⁾で西島氏が指摘されているように、この年代については、松陽新報（現：山陰中央新報）に連載された岡田射雁による一老嫗からの聞き取りであることが分かっている。根拠とするには余りにも希薄なものであるが、この他に具体的な根拠を示したものがないことや関ヶ原の戦い以降に造られた他の近世城郭（織豊系城郭）の築造年代と合致していることから、いつの日か史実のように取り扱われるようになったのである。

さて、それでは史料から見た松江城下町の築造はいつのことであったのだろうか。城下町の造成年代が記載された史料は見つかっていないが、松江城創建に関わる2枚の祈祷札⁽¹⁰⁾により慶長16（1611）年正月には松江城が完成し、ここで祈禱がおこなわれたことが分かった（史料1）。

また、堀尾氏が慶長13（1608）年10月に富田から松江に居住を移したであろうという記載（慶長13年の条「松江越 十月二日」）が『堀尾古記』に記されている（史料2）。この史料により、遅くともこの頃には城郭及び城下の造成に着手していたことが分かる。城下における侍屋敷の建設が同時に完了したのかは不明だが、少なくとも造成についてはこれに近い時期に完成したと考えて間違いない。

本報告においての城下町の造成、或いは初期造成段階という記載は、造成開始が（堀尾氏が富田城に入部して間もなく松江城下町の造成に着手した可能性も否定できず）17世紀代初頭、完了が1611年に近い時期という年代観となる。

史料1 松江城創建に関わる祈祷札



松江城祈禱札①
(赤外線)



祈禱札①翻訳文



松江城祈禱札②
(赤外線)

梵
慶長拾六年 辛亥 大山寺敬
正月吉祥日
□
奉轉讀大般若經六百部 武運長久延

祈禱札②翻訳文

史料2 堀尾古記



堀尾古記 1608(慶長13)年10月2日条（個人蔵）

堀尾古記は市指定文化財（古文書）で、数少ない地元に残る堀尾氏関係史料の1冊で、松江移転前から堀尾家断絶までのが年代順に簡潔に記されている。書き出し年ははっきりしないが、記載内容から天正12（1584）年と思われ、書き終わりは正保元（1644）年と考えられる。

以上のことと踏まえて、各期の時期区分（堀尾期・京極期・松平期）については表3に示すよう設定した。その中で松江城下町遺跡における堀尾期の時期区分について、堀尾氏が出雲・隠岐両国を拝領して富田城に入部した1600年が統治の開始時期で間違いないが、松江城下町造成の開始年代を現段階では明確に示すことができない。また、松江城築城・城下町建設開始とされている「1607年」という年代も確実なものではないことから、松江城下町の初期造成年代を17世紀初頭とし、堀尾氏が断絶する1633年までの期間を堀尾期と設定した。検出遺構面及び出土遺物を詳細に検討した結果、各期の遺構面の年代観や時期決定は第7章第1節に詳述することとした。

表3 松江藩主の時期区分

時代	安土桃山時代	江戸時代			明治時代	
		初期／前期	中期	後期／幕末	19世紀	20世紀
世紀	16世紀	17世紀	18世紀			
西暦	1600年	1700年	1800年		1900年	
松江藩主の変遷		堀尾期（1600～1633年） 出雲 隠岐	京極期（1634～1637年）			
				松平期（1638～1871年） 宣政 繁昌 貞通 宣純 宣信 治綱 青臣 青貞 宣安		
遺跡周辺の状況	低湿地		城下町		城下町の形成	

5 大橋茂右衛門政貞について

本報告をおこなう松江城下町遺跡（南田町132外）：第16ブロック中央部は、松平期の家老・大橋家の家臣である与力⁽¹³⁾の屋敷地に該当する。与力屋敷の調査成果（第4章）を報告する上で、大橋家に触れておく必要があるため、ここでは大橋茂右衛門政貞の出自や戦歴について概略を示しておく（大橋家の位置は第13・14図参照）。

大橋茂右衛門政貞は、本国が信濃で生國は尾張である。生まれ育った場所は尾張国津島（現：愛知県津島市）である。茂右衛門政貞は信州諏訪⁽¹⁴⁾（現：長野県諏訪市）で福島正則に仕え、関ヶ原の戦い・岐阜の城攻めで勇名をとどろかせ、広島にて千石足軽40人で普請奉行番頭格を仰せつけられる。

元和3（1617）年、太田川が氾濫し大洪水となり、堤防が決壊するなどの甚大な被害をもたらした。広島城の本丸、二の丸、三の丸の石垣や櫓が崩れるなどの大災害であった。福島正則は、早速城内の

増築修復を命令し修復にかかった。しかし、この修復は幕府の許可を得ておらず、天下の大禁（武家諸法度）を犯したとの理由で罰せられ、元和5（1619）年に安芸・備後両国を没収された。この福島家滅封の際には、交渉役を茂右衛門政貞が勤めたと言われる。幕府との改易交渉は非常に難航したと考えられるが、その見事な交渉ぶりは天下に名を馳せたようである。

福島氏が滅んだ後は若狭国小浜（現：福井県小浜市）で京極忠高に仕官し3千石を給せられ、寛永11（1634）年に京極忠高が雲州松江（現：島根県松江市）へ移封される際に2千石加増され5千石と鉄砲22人を賜った。松江に移った茂右衛門政貞は、現在の南殿町に屋敷を拝領していた。その後、京極氏を離れて浪々の身となり、近江国大津（現：滋賀県大津市）にいた。

松平直政が松江藩主となる頃、津島衆七苗字の一人平野長泰が、浪人となった茂右衛門政貞を松平直政に推挙していた。福島軍団の出身で京極家家老の経験があり、山陰と山陽に明るく、更に出自、戦功、一族の軍団と申し分のない人材であった茂右衛門政貞を松平直政は懇意にし、家臣に召し抱えていた平野勘兵衛（元京極家家臣で津島衆出身）を御使に遣わせ、6千石うち与力千石足軽30人で召し抱えた。松平直政は自らの藩を越前家出身の者を中心に考え任用していたが、越前出身者ではない武功に優れた茂右衛門政貞を与力と併せて家臣とし、大橋家と縁故のある者を与力として採用していた。

松平直政は、茂右衛門政貞を中心とする家臣団を組織して松平家自体の軍団を強化することをねらっていたのである。

茂右衛門政貞が松平氏から拝領した屋敷は、松江城下町の東端角地（現在の南田町）にある。この場所は堀尾・京極氏が藩主の時代から重要地点とされ、水運の監視機能や東方からの水軍による攻撃に対するなど出城のような機能をもたせており、重臣屋敷が配置されていた。

松平直政から屋敷を拝領されて以降、幕末に至るまでこの場所には大橋家の屋敷が存在していた。その間、大橋家は代々家督を相続し、格式家老も継承していた。茂右衛門政貞は承応3（1654）年に隠居、梅仙と号し同年10月16日に逝去している。

初代大橋茂右衛門政貞の禄高は、朝日丹波重正に次いで2番目であるが、朝日家老は二代目から大きく減禄される。その後は、明治維新を迎えるまで大橋家老が筆頭である。

6 明治以降の城下町と現代に残る地名

松江藩は、明治4（1871）年の廃藩置県で松江県を経て島根県となる。明治22（1889）年に松江市政が始まり、県庁所在地として発展し現在に至る。

明治時代に入り、それまでの武家地はそのまま公共施設に利用し、広大な土地は細かく短冊状に分筆されるなどして改変していく。

現在でも通りや路地、外堀、内堀、鉤型路等が残っており、江戸時代の町割りの面影を見ることができる。調査地周辺は、江戸時代に大橋家の与力屋敷が建ち並んでいたことから、明治時代までは「与力町」と呼ばれていた。大正時代以降に「南田町」となり、現代に至る。現代では南田町の範囲にあるが、既存の電柱に「与力町」という幹線名だけが残っている。



現代に残る城下町の地名

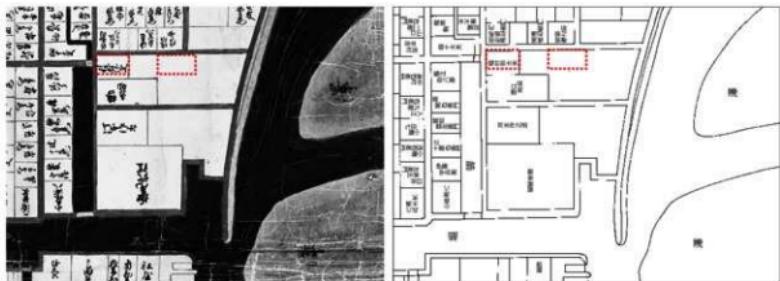
第3節 城下町絵図に見る調査地とその周辺

ここでは現存する松江城下町絵図と近代の地図を通して、今回の調査地を絵図・地図に重ね合わせて周辺の様子を概観したい。調査地の変遷を知る上で資料とした絵図は表4に示したとおりである。なお、絵図・地図の使用箇所は調査地周辺（南田町：第16ブロック）を拡大して掲載している。

①堀尾期絵図（第10図）

堀尾氏が統治していた時期の絵図として「堀尾期松江城下町絵図」がある。この絵図が現段階で松江開府間もない時期を示す最も古い絵図とされる。松江城下町が慶長16（1611）年にはほぼ完成したとするならば、その時点から9年～22年しか経っていない城下町の情報を提供してくれる絵図である。

第16ブロック西側に比定される地点には「種田弥太夫」と記載され、堀尾期の段階から屋敷地が配置されていたことが分かる。中央部周辺には屋敷地名義の記載は無く、界線すら引かれていない。



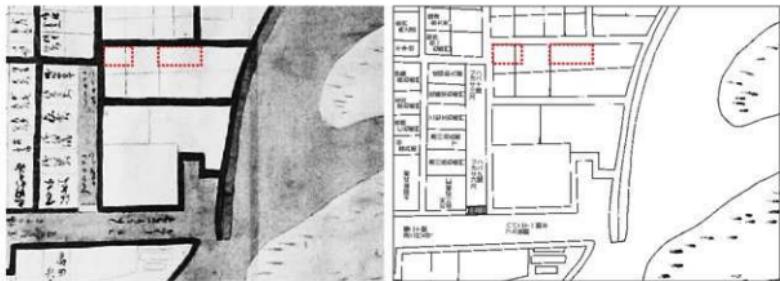
第10図 堀尾期松江城下町絵図

堀尾期

□は調査地該当箇所。絵図・地図は上が北。

②京極期絵図（第11図）

京極氏が統治していた時期の絵図として、「寛永年間松江城家敷町之図」がある。この絵図は京極家が所蔵していた伝来の確かな絵図である。ただし、現存の京極期絵図は清書本の写と考えられ、所々に誤写がある¹⁰⁰。絵図には屋敷地を区画する界線は引かれているが、屋敷地名義は記されていない。

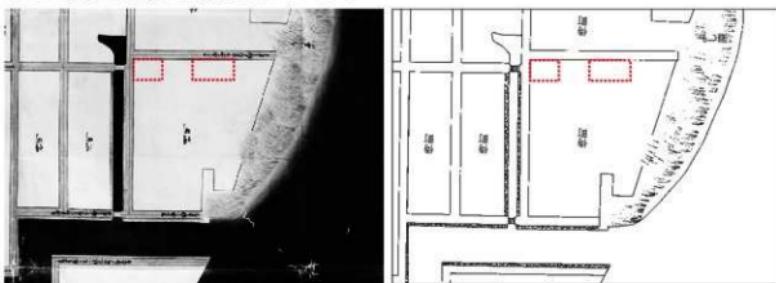


第11図 寛永年間松江城家敷町之図

京極期

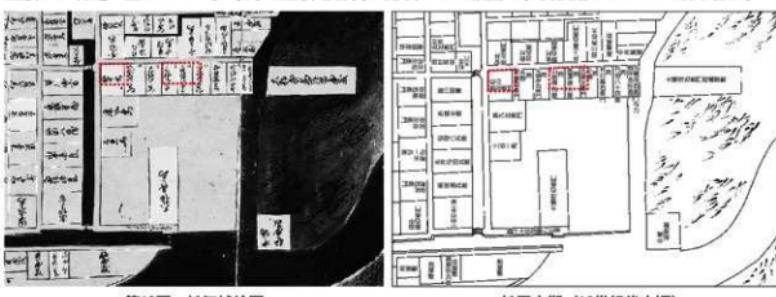
③松平前期絵図（第12図）

この絵図は松平氏が統治を開始した寛永15（1638）年に一番近く、17世紀代中頃の正保年間（1644～48年）に幕府が諸藩に命じて作成させたものである。絵図には「侍町」の記載しかないが、文献ではこの時期に大橋家の屋敷地となっている³⁷⁾。



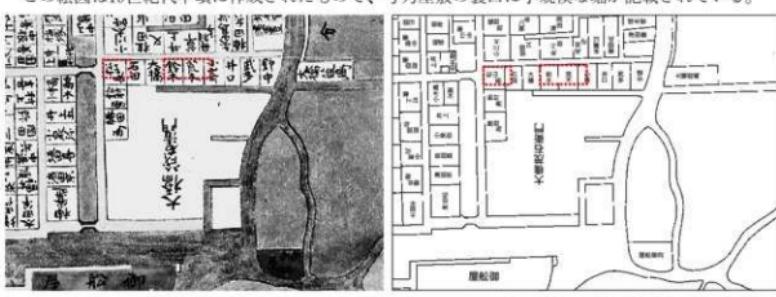
④松平中期絵図（第13図）

この絵図は18世紀代中頃に作成されたもので、大手前通りに面した南側には武家屋敷が1軒・与力屋敷が8軒建ち並んでいる。与力の屋敷地名義が記載された絵図は、現段階ではこれが最も古い。



⑤松平後期絵図（第14図）

この絵図は19世紀代中頃に作成されたもので、与力屋敷の裏口に小規模な堀が記載されている。



⑥近代・現代の地図（第15・16図）

明治時代の地図には「与力町」の記載が見られる。大正時代～現代に至るまで「南田町」となる。



第15図 松江市街図 明治41(1908)年



第16図 松江市都市計画図 平成23(2011)年

以上の絵図・地図7点を参考に調査地周辺の様子を見てきた。これらの資料から、第16ブロック西側には堀尾期から幕末まで連綿と続く屋敷地が配置されていたことが分かる。中央部は堀尾・京極期には屋敷区画のみとなっていたが松平期には屋敷地として利用されるようになり、周辺に8軒の与力屋敷が展開する。その後、幕末に至るまで屋敷割の変化がないという状況が窺える。

表4 松江城下町の変遷を示す絵図

絵図名称	絵図作成年代	所蔵機関	時期	本文中呼称
堀尾期松江城下町絵図	1620~33年	島根大学附属図書館	堀尾期	堀尾期絵図
寛永年間松江城家敷町之図	1634~37年	香川県丸亀市立資料館	京極期	京極期絵図
出雲国松江城絵図	1644~48年	国立公文書館	松平前期	正保年間絵図
松江城絵図	1736~48年	島根県立図書館	松平中期	元文~延享年間絵図
松平期松江城下町絵図	1825~51年	島根大学附属図書館	松平後期	文政~嘉永年間絵図

第4節 屋敷地名義の変遷

ここでは絵図や文献史料を基に17世紀代初頭の堀尾期から明治に至るまでの調査地周辺の変遷を概観し、武家屋敷及び大橋家与力屋敷における屋敷地名義の変遷をまとめておきたい。

武家屋敷及び大橋家与力屋敷の屋敷地名義の変遷については表5に示したとおりである。表5は、現存する松江城下町絵図を基に堀尾期・京極期・松平期に区分し、各期の屋敷地名義がどのように変わっていくかを示している。屋敷地の比定については、発掘調査で検出した明瞭な屋敷境を根拠として概ね4軒の屋敷地がかかり、それぞれ該当する屋敷地を推定している。

絵図・文献から武家屋敷（第16ブロック西側）に比定する屋敷地名義は、堀尾期には「種田弥太夫」、京極期には人名の記載なし、松平期には「松山長左衛門」となっている。松平期を通して松山家が代々家督を相続し、この場所に屋敷を拝領していたことが分かる。

大橋家与力屋敷（第16ブロック中央部）は、松平期以降から屋敷地として利用されることが絵図や文献に見られる⁽¹⁸⁾。与力屋敷に比定する屋敷地名義は調査区東側から便宜的に「A屋敷」、「B屋敷」、

「C屋敷」と呼称している⁽³⁾。A屋敷は松平期前半には「小崎喜左衛門」、中頃には「小崎五郎左衛門」、後半には「小崎拾四郎」の屋敷地に比定する。B屋敷は松平期前半には「丹羽左衛門」、中頃には「西澤徳太郎」、後半には「荒木甚八」の屋敷地に比定する。C屋敷は松平期前半には「山田孝右衛門」、中頃には「山部傳九郎」、後半には「鈴木甚兵衛」の屋敷地に比定する。

大橋家与力の人名については『松平家々譜並御給帳写』に記載が見られ、表6に示している。この文献から松平家初代藩主直政の時期における大橋家与力は7名だが、松平家二代藩主綱降以降から幕末に至るまでの間の大橋家与力は8名となっていたことが分かる。

表5 武家屋敷・与力屋敷の屋敷地名義の変遷

続圖・地図名	時期	年代	通構面	武家屋敷	大橋家与力屋敷		
					A屋敷	B屋敷	C屋敷
堀尾期松江城下町絵図	堀尾期	17世紀代初頭	第一面	種田弥太夫 空開地	空開地(畠地)	空開地(畠地)	空開地(畠地)
更年永年松江城下町絵図	京極期	17世紀代前半	第一面	侍町	侍町	侍町	侍町
出雲国松江城下町絵図	松平期	17世紀代前半～中頃	第三面	松山長左衛門 小崎五郎左衛門	西澤徳太郎 山部傳九郎	西澤徳太郎 山部傳九郎	西澤徳太郎 山部傳九郎
松江城絵図		18世紀代	第五面	松山長左衛門 小崎拾四郎	荒木甚八 鈴木甚兵衛	鈴木甚兵衛 鈴木	鈴木甚兵衛 鈴木
武家屋敷明細帳		19世紀代	第六面	松山長 小崎	荒木 鈴木	鈴木 鈴木	鈴木 鈴木
松平期松江城下町絵図			攘乱面	与力町	与力町	与力町	与力町
松江市街圖	明治	19世紀代中頃～近代					

表6 松平家々譜並御給帳写に記載のある大橋家与力の人名（松江城下町絵図東側から順に大橋家与力1～8と設定）

松平直政（初代）	松平綱隆（二代）	松平綱近（三代）	松平定次（十代）
寛永15(1638)年～ 寛文6(1666)年	寛文6(1666)年～ 寛延3(1675)年～ 宝永1(1704)年	延宝3(1675)年～ 宝永1(1704)年	嘉永6(1863)年～ 明治4(1871)年
大橋家与力1 野中太郎左衛門	野中太郎右衛門 野中助之進	野中助之進	野中善右衛門
大橋家与力2 森藤与三兵衛	武多次右衛門 武多治左衛門	武多治左衛門	武多治左衛門
大橋家与力3 小崎三郎兵衛	小崎三郎兵衛	井口藤右衛門	井口市兵衛
大橋家与力4（A屋敷） 小崎喜左衛門	小崎喜左衛門	小崎喜右衛門	小崎喜左衛門
大橋家与力5（B屋敷） 丹羽左衛門	丹羽左衛門	丹羽辰兵衛 丹羽辰右衛門	丹羽辰右衛門
大橋家与力6（C屋敷） 山田学右衛門	山田学右衛門	山部傳兵衛 山部左右衛門	鈴木正兵衛
大橋家与力7 大橋猪左衛門	大橋猪左衛門	大橋伊右衛門 大橋伊左衛門	大橋伊左衛門
大橋家与力8 —	—	糸野市郎右衛門 糸野市郎右衛門	糸田作右衛門
与力人數/石高	与力七名/千石	与力八名/千石	与力八名/千石

註

- (6) 一部の重臣屋敷や下屋敷は城郭から離れた城下町の端部に位置し、出城の役割を持たせていたものと考えられている。
- (7) 『新修島根県史』史料篇2・近世上 1965年のうち、「雲陽大数録」(春日嶺三郎所蔵、天保三年写本)による。
- (8) 山根正明『松江市ふるさと文庫6 堀尾吉晴―松江城への道』 松江市教育委員会 2009年1月
- (9) 同宏三『松江藩の時代』「中世のプレ松江」 山陰中央新報社 2008年9月
- (10) 『島根縣史9』藩政時代（下） 島根縣内務部島根縣史編纂掛 1930年には「かくて城地移転を徳川秀忠將軍に出願し其許可を得たるは實に慶長八年なりき」とあるが、慶長8年に征夷大將軍になったのは徳川家康であり、慶長10年4月まで勤め、同月2代將軍秀忠が就任している。現段階ではこれ以外に根拠とする新史料は見つかっていないが、信憑性に欠ける。
- (11) 『島根縣史9』藩政時代（下） 島根縣内務部島根縣史編纂掛 1930年 ※本書に引用した事項については諸説ある。
- (12) この年代根拠については『堀尾古記』に記載されている慶長13年の条「松江越 十月二日」による。
- (13) 『島根縣史9』藩政時代（下）には詳細な城下町造成の過程が年ごとに記載されているが、『続松江藩の時代』山陰中央新報社2010年11月のうち、第2章城づくり国づくり「築城物語」の中で西島太郎氏がその根拠について検証されている。
- (14) 『松江城研究2』「再発見の祈祷札－松江城天守創建に関わる祈祷札について」 松江市教育委員会 2013年3月
- (15) ここで「与力」とは、大橋家が自身の費用をもって直属の家臣としていたいわゆる大橋軍團である。
- (16) 西島太郎『日本歴史 第755号』『堀尾期松江城下町絵図の制作工程と伝来』のうち京極健一 吉川弘文館 2011年4月
- (17) 『松平家々譜並御給帳写 明治4辛未三月』(島根県立図書館所蔵)、『雲藩職制』歴史図書社 1979年
- (18) 17世紀代初頭の堀尾～京極期の絵図では空開地となっているが、近年の発掘調査成果から飯場や畠地として利用されていたことが明らかとなった。松平期になり大橋茂右衛門がこの地に屋敷を拝領した段階から与力屋敷が展開する。
- (19) 現段階では大橋家与力について明確な屋敷地使用年代や居住者名の記された文献が無いため、このような呼称を付した。

第3章 武家屋敷の調査

第16ブロックは、市道北田大橋線から田町川に挟まれた城山北公園線沿いの南側部分である。

ここでは第16ブロックのうち、平成25年度に調査を実施した松江城下町遺跡（南田町127-17外・127-14外・130-3外）に該当する3地点の調査区を「武家屋敷調査区」として取り扱う（第17図）。

武家屋敷調査区は、第16ブロック西側の東西50.4m×南北18.0mの区画で調査面積は約514.8m²である。以下、基本層序を示し、旧地表面を始めとした古い遺構面から順に調査成果を詳述する。

第1節 調査手法と基本層序

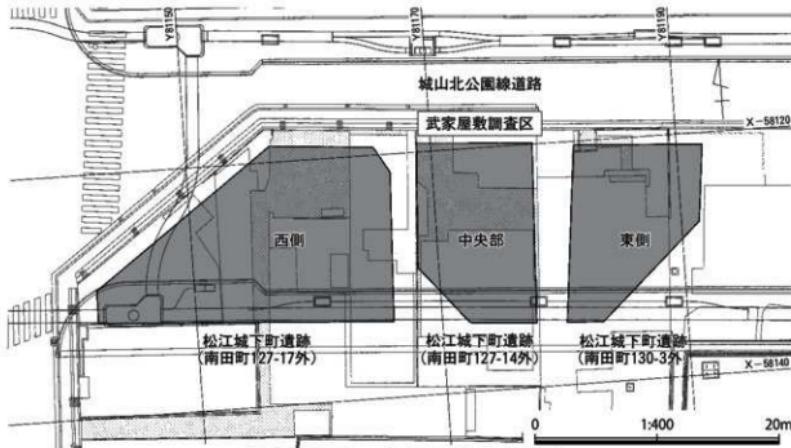
武家屋敷の調査手法

調査地は松江城本丸から東へ約970m離れた地点に位置し、調査開始以前には店舗や民家が建ち並んでいた。堀尾期の段階から連絡と続く武家地の一角にあたり、直臣の屋敷地として利用されていた。

武家屋敷調査区のうち、南田町127-17外地点では、周辺民家の進入路・作業ヤードの確保等の必要性から調査区を東西に大きく2分割して調査を実施した。南田町127-14外・130-3外地点では、分割をおこなう必要性が生じなかったため1つの調査区で調査を実施した。

調査区は、南田町127-17外地点に東西22.4m×南北13.5m区画（うち調査面積261.4m²）、南田町127-14外地点に東西9.0m×南北13.5m区画（うち調査面積132.7m²）、南田町130-3外地点に東西10.0m×南北13.5m区画（うち調査面積120.7m²）の範囲で設定し、西側の南田町127-17外地点から調査を進め、東側の南田町127-14外・130-3外地点へと順次調査をおこなった。

第1～15ブロックでは城山北公園線南側への道路拡張範囲が平均して4.0～7.0mであるのに対し、本遺跡を含む第16ブロックは南側へ18.0mの道路拡張となることから、他に比べて広範囲に調査区を設定することが可能であった。



第17図 第16ブロック武家屋敷調査区配置図

遺構面の設定と基本層序（第18図）

武家屋敷調査区の土層堆積状況の観察をおこなった結果、旧地表面と2面の遺構面を確認した。遺構面の把握・認定区分については、主に自然堆積層・造成土（盛土）・搅乱層に分け、その中から生活面と考えられる整地層や遺構の機能面および廃絶面を細分した。そして、遺構面直上から出土した遺物の年代観などを考慮して遺構面として捉えている。

なお、武家屋敷の基本的な層序は第1章第2節-4で示した松江城下町遺跡基本土層（第4図）と共通するものであり、土層の呼称についてはこれに準じて対応する層名を付した。

第18図の基本土層図は、上図に東西方向の北壁土層の一部分を、下図に南北方向の東壁土層の一部分を掲載している。以下、各遺構面の土層堆積状況について下層から上層の順に説明する。

旧地表面以下の自然堆積層 標高-0.10～0m

Ⅲ層は自然堆積層の青灰色細砂である。この土壤はシルト質が強く、場所によってはアナジャコなどの水生生物の生痕が確認でき、周辺が水域や湖底（海底）であったことを示すものと考えられる。

旧地表面 標高0.10～0.20m、層厚約10～15cm

I b層は旧地表面の茶褐色有機質土である。層理面下方は未分解の有機物を多量に含んでおり、層理面上方ではラミナ状の堆積を確認した。堆積状況は、東西軸ではほぼ水平であるが、南北軸では北西側から南東側へかけてやや傾斜している。

第1遺構面 標高0.40～0.60m、層厚約30～40cm

A層は城下町初期造成土と考えられるI b層とⅢ層の混和土で、第1遺構面の基盤層である。

第2遺構面 標高0.60～0.80m、層厚約20cm

B層は灰色シルト質細砂を主体とした第2遺構面の基盤層である。

第2遺構面より上層 標高0.80～1.50m、層厚約70～80cm

C層は搅乱層である。近現代の陶磁器やガラス片、コンクリート片などが混じる。

現地表面 標高1.60m

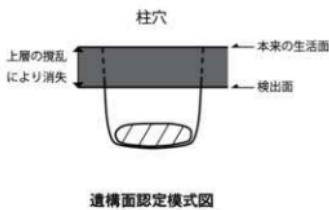
明治以降の区割りをほぼ踏襲して、現代に至る。調査開始以前までは民家や店舗が存在していた。現道路面は標高1.45mで、調査地の地表面は道路面より15cm程高い。

武家屋敷調査区の遺構面認定について

武家屋敷調査区に該当する3地点の調査区では、各区を通して近代以降の搅乱の影響が大きく、遺存する遺構も地点によって大きく異なる。

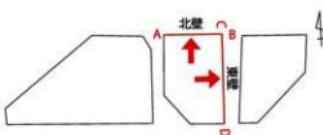
武家屋敷調査区では、搅乱層を取り除いたところで検出した任意の遺構面（基盤層）を設定し、厳密には生活面ではない部分を遺構面としたものを含んでいる。

同一遺構面としているが、上層から掘り込まれた遺構の底部を図示している可能性もある。

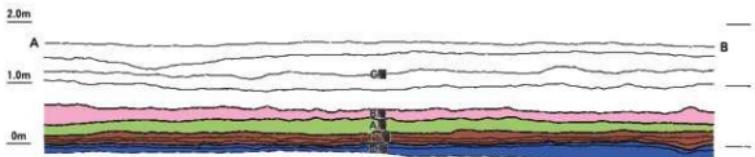




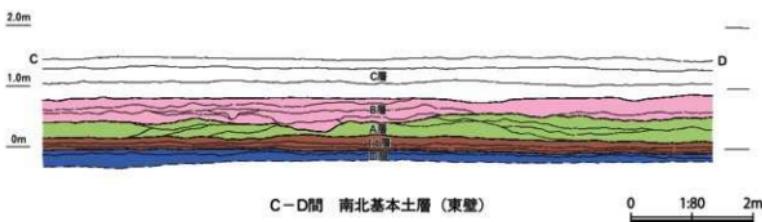
A-B間 基本土層断面（南から）



武家屋敷調査区



A-B間 東西基本土層（北壁）



C-D間 南北基本土層（東壁）

0 1.00 2m

- C層…第2達構面より上層：擾乱層
- B層…第2達構面：灰色シルト質細砂
- A層…第1達構面：I b層とⅢ層の混和土
- I b層…旧地表面：茶褐色有機質土
- Ⅲ層…自然堆積層：青灰色細砂

第18図 武家屋敷基本土層図

第2節 城下町造成以前の旧地表面

松江城下町の下層には、広い範囲で城下町造成以前の旧表土と考えられる黒褐色～茶褐色粘質土（I層）の堆積が認められており、自然堆積層と城下町造成土とを見分ける際の鍵層となっている。この層は、同一レベルに堆積しているわけではなく、松江城に近い西側（殿町）が高く、東側（南田町）へ向かうに従って徐々に低くなっている（第7章第3節参照）。

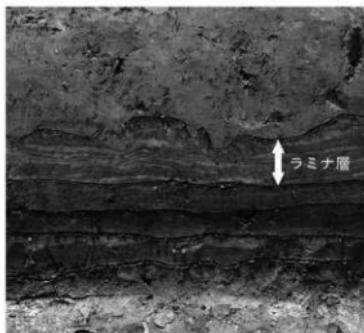
武家屋敷調査区では、土壤が未分解でラミナ状（茶褐色粘性土と灰色粘質土が1cm単位で互層状）に堆積する茶褐色有機物層（Ib層）を検出し、調査区内全体に広がっている状況を確認した。

Ib層は、茶褐色を呈した有機質土で層厚約15～20cmを測り、層理面下方はほぼ水平堆積であったが、上方は城下町初期造成時に土壤が盛り返された影響を受けているためか、層理面に斜交している。未分解の薄片状の木片を多量に含んでおり、殿町・母衣町で検出されるIa層よりも比重がかなり軽く、細粒分を多く含むといった性質をもつ土層である。

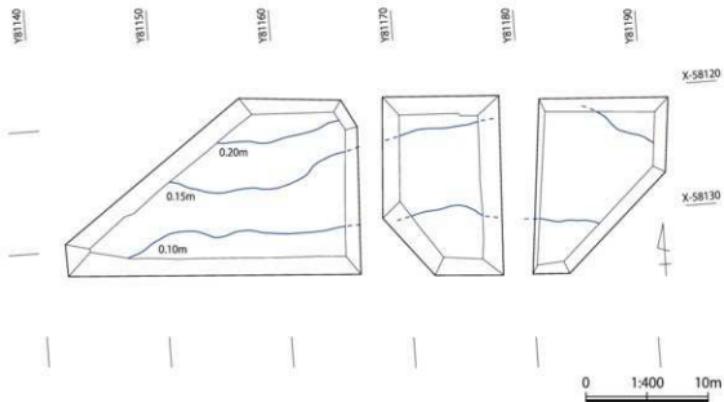
調査ではIb層を露呈した面を城下町造成以前の旧地表面とし、精査をおこなった。旧地表面東西はほぼ平坦だが、調査区内北西側での検出標高は0.20m、中央部で0.15m、南東側で0.10mを測る。北西から南東へ向かってやや傾斜しており、その比高差は10cmである。

Ib層の下層には青灰色細砂層（III層）が堆積し、周辺の城下町遺跡（殿町・母衣町）の層序に見られる灰色細砂層（II層）は確認していない。

その他に明瞭な遺構は検出せず、遺物も出土していない。



I b層のラミナ状の堆積



第19図 武家屋敷旧地表面平面図

第3節 第1遺構面

第1遺構面の概要（第20図）

第1遺構面は、標高0.40～0.60mで検出した遺構面である。遺構は、素掘溝2条（SD01・02）、土坑4基（SK01～04）、疊敷遺構（SX01）、その他に柱穴や土坑を多数検出した。

第1遺構面は、自然堆積層である旧地表面（1b層）に盛土（A層）を施して造成された最初の遺構面であり、その開始時期は堀尾氏が富田城から松江へ城地を移した17世紀代初頭に造成されたものと考えている。ただし、松江城下町造成の期間を明確に記した文献史料などの記録は残っておらず、正確な年代は分かっていない。幕府の承認のもと城とともに計画的に建設された城下町であり、松江城の築城が1607（慶長12）年に着工、1611（慶長16）年頃に完成していたとするならば、城下町の造成もそれとはほぼ同じ時期か、あまり間を置かずにおこなわれたものであろう。

この遺構面が存続した期間については様々な解釈ができるものの、堀尾氏が統治していた段階に造成がおこなわれて機能していた遺構面と捉えている。

なお、武家屋敷調査区西側は搅乱層を取り除いたところで検出した任意の遺構面（基盤層）である。厳密には堀尾期の生活面（機能面）ではないが、第1遺構面に含めて掲載している。

遺物の概要

遺物は、中国磁器・国産陶器・土師器皿・金属製品・木製品・瓦がある。出土した陶器には中国磁器と国産陶器があり、国産磁器である初期伊万里の出土はない。陶器の産地は、肥前・瀬戸・美濃、備前で占められる。このうち出土量の多い肥前陶器は、九陶I-2期（1594～1610年代）のものが中心となるが、天目碗のなごりをもつ碗や鉄絵の四方向付皿など九陶II期（1610～1650年代）の製品も出土している。器種構成は碗・皿類を中心である。

磁器は、中国磁器の青花皿、小杯が出土している。中国磁器の産地は、景德鎮と漳州窯である。

土師器皿は、手づくね成形されたものを「京都系」とし、底部外面に糸切り痕をもつものを「在地系」として分類した。第1遺構面では京都系の割合が圧倒的に多く、在地系は2点出土している。大きさは大小あり、灯芯油痕をもつものは灯明皿として利用されたものである。

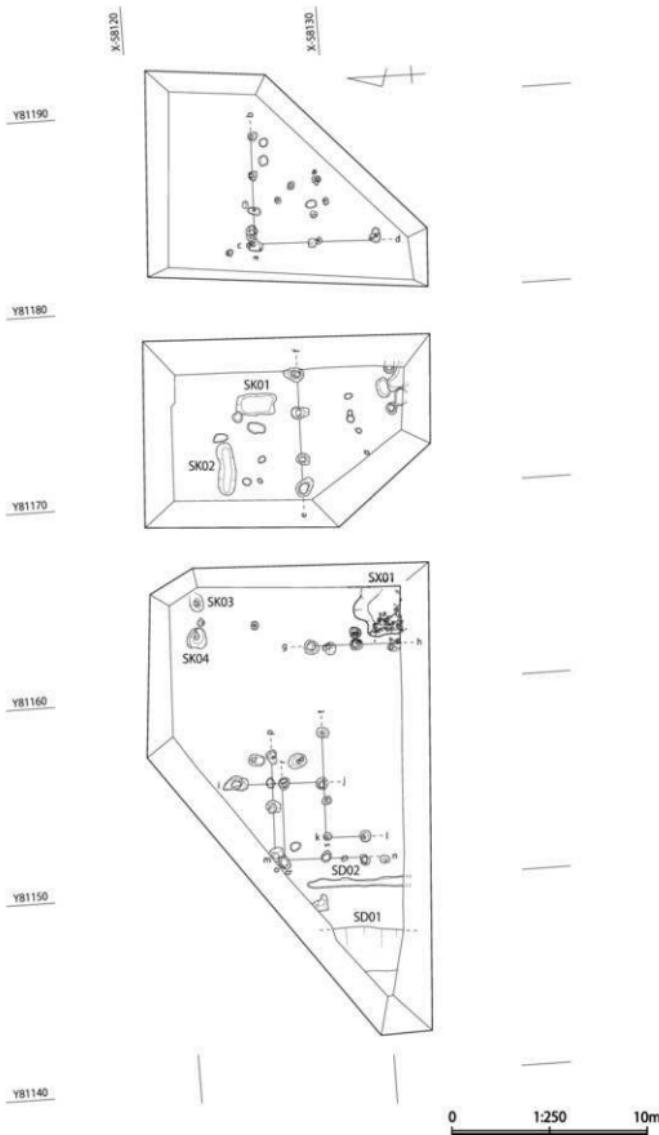
金属製品は、煙管の雁首、小柄の柄が出土している。木製品は、漆器椀、柄杓、下駄など多岐にわたる。瓦は、平瓦、軒丸瓦、玉縁式丸瓦（いずれも破片）が出土し、コビキBのものである。

なお、発掘調査時に第1遺構面出土遺物として取り上げた陶磁器類の中には明らかに混入品と考えられるものが数点あり、それらは非掲載遺物として取り扱っている。

遺構面の時期

第1遺構面の年代は、前述した遺物の年代観と城下町造成以前の旧地表面上に盛られたA層を基盤とする最初の遺構面であることを根拠として、堀尾期（1600年代初頭～1633年）を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を報告する。



第20図 武家屋敷第1遺構面全体図

第1項 素掘溝SD01（第21図）

SD01は武家屋敷調査区西端で検出した南北方向に延びる素掘溝である。規模は東西幅5.20m以上、深さ1.40mを測り、検出は約2分の1程度と考えられる。検出標高は溝の東側上端部で0.32m、調査区内西端の最深部では-1.08mを測り、溝底部はさらに西側へ落ち込む。

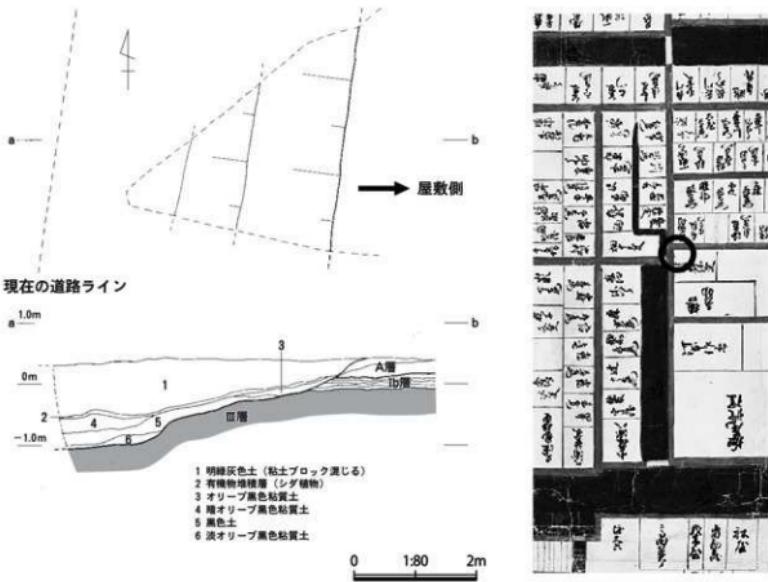
SD01は絵図に描かれている堀（舟入）の可能性も考えられるが、掘り込みが緩やかで浅いことや道路との位置関係を勘案し、城下町形成段階の素掘の大溝に位置づけられる遺構として捉えている。

溝埋土の土層断面から、シダ植物（第21図第2層）を挟んで溝の埋戻しをおこなっている状況が看取でき、松江城下町遺跡（母衣町100外）で検出した背割の大溝と埋め方が酷似している。

SD01の掘り込み面はA層上面で、土層断面から堀尾期の屋敷地初期造成段階には掘削が開始され、屋敷地造成完了以降（A層を盛土造成した後）に埋め戻された可能性が考えられる。

松江城下町遺跡（母衣町68：裁判所前庭・廈舎建替え部分）では道路の両脇や屋敷境（背割）に大溝を掘削し、それと並行して土取穴（造成土採取のための採掘坑）が掘削されている。大溝自体は排水溝として利用していた可能性もあるが、その大半が時を置かずして埋め戻されている状況である。

SD01埋土の土壤分析を実施したところ、大溝埋土下部では黒色土と淡オリーブ黒色粘質土層（第21図第5～6層）が堆積し、同層内にはラミナが認められ、埋土に特徴的な「ブロック」が含まれていないことから自然堆積と指摘されている。この結果を踏まえ、大溝下部（第5～6層）は自然に埋まり、それより上層（第1～4層）は人為的に埋められたものと捉えている。



第21図 SD01平面図・断面図

堀尾期絵図に見る大溝推定位置
(○印部分が大溝推定位置)

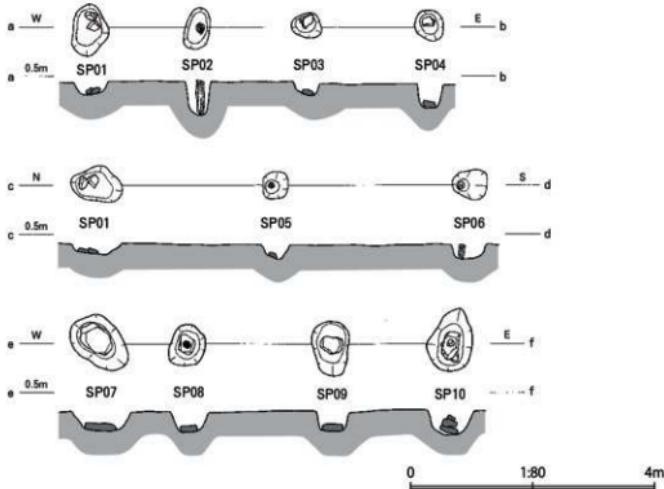
第2項 柱穴列（第22・23図）

武家屋敷調査区では数多くの柱穴を検出しているが、柱穴には礎盤石を伴うもの・礎盤石を伴わないもの・柱と礎盤石を伴うもの・柱のみ残存するものがある。検出した柱穴は掘立柱建物を構成する柱穴あるいは塀・柵などの遮蔽物に伴う柱穴と考えられるが、検出状況からその判別はできていない。

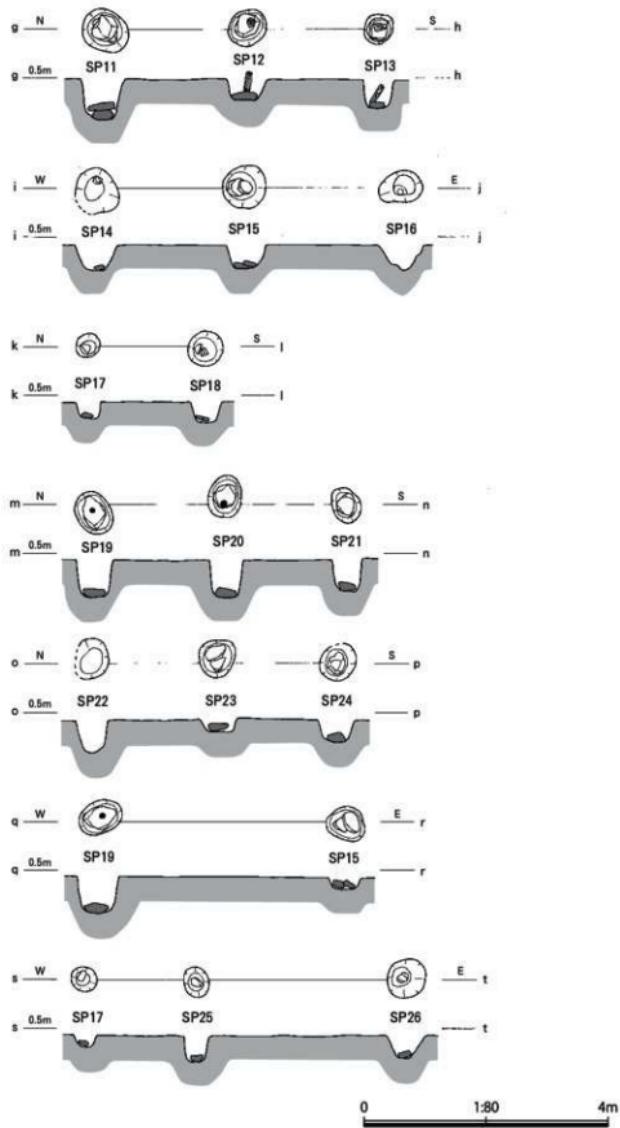
そのためここで掲載した柱穴列は、ある程度等距離で筋の通る柱穴を抽出し、掘立柱建物あるいは遮蔽物に伴う可能性のあるものを取り扱っている。ただし、武家屋敷調査区西側は擾乱層を取り除いたところで検出した任意の造構面であり、厳密には堀尾期の生活面ではない。柱穴は検出しているが、深さをもつ柱穴底部のみの検出に留まっているものも含んでいる。

柱穴は円形や楕円形で、直径0.40～0.70m、深さ0.18～0.62mを測り、主軸方位は南北を軸とした場合N-E-Eである。規模はa-b間で5.88m以上、c-d間で5.88m以上、e-f間で5.88m以上、g-h間で3.92m以上、i-j間で3.92m以上、k-l間で1.96m以上、m-n間で3.92m以上、o-p間で3.92m以上、q-r間で3.92m以上、s-t間で5.20m以上である。柱間寸法は現地測量で1間=1.96m（6尺5寸）を基準とするが、c-d間で2.94m（9尺8寸）、q-r間で3.92m（2間）を測るものもある。

礎盤石（地下式礎石）の天端検出標高は深い柱穴で0.02m、浅い柱穴で0.44mとなっており、約42cmの比高差があるため統一的ではない。礎盤石は直径30～40cmを測り、石材は大海崎石や川原石が混在する。礎盤石には2～3個の根石を伴うもののが含まれ、SP08・19・20の礎盤石には柱の当たり痕が残る。礎盤石はしっかりした石材を使用しているのに対し、柱材の中には直径5～10cmの華奢な柱があり、これらは建物に関係する柱材ではなく塀や柵などに使用される木杭と思われる。その他の柱材には直径15cmの角材で柄穴をもつ柱があり、転用材の可能性がある。



第22図 柱穴平面図・断面図(1)



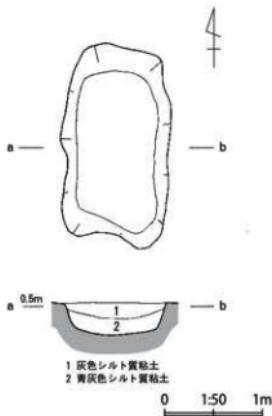
第23図 柱穴平面図・断面図(2)

第3項 土坑SK01（第24図）

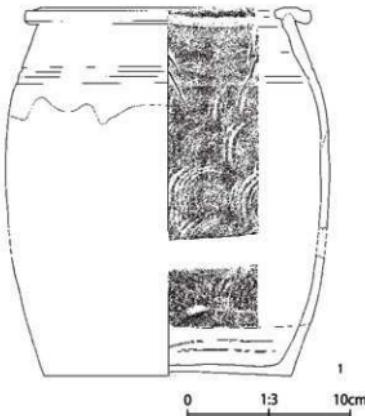
SK01は武家屋敷調査区(中央部)で検出した廃棄土坑である。規模は上縁長軸が2.10m、短軸が1.00m、深さ0.32mを測り、歪んだ楕円形を呈する。埋土はシルト質粘土で、国産陶器が出土している。

SK01出土遺物（第25図）

25-1はSK01の埋土から出土した国産陶器である。肥前陶器の壺で円筒形を呈し、内面に同心円状のタタキ痕が残る。外面口縁部から胴部上方にかけて透明釉を施す。17世紀代初頭。



第24図 SK01平面図・断面図



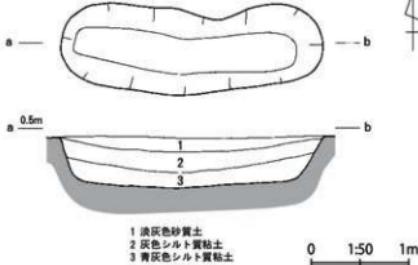
第25図 SK01出土遺物

第4項 土坑SK02（第26図）

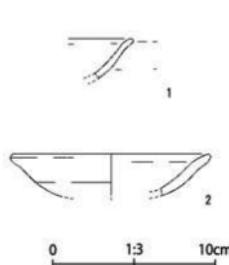
SK02は武家屋敷調査区(中央部)で検出した廃棄土坑である。規模は上縁長軸が2.68m、短軸が0.74m、深さ0.53mを測り、楕円形を呈する。埋土は砂質土とシルト質粘土で、国産陶器が出土している。

SK02出土遺物（第27図）

27-1は国産陶器である。肥前陶器の折縁皿で、口縁部のみ残存している。九陶1-2期。27-2は京都系土師器皿である。手づくね成形で、体部をやや肥厚させる。



第26図 SK02平面図・断面図



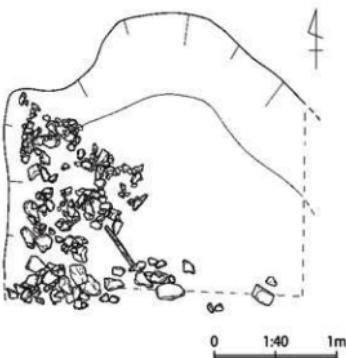
第27図 SK02出土遺物

第5項 碓敷SX01（第28図）

SX01は武家屋敷調査区（西側）の南東角で検出した礫敷造構である。東西1.40m×南北1.70mの範囲で、直径5~20cmを測る平らな川原石を検出している。

礫は浅い土坑状の窪みの中に敷かれ、窪み西側縁辺部に偏った状態で出土している。

SX01の範囲では木片や炭化物とともに礫を検出していることから、母屋に近い位置に存在していたものと想定している。廃棄土坑（ゴミ穴）の可能性も考えられるが、SX01から遺物は出土しておらず、造構の性格は判然としない。



第28図 SX01平面図

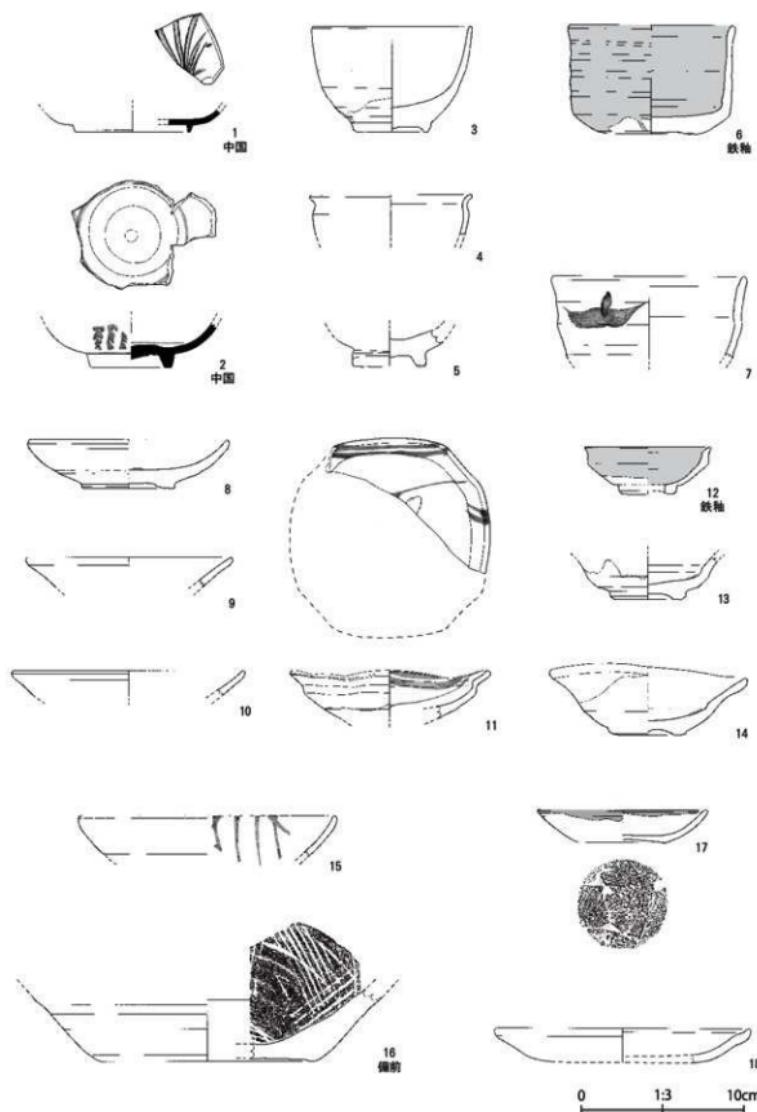
第6項 第1遺構面遺構外出土遺物（第29図）

ここでは第1遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。

29-1・2は中国磁器である。29-1は景德鎮窯の青花皿である。精製の丸形皿で、見込みに草文を施す。29-2は漳州窯の青花皿である。粗製の丸形皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、外面に鱗文を施す。いずれも16世紀代末~17世紀代初頭のものである。

29-3~16は国産陶器である。29-3は肥前陶器の丸形碗である。外面に緑釉を施し、高台は露胎。九陶I-2期。29-4は肥前陶器の碗である。口縁部に天目碗のなごりを残す。九陶II期。29-5は肥前陶器の碗である。底部のみ残存し、脛付に砂粒が付着している。九陶II期。29-6は肥前陶器の筒形碗である。高台が付かないタイプで、内外面に鉄釉を施す。九陶II期。29-7は肥前陶器の碗である。腰張形で、外面に鉄絵で草文を施す。九陶II期。29-8は肥前陶器の皿である。丸形で内面に4箇所の胎土目痕が残り、高台は露胎。九陶I-2期。29-9は肥前陶器の皿である。口縁部のみ残存し、断面は直線的である。九陶I-2期。29-10は肥前陶器の皿である。口縁部のみ残存し、口縁端部をやや内傾させる。九陶I-2期。29-11は肥前陶器の四方向付皿である。内面に鉄絵を施し、見込みに胎土目痕が残る。九陶I-2期。29-12は肥前陶器の小皿である。内外面に鉄釉を施し、高台は露胎。分類では小皿としたが、小天目の可能性も考えられる。九陶I-2期。29-13は肥前陶器の皿である。体部中段に段をもち、口縁部でやや外反するタイプの皿である。胎土目痕が残り、高台は露胎。九陶II期。29-14は肥前陶器の皿である。高台から緩やかに湾曲した体部が延び、口縁部でやや外反し、体部内面に段をもつ。内面に4箇所の胎土目痕が残り、高台は露胎。九陶II期。29-15は肥前陶器の皿である。口縁部のみ残存し、内面に鉄絵の輪描きを施す。九陶II期。29-16は備前の擂鉢である。内外面は赤茶色で、底部のみ残存する。スリ目単位は6本である。

29-17・18は土師器皿である。29-17は在地系土師器皿である。口縁部内外面に灯心油痕が付着することから灯明皿として使用されたものである。29-18はやや大ぶりな京都系土師器皿である。



第29図 第1造構面造構外出土遺物

第4節 第2遺構面

第2遺構面の概要（第30図）

第2遺構面は、標高0.60～0.80mで検出した遺構面である。遺構は、土坑5基（SK05～09）、その他に柱穴を多数検出した。

第2遺構面は、第1遺構面の上にB-1層（灰色シルト質細砂）の盛土造成を施して形成された遺構面である。ただし、第2遺構面は擾乱層を除去した段階で検出した遺構面であり、一部に生活面が残っていることは否定しないが、擾乱を免れた様々な時期の遺構を検出している可能性があり、厳密な意味での遺構面ではない。

また、遺構面出土遺物として取り上げられている遺物の中には明らかに後世の遺物や混入品があり、遺物が示す年代も幅広く様々な時期のものが含まれているため、当遺跡の調査成果のみでの分類は難しい状況である。

遺物の概要

遺物は、国産陶磁器・土師器皿・銭貨・金属製品・石製品・木製品・瓦があるが、第2遺構面出土遺物として取り扱ったものは時期幅が広く、混入品もあり明確な遺構面の時期を示していない。

第2遺構面では中国磁器が出土せず、すべて国産陶磁器である。陶器の産地は、肥前・瀬戸・美濃、京信系、山口（萩・須佐）、在地系で占められる。器種構成は碗・皿類が中心だが、18世紀代後半～19世紀代の壺・甕類や土瓶などでバリエーションが増加する。

磁器は、肥前の割合が高く出土量の大半を占めるが、九陶Ⅲ～V期と時期幅が大きい。その他に、瀬戸磁器が少量出土している。

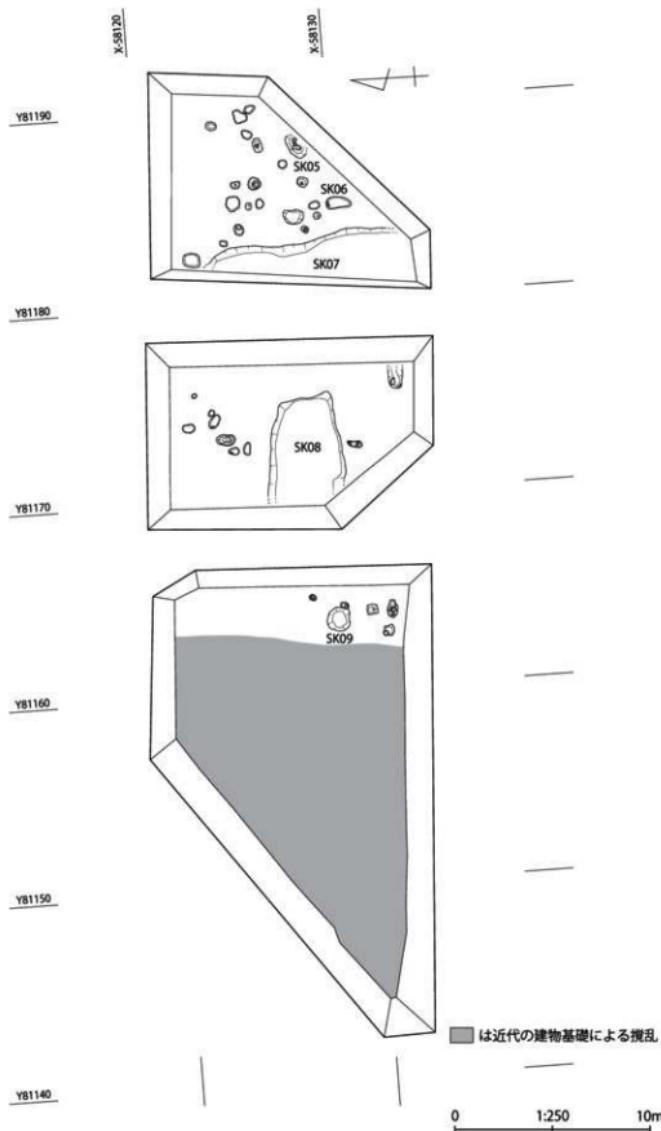
土師器皿は、すべて在地系である。口縁部周辺や内外面に灯芯油痕をもつ灯明皿が多い。

銭貨は、寛永通寶が出土している。金属製品は、煙管の雁首・吸口・釘がある。石製品は、火打石が出土している。木製品は、漆器椀・曲物・木栓・箸・木箱・下駄など多岐にわたる。瓦は、平瓦（棟瓦）、軒丸瓦、玉縁式丸瓦（いずれも破片）が出土し、コピキBのものである。

なお、発掘調査時に第2遺構面出土遺物として取り上げた陶磁器類の中には明らかに混入品と考えられるものがあり、それらは非掲載遺物として取り扱っている。また、近現代擾乱層出土遺物は基本的に取り扱っていないが、一部特徴的なものを抽出して近現代の遺物（第42図）として掲載した。

遺構面の時期

第2遺構面の年代は1638年以降の松平期を想定しているが、検出遺構には松平期前半の柱穴・廃棄土坑や幕末～近代の廃棄土坑があり、遺物が示す年代は上限が17世紀代前半、下限が19世紀代後半とかなりの時期幅をもつ。そのため、第2遺構面が松平期においてどの時期に比定するのか提示することは難しい状況である。以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を報告するが、前述のとおり擾乱を免れた様々な時期の遺構・遺物を取り扱っている可能性もある。



第30図 武家屋敷第2遺構面全体図

第1項 土坑SK07 (第31図)

SK07は武家屋敷調査区(東側)で検出した大形廃棄土坑である。規模は上縁長軸が9.85m以上、短軸が1.80m以上、深さ0.80mを測る。梢円形を呈するが検出は約3分の2程度である。埋土は3層で、上層の灰色砂質粘土から遺物が出土している。遺物は様々なものが混入し遺構の明確な時期は示せないが、上限は生産地年代で1630年代のものが古く、下限は1780年代が最も新しい。

SK07出土遺物 (第32・33図)

32-1~8は国産陶器である。32-1・2は肥前陶器の呉器手碗で、脣付は無釉。九陶Ⅲ期。32-3は肥前陶器(内野山窯)の碗で、内外面に緑釉を施す。九陶Ⅲ期。32-4・5は京信系陶器の丸形碗である。18世紀代。32-6は肥前陶器の平形皿である。内外面に銅緑釉、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。32-7は肥前陶器の二彩手の大皿である。口縁部は直立して玉縁状におさめ、内面に刷毛目を施す。九陶Ⅱ期。32-8は肥前陶器の擂鉢で、鉄化粧を施す。

32-9~14は国産磁器である。32-9は肥前磁器の端反形の小杯である。外面に連弁文を施す。九陶IV期。32-10は肥前磁器の仏飯器である。口縁部外面に雨降文を施す。高台部は欠損している。九陶IV期。32-11は肥前磁器の端反碗である。外面に網目文と2本の線巻を施す。九陶Ⅲ期。32-12は肥前磁器の陶胎染付碗である。底部のみ残存し、高台付近に線巻を施す。九陶IV期。32-13は肥前磁器の皿である。内外面に青釉釉、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。九陶Ⅲ期。32-14は肥前磁器の丸形皿である。内面に草花文の染付を施し、脣付に砂粒が付着している。九陶Ⅲ期(1650年代)。

33-1~4は在地系土師器皿である。いずれも底部に糸切り痕をもち、口縁部内外面に灯心油痕が付着することから灯明皿として使用されたものである。

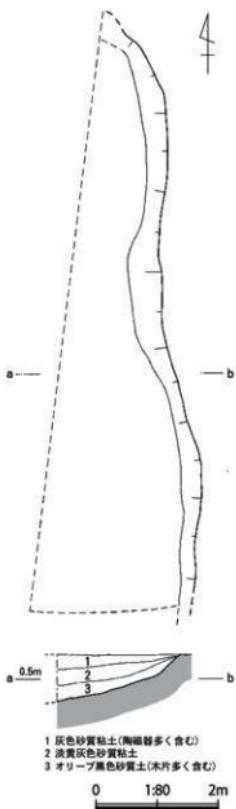
33-5は焰烙である。無耳の焰烙で、器壁は「く」の字状である。

33-6は金属製品である。真鍮製の煙管の雁首で、火皿の斜め後方に火皿冠の穿孔がある。

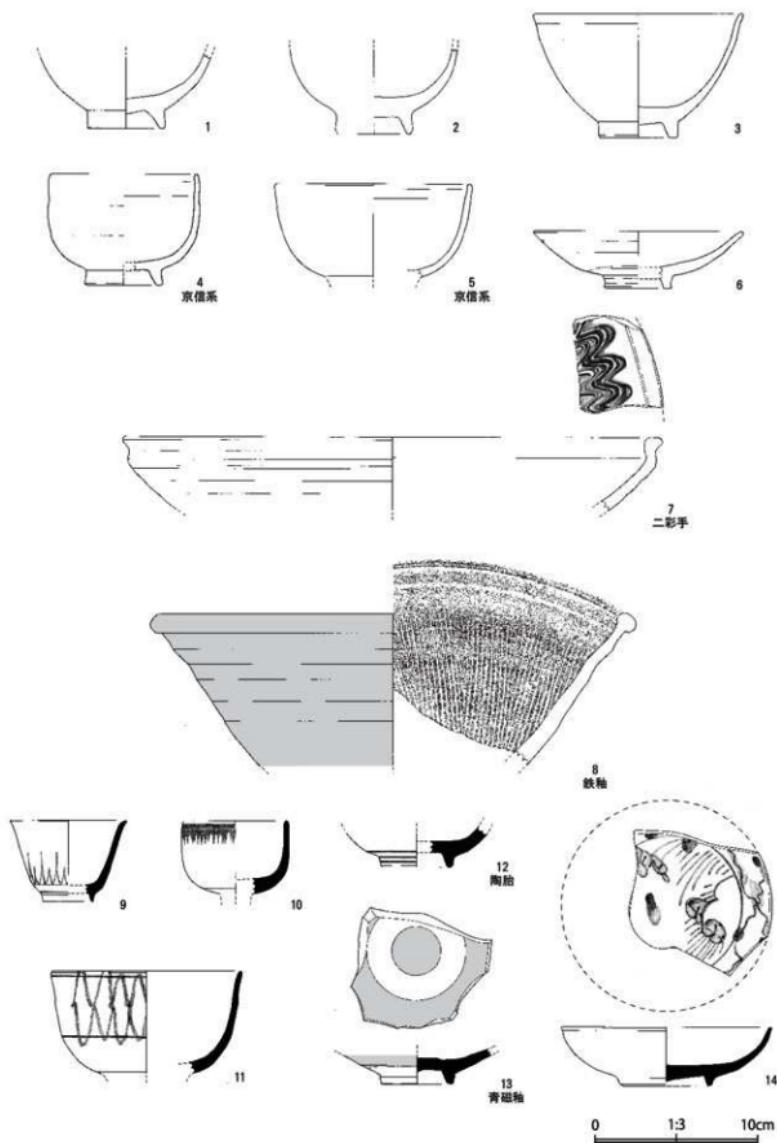
33-7は火打石である。石材は白色透明の石英で、石の側縁部に敲打痕が残るが使用頻度は少ない。

33-8は銭貨である。寛永通寶で1638~56年に鋳造された古寛永である。

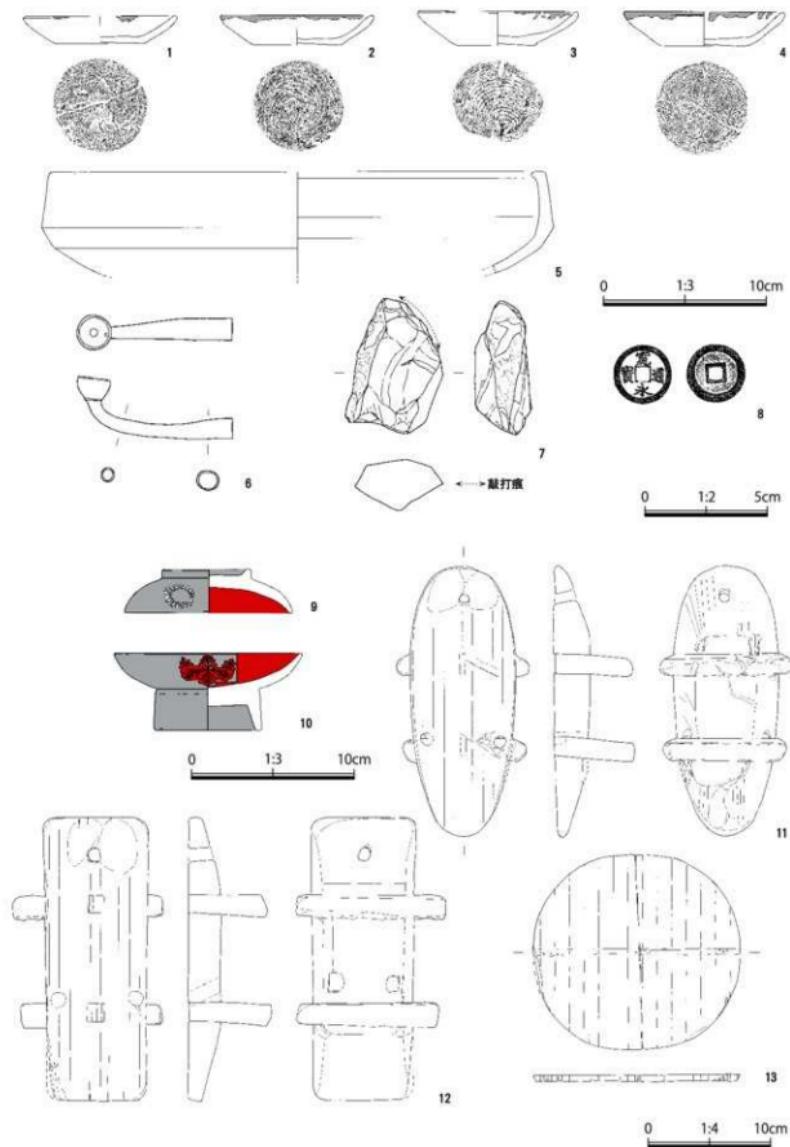
33-9~13は木製品である。33-9は漆器椀の蓋である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に菊花文を施す。33-10は漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に五七桐文を施す。33-11は丸型差込下駄で木取りは杼目、枘穴は前後1箇所ずつである。歯高は6.7cmを測る。33-12は角型差込下駄で木取りは杼目、枘穴は前後1箇所ずつである。歯高は6.8cmを測る。いずれも前緒付近には足の指の痕跡が残る。33-13は曲物の蓋である。蓋の中央部に横板を接合するための木釘が残る。



第31図 SK07平面図・断面図



第32図 SK07出土遺物(1)



第33図 SK07出土遺物(2)

第2項 土坑SK08（第34図）

SK08は武家屋敷調査区（中央部）で検出した廃棄土坑である。規模は上縁長軸が4.96m以上、短軸が3.60m、深さ0.28mを測り、不整形な楕円形を呈する。埋土は2層で、下層の灰色砂質粘土には陶磁器類とともに建築部材などの木質片が多量に含まれる。遺物は18世紀代後半～19世紀代にかかるものが多く、幕末～近代の一括廃棄土坑と考えられる。

SK08出土遺物（第35・36図）

35-1～8は国産陶器である。35-1は在地系陶器の杉形碗である。外面口縁部から胴部上方にかけて透明釉を施す。胴部下方には縱方向のケズリ痕跡が顕著に見られ、高台内は無釉。18世紀代。35-2は京信系陶器の碗である。外面に呉須絵で注連縄文を施す。

18世紀代。35-3は瀬戸・美濃陶器の腰張形の碗である。内外面に透明釉を施し、高台は露胎。18世紀代。35-4は在地系陶器（布志名）の碗である。内外面に淡い緑釉を施し、高台は露胎。いわゆる「ボテボテ茶碗」。18世紀代後半以降。35-5は山口（萩か）の壺である。口縁部は内側に湾曲し、底部無釉である。18世紀代。35-6は在地系陶器の描鉢である。口縁部は玉縁状におさめ、スリ目単位は10本である。18世紀代後半。35-7は肥前陶器の片口である。注口は貼り付け、口縁部周辺と内面に銅緑釉を施す。18世紀代。35-8は瀬戸の水鉢である。外面に土灰釉の上から鉄釉と緑釉を施釉する。見込みには砂目があり、口縁は折り返して内側に肥厚させる。19世紀代中頃。

35-9は土器製の焜炉である。腰丸形で外面上部に空気孔があり、内面3箇所に突起をもつ。

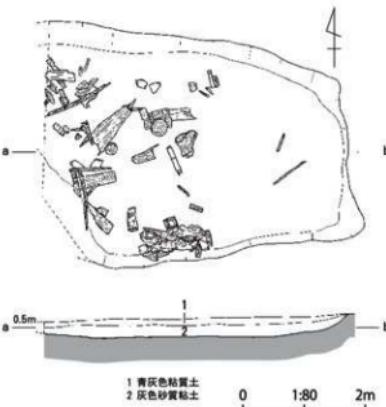
35-10は瓦質土器の火鉢である。内面はミガキ調整、外面体部に2条の区画帯と字文の陽刻、脚部に菊花文の陽刻を施す。

36-1～4は国産磁器である。36-1は肥前磁器の陶胎染付碗である。口縁部のみ残存し、外面に草文を施す。九陶IV期。36-2は肥前磁器の外青磁碗である。見込みに手描きの五弁花と二重圓線を施し、高台内に方形枠「渦福」の銘をもつ。九陶IV期。36-3は肥前磁器の白磁皿である。型打成形の輪花皿で、内面に菊花文の陰刻を施す。九陶III期。36-4は肥前磁器の平形皿である。内面口縁部周辺に草文の染付を施し、見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。九陶IV期。

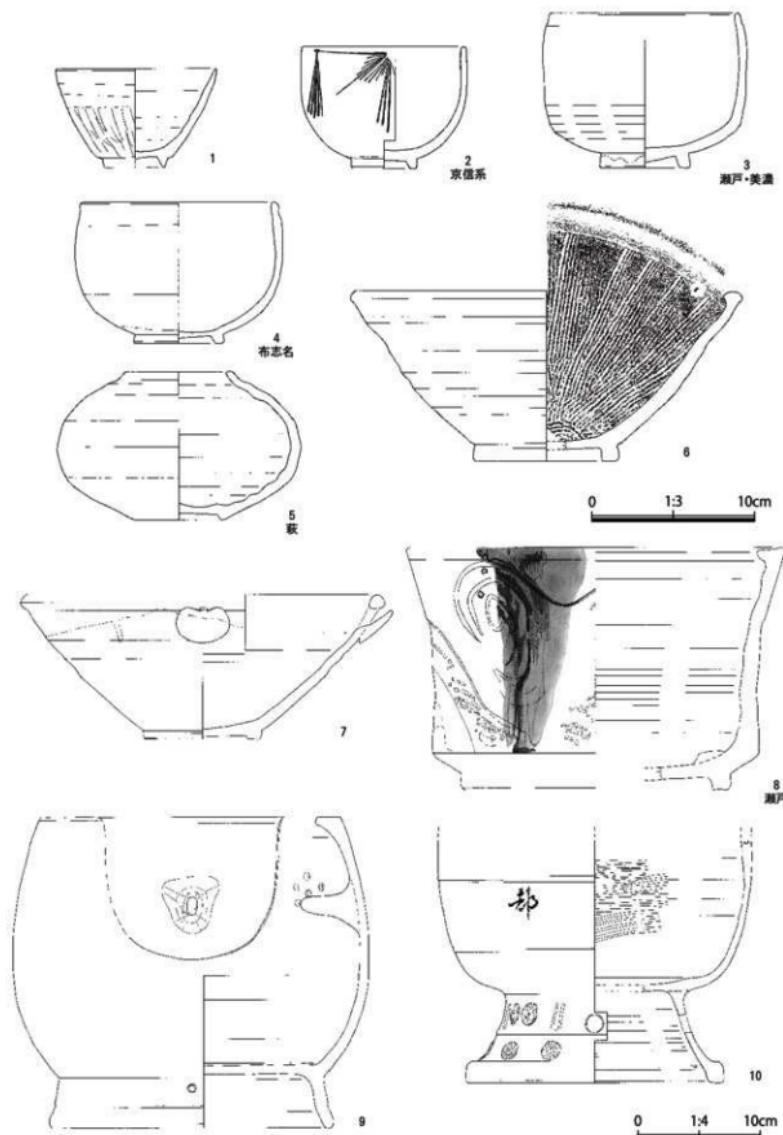
36-5・6是在地系土師器皿である。いずれも底部に糸切り痕をもつ。

36-7は板作りの焼塩壺である。無刻印のもので、底部に粘土充填の痕跡をもつ。

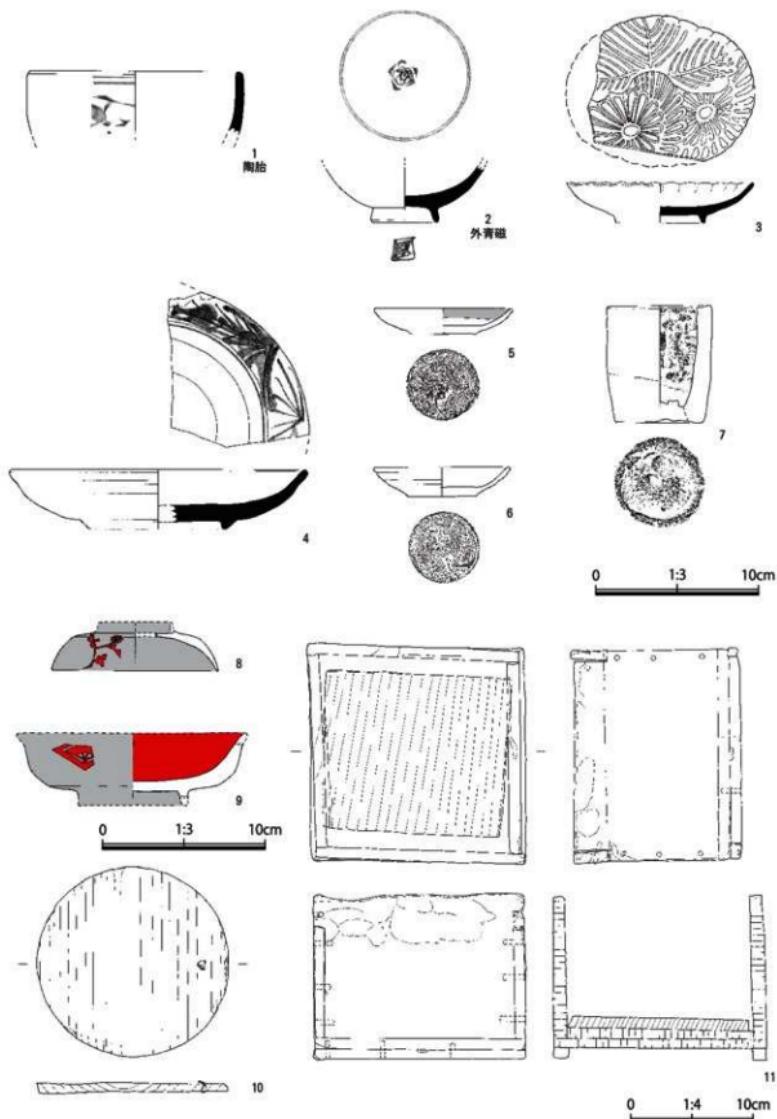
36-8～11は木製品である。36-8は漆器椀の蓋である。塗色は内外面とも黒色、外面に花文を施す。36-9は漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に中菱五骨扇文を施す。36-10は曲物の蓋である。木取りは板目で一部に樺皮紐が残る。36-11は木箱である。直径17.3cm角、高さ13.8cmの方形箱で、側板と底板は木釘で接合する。内容物は遺存していないため用途不明である。



第34図 SK08平面図・断面図



第35図 SK08出土遺物(1)



第36図 SK08出土遺物(2)

第3項 土坑SK09（第37図）

SK09は武家屋敷調査区（西側）で検出した廃棄土坑である。規模は上縁長軸が1.20m、短軸が1.12m、深さ0.30mを測り、歪んだ円形を呈する。埋土は2層で、下層の淡オリーブ黒色粘土から土師器皿（いずれも灯明皿）と木栓・箸・下駄などの木製品が出土している。陶磁器類は出土していない。

武家屋敷調査区での廃棄土坑の検出位置は、屋敷地空間として捉えた場合、屋敷の北側縁辺部に比定される。表口は絵図から西側と想定され、北側縁辺部は屋敷地の側面にあたる。

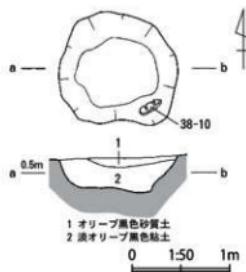
SK09出土遺物（第38図）

38-1～4は在地系土師器皿である。いずれも底部に糸切り痕をもち、口縁部内外面に灯心油痕が付着することから灯明皿として使用されたものである。

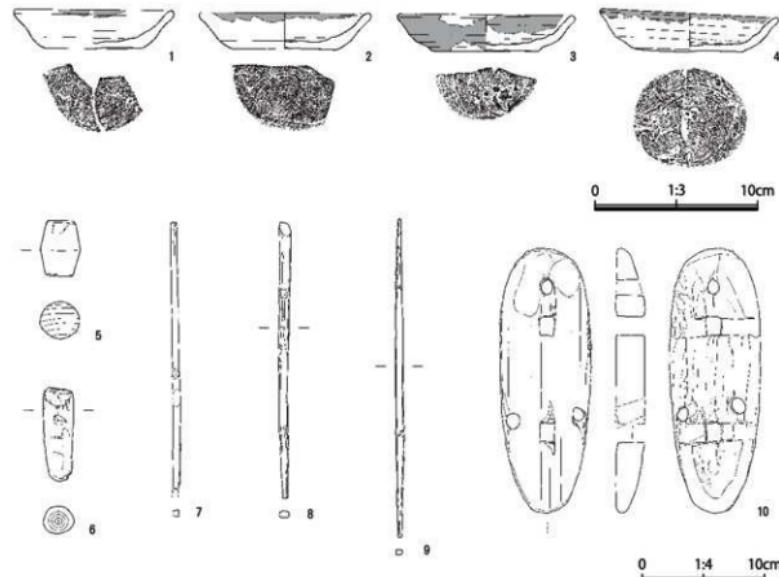
38-5・6は木栓である。38-5は円柱で算盤の珠状、38-6は円錐状である。

38-7～9は箸である。いずれも白木の箸で、38-9は中心付近に最大幅をもつ両口箸である。

38-10は丸型差込下駄である。木取りは極目、枘穴は前後1箇所ずつである。歯部は欠落している。前緒付近には足の指の痕跡が残り、左足用と考えられる。



第37図 SK09平面図・断面図



第38図 SK09出土遺物

第4項 第2遺構面遺構外出土遺物（第39～41図）

ここでは第2遺構面直上から出土した遺物を遺構外出土遺物として取り扱うが、遺物が示す年代の時期幅は大きく、様々な年代のものが混在しているため明確な遺構面の時期を示していない。

39-1～40-8は国産陶器である。39-1は山口（萩）の開口碗で、藁灰釉に鉄釉を掛け流す。18世紀代後半。39-2は京信系陶器の小坏である。18世紀代。39-3は肥前陶器の丸形碗である。九陶Ⅲ期。39-4は京信系陶器の杉形碗である。外面に呉須絵で小杉文を施す。18世紀代。39-5は肥前陶器の呉器手碗である。九陶Ⅲ期。39-6は瀬戸・美濃陶器の半球碗である。40-1は山口（萩）の丸形碗で、内外面に藁灰釉を施す。40-2は京焼風陶器の碗である。九陶Ⅲ期。40-3は瀬戸・美濃陶器の半球碗である。40-4～6は肥前陶器の皿である。いずれも九陶Ⅱ期。40-7は須佐の插鉢、40-8は在地系の插鉢である。

40-9～41-7は国産磁器である。40-9は肥前磁器の小坏である。外面に字文と錫を施す。40-10～41-1は肥前磁器の碗である。40-10～14は丸形碗、40-15は廣東碗、40-16は端反碗である。41-1は半球碗である。口縁部内側に四方禪、見込みに唐草文と二重圓線を施す。いずれも九陶Ⅲ～V期。41-2・3は肥前磁器の皿である。九陶IV～V期。41-4～6は肥前磁器の蓋である。九陶IV～V期。41-7は肥前磁器の火入である。半筒形で外面に瓔珞文を施し、高台は蛇ノ目高台である。九陶IV期。

41-8～11是在地系土師器皿である。いずれも底部に糸切り痕をもつ。41-8は受皿とセットで、上皿口縁部内外面に灯心油痕が付着することから灯明皿として使用されたものである。41-9の体部外面には「□七□」の墨書があり、底部は墨で塗り潰されている。

近現代の遺物（第42図）

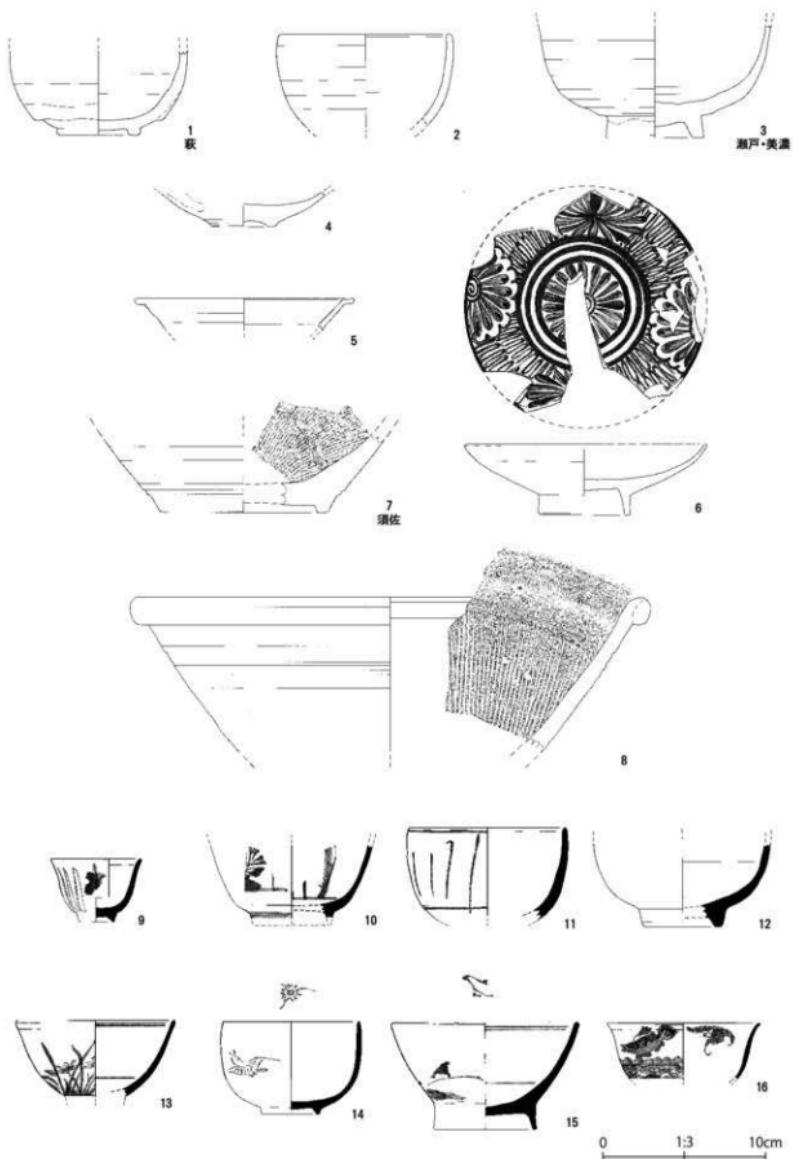
掲載する遺物は近現代搅乱層出土遺物のうち、在地系陶器（布志名）とガラス製品の中で特徴的なものを抽出し、近現代の遺物として取り扱う。

42-1～3是在地系陶器（布志名）である。42-1は円筒形の薬湯瓶で外面に一畠薬師の○マークがある。42-2は浅半球碗で外面に梅花と草文の絵付を施す。底部外面に鍛治山窯の⑦マークがある。42-3は鉢の蓋で竹箇と雀の絵付を施し、竹を模倣したツマミをもつ。いずれも19世紀代後半以降。

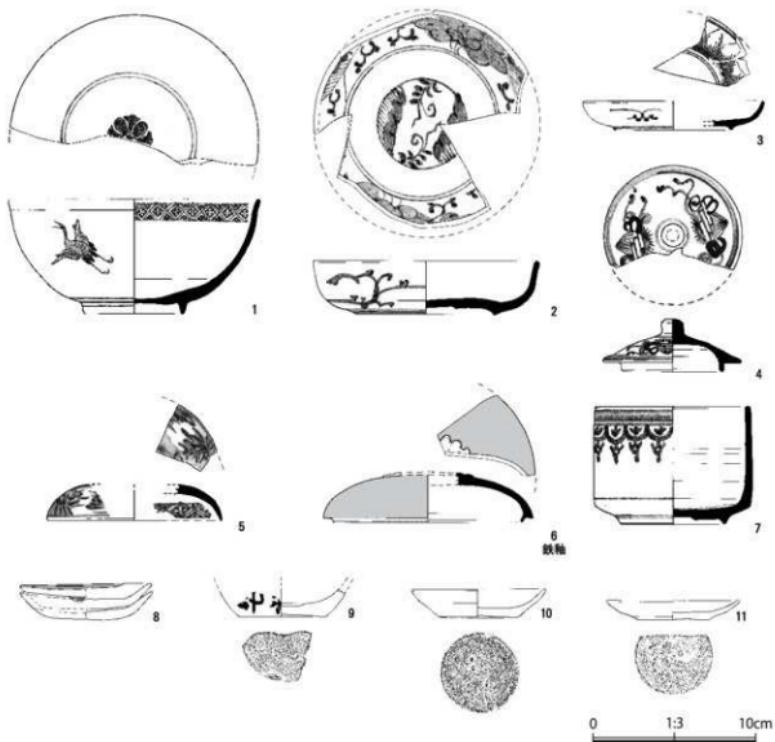
42-4～6はガラス製品である。42-4はヨードチンキの薬瓶である。瓶は無色透明で側面に「ヨデー
ム丁幾」「磐井製」のエンボスが付く。昭和前半。42-5は目薬瓶である。瓶は無色透明で側面に「参
天堂薬房」「大学目薬」のエンボスが付く。1899年以降。42-6は薬瓶である。瓶は無色透明で側面に
「松江病院」のエンボスが付く。明治～大正。



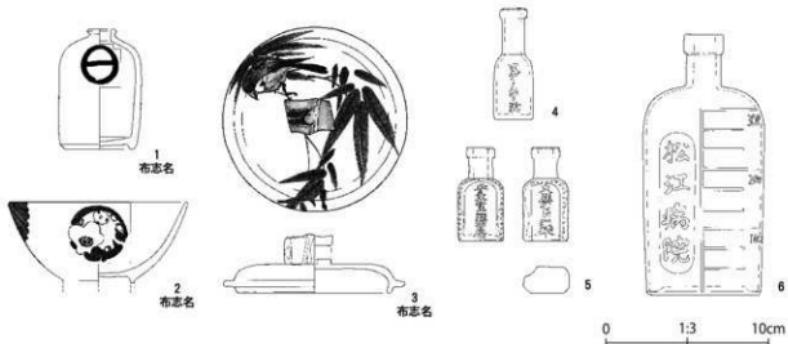
第39図 第2遺構面遺構外出土遺物(1)



第40図 第2造構面遺構外出土遺物(2)



第41図 第2造構面造構外出土遺物(3)



第42図 近現代の遺物

第4章 大橋家与力屋敷の調査

第16ブロックは、市道北田大橋線から田町川に挟まれた城山北公園線沿いの南側部分である。

ここでは第16ブロックのうち、平成25~26年度に調査を実施した松江城下町遺跡（南田町132外）に該当する調査区を「大橋家与力屋敷調査区」として取り扱う（第43図）。

大橋家与力屋敷調査区は、第16ブロック中央部の東西50.0m×南北18.0mの区画で調査面積は約582.1m²である。以下、基本層序を示し、旧地表面を始めとした古い造構面から順に調査成果を詳述する。

第1節 調査手法と基本層序

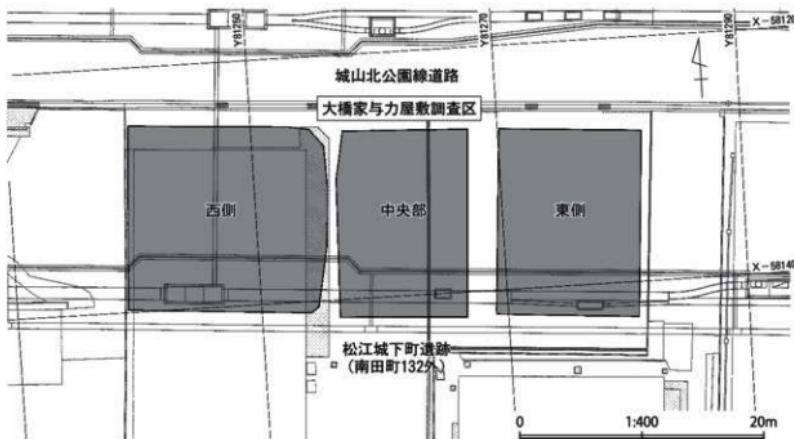
大橋家与力屋敷の調査手法

調査地は松江城本丸から東へ約1.1km離れた場所に位置し、調査開始以前には店舗と店舗の駐車場となっていた。堀尾・京極期では武家地の一角にあたり、松平期初頭から幕末に至るまでの間には当時の家老である大橋茂右衛門の与力（陪臣）の屋敷地として利用されていた。

大橋家与力屋敷調査区では周辺民家の進入路・作業ヤードの確保等の必要性から、調査区を東西に大きく3分割して調査を実施した。

3分割した調査区は、西側に東西15.5m×南北15.2m区画（うち調査面積228.0m²）、中央部に東西1.2m×南北15.2m区画（うち調査面積170.2m²）、東側に東西12.1m×南北15.2m区画（うち調査面積183.9m²）の範囲で設定し、西側から調査を進め、中央部・東側へと順次調査をおこなった。

第1~15ブロックでは城山北公園線南側への道路拡張範囲が平均して4.0~7.0mであるのに対し、本遺跡を含む第16ブロックは南側へ18.0mの道路拡張となることから、他に比べて広範囲に調査区を設定することが可能であった。



第43図 第16ブロック大橋家与力屋敷調査区配置図

遺構面の設定と基本層序（第44図）

大橋家与力屋敷調査区の土層堆積状況の観察をおこなった結果、旧地表面と6面の遺構面を確認した。遺構面の把握・認定区分については、主に自然堆積層・造成土（盛土）・搅乱層に分け、その中から生活面と考えられる整地層や遺構の機能面および廃絶面を細分した。そして、遺構面直上から出土した遺物の年代観などを考慮して遺構面として捉えている。

なお、大橋家与力屋敷の基本的な層序は第1章第2節-4で示した松江城下町遺跡基本土層（第4図）と共通するものであり、土層の呼称についてはこれに準じて対応する層名を付した。

第44図の基本土層図は、上図に東西方向の北壁土層の一部分を、下図に南北方向の東壁土層の一部分を掲載している。以下、各遺構面の土層堆積状況について下層から上層の順に説明する。

旧地表面以下の自然堆積層 標高-0.30～-0.20m

Ⅲ層は自然堆積層の青灰色細砂である。この土壤はシルト質が強く、場所によってはアナジャコなどの水生生物の生痕が確認でき、周辺が水域や湖底（海底）であったことを示すものと考えられる。

旧地表面 標高-0.15～0m、層厚約20cm

I b層は旧地表面の茶褐色有機質土である。層理面上方ではラミナ状の堆積を確認し、層理面下方は未分解の有機物を多量に含む。堆積状況は、南北軸ではほぼ水平であるが、東西軸では西側から緩やかに東側へ傾斜する。

第1遺構面 標高0.10m、層厚約10cm

A層は城下町初期造成土と考えられるI b層とⅢ層の混和土で、第1遺構面の基盤層である。

第2遺構面 標高0.20～0.30m、層厚約10～20cm

B-1層は畠を形成する淡茶褐色有機質細礫粘土である。畠と畠間の土壤分析結果から、耕作土と指摘されている（土壤分析結果については本章第5節に詳述）。

第3遺構面 標高0.50～0.70m、層厚約30～40cm

B-2層は第3遺構面の掘立柱建物を構築する、灰色シルト質細砂を主体とした基盤層である。また、与力屋敷初期段階の造成手法として、島状整地（盛土）を施している状況が明らかとなった。

第4遺構面 標高0.80m、層厚約20cm

B-3層は第4遺構面の礎石建物を構築する、灰色～暗灰色砂質土を主体とした基盤層である。

第5遺構面 標高1.10m、層厚約30cm

B-4層は黄褐色粘性土（山土造成土）で、土壤に地山ブロックを多く含んでいる。

第6遺構面 標高1.30m、層厚約20cm

B-5層は灰褐色粘土を主体とした客土層である。上層からの搅乱土も混じる。

第6遺構面より上層 標高1.50m、層厚約20cm

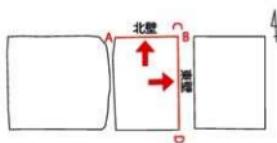
C層は搅乱層である。近現代の陶磁器やガラス片、コンクリート片が混じる。

現地表面 標高1.50m

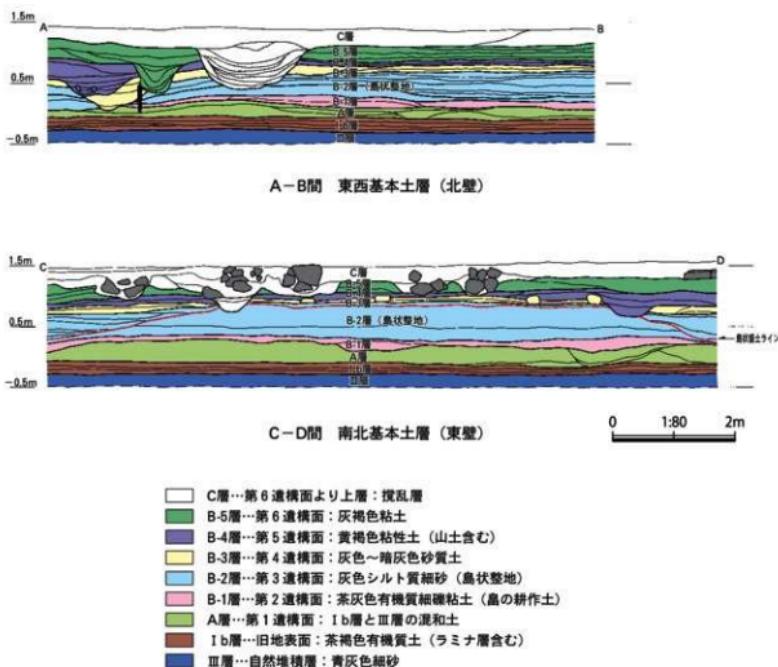
明治以降の区割りをほぼ踏襲して、現代に至る。調査開始以前までは店舗が存在していた。現道路面は標高1.35mで、調査地の地表面は道路面より15cm程高い。



C-D間 基本土層断面（北西から）
写真中央の台形状の高まりが島状整地



大橋家与力屋敷調査区



第44図 大橋家与力屋敷基本土層図

第2節 旧地表面以下

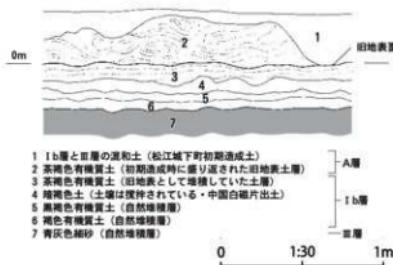
松江城下町の下層には、広い範囲で城下町造成以前の旧表土と考えられる黒褐色～茶褐色粘質土（I層）の堆積が認められている。大橋家与力屋敷調査区では、この旧表土として堆積する土層を4層に細分することが可能であったため、本節に提示しておく。

標高-0.25～0mに堆積する旧表土は、上層から茶褐色有機質土、暗褐色土、黒褐色有機質土、褐色有機質土の4層である（第45図第3～6層）。

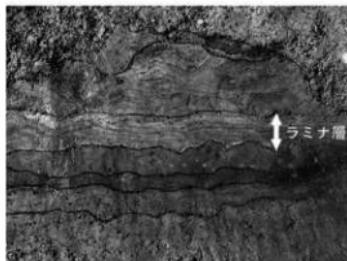
茶褐色有機質土はラミナ状（茶褐色粘性土と灰色粘土が1cm単位で互層状）に堆積する土壤で、旧地表面土層となる。ラミナ状の堆積は、数年単位で堆積している可能性が指摘されている⁽³⁰⁾。この土層より上層が城下町初期造成土となり、旧地表面直上に造成土として盛り返された旧地表面土層⁽³¹⁾、さらにその上にA層が盛土造成される（第45図第1・2層）。

旧地表面土層直下の暗褐色土は攪拌された土壤である。この土層から15世紀代後半の中国白磁皿が出土している。黒褐色有機質土と褐色有機質土には草植物の地下茎が遺存し、周辺が低湿地であったことを示している。以下の青灰色細砂（第45図第7層）は水域に堆積した自然堆積層である。

暗褐色土から遺物が出土していることを根拠に、旧地表面であるラミナ層は15世紀代後半を週らないことが指摘でき、城下町造成以前の環境を考える上で指標となり得る可能性がある。



第45図 旧地表面以下の土層断面図

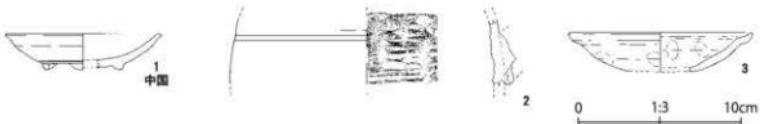


旧地表面以下の土層堆積状況

旧地表面以下及び直上の出土遺物（第46図）

46-1は旧地表面以下の土層（第45図第4層）から出土した中国白磁の皿である。粗製の白磁皿で、高台は抉高台。内外面全面に施釉される。15世紀代後半のもので、白磁森田分類D類⁽³²⁾に相当する。

46-2・3は旧地表面直上から出土した。46-2は肥前系陶器の水注の小片である。内面に顕著な横向のケズリ痕をもつ。16世紀末～17世紀初頭。46-3は京都系土師器皿である。



第46図 旧地表面以下及び直上の出土遺物

第3節 城下町造成以前の旧地表面

大橋家与力屋敷調査区で検出した旧地表面は、武家屋敷調査区と同様に土壌が未分解でラミナ状に堆積する茶褐色有機物層（I b層）で、調査区内全体に広がっている状況を確認した。

I b層は、茶褐色を呈した有機質土で層厚20cmを測り、層理面下方はほぼ水平堆積であったが、上方は城下町造成時に土壌が盛り返された影響を受けているためか、層理面に斜交している。未分解の薄片状の木片を多量に含んでおり、乾燥密度 $Pd=0.373g/cm^3$ と松江城に近い殿町・母衣町で検出される I a 層よりも比重がかなり軽く、細粒分が多く含むといった性質をもつ土層である⁽²⁰⁾。

調査では I b 層を露呈した面を城下町造成以前の旧地表面とし、精査をおこなった。旧地表面は平坦ではなく、調査区西側での検出標高は0m、中央部で-0.10m、東側で-0.15mを測る。西側から東側へ向かって傾斜しており、その比高差は15cmである。

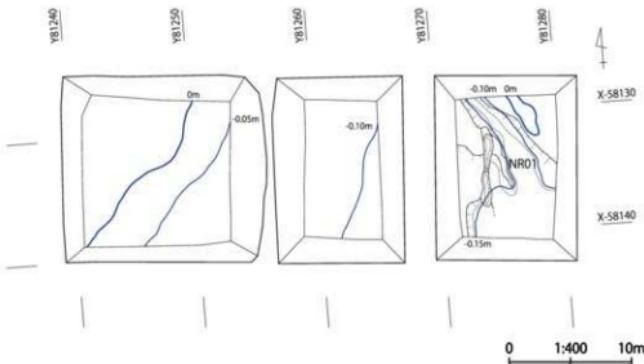
旧地表面の検出標高は、武家屋敷調査区では平均0.15mであるのに対し、本調査区では平均-0.10mとなり、調査区間の距離約100mで25cmの比高差をもつ。旧地表面は、殿町・母衣町と変わらず、南田町においても西側が高く、東側へ向かうに従って徐々に低くなっていることが分かる。

遺構は、調査区東側で自然流路NR01を検出し、旧地表面の一部では苔を確認した。遺物は、旧地表面直上から肥前系陶器と土師器皿が出土している（第46図2・3）。

第1項 自然流路NR01（第47図）

NR01は調査区東側で検出した、北西から南東方向に延びる溝状の落ち込みである。規模は長さ9.32m以上、幅3.56m、深さ0.24mを測る。断面形はU字形で、埋土に単層の淡褐色粘質土が堆積する。北西から南東に向かってやや傾斜していることから、水流方向は南東方向と考えられる。

この溝状の落ち込みは自然流路と捉えているが、以後に施される城下町初期造成による盛土の土圧荷重痕あるいは畠の耕作による荷重痕の可能性もあり、限定的ではない。



第47図 大橋家与力屋敷旧地表面平面図

第4節 第1遺構面

第1遺構面の概要（第48図）

第1遺構面は、標高0.10mで検出した遺構面である。遺構は、掘立柱建物跡1棟（SB01）、土坑7基（SK10～16）を検出した。

第1遺構面の基盤層となるA層は、Ib層（旧地表面土層）とIII層（自然堆積層）の混和土である。A層土壤はIb層とIII層を母材としていることから、造成土の採取にあたって第1遺構面以下の土壤を掘り上げる必要がある。調査では壁面での検出に留まったが、造成土採取を目的とした土取穴と考えられる無遺物の大形土坑がある。また、立会調査では調査区外南側で東西方向の素掘の大溝を検出し、掘削に生じた残土を初期造成土として利用していたことが想定される。

第1遺構面は、自然堆積層である旧地表面（Ib層）に盛土（A層）を施して造成された最初の遺構面であり、その開始時期は堀尾氏が富田城から松江へ城地を移した17世紀代初頭に造成されたものと考えている。ただし、松江城下町造成の期間を明確に記した文献史料などの記録は残っておらず、正確な年代は分かっていない。幕府の承認のもと城とともに計画的に建設された城下町であり、松江城の築城が1607（慶長12）年に着工、1611（慶長16）年頃に完成していたとするならば、城下町の造成もそれとほぼ同じ時期か、あまり間を置かずにおこなわれたものであろう。

この遺構面が存続した期間については様々な解釈ができるものの、堀尾氏が統治していた段階に造成がおこなわれて機能していた遺構面と捉えている。

遺物の概要

遺物は、中国磁器・国産陶器・土師器皿・金属製品・木製品・瓦がある。出土した陶磁器⁽³⁾には中国磁器と国産陶器があり、国産磁器である初期伊万里の出土はない。陶器の産地は、肥前・瀬戸・美濃、山口（萩）、備前で占められる。このうち出土量の多い肥前陶器は、九陶I-2期（1594～1610年代）のものが中心となる。瀬戸・美濃は、灰釉折縁皿で見込みに印花をもつもの、灰釉内禿皿、志野の菊花皿がある。器種構成は、肥前陶器は碗・皿類、瀬戸・美濃陶器は皿類、備前は擂鉢を中心とする。

磁器は、中国磁器の青花碗が出土している。中国磁器の産地は、景德鎮と漳州窯である。

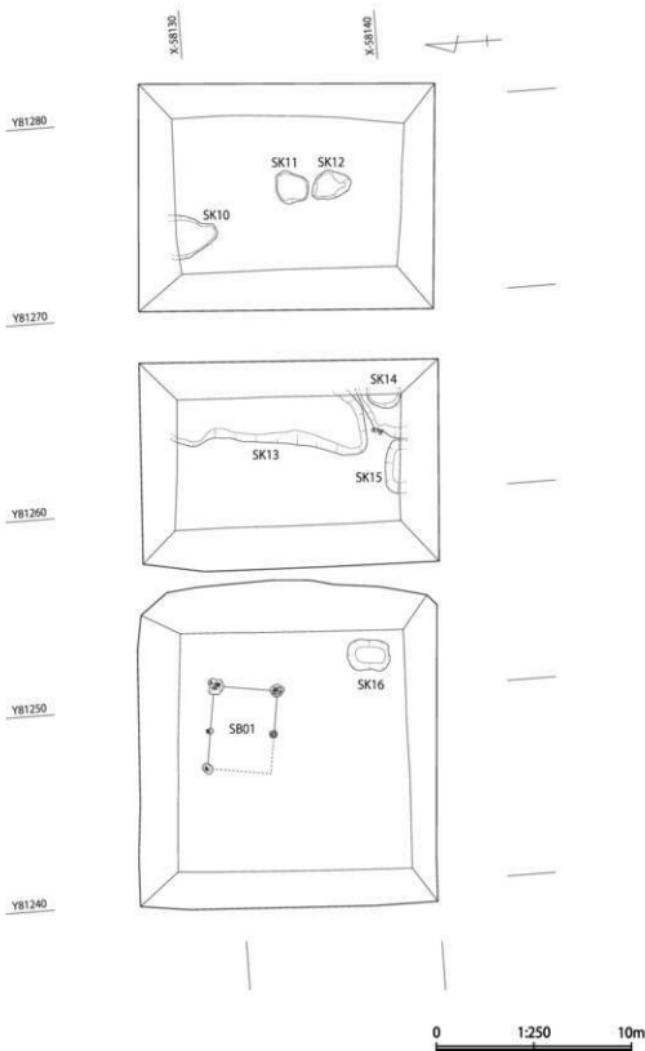
土師器皿は、すべて京都系で占められ、在地系は出土していない。大きさは大小あり、器壁をやや肥厚させた土師器皿が多い。灯芯油痕をもつものは灯明皿として利用されたものである。

金属製品は、煙管の雁首が出土している。木製品は、漆器椀・壺・鉢、下駄など多岐にわたる。瓦は、軒丸瓦（破片含む）が出土し、コビキBである。

遺構面の時期

第1遺構面の年代は、前述した遺物の年代観と城下町造成以前の旧地表面上に盛られたA層を基盤とする最初の遺構面であることを根拠として、堀尾期（1600年代初頭～1633年）を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を報告する。



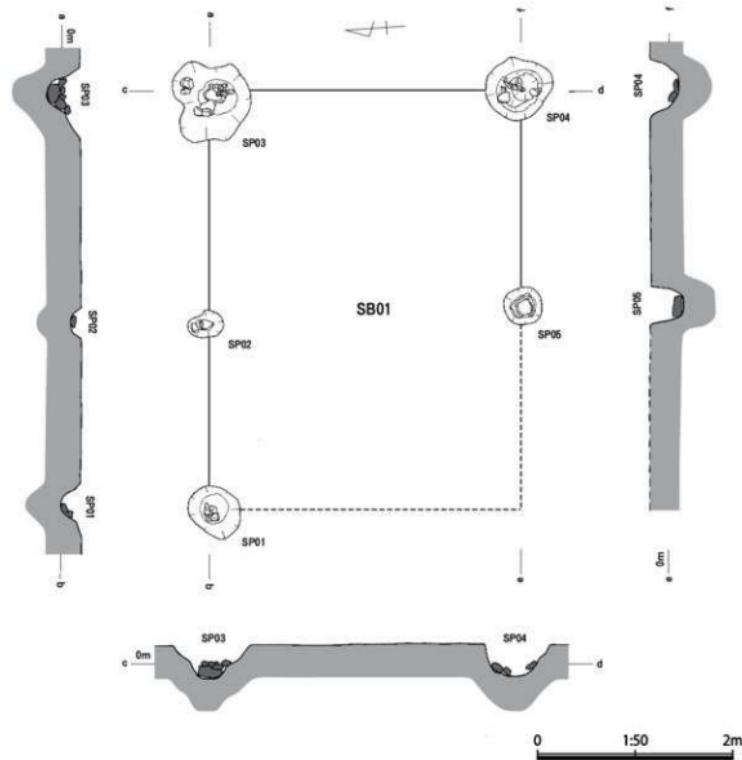
第48図 大橋家与力屋敷第1造構面全体図

第1項 掘立柱建物跡SB01（第49図）

SB01は大橋家与力屋敷調査区（西側）で検出した掘立柱建物跡である。SB01の主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。規模は東西桁行2間（3.92m）×南北梁行1間（2.94m）を測る。柱間寸法は現地測量で1間=1.96m（6尺5寸）を基準としている。

東西列北側の柱穴（SP01-03）は直径0.50～0.70m、深さ0.30～0.40mを測り、平面形は梢円～不定形な円形を呈する。東西列南側の柱穴（SP04-05）は直径0.40～0.65m、深さ0.40mを測り、平面形は梢円形を呈する。いずれも柱穴の底部には、直径20cmを測る拳大の大海上崎石や川原石の根石が置かれていた。なお、SB01南西角に位置する柱穴は確認していない。

SB01は建物としての規模が小さく、屋敷地の住居とは考え難いことから、城下町初期造成に関連した飯場に伴う建物遺構を想定している。



第49図 SB01平面図・柱穴断面図

第2項 土坑SK13（第50図）

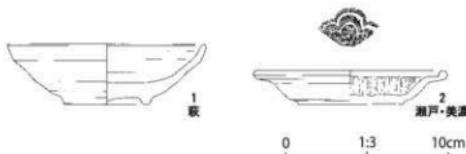
SK13は大橋家与力屋敷調査区（中央部）で検出した大形庵乗土坑である。平面形は不定形な楕円形で、規模は上縁長軸が8.30m以上、短軸が2.50m以上、深さ最大0.45mを測る。

土坑埋土は2層に分かれ、下層の黒褐色土では炭化物や木片とともに遺物が出土している。遺物は国産陶器のほか、漆器椀や下駄などの木製品がある。

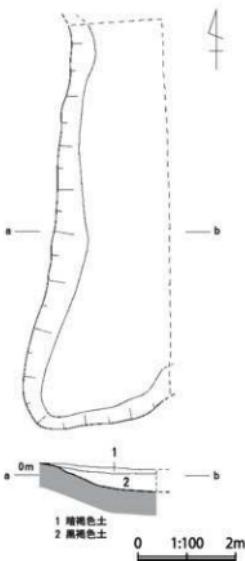
SK13出土遺物（第51図）

51-1・2は国産陶器である。51-1は山口（萩）の丸形皿である。内外面に灰釉を施し、置付無軸。17世紀代初頭。

51-2は瀬戸・美濃陶器の灰釉折縁皿である。体部内面に鏽文を陰刻し、見込みに印花を施す。1590～1610年代。



第51図 SK13出土遺物



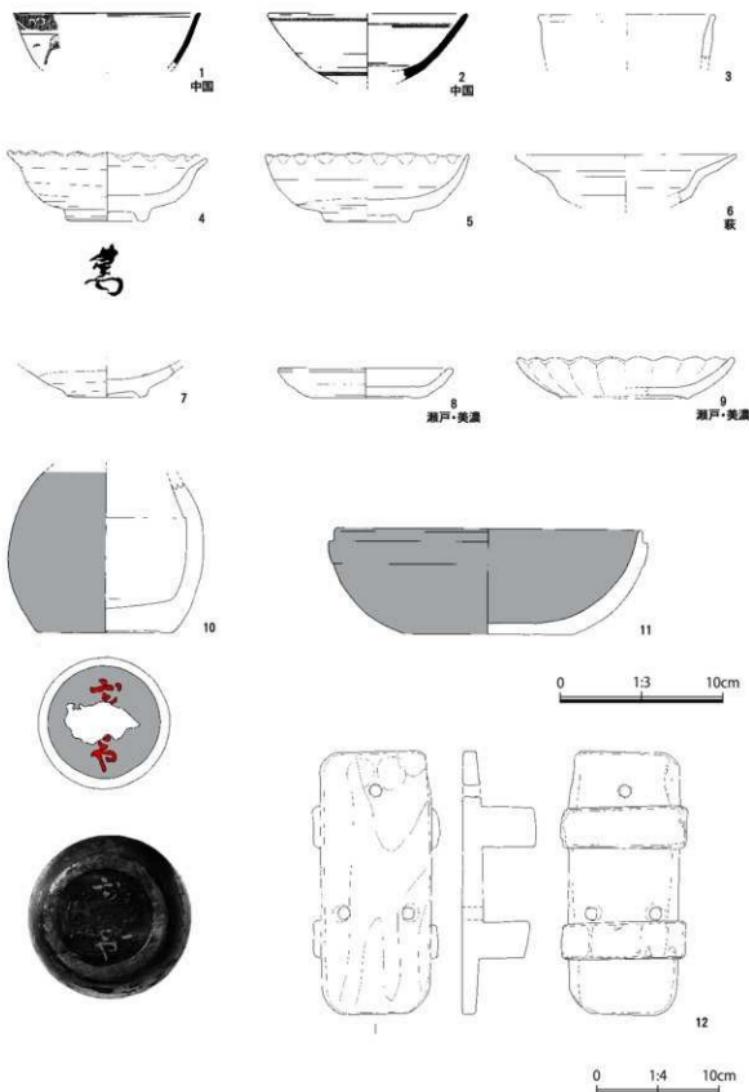
第50図 SK13平面図・断面図

第3項 第1造構面遺構外出土遺物（第52図）

ここでは第1造構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。

52-1・2は中国磁器である。52-1は景德鎮窯の青花碗である。精製の平形碗で、口縁部外面に雲文、胴部に草文を施す。52-2は漳州窯の青花碗である。粗製の平形碗で、胴部内外面に2本の圈線を施す。いずれも16世紀末～17世紀代初頭のものである。

52-3～9は国産陶器である。52-3は肥前陶器（福岡か）の碗である。半筒形で口縁部のみ残存し、口縁端部に薬灰釉を施す。17世紀代初頭。52-4は肥前陶器の皿である。なぶり口の口縁で、口縁部をやや外傾させる。内外面に薬灰釉を施し、高台は露胎。高台内に「□衙門」の墨書がある。九陶I-2期。52-5は肥前陶器の皿である。なぶり口の口縁で、口縁部は緩やかに直立する。九陶I-2期。52-6は山口（萩）の稜皿である。内外面に薬灰釉を施し、口縁部を大きく外傾させる。17世紀代初頭。52-7は肥前陶器の皿である。底部のみ残存し、内面に4箇所の胎土目痕が残る。高台は露胎。九陶I-2期。52-8は瀬戸・美濃陶器の内堀皿である。内外面に灰釉を施し、見込みは釉剥ぎ。1590～1610年代。52-9は瀬戸・美濃陶器（志野）の菊花形皿である。長石釉が施され、菊花状に型成している。52-10～12は木製品である。52-10は漆器壺である。上部は欠損している。塗色外面は黒色で、底部高台内に「□□や」の朱書きがある。52-11は鉢である。縦木取りで削り出し、口縁部に段をもつことから蓋付の鉢と考えられる。52-12は角型連歛下駄である。木取りは板目、歛高は4.4cmを測る。



第52図 第1造構面造構外出土遺物

第5節 第2遺構面

第2遺構面の概要（第53図）

第2遺構面は、標高0.20～0.30mで検出した遺構面である。遺構は、畠跡SN01を検出し、調査区中央部～東側に広がる状況を確認している。SN01では、南北方向に延びる畠を8条検出した。この畠は、平成22～24年度調査で検出した畠と連続するもので、調査区中央部での終息が見られる（第7章第116図参照）。その他に埋籠2基（SK17・18）、土坑1基（SK19）を検出した。

第2遺構面は、第1遺構面の上にB-1層（淡茶褐色有機質細礫粘土）を盛って畠を形成している。調査地周辺は堀尾期・京極期絵図によると地割の界線は記載されているが、屋敷地名義が入っていない場所にあたる。

遺物の概要

出土遺物は、畠の耕作土から出土したものを取り扱った。遺物は、中国磁器・国産陶器・土師器皿・金属製品・石製品・木製品・瓦がある。

陶器類は畠の耕作により搅拌された影響を受けていたためか細片のものが多く、その中から実測可能なものを抽出して掲載した。また、土壤の搅拌により下層の遺物が混入していることも考えられ、耕作土から出土した遺物は第1遺構面に付随する可能性を否定できない。

出土した陶磁器には中国磁器と国産陶器があり、第1遺構面に引き続き国産磁器である初期伊万里の出土はない。国産陶器の産地は、肥前、瀬戸・美濃、備前、山口（萩）のもので占められる。

このうち出土量の多い肥前陶器は、九陶I-2期（1594～1610年代）とII期（1610～1650年代）のものが中心となるが、九陶I-2期のものが若干多い割合を占める。出土遺物のうち、肥前陶器の占める割合が高い状況は第1遺構面と変わっていない。器種構成は、肥前陶器は碗・皿類が中心で鉄絵の絵唐津が目立つ。瀬戸・美濃陶器は皿類が中心で、志野織部の向付を1点含む。備前は播鉢や瓶、山口（萩）は碗類がある。

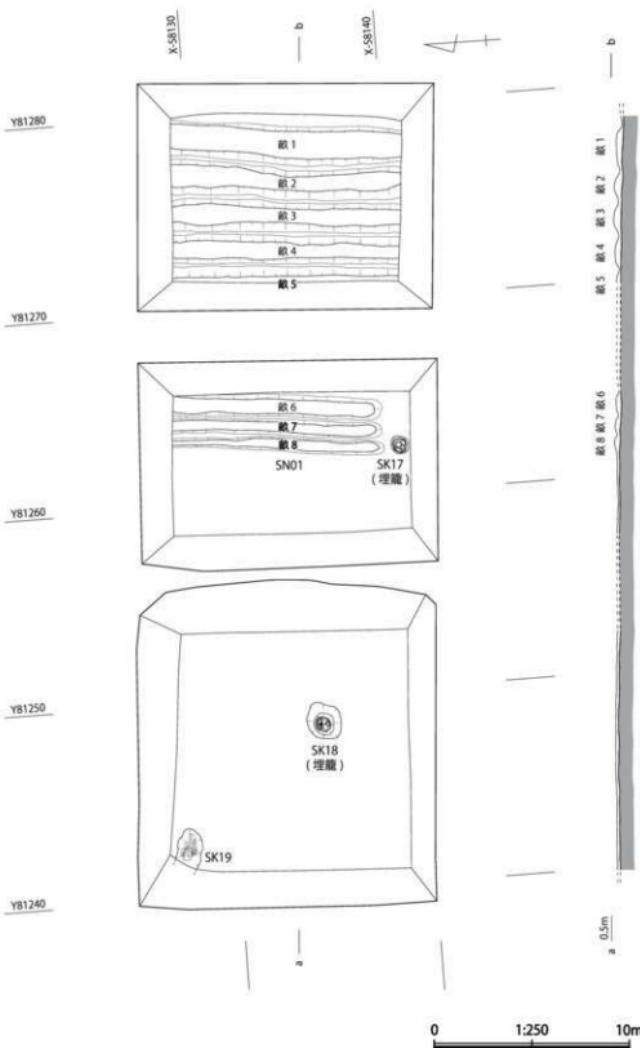
磁器は、いずれも破片だが中国磁器の青花碗・皿、青磁碗、白磁皿が出土している。中国磁器の産地は景徳鎮と漳州窯で占められるが、青磁碗は12世紀代の龍泉窯青磁で伝世品の可能性がある。

土師器皿は、京都系の割合が大半を占め、少量の在地系が入る。土師器皿の出土総数（破片数）は、京都系46点、在地系2点となっている。

金属製品は、煙管の雁首・吸口、刀の柄縁、表具金具、釘、小柄の柄がある。石製品は、火打石がある。木製品は、下駄がある。瓦は、軒平瓦、軒丸瓦、練込瓦が出土し、軒丸瓦はコビキBである。

遺構面の時期

第2遺構面の年代は、城下町初期造成土（A層）の上に形成された遺構面であること、そして後述する第3遺構面の始まりが松平期初頭であることを根拠として、堀尾～京極期（1600年代初頭～1637年）を想定している。以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を報告する。



第53図 大橋家与力屋敷第2造構面全体図

第1項 島跡SN01（第54図）

SN01は標高0.20～0.30mで検出した島跡である。規模は東西17.5m×南北11.5mの201.2m²を測る範囲で畝を検出し、調査区中央部～東側へ広がっている状況を確認した。島を形成する畝は、南北方向に延びる畝を8条検出している。

畝1条の規模は、平均して長さ11.50m以上、幅1.40mを測り、ほぼ平坦地に形成される。畝立てされた作土部分は、畝下から畝頂部まで高さ20～25cmを測る。

耕作土の土層堆積は、上位から淡茶褐色有機質細礫粘土、黄茶色礫質粗砂、灰色有機質細砂の3層で構成されている。間層の黄茶色礫質粗砂は、数mm～2cm程度の小礫を含む粗砂層で、上層から浸み込んできた水分を畝全体に浸透させて一定量に保つ役割や作物の根付きを良くするために施された堆積層と考えられ、作物の生育環境を整えていたことが窺える⁽²⁰⁾。

当地において畠地として利用していた時期が問題となるが、先述した第1造構面は、城下町造成以前の旧地表面に盛られたA層を基盤とする最初の造構面であることから堀尾期としている。続く本造構面である第2造構面は、A層の上に砂層や淡茶褐色有機質細礫粘土を盛ることによって形成された畠地である。後述する第3造構面は、松平期初頭の掘立柱建物が構築される造構面である。これらから畠地として利用していた時期を推定すると、上限は堀尾期～京極期、下限は松平期初頭となる。

また、出土遺物の年代観からは堀尾期・京極期の両時期に該当し、確実に京極期の畠地であるとは断定できないが、いずれにせよ京極期には畠として利用されていた可能性が高いものと考えられる。

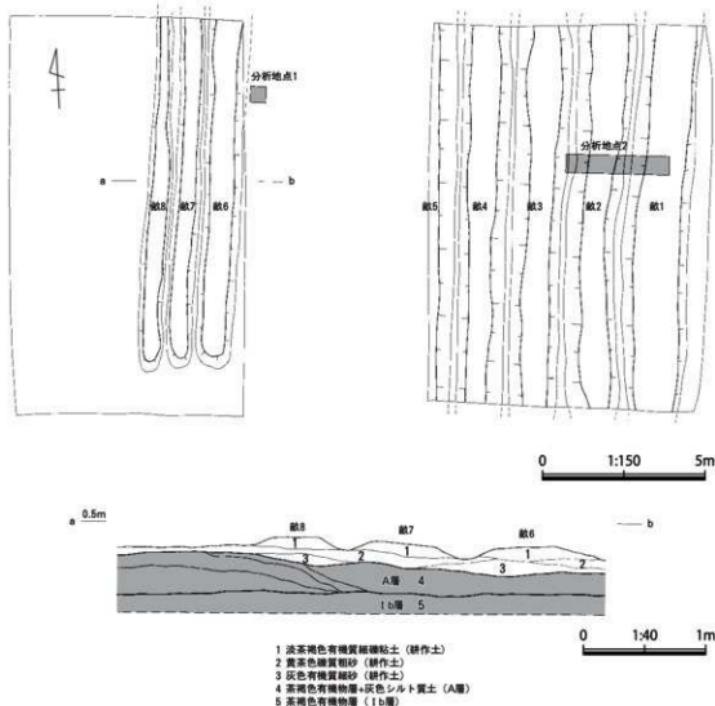
島跡SN01土壤分析（第55図）

調査区中央部の東壁（分析地点1）と調査区東側で検出した畝2の畝頂部（分析地点2）の土壤分析⁽²⁰⁾をおこなったところ、畝構成層上位から栽培関連植物としてソバ属、アズキ（ササゲ属）、ゴマ属、ワタ属などの畠作物由来と考えられる花粉化石を検出したほか、ウナギツカミ節ーサナエタデ節、アカザ科ヒュ科、ナデシコ科などの畠地雜草由来と考えられる花粉化石を検出した。さらに、カキ、トウガン、ベニバナの花粉も検出している。

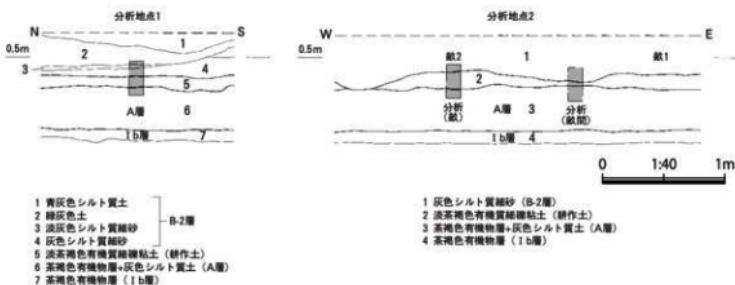
分析結果から、畠ではソバ、アズキ、ゴマ、ワタなどが栽培され、付近にカキ、トウガン、ベニバナなどが生育していた環境であったと考えられる。

また、イネ科（40ミクロン以上）は85%を示し、植物珪酸体分析ではイネ植物珪酸体が多量の検出量を示すほか、カヤツリグサ科、キカシグサ科、セリ科などの水田雜草由来と考えられる花粉化石が検出されるなど、調査地での稲作を示唆する結果も得られている。ただし、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科などが高率を示し、ヒシ属や現在の水田では生育しないガマ属などの水生植物の花粉が検出されており、これらは水田の管理（除草）が不十分で、ヒシ属やガマ属などは水路に生育していたものが流れ込んだとも考えられる。

以上の結果から、畝構成層上位は湿地堆積物（Ib層）を母材とする土層を客土した後に耕作土とした可能性があり、ガマ属などを検出していることから調査地が水田耕土であった可能性を否定している。畝構成層下位ではイネ科（40ミクロン未満）やカヤツリグサ科がイネ科（40ミクロン以上）を上回る出現率を示し、イネ植物珪酸体は検出されていないという状況である。



第54図 岩跡SN01平面図・断面図（部分）



第55図 岩跡土壤分析地点断面図（地点1・2）

第2項 埋籠SK17（第56図）

SK17は大橋家与力屋敷調査区（中央部）、戸8の南側で検出した埋籠遺構である。掘方は円形で、規模は直径0.84m、深さ0.44mを測る。

埋籠は竹製で、直径60cm、深さ30cmを測る円筒状に編み込んだ籠である。底部をもたず、外縁部のみが残存する。底部には粘土が貼られ、その直上に直径30cmで上面が平坦な大海崎石と川原石が4個置かれている。

埋籠中埋土は3層に分かれ、上層の灰色粘土から木片とともに土師器皿が出土した。

埋籠は畠に関係するものと思われるが、籠底部がないことから水溜めや肥溜めの可能性は低く、貯蔵穴（畠作物の貯蔵・越冬など）としての用途が考えられる。

SK17出土遺物（第57図）

57-1は京都系土師器皿である。手づくね成形で、体部をやや肥厚させる。内外面に煤が付着していることから、灯明皿として使用されたものである。

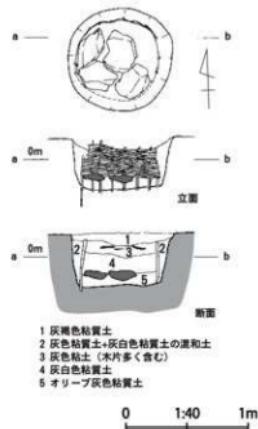
第3項 埋籠SK18（第58図）

SK18は大橋家与力屋敷調査区（西側）で検出した埋籠遺構である。検出位置は、SK17を基点とすると北西方向に15m離れた地点となる。掘方は不定形な円形で、規模は直径1.80m、深さ0.50mを測り、SK17よりも大きな土坑である。

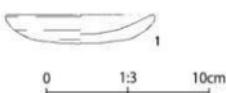
埋籠はSK17で検出した籠と同様に竹製で、直径65cmを測る円筒状に編み込んだ籠である。底部をもたず、外縁部のみが残存する。

ここでは、籠中に大海崎石や木片が入れられている状態で検出し、石や木片の検出レベルが底面よりも高い位置にあることから、埋籠の機能が廃絶した後に投げ込まれたものと捉えている。

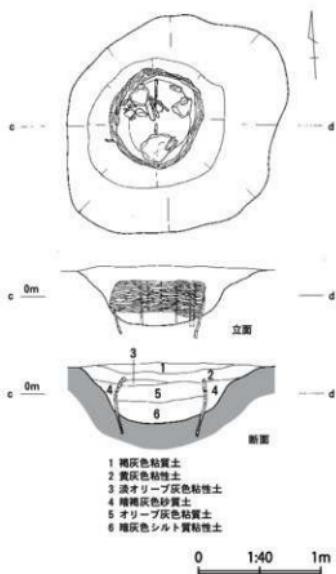
埋籠は、平成22～24年度調査で畠の戸直下から1基検出しておらず、本報告と合わせて合計3基の検出例となる。その用途は現段階で貯蔵穴としたが、限定的ではない可能性も含むため、今後の類例を待ちたい。



第56図 SK17平面図・立面図・断面図



第57図 SK17出土遺物



第58図 SK18平面図・立面図・断面図

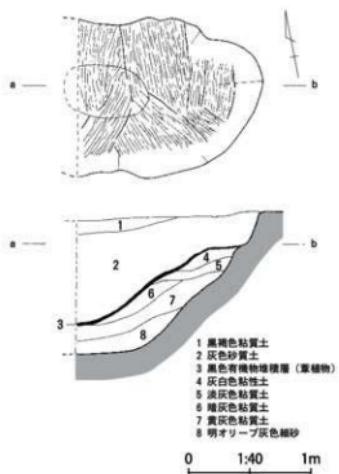
第4項 土坑SK19（第59図）

SK19は大橋家与力屋敷調査区（西側）で検出した土坑である。平面形は不定形な楕円形で、規模は上縁長軸が1.50m以上、短軸が1.30m、深さ1.10mを測る。

土坑埋土は8層で、灰色砂質土（第59図第2層）の床面では草の敷き詰めを検出した。草の敷き詰めの厚さは3cmを測り、断面から数回にわたって草を重ねている状況を確認した。

草の敷き詰め以下の土層（第59図第4～8層）は徐々に埋められている。その後、土壤の不等沈下を防ぐ目的で草の敷き詰めをおこない、上層の黒褐色粘質土と灰色砂質土は一気に埋めているものと捉えている。

土坑埋土から遺物が出土していないため、SK19は土取穴の可能性が考えられる。



第59図 SK19平面図・断面図

第5項 岬跡SN01耕作土中出土遺物（第60～62図）

ここで掲載する遺物は、岬跡SN01の耕作土である第54図第1～3層から出土した遺物を取り扱う。出土遺物は畠の耕作により攪拌された影響を受けているため細片のものが多いが、その中から実測可能なものを抽出して掲載した。

60-1～8は中国磁器である。60-1は景德鎮窯の青花小杯である。精製で外面に草花文、見込みに草花文と二重輪線を施す。17世紀代初頭。60-2は景德鎮窯の青花碗である。精製で外面に草花文、見込みに草花文と二重輪線を施す。高台内に「長命富貴」の銘をもつ。16世紀代末～17世紀代初頭。60-3～5はいずれも景德鎮窯の青花丸形碗である。精製で外面に草花文と輪線を施す。うち60-5は染付碗C群（上田分類A-II類）⁽²⁷⁾に相当する。16世紀代末～17世紀代初頭。60-6は龍泉窯青磁の平形碗である。内面に線描きで劃花文を施す。龍泉窯青磁碗1類⁽²⁸⁾に相当し、伝世品の可能性が指摘される。12世紀代中頃～後半。60-7は景德鎮窯の青花丸形底広皿である。精製で見込みに線描きの草花文を施し、高台内は無釉。16世紀代末～17世紀代初頭。60-8は漳州窯の青花折縁皿である。精製で口縁部周辺と内面に草花文を施す。16世紀代末～17世紀代初頭。

61-1～18は国産陶器である。61-1は肥前陶器の碗である。口縁部は欠損しているが天目形の碗で内外面に透明釉を施し、脣付無釉。九陶I-2期。61-2は肥前陶器の碗である。底部のみ残存し、高台は露胎。九陶II期。61-3は山口（萩か）の丸形碗である。胎土は精緻で硬質。17世紀代初頭。61-4は肥前陶器の碗である。砂目段階のグループで、底部のみ残存する。九陶II期。61-5～13は肥前陶器の皿である。61-5～8は胎土目段階のグループで、高台から緩やかに湾曲した体部が延び、口縁部へ立ち上がる。いずれも九陶I-2期。61-9～13は砂目段階のグループである。61-9は溝縁皿、61-13は砂目刷毛目皿である。いずれも九陶II期。61-14～16は瀬戸・美濃陶器である。61-14は志野織部の筒形の

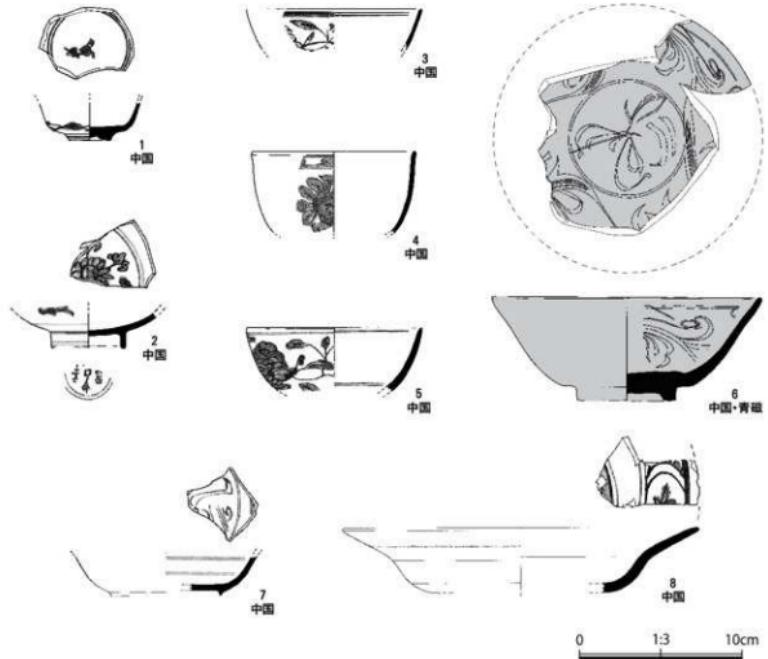
向付で、外面に梅花文を施す。17世紀代初頭。61-15は灰釉折縁皿である。体部内面に鶴文を陰刻し、見込みに印花を施す。1590～1610年代。61-16は折縁形の内禿皿である。内外面に灰釉を施し、見込みは釉剥ぎ。1590～1610年代。61-17は備前の描鉢である。底部のみ残存し、スリ目単位は9本である。17世紀代初頭。61-18は肥前の描鉢である。底部のみ残存する。底部には糸切り痕をもち、スリ目単位は8本である。九陶II期。

61-19・20は京都系土師器皿である。61-20は内面底部に灯心油痕があり、外面に煤が付着する。

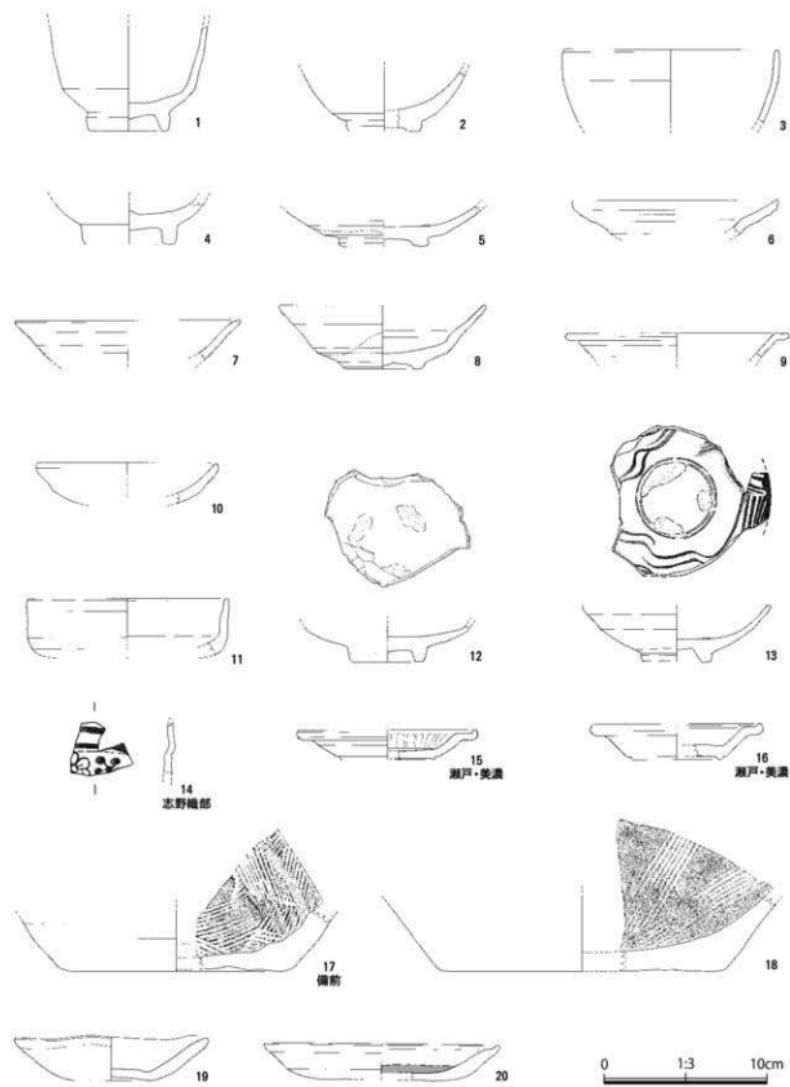
62-1～8は金属製品である。62-1は煙管の雁首、62-2・3は煙管の吸口である。62-4は真鍮製の柄縁である。62-5は真鍮製の表具金具で、中心に方形の孔をもつ。62-6は鉄製の角釘、62-7は鉄製の錨である。62-8は真鍮製の小柄である。柄部のみ残存し、片側外面に渦文の線刻を施す。

62-9・10は石製品である。62-9は瑪瑙製の火打石である。石の側縁部に敲打痕があり、使用頻度が多い。62-10は石英製の火打石である。石の側縁部に敲打痕があるが、使用頻度は少ない。

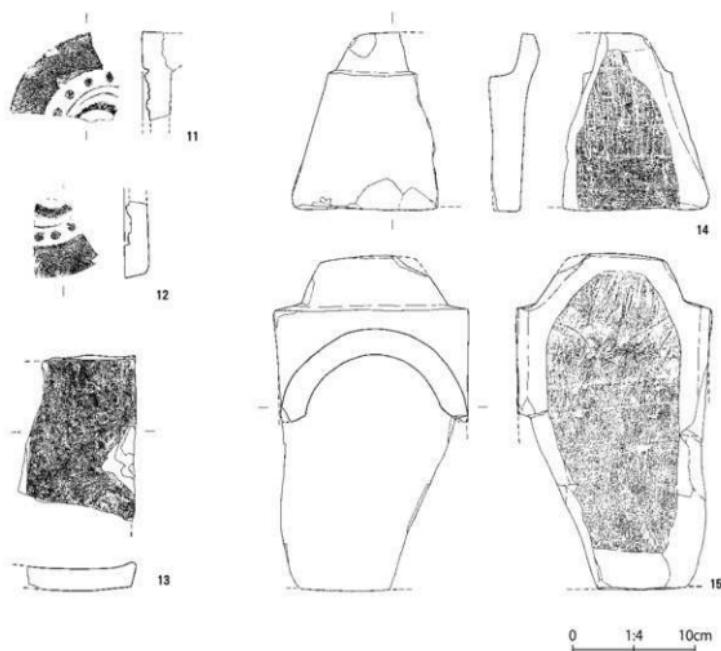
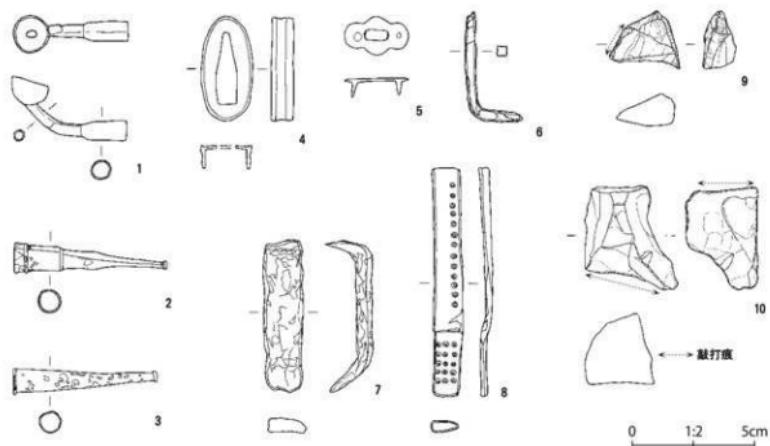
62-11～15は瓦である。62-11・12は軒丸瓦である。瓦当面は欠損しているが、中央に左三巴文、その周囲に珠文が廻る。62-12には被熱痕跡がある。62-13は平瓦である。両外面に被熱痕跡がある。62-14は練込瓦である。内面に布目痕が残り、コビキBである。62-15は玉縁式丸瓦である。内面に布目痕が残り、コビキBである。



第60図 SN01耕作土中出土遺物(1)



第61図 SN01耕作土中出土遺物(2)



第62図 SN01耕作土中出土遺物(3)

第6節 第3遺構面

第3遺構面の概要（第63図）

第3遺構面は、標高0.50～0.70mで検出した遺構面である。遺構は、鍛冶炉1基（SL01）、掘立柱建物跡4棟（SB02～05）、素掘溝の屋敷境2条（SD03・04）、雨落溝1条（SD05）、柵1列（SA01）、石列（SS01）、土坑2基（SK20・21）を検出した。

第3遺構面は、第2遺構面の上にB-2層（灰色シルト質細砂）の盛土造成を施して形成された遺構面である。造成手法については、本項内に後述する「大橋家与力屋敷における初期段階の屋敷地造成（島状整地）」の中で取り扱う。

大橋家与力屋敷調査区では検出した屋敷境を境界として概ね3軒の屋敷地がかかり、調査区東側からA屋敷、B屋敷、C屋敷と呼称することとした⁽²⁰⁾。各屋敷に比定する屋敷地名義は、A～C屋敷の概要の中で詳述する。

遺物の概要

遺物は、中国磁器・国産陶磁器・土師器皿・土製品・金属製品・錢貨・木製品・瓦がある。

出土した陶磁器には中国磁器と国産陶磁器があり、この遺構面から国産磁器である初期伊万里が入ってくるようになる。国産陶磁器の産地は、肥前、備前、山口（萩・須佐）のもので占められる。

このうち出土量の多い肥前陶器は、九陶Ⅱ期（1610～1650年代）のものが中心で、砂目が主体となっている。肥前磁器は、九陶Ⅱ-2期（1630～1650年代）のものが中心で、鉄釉や青磁釉を施されるものが多い。肥前陶器と肥前磁器の出土比率は概ね半々となっている。

器種構成は、肥前陶磁器は碗・皿類が中心で、陶器では溝縁皿が比較的多く出土している。磁器では初期伊万里の碗・皿の他、イケ縁皿が入る。備前は擂鉢、山口（萩・須佐）は碗や擂鉢がある。

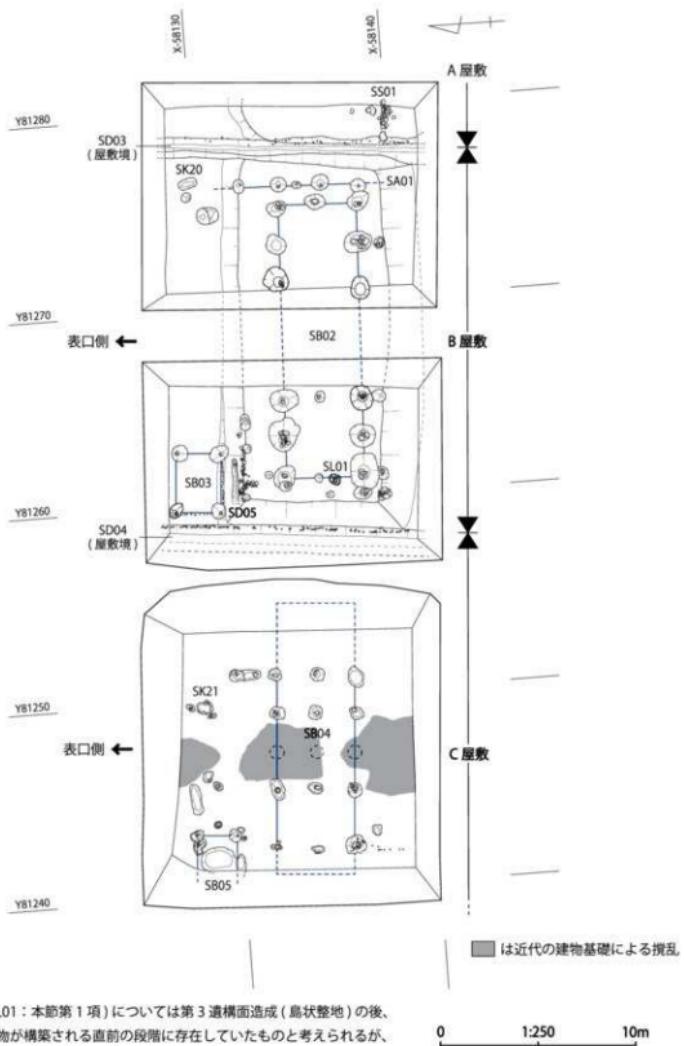
中国磁器は数点ほどに減少するが、青花碗・皿が出土している。

土師器皿は、これまで京都系が大半を占めていたが、在地系が増加する。土製品は、焼塩壺が出土している。金属製品は、煙管などが出土している。錢貨は北宋錢の咸平元寶がある。木製品は、漆器椀、籠、下駄などがある。瓦は、軒丸瓦、平瓦が出土し、コピキBのものである。

遺構面の時期

当地が最初に与力屋敷（陪臣屋敷）として利用される開始時期は1638年の松平氏の治世からということが絵図や文献から分かっており⁽²⁰⁾、松平期の家老である大橋茂右衛門（出仕期間：1638～54年）が6000石うち与力1000石足軽30人で松平期初代藩主松平直政に召し抱えられた時期に比定される。これを踏まえて第3遺構面の年代は、大橋茂右衛門が当地に屋敷を拝領した時期（あるいはその直前）に大橋家の与力屋敷として形成された遺構面と捉え、前述した遺物の年代観を含めて松平期初頭（1638～1650年代）を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について、屋敷地ごと（A～C屋敷）に詳細を報告する。



*鍛冶炉(SL01:本節第1項)については第3造構面造成(島状整地)の後、
掘立柱建物が構築される直前の段階に存在していたものと考えられるが、
平面検出時の位置関係を示すためここに含めた。

第63図 大橋家与力屋敷第3造構面全体図

第1項 鍛冶炉SL01（第64図）

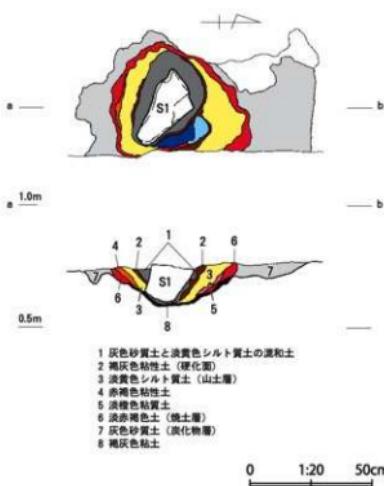
SL01は大橋家与力屋敷調査区（中央部）で検出した鍛冶炉である。炉の東側一部は調査時のトレチ掘削によって消失しているが、平面形は不成形な円形をなし、東西50cm以上、南北94cm、深さ36cmを測る。断面形は浅半球状で掘方に粘土を貼り重ねて造られている。炉の中心部には直径35cmの上面が平坦な自然石（S1）が置かれ、金床石の可能性がある⁽³¹⁾。

炉の内側の規模は、東西44cm、南北58cm、深さ34cmを測る。断面形は、南側の掘り込み傾斜が緩く、開放的な造りとなっている。北側はやや傾斜をもち、南側に比べて厚く粘土が貼られている。送風は羽口や送風孔による方法が考えられるが、羽口は出土していない。

炉壁の内側はガラス質に近いような硬面（第64図第2層）があり、さらに外側には赤褐色に被熱している部分（第64図第6層）があることから、少なくとも2回程度の炉の使用が考えられる。

鍛造剥片の有無確認にあたり、炉の埋土を採取して水洗フリイ選別法を用いて微細遺物の採集をおこなった。採集したものを乾燥させた後、実体顕微鏡観察を実施した結果、砂鉄粒子や鉱物粒子がほとんどの割合を占める中で鍛造剥片を確認した。

SL01の機能時期は、第3造構面を造成した後、掘立柱建物を構築する直前あるいは同時期に機能していたものと想定している。建物構築の際に使用する目的で、現地で釘などの鉄製品を制作していくことが考えられる。松江城下町遺跡で現在までに検出した鍛冶関連遺構（鍛冶炉）は、重臣屋敷（北屋敷：殿町287番地）第4造構面以下での検出例のみであり、堀尾期初頭の松江城築城に関係する遺構に位置づけられている⁽³²⁾。今回検出した鍛冶炉は松平期初頭に比定されることから、松平期の屋敷地においても堀尾期と同様に、建物構築の直前に鍛冶炉を設置していたという点が共通する。



第64図 SL01平面図・断面図



SL01平面検出状況(上方から)



A・B屋敷の概要

ここでは第3造構面で検出した屋敷境（SD03）を基に、大橋家与力屋敷調査区東端の区割をA屋敷、中央部～東側の区割をB屋敷とした。A屋敷は建物跡の検出に至っておらず⁽³⁾、屋敷境周辺のみの検出に留まっていることから、A屋敷とB屋敷を一括して取り扱い「A・B屋敷」として掲載した。なお、検出遺構がどの屋敷に属するのか明確にするため、各項の後に屋敷記号を付記している。

A・B屋敷の屋敷地名義は松平家々譜並御給帳写⁽³⁾を根拠として、松平期前半のA屋敷は「小崎家」、B屋敷は「丹羽家」の屋敷地に比定する（第2章第4節参照）。

遺構は、掘立柱建物跡SB02・03（第65・66図）、屋敷境溝SD03（第69図）、柵SA01（第70図）、石列SS01（第71図）、土坑SK20（第72図）を検出した。

第2項 掘立柱建物跡SB02：B屋敷（第65図）

SB02はB屋敷で検出した掘立柱建物跡である。B屋敷は「丹羽家」の屋敷地に比定し、松平期の松江城下町絵図⁽³⁾から表口の向きは大手前線道路に面した北側と看取される。

検出標高は0.70m、規模は東西桁行7間（13.72m）×南北梁行2間（3.92m）を測る。調査区を跨って検出しているため一部未検出だが、東西方向に長い建物である。主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。柱間寸法は現地測量で1間=1.96mの6尺5寸を基準とする。

検出した柱穴の平面形は円形～楕円形を呈し、直径0.60～1.40m、深さ0.40～1.20mを測る。柱穴には柱と礎盤石（地下式礎石）が遺存するもの、礎盤石のみ遺存するものがある。

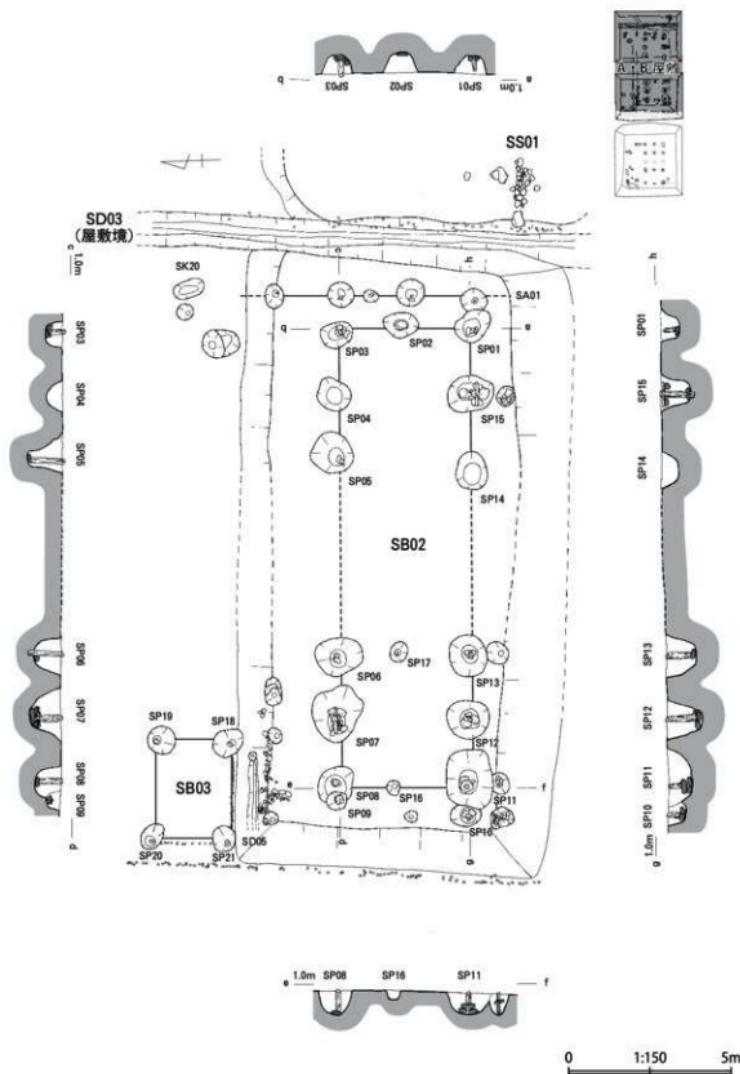
礎盤石の大きさは差し渡し20～30cmを測り、礎盤石単独のものや、礎盤石と3～5個の根固め石を有するものがある。石材は大海崎石・島石・川原石が混在している。平成22～24年度調査で検出した大橋家与力屋敷第3造構面掘立柱建物跡（屋敷地A-1：竹田家）では、「すべての柱穴に礎盤石として島石の使用が認められる」と報告されているが、今回検出した柱穴の礎盤石は石材が混在していることから、屋敷地ごとに石材の入手経路が異なり、石材の使い分けをしていたことが想定される。

SB02では柱穴17基（SP01～17）のうち、10本の柱材が良好な状態で遺存していた。柱材は直径11～20cm、長さ26～109cmを測り、いずれも柱材の基部にはケズリやハツリ加工が施されている。樹種同定を実施した結果、SB02の柱材にはクリ・スギ・マツ・スダジイ・クスノキを使用していることが明らかとなり、多様な樹種が柱材に用いられていることが分かった。ひとつの屋敷単位において柱材の樹種を限定して使用するということを否定する結果が得られたが、特異な事例となる可能性が指摘される（SB02の柱材樹種同定結果および詳細は第7章第4節第2項参照）。

柱穴のうちSP07・15の地下構造は大橋家与力屋敷調査区で初見となるので提示しておきたい。

SP07の柱材は直径20cm、長さ80cmを測る丸柱で、基部を円錐状に加工して基部付近に直径8cm角の孔を貫通させ、孔に直径7cm、長さ85cmを測る丸太の補助材を門状に通す。

SP15の柱材は直径17cm、長さ104cmを測る丸柱で、底部に凸状のハツリ加工を施す。柱穴底部には根石を据え付け、上部は柱と直交するように腕木を伴っている。そして、腕木直下には柱の両側に沿う形で根石を据え付けている。SP07・15の地下構造は、上構造の耐荷重などを考慮していずれも柱材を補強する意図があり、沈下を防止する目的でこのような構造をもつものと思われる。



第65図 SB02 (B屋敷) 平面図・柱穴断面図

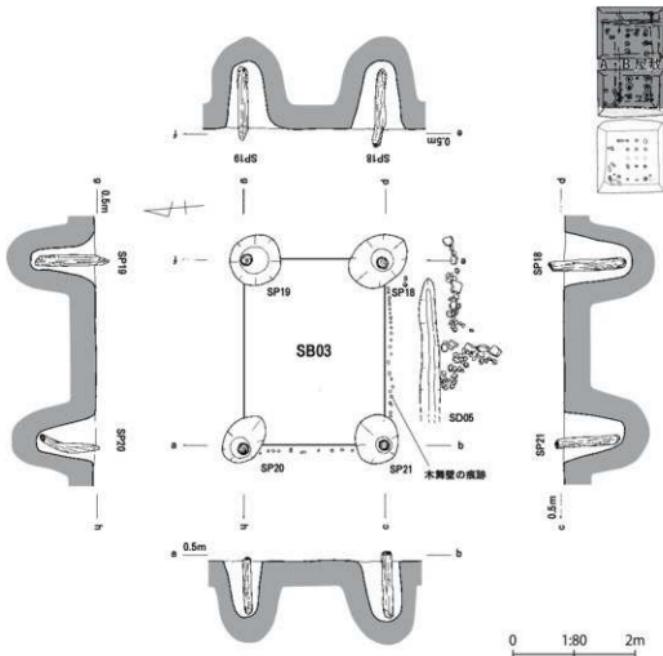
第3項 掘立柱建物跡SB03：B屋敷（第66図）

SB03はB屋敷で検出した掘立柱建物跡である。検出標高は0.50m、規模は東西桁行1間（2.94m）×南北梁行1間（1.96m）を測る。主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。

検出した柱穴の平面形は円形を呈し、直径0.60～1.40m、深さ0.40～1.20mを測る。柱穴には柱のみ遺存し、礎盤石（地下式礎石）を伴わないので特徴的である。

SB03では柱穴4基（SP18～21）のうち、すべての柱穴で柱材が良好な状態で遺存していた。柱材は直径10～17cm、長さ88～125cmを測る。柱材の上端は廃絶の過程で露頭していたのであろうか痩せて先細りとなり、基部にはケズリやハツリ加工が施されている。樹種同定を実施した結果、SB03の柱材にはクマシデ・サクラ・ハコヤナギを使用していることが明らかとなり、SB02と同様に柱材の樹種を限定していないことが分かった。

SP18～21、SP20～21の検出面では縦木舞と考えられる地面に突き刺さった竹の痕跡を検出しており、木舞壁をもつ施設だった可能性がある。さらにSB03の南側には長さ2.40m、幅0.35m、深さ0.10mを測る雨落溝SD05が付属する。SB03の検出標高は0.50m、SB02は標高0.70mでその比高差は約20cmとなるが、島状整地後の屋敷地の平坦化に伴い、本来の機能面は数十cm上面であったと考えられる。SB03は規模が小さく、検出位置からSB02に付随する簡易な倉庫を想定している。



第66図 SB03（B屋敷）平面図・柱穴断面図

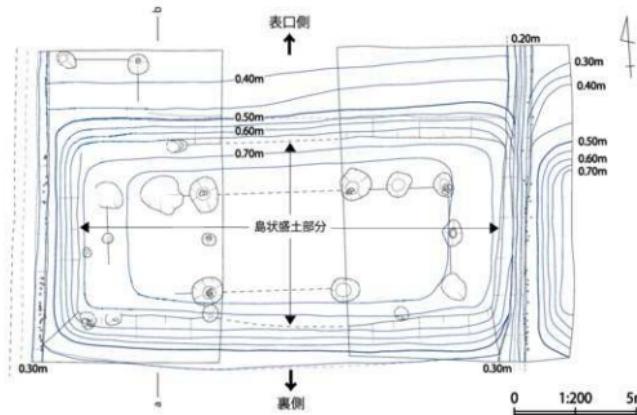
第4項 大橋家与力屋敷における初期段階の屋敷地造成（島状整地）：B屋敷（第67・68図）

平成22～24年度調査で検出した大橋家与力屋敷第3造構面掘立柱建物跡（屋敷地A-1）では、造成手法として「島状整地」がおこなわれていることが明らかとなっている。この造成手法は、徳島城下町では城下町建設の初期段階から確認される通例的な整地法である⁽³⁰⁾。B屋敷においてもこの島状整地が施されており、当地での時間的な位置づけは松平期初頭（1638年前後）に比定する⁽³¹⁾。

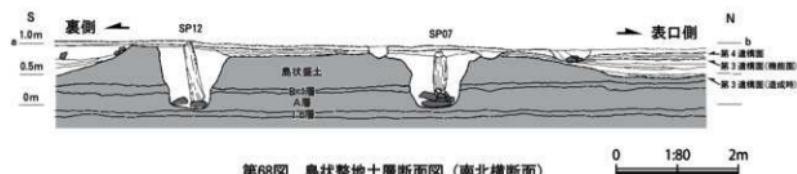
B屋敷の造成土は、I b層とA層の混合土である灰色シルト質細砂を主体とし、層厚約40cmを測る。造成手法は第67・68図に示したとおり、初めの造成段階では屋敷地の建物となる部分にマウンド状の高まり（島状盛土部分）をもたせ、屋敷の周囲は低く造成し、断面は台形状を呈する。

検出標高は高まり部分が標高0.70m、低位部が標高0.30mを測り、その比高差は約40cmである。その後の段階で高まり周囲の低位部に土砂を投入することにより、屋敷地の平坦化をおこなっている。平坦化は、街路に面する北側の表口付近では良質なシルト質粘土と砂を互層状に堆積させ、土層を固く叩き締めて版築状に整地していた。土層堆積状況から北側表口付近ではあまり時間差を置かず、建物を建築する段階で既に平坦化されていた可能性があるが、南側は低地のまま利用されていた可能性を否定できず、明確ではない。

調査では灰色シルト質細砂上面を露呈した段階で造構面としているが、この面は造成途中（島状整地）の段階であり、本来はそれより5cm程上層の灰褐色砂層上面が生活面であったと考えられる。



第67図 B屋敷平面地形測量図（島状整地）



第68図 島状整地土層断面図（南北横断面）

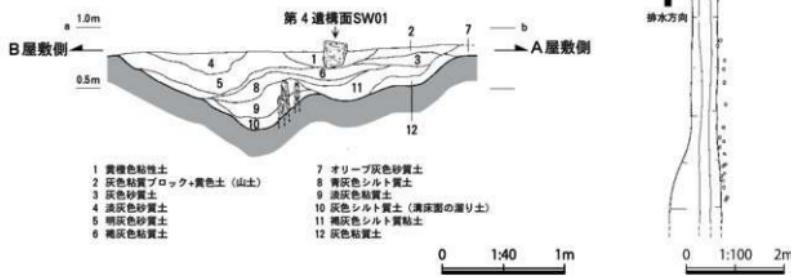
第5項 屋敷境SD03：A・B屋敷境界（第69図）

SD03はA屋敷の西端で検出し、A屋敷とB屋敷の境界（小崎家と丹羽家の屋敷境）に位置づけられる素掘溝である。SD03は南北方向に延びるものであり、主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。

規模は長さ13.20m以上、幅0.80m、深さ0.35mを測る。断面形はU字状である。排水方向は溝底部南側が標高0.20m、北側が標高0.08mを測ることから、南から北へ向かって排水されていたものと考える。

溝埋土は、溝底部に灰色シルト質土が堆積しており、雨水などによる堆積物（溝機能時の溜り土）と考えられるが、それより上層では掘り直しの痕跡が見られ、人為的に埋められた状況を示す。

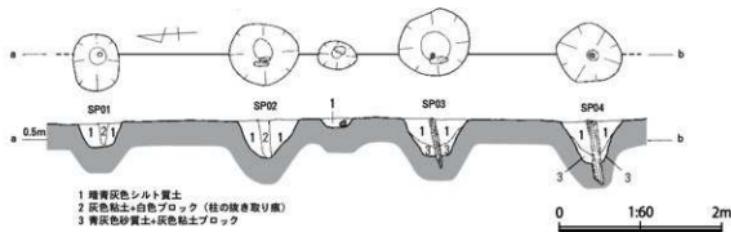
溝の東側肩部には、溝と並行に直径6cm、長さ40cmの木杭を打ち込んでいるが、反対側の西側肩部で杭列は認められない。この杭列はA屋敷側から溝へ雨水や土砂の流入を防ぐための遮蔽物と捉えている。



第6項 柵SA01：B屋敷（第70図）

SB02の東側で検出した柵SA01である。SA01は南北方向7.20m間に直線的に並び、杭の間隔は2.00mを測る。主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。

杭は直径15cm、長さ65cmを測り、先端部が尖るように加工を施す。北側半分については杭の抜き取り痕のみを確認している。SA01は検出した位置関係から、SB02に付随する遮蔽物と考える。

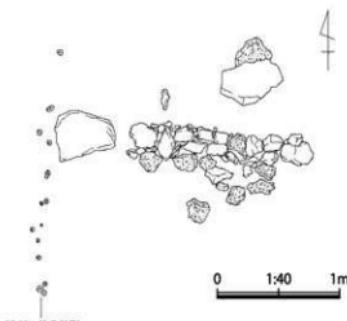


第7項 石列SS01：A屋敷（第71図）

SS01はA屋敷の南側、SD03に隣接する位置で検出した石列である。

石列は東西方向に長さ2.10m、幅0.50mの範囲で検出した。石材は直径15~40cm程度で上面が扁平な大海崎石と島石が混在していた。

SS01は屋敷地側面に位置することから、A屋敷とB屋敷を行き来するための通路を想定している。その場合、SD03に木橋（道板）を架ける必要性があるが、板などの木材は検出していない。



第71図 SS01平面図

第8項 土坑SK20：B屋敷（第72図）

SK20はB屋敷の北東側で検出した廃棄土坑である。平面形は楕円形で、規模は上縁長軸が0.96m、短軸が0.50m、深さ0.16mを測る。

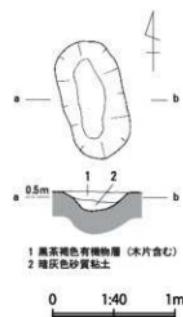
土坑埋土は2層に分かれ、上層の黒茶褐色有機物層から木片とともに遺物が出土した。

SK20出土遺物（第73図）

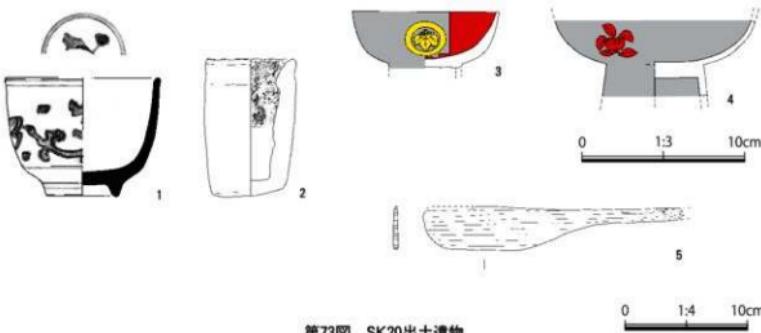
73-1は肥前磁器の碗である。半筒形で外面に草文、見込みに草文と圓線を施す。蓋付無釉。九陶II-2期。

73-2は輪積み成形の焼塩壺である。無刻印のもので、焼塩壺小川分類I期⁽³⁰⁾に相当する。

73-3~5は木製品である。73-3は漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に桐文を施す。73-4は漆器椀である。塗色は内外面ともに黒色で、外面に赤絵で椿を施す。73-5は籠である。木取りは柾目で、片刃の籠である。



第72図 SK20平面図・断面図



第73図 SK20出土遺物

第9項 第3遺構面遺構外出土遺物：A・B屋敷（第74・75図）

ここでは第3遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。なお、C屋敷については近代の建物基礎による搅乱層を除去した任意の遺構面であり、遺構面直上出土遺物が皆無であることや、基盤層出土遺物の中に明らかな混入品が含まれ、明確な時期決定ができないなどの理由から取り扱っていない。そのため、ここで掲載する遺物はA・B屋敷から出土した遺物を取り扱う。

74-1・2は中国磁器である。74-1は景德鎮窯の青花平形皿である。精製で見込みに鞠挾の草花文を施し、口縁部周辺に如意頭の陽刻をもつ。外面高台周辺には渦文を施す。17世紀代初頭。74-2は漳州窯の青花皿である。粗製で内面に雨龍文を施す。高台に砂粒が付着する。17世紀代前半。

74-3～13は国産陶器である。74-3は肥前陶器の碗である。天目形なごりをもつ碗で、内外面に透明釉を施す。九陶Ⅲ期。74-4は肥前陶器の碗である。腰折形の碗で、内外面に薺灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅱ期。74-5は肥前陶器の溝縁皿である。内外面に透明釉が施され、内野山窯の可能性がある。九陶Ⅱ期。74-6は肥前陶器の溝縁皿である。内外面に灰釉が施され、肥前磁器出現期の頃に比定される。九陶Ⅱ期。74-7は肥前陶器の溝縁皿である。内外面に灰釉が施される。九陶Ⅱ期。74-8は肥前陶器の溝縁皿である。内面に3箇所の砂目痕が残り、全面釉が施される。九陶Ⅱ期。74-9は肥前陶器の皿である。端反形の皿で、口縁部をやや外傾させる。豊付無釉。九陶Ⅱ期。74-10は備前窯の壺である。内外面は赤茶色で、胎土は灰色である。底部のみ残存する。74-11は肥前陶器の片口である。口縁部周辺のみ残存し、注口は欠損。口縁部は外側に折り曲げる。九陶Ⅲ期。74-12は肥前陶器の擂鉢である。底部～体部のみ残存し、スリ目単位は10本。底部に糸切り痕をもつ。九陶Ⅱ期。74-13は山口（萩）の鉢である。折縁形の鉢で内外面に薺灰釉を施すが、焼成不良である。17世紀代前半。

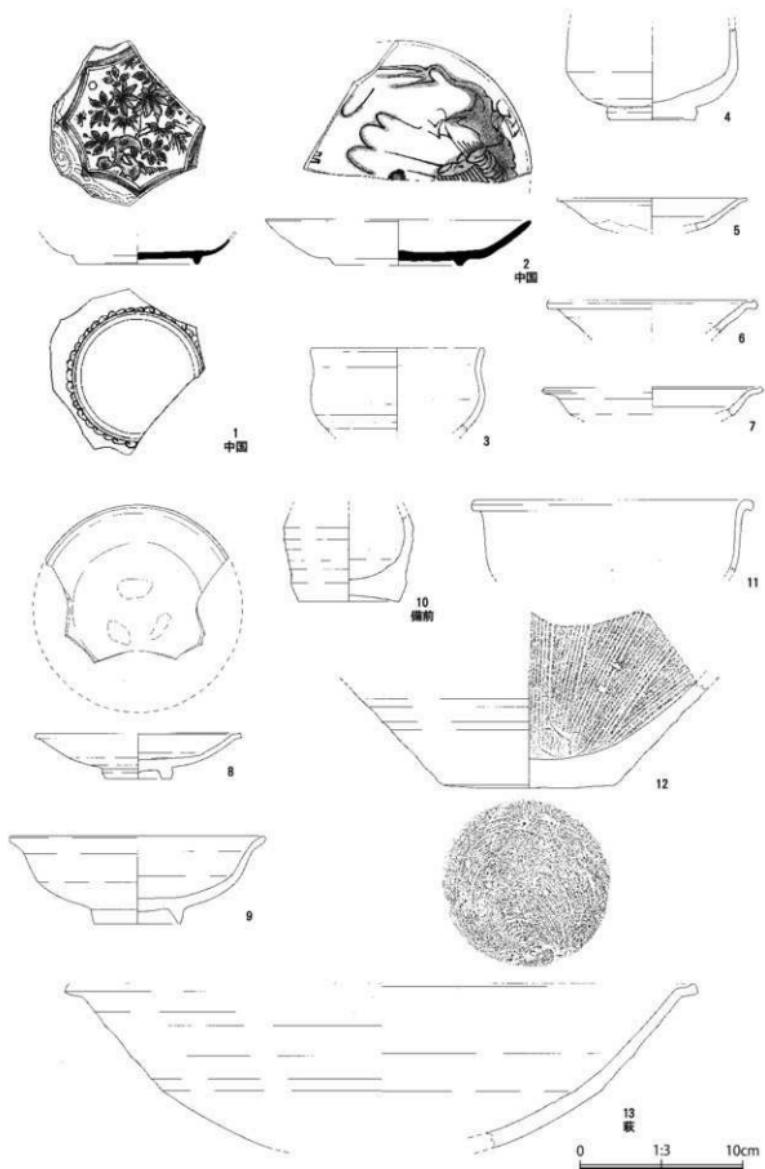
75-1～8は国産磁器である。75-1は肥前磁器の小壺である。口縁端部を外傾させ、外面に蘭文を施す。豊付・高台内無釉。九陶Ⅱ-2期。75-2は肥前磁器の小壺である。口縁部は端反気味に立ち上がる。豊付・高台内無釉。九陶Ⅱ-2期。75-3は肥前磁器の碗である。外面に菊唐草文を施し、豊付無釉。九陶Ⅱ-2期。75-4は肥前磁器の皿である。菊花形の皿で、型打成形である。見込みに半菊唐草文を施し、豊付無釉。九陶Ⅱ-2期（1640年代）。75-5は肥前磁器の皿である。口縁端部はイゲ縁で、見込みに半菊唐草文と二重圈線、体部内面に3箇所の花文を施す。豊付無釉。九陶Ⅱ-2期（1640年代）。75-6は肥前磁器の菊花皿である。初期伊万里の皿で、見込みに二重円圈を施す。豊付に砂粒が付着する。九陶Ⅱ-2期（1630～40年代）。75-7は肥前磁器の変形皿である。型打成形で葉を模倣し、高台は貼り付け高台である。九陶Ⅲ期。75-8は肥前磁器の壺である。胴部外面に菊花文を施す。九陶Ⅱ-2期。

75-9～11は土師器皿である。75-9は京都系土師器皿である。手づくね成形で、口縁部内面に灯心油痕が付着することから灯明皿として使用されたものである。75-10・11は在地系土師器皿である。いずれも底部に糸切り痕をもち、75-10は回転糸切り、75-11は静止糸切りである。

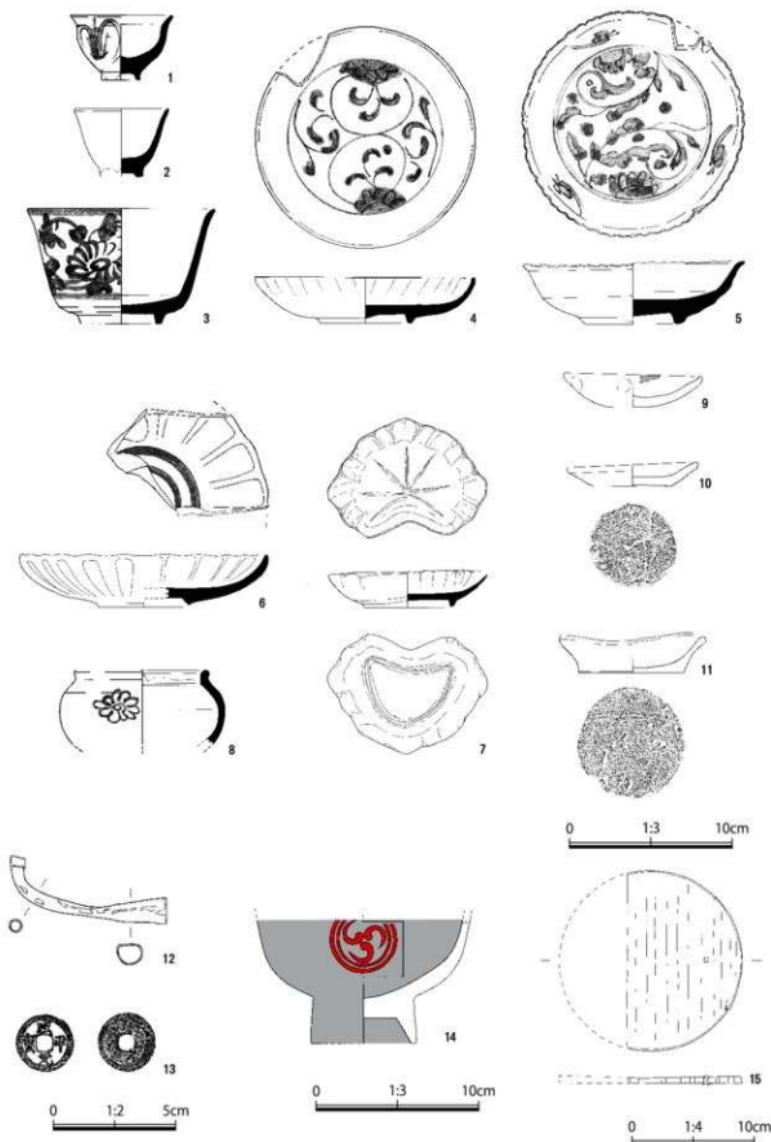
75-12は金属製品である。真鍮製の煙管の雁首で、火皿は欠損しているが補強体が残存する。

75-13は銭貨である。北宋錢で咸平元寶の摸錄錢か。

75-14・15は木製品である。75-14は漆器椀である。塗色は内外面ともに黒色で、外面に丸に三巴文を施す。75-15は曲物の底板である。木取りは柾目で一部に樺皮紐が残る。



第74図 第3造構面（A・B屋敷）造構外出土遺物(1)



第75図 第3造構面（A・B屋敷）造構外出土遺物（2）

C屋敷の概要

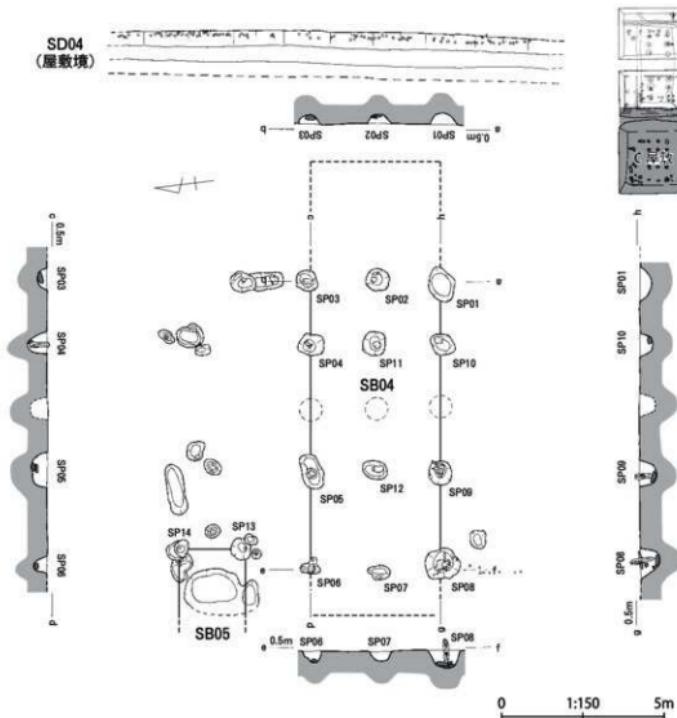
ここでは第3造構面で検出した屋敷境（SD04）を基に、大橋家与力屋敷調査区西側の区割をC屋敷とした。屋敷地名義は松平家々譜並御給帳写を根拠として、松平期前半のC屋敷は「山田家」の屋敷地に比定する（第2章第4節参照）。C屋敷で検出した造構は擾乱層を除去した段階で検出した造構であり、厳密には造構の掘り込み面ではない。そのため、B屋敷と比べて造構の検出標高が低い。

造構は、掘立柱建物跡SB04・05（第76図）、屋敷境溝SD04（第76図）を検出した。

第10項 掘立柱建物跡SB04・05：C屋敷（第76図）

SB04はC屋敷で検出した掘立柱建物跡である。検出標高は0.45m、規模は東西桁行4間以上（8.82m）×南北栄行2間（3.92m）を測る。現代の建物基礎により一部未検出だが、東西方向に長い建物である。主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。検出した柱穴の平面形は円形～楕円形を呈し、直径0.60～1.00m、深さ0.30～0.60mを測る。柱穴には柱と礎盤石を伴うものが遺存する。

SB05はSB04の北西に位置するが他の造構と切り合い、その規模は把握できていない。B屋敷で検出したSB03と同様の機能を考えられ、SB04に付随する簡易な倉庫を想定している。



第76図 SB04・05（C屋敷）平面図・柱穴断面図

第7節 第4遺構面

第4遺構面の概要（第77図）

第4遺構面は、標高0.80mで検出した遺構面である。遺構は、礎石建物跡1棟（SB06）、屋敷境石垣1条（SW01）、溝1条（SD06）、杭列（SA02）を検出した。基盤層は、第3遺構面の上に盛土造成を施したB-3層（灰色～暗灰色砂質土）である。

第4遺構面での遺構検出はA・B屋敷の範囲に留まり、C屋敷は近代の建物基礎や上層からの擾乱の影響を受けて遺構は消失している。このため、第4遺構面として掲載した遺構はA・B屋敷の調査成果に絞って取り扱うこととした。

遺物の概要

遺物は、中国磁器・国産陶磁器・土師器皿・瓦質土器・土製品・錢貨・木製品がある。

出土した陶磁器のほとんどが国産陶磁器で、中国磁器が1点入っている。

国産陶磁器の産地は、肥前・瀬戸・美濃（織部）、京信系、山口（須佐）のもので占められる。

このうち出土量の多い肥前陶磁器は、九陶Ⅱ～Ⅲ期（1610～1690年代）を中心とする。肥前陶器は内野山窯産が多い。皿は九陶Ⅱ期（1610～1650年代）の溝縁皿があるが、その他に1640年代以降の灰釉の後のグループのものも含む。碗は九陶Ⅲ期（1650～1690年代）の呉器手碗が主体をなす。

肥前磁器は、九陶Ⅱ-2期（1630～1650年代）のものが減少し、Ⅲ期（1650～1690年代）のものが中心となる。肥前陶器と肥前磁器の出土比率は、この段階から肥前磁器の占める割合が多くなる。

器種構成は、肥前陶磁器は碗・皿類が中心で、磁器には手塙皿と呼ばれる小さな浅い皿がある。瀬戸・美濃、京信系は碗類が多い。山口（須佐）は擂鉢がある。

土師器皿は、京都系が出土せず、在地系で占められる。17世紀後半から次第に京都系から在地系に使用の主体が切り替わっていくことを示すものであろう。

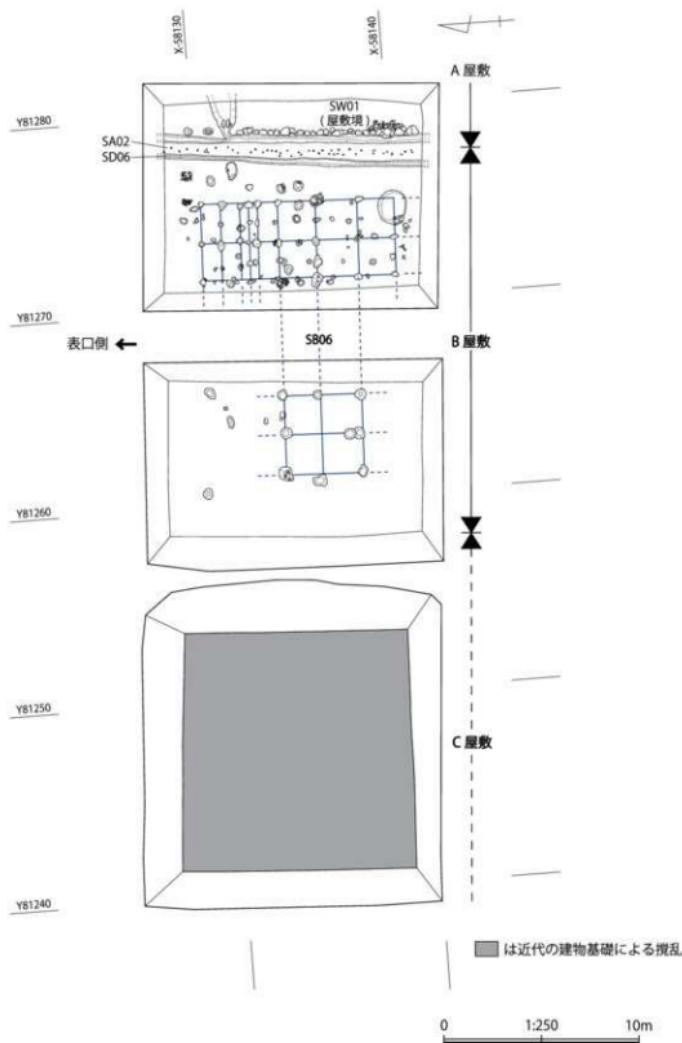
瓦質土器は火鉢が出土している。土製品は土人形がある。錢貨は寛永通寶がある。木製品は、漆器椀、曲物、櫛、下駄などがある。

遺構面の時期

屋敷地は第3遺構面に引き続き、第4遺構面でも屋敷地割を踏襲して変化しないが、構築される建物が掘立柱建物から礎石建物へと移り変わる。そのため、構築物の違いから遺構面として明確に区分できる。大橋家与力屋敷調査区では概ね3軒の屋敷地がかかり、この時期に比定される屋敷地名義は松平家々譜並御給帳写を根拠として、A屋敷は「小崎家」、B屋敷は「丹羽家」、C屋敷は「山部家」の屋敷地となっている（第2章第4節参照）。

第3遺構面の掘立柱建物が廃絶した後、礎石建物が構築された遺構面であり、出土遺物の年代観を考慮して松平期前半～中頃（1650～1700年代）を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を報告する。



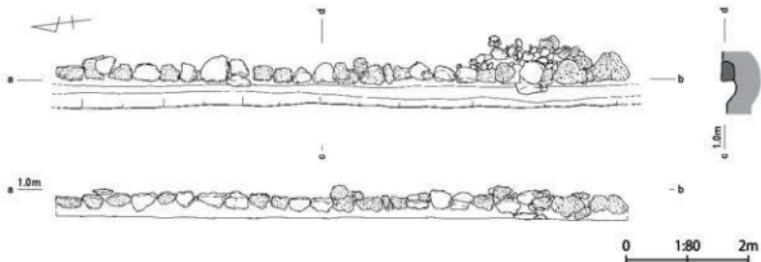
第77図 大橋家与力屋敷第4 遺構面全体図

第1項 屋敷境石垣SW01：A屋敷（第78図）

SW01はA屋敷の西端で検出した屋敷境石垣で、第3遺構面で検出した屋敷境SD02の位置をほぼ重複する。第3遺構面では素掘溝の屋敷境だったが、第4遺構面では石垣の屋敷境へ造り替わる。

SW01は南北方向に延び、主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。石垣の検出天端は標高0.90~1.00m、規模は南北長さ9.40m以上、高さ0.40mを測る。石垣は1~2段の積込みで、石材は主に島石を使用するが、所々に大海崎石が混在する。使用される石材は大きいもので差し渡し40cmを測る。石垣の西側直下には幅0.30m、深さ0.15mを測る溝を伴う。

松平家々譜並御給帳写に見る屋敷地名義から、小崎家と丹羽家の境界に位置づけられる屋敷境石垣となり、石垣の面が西向きであることを根拠に、小崎家（A屋敷）に付属する屋敷境石垣と考える。



第78図 SW01平面図・立面図

第2項 碇石建物跡SB06：B屋敷（第79図）

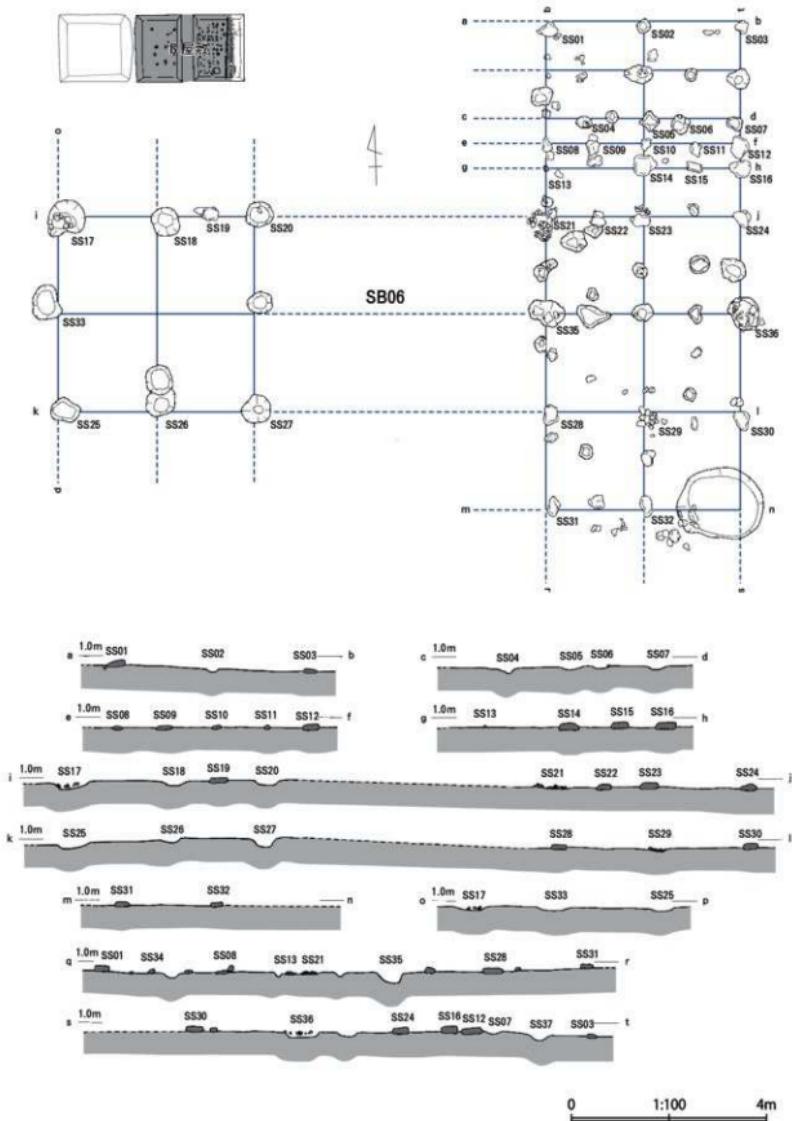
SB06はB屋敷の中央部からやや東寄りの位置で検出した礎石建物跡である。松平期の松江城下町絵図から、表口の向きは大手前線道路に面した北側であることが看取される。

検出標高は0.80m、規模は南北桁行5間以上（10.00m以上）、東西梁行7間以上（14.00m以上）を測る。調査区を跨って検出しているため一部未検出だが、東西方向に長い建物である。主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。柱間寸法は現地の測量で2.00mの6尺6寸を基準とする。

建物は全容を示しておらず、検出状況から南側の調査区外まで広がることが考えられる。礎石建物跡の検出位置は、第3遺構面で検出した掘立柱建物跡SB03と一部重複している。

建物礎石の天端検出標高は0.85~0.90mを測る。礎石の検出状況は散漫で、根石のみ遺存するもの、礎石の抜き取り痕を検出したものも含む。遺存していた石材は、差し渡し40~50cmの扁平な大海崎石・川原石・島石が混在する状況である。

身舎の空間配置は、北側から表口、居住空間となり、北東側の張り出し部分は玄関が想定される。玄関部分は東西2間（4.00m）×南北1間（2.00m）の範囲で、この部分には厚さ4.0cmを測る粘質土が堆積していた。粘質土は硬く締まり、貼り床とも見受けられる。第79図中e-f間、g-h間は半間（1.00m）の間隔で礎石が配されており、縁側の存在が想定される。出土遺物のなかには被熱痕跡をもつものがあり、土層断面の一部では焼土や炭が認められることから火災にあってる可能性がある。



第79図 SB06 (B屋敷) 平面図・礎石断面図

第3項 第4遺構面遺構外出土遺物：B屋敷（第80・81図）

ここでは第4遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。なお、A屋敷では遺構面直上出土遺物が皆無であり、C屋敷では近代の建物基礎による搅乱のため遺構面が消失している。そのため、ここで掲載する遺物はB屋敷から出土した遺物を取り扱う。

80-1は中国磁器である。80-1は景德鎮窯の青花皿である。精製の折縁皿で、芙蓉手である。口縁部を菊花形におさめ、口縁部周辺と外面部に草花の区画文を施す。17世紀代前半。

80-2～6は国産陶器である。80-2は瀬戸・美濃陶器（織部）の向付である。筒形の向付で、口縁端部を外傾させる。内面に格子文を施し、外面口縁部～体部にかけて緑釉を掛け流す。伝世品の可能性がある。17世紀代初頭。80-3は肥前陶器の碗である。天目形のなごりをもつ碗で、内外面に葉灰釉を施し、高台は露胎。九陶II期（1610～30年代）。80-4は肥前陶器の碗である。玉子手の呉器手碗で、胴部～底部のみ残存する。九陶II期（1610～30年代）。80-5は肥前陶器の溝縁皿である。砂目積みによる窯詰めで、灰釉の後のグループのものである。九陶II期（1640年代）。80-6は肥前陶器の溝縁皿である。内面に4箇所の砂目痕が残り、口縁部周辺に鉄釉が施される。九陶II期（1640年代）。

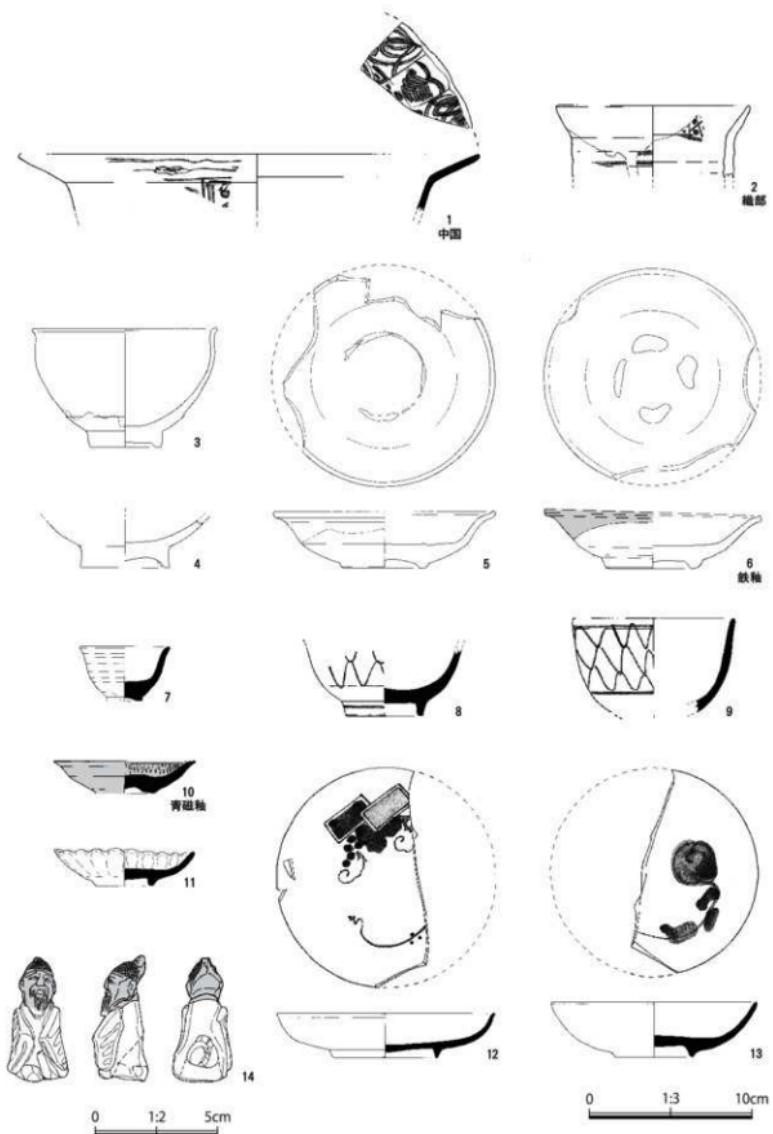
80-7～81-2は国産磁器である。80-7は肥前磁器の小杯である。口縁端部を外傾させ、端反形におさめる。高台無釉。九陶III期（1650年代）。80-8は肥前磁器の丸形碗である。外面に網目文、高台周辺に圓線を施す。豊付無釉。九陶III期（1650～60年代）。80-9は肥前磁器の丸形碗である。外面に網目文とその上下に圓線を施す。口縁部～胴部のみ残存する。九陶III期。80-10は肥前磁器の手塙皿である。内外面に青磁釉を施し、豊付無釉。内面体部周辺に鎬文の陰刻を施す。九陶II-2期（1640年代）。80-11は肥前磁器の手塙皿である。菊花形の皿で、型打成形である。九陶II-2期（1630～40年代）。80-12は肥前磁器の丸形皿である。見込みに葡萄文を施し、豊付無釉で砂粒が付着する。やや薄手の器壁である。九陶III期（1650～60年代）。80-13は肥前磁器の丸形皿である。見込みに蔓草文を施し、豊付無釉で砂粒が付着する。九陶II-2期（1640～50年代）。80-14は肥前磁器の灯芯押である。素地は白色で、全体に透明釉を施す。頭部は型押成形で顔面に鉄釉が施され、両手は手びねりである。背面から底部にかけて灯芯を入れる孔をもつ。九陶II-2期。81-1は肥前磁器の折縁皿である。内外面に青磁釉を施し、見込みに菊花文とその周間に印花を施す。高台は蛇ノ目高台。九陶III期（1650年代）。81-2は肥前磁器の折縁皿である。口縁部に波文、見込みに魚文を施すが焼成不良である。九陶II-2期。

81-3～6は土師器皿である。いずれも底部に糸切り痕をもつ在地系土師器皿である。81-3～5は口縁部内外面に灯心油痕が付着することから灯明皿として使用されたものである。

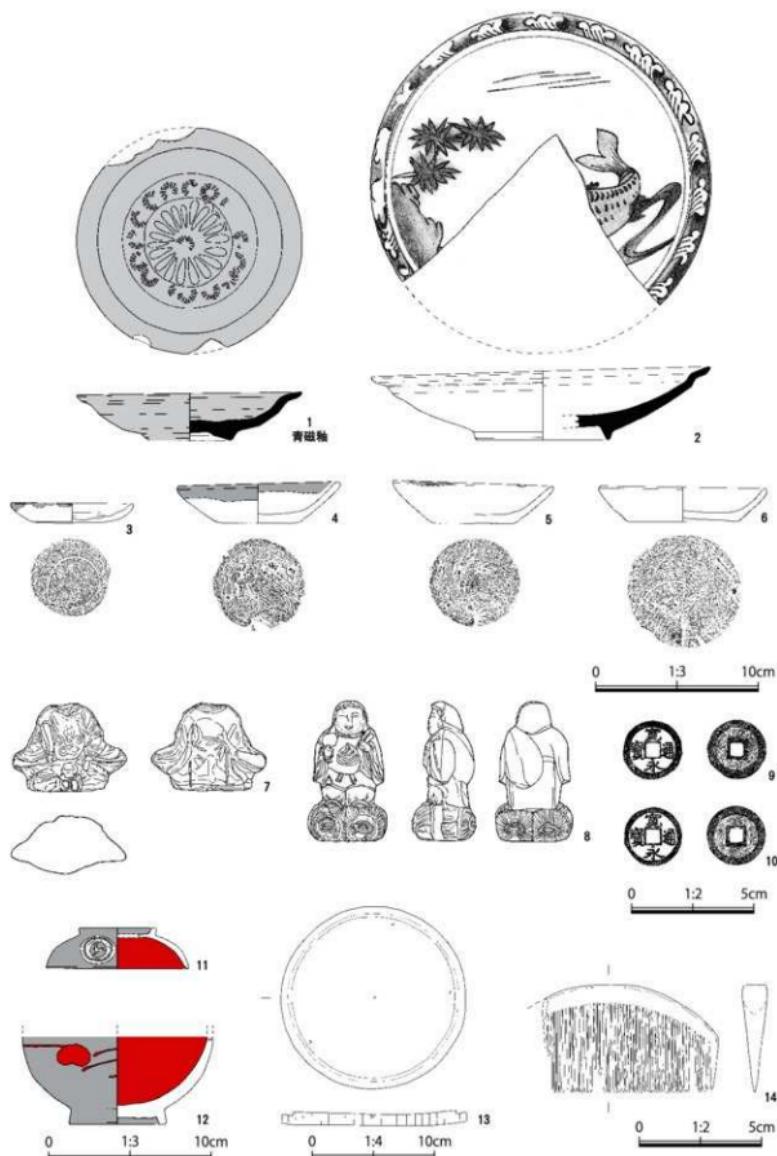
81-7・8は土製玩具の土人形である。81-7は天神で、外面は施釉される。81-8は大黒天で、製作時に土離れを良くするための雲母が外面に残る。いずれも型合わせ成形である。

81-9・10は銭貨である。いずれも寛永通寶で1638～56年に鋳造された古寛永である。

81-11～14は木製品である。81-11は漆器碗の蓋である。塗色は外面が黒色、内面が赤で、外面に丸に鳥文を施す。81-12は漆器碗である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に赤絵で花文を施す。81-13は曲物の底板である。木取りは柾目で、内面に孔が4箇所残る。81-14は櫛である。一部欠損するが、白木の横櫛である。



第80図 第4遺構面（B屋敷）遺構外出土遺物(1)



第81図 第4造構面（B型窯）造構外出土遺物（2）

第8節 第5遺構面

第5遺構面の概要（第82図）

第5遺構面は、標高1.10mで検出した遺構面である。遺構は、礎石建物跡1棟（SB07）、屋敷境石垣1条（SW02）、柵1列（SA03）、埋桶1基（SK22）、埋甕1基（SJ01）、土坑1基（SK23）を検出した。基盤層は、第4遺構面の上に盛土造成を施したB-4層（黄褐色粘性土）である。

第5遺構面での遺構検出はA・B屋敷の範囲に留まり、C屋敷は近代の建物基礎や上層からの擾乱の影響を受けて遺構は消失している。ただし、この遺構面ではB屋敷の一部まで擾乱の影響が及んでいる。このため、第5遺構面として掲載した遺構はA・B屋敷の検出遺構のうち、遺存していた遺構に絞って取り扱っている。

遺物の概要

遺物は、国産陶磁器・土師器皿・土製品・金属製品・石製品・錢貨・木製品がある。

出土した陶磁器は、中国磁器の出土がなくなり、すべて国産陶磁器となる。国産陶磁器の産地は、肥前、瀬戸・美濃、京信系、備前、山口（萩・須佐）、在地系のもので占められる。

このうち肥前陶磁器は、九陶IV期（1690～1780年代）と九陶V期（1780～1860年代）のものが中心である。陶器は肥前陶器が減少し、代わりに京信系陶器や在地系陶器が増加している。肥前磁器は、九陶IV～V期（1690～1860年代）のものが中心となり、陶胎染付碗が入る。この時期に見られる外青磁・筒形碗などの出土量は少ない。また、瀬戸磁器が入ってくるようになる。肥前陶器と肥前磁器の出土比率は、肥前陶器が減少し、肥前磁器が圧倒的に多くなっている。器種構成は、肥前陶磁器、瀬戸・美濃、京信系、萩は碗・皿類が中心である。備前、須佐、在地は擂鉢や鉢がある。

土師器皿は、京都系が3点入るが、在地系が圧倒的に増加する。この時期から在地系に使用の主体が移行するものと考えられる。土製品は焼塩壺がある。

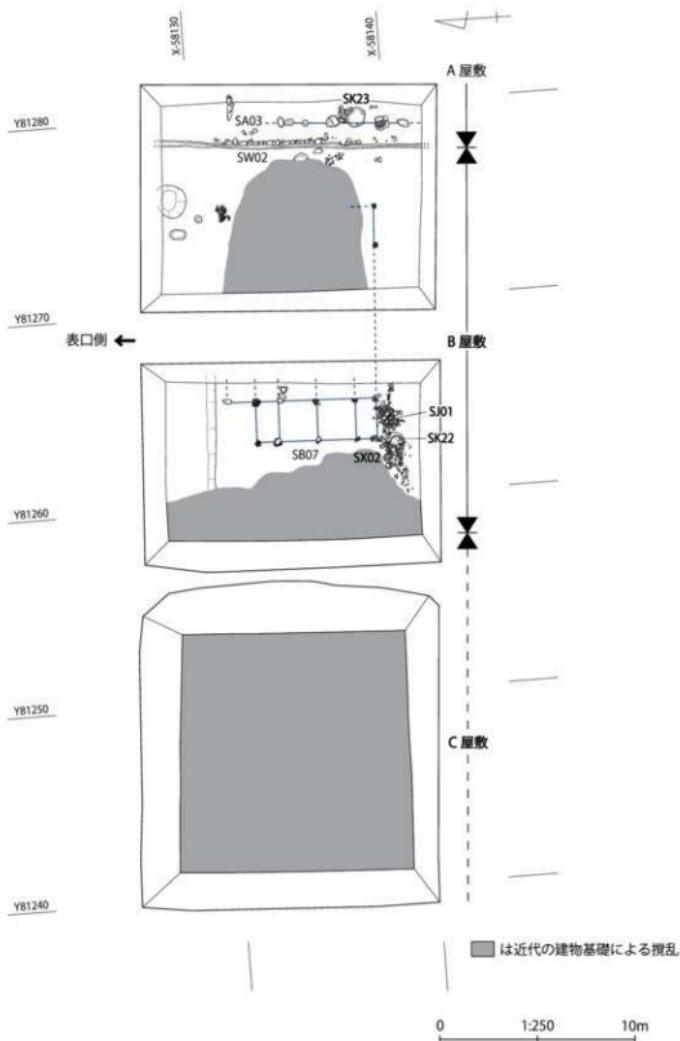
金属製品は煙管の雁首・吸口、切羽などがある。石製品は火打石が出土している。錢貨は寛永通寶がある。木製品は漆器椀、下駄などが出土している。

遺構面の時期

屋敷地は第4遺構面に引き続き、第5遺構面でも屋敷地割を踏襲して変化しない。大橋家与力屋敷調査区では概ね3軒の屋敷地がかかり、この時期に比定される屋敷地名義は元文～延享年間絵図（1736～48年）を根拠として、A屋敷は「小崎家」、B屋敷は「西澤家」、C屋敷は「山部家」の屋敷地となっている（第2章第4節参照）。

第5遺構面の年代は、1690～1860年代を示す遺物が大半を占める状況を踏まえ、松平期中頃～後半（1700～1860年代）を想定している。なお、擾乱のため遺構面の遺存状況が散漫であり、遺構面出土遺物として取り上げられている中には明らかに後世の遺物（混入品）が数点含まれている。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を報告する。



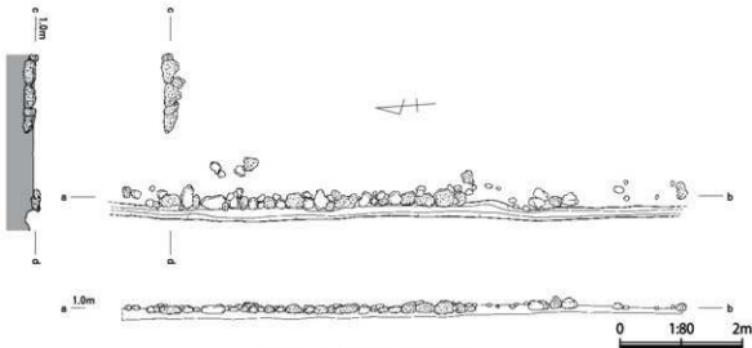
第82図 大橋家与力屋敷第5造構面全体図

第1項 屋敷境石垣SW02：A屋敷（第83図）

SW02はA屋敷の西端で検出した屋敷境石垣で、第4造構面で検出した屋敷境石垣SW01の位置をほぼ重複する。第4造構面の屋敷境石垣は、第5造構面の段階で造り替えがおこなわれる。

SW02は南北方向に延び、主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。石垣の検出天端は標高1.00~1.10m、規模は南北長さ9.00m以上、高さ0.35mを測る。石垣は1段の積込みで、石材は主に島石を使用するが、所々に川原石が混在する。使用される石材は大きいもので差し渡し40cmを測る。石垣の西側直下には幅0.30m、深さ0.15mを測る溝を伴う。

元文～延享年間絵図に見る屋敷地名義から、小崎家と西澤家の境界に位置づけられる屋敷境石垣となり、石垣の面が西向きであることを根拠に、小崎家（A屋敷）に付属する屋敷境石垣と考える。

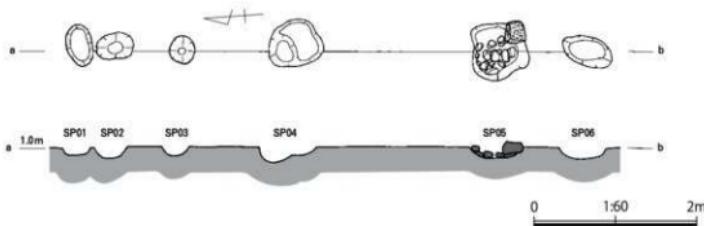


第83図 SW02平面図・立面図

第2項 柵SA03：A屋敷（第84図）

SW02の東側で検出した柵SA03である。SA03は南北方向6.70m間に直線的に並び、杭の間隔は1.00~2.00mを測る。主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。

杭列は認められず、根石や杭の抜き取り痕のみを確認している。掘方の平面形は円形～楕円形で、直径0.40~0.60m、深さ0.15mを測る。いずれも掘方は底部付近を検出している状況であり、掘り込み面はもう少し高い位置からと思われる。SA03は検出した位置関係から、A屋敷に存在していた建物に付随する遮蔽物、あるいはSW02に付随する遮蔽物と考える。



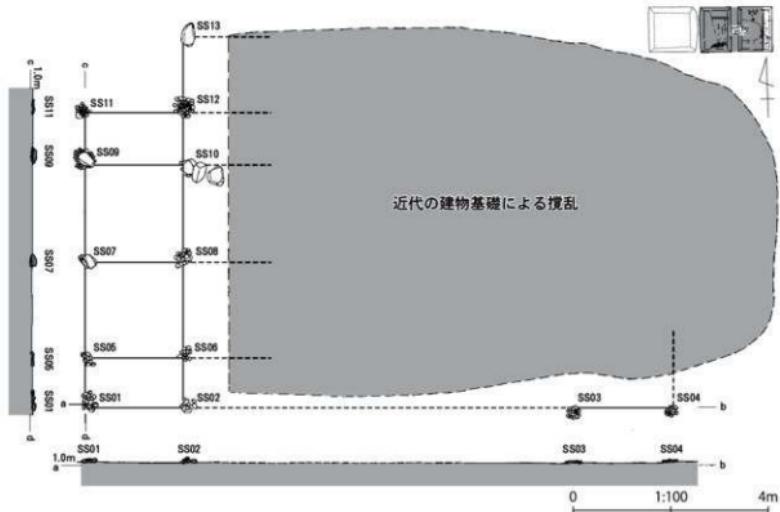
第84図 SA03平面図・断面立面図

第3項 碇石建物跡SB07：B屋敷（第85図）

SB07は第4造構面のSB06とほぼ重複する位置で検出した礎石建物跡である。礎石の天端標高が20～25cmほど高い位置にあることから、建替え・改築後の建物としてここに掲載した。

検出標高は1.10m、規模は南北桁行5間以上(8.00m以上)、東西梁行6間以上(12.00m以上)を測る。

調査区を跨っていることや、近代の建物基礎による搅乱のため一部未検出だが、東西方向に長い建物である。主軸方位は南北を軸とした場合N-4°-Eとなる。柱間寸法は現地の測量で2.00mの6尺6寸を基準とする。礎石は根石のみのものを含むが、直径30cmの扁平な川原石を使用している。



第85図 SB07（B屋敷）平面図・礎石断面図

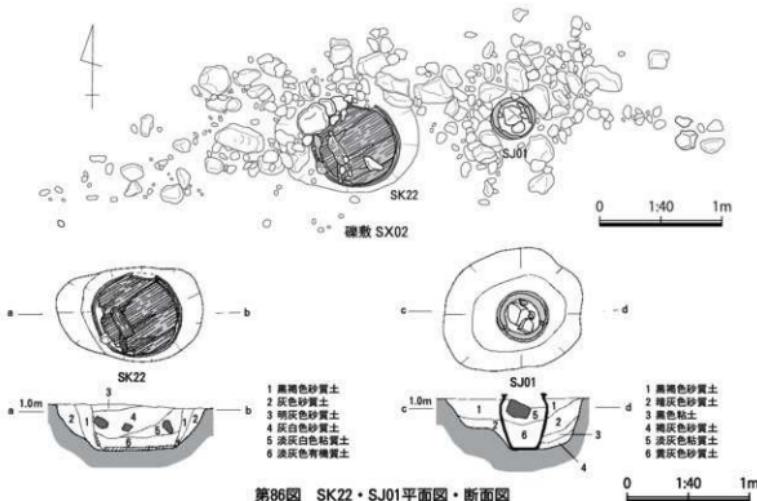
第4項 埋桶SK22・埋甕SJ01：B屋敷（第86図）

SK22・SJ01は礎敷SX02中から検出した埋桶・埋甕である。SX02は直径10～30cmを測る川原石の円礎を、東西5.60m×南北1.50mの範囲に集中して置いたような状態で検出した。

SK22は埋桶で、桶は底板と蓋の一部だけが残り、側板は廃絶時に抜き取られたものか遺存していない。桶底部は直径70cm、厚さ2cmを測り、底板上面にはリン酸カルシウム⁽³⁾と思われる青斑点が顕著に見られる。桶埋土から陶磁器片が出土している。

SJ01は埋甕で、検出時には甕の口縁部を外周するように石で固定されていた。甕は口径33cm、器高45.9cmを測る18世紀代の肥前陶器の甕である。甕内から石とともに陶磁器片が出土し、掘方から土師器皿が1点出土している。

SK22・SJ01の検出位置はいずれも建物の南側にあたり、二つの造構を並んで検出していることから便槽造構（トイレ造構）の可能性が高いものと捉えている。

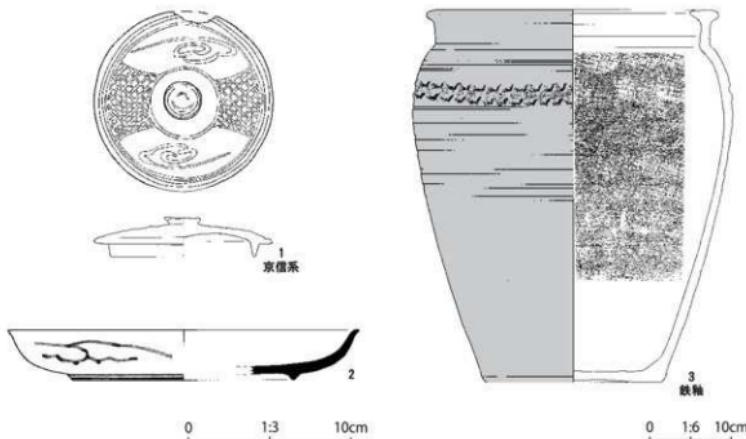


第86図 SK22・SJ01平面図・断面図

SK22・SJ01出土遺物（第87図）

87-1～3は国産陶磁器である。87-1・2はSK22から出土し、87-3はSJ01の埋甕である。

87-1は京信系陶器の土瓶蓋である。ボタン状のツマミで、外面に斜め格子と雲文を施す。18世紀代後半。87-2は肥前陶器の丸形底広皿である。九陶V期。87-3は肥前陶器の甕である。口縁断面はT字状で、外面胴部上方に波状突帯を施し、内面に格子状のタタキ痕が残る。18世紀代。



第87図 SK22・SJ01出土遺物

第5項 土坑SK23：A屋敷（第88図）

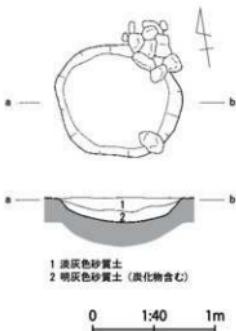
SK23はA屋敷の南側で検出した廐棄土坑である。平面形は円形で、規模は直径1.05m、深さ0.20mを測る。

土坑埋土は2層に分かれ、下層の明灰色砂質土から炭化物とともに遺物が出土した。

SK23出土遺物（第89図）

89-1・2は国産陶器である。89-1は京信系陶器の小壺、89-2は山口（萩）の開口碗である。いずれも18世紀代後半。

89-3～5は国産磁器である。89-3・4はセットで端反碗の蓋と碗である。線描きで口縁部に雷文、外面に草花文を施す。九陶V期。89-5は肥前磁器の皿である。九陶V期。



第88図 SK23平面図・断面図



第89図 SK23出土遺物

第6項 第5遺構面遺構外出土遺物：B屋敷（第90～93図）

ここでは第5遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。なお、第4遺構面と同様にA屋敷では遺構面直上出土遺物が皆無であり、C屋敷では近代の建物基礎による搅乱のため遺構面が消失している。そのため、ここで掲載する遺物はB屋敷から出土した遺物を取り扱う。

90-1～10は国産陶器である。90-1は京信系陶器の丸形碗である。外面に緑釉で草文を施す。削り出し高台。18世紀代。90-2は京信系陶器の碗である。外面に呉須絵で注連縄文を施す。18世紀代。90-3は瀬戸・美濃陶器の碗である。内外面に長石釉を施し、高台は露胎。18世紀代。90-4・5は肥前陶器の平形皿である。内面に銅緑釉を施し、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。高台は露胎。九陶IV期。90-6は肥前陶器の皿である。なぶり口の口縁で内面に刷毛目を施し、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。九陶IV期。90-7は山口（萩）の片口である。口縁は玉線状におさめ、内外面に薺灰釉を施す。18世紀代。90-8は在地系陶器（布志名）の内湾形の鉢である。18世紀代後半以降。90-9・10は須佐の擂鉢である。90-10は高台内に工具による削り痕が残る。

91-1～92-8は国産磁器である。91-1は肥前磁器の小壺だが、紅入の可能性もある。九陶V期。91-2は肥前磁器の小壺である。口縁部外面に圓線を廻らせ、口縁端部内面のみに釉剥ぎを施す。九陶V期。91-3は肥前磁器の小壺である。桶形で口縁部外面に瓔珞文を施す。九陶V期。91-4は肥前磁器の端反形の小壺である。九陶IV期。

91-5～15は肥前磁器の碗である。91-5は丸形碗である。初期色絵の碗で、外面に草花文、見込みに草花文と二重圓線を施す。高台内に「宣徳年製」の銘をもち、傷隠しのガラス継痕が残る。九陶III期(1650～60年代)。91-6は外青磁の碗である。胴部～底部のみ残存する。九陶IV期。91-7は丸形碗である。口縁部内面に四方禪文、外面に松葉文を施す。置付無釉。九陶IV期。91-8は折線形の碗である。外面に草文を施す。九陶IV期。91-9は無筋形碗である。口縁部内面に四方禪文、外面に草花文、見込みに手描きの五弁花を施す。置付無釉。九陶IV期。91-10～12は陶胎染付碗である。九陶IV期。91-13は丸形碗である。口縁部内面に四方禪文、外面に鼠・蕉文、見込みに環状の松竹梅文と二重圓線を施す。九陶V期。91-14は桶形碗である。外面に井桁桐文の印判を施す。置付無釉。九陶V期。91-15は半筒碗である。外面に玉取獅子文を施す。九陶V期。

91-16は肥前磁器の火入である。半筒形で外面に簡略した桐文を施し、高台は蛇ノ目凹形高台である。高台内に「キ五」の墨書記号をもつ。九陶IV期。

92-1～4は肥前磁器の皿である。92-1は丸形皿である。内面口縁部に草文、見込みにコンニャク印判の五弁花を施す。九陶IV期。92-2は丸形底広皿である。内外面に蔓草文を施し、置付無釉。九陶IV期。92-3は平形皿である。内外面に草花文を施し、底部高台内にハリ支えの痕跡が残る。九陶IV期。92-4は波佐見の青磁皿である。獸面三足付の皿で、内面口縁部周辺に鏽文の陰刻、見込みに草花文の片切彫りを施し、断面に漆継痕が残る。九陶III期。

92-5は肥前磁器の鉢蓋である。外面に丸寿字・瑞雲文を施し、断面に漆継痕が残る。九陶V期。92-6は肥前磁器の蓋である。内外面に算木文を施し、ツマミの内側に「太明成化年製」の銘をもつ。九陶IV期。92-7・8はセットの蓋付鉢である。筒形の鉢で、外面に人物・蜻唐草文を施す。92-8は高台内に「湯福」の銘をもつ。九陶IV期。

93-1～4は土師器皿である。93-1・2は手づくり成形の京都系土師器皿である。93-3・4は在地系土師器皿である。いずれも底部に糸切り痕をもつ。93-1～3は口縁部外面に灯心油痕が付着することから灯明皿として使用されたものである。

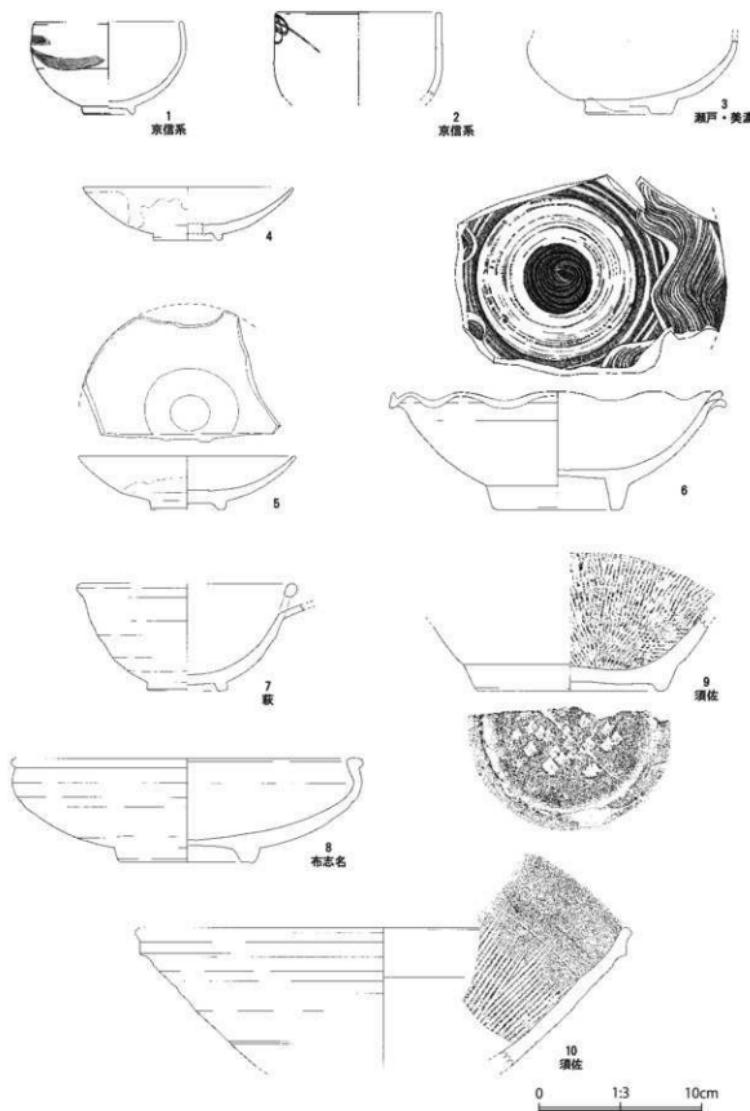
93-5は板作り成形の焼塩壺である。深桶形の無刻印のもので、焼塩壺小川分類III期に相当する。

93-6～9は金属製品である。93-6・7は煙管の雁首、93-8は煙管の吸口である。93-9は真鍮製の刀鍔である。小判形の鍔で、外縁部はイグ線状である。

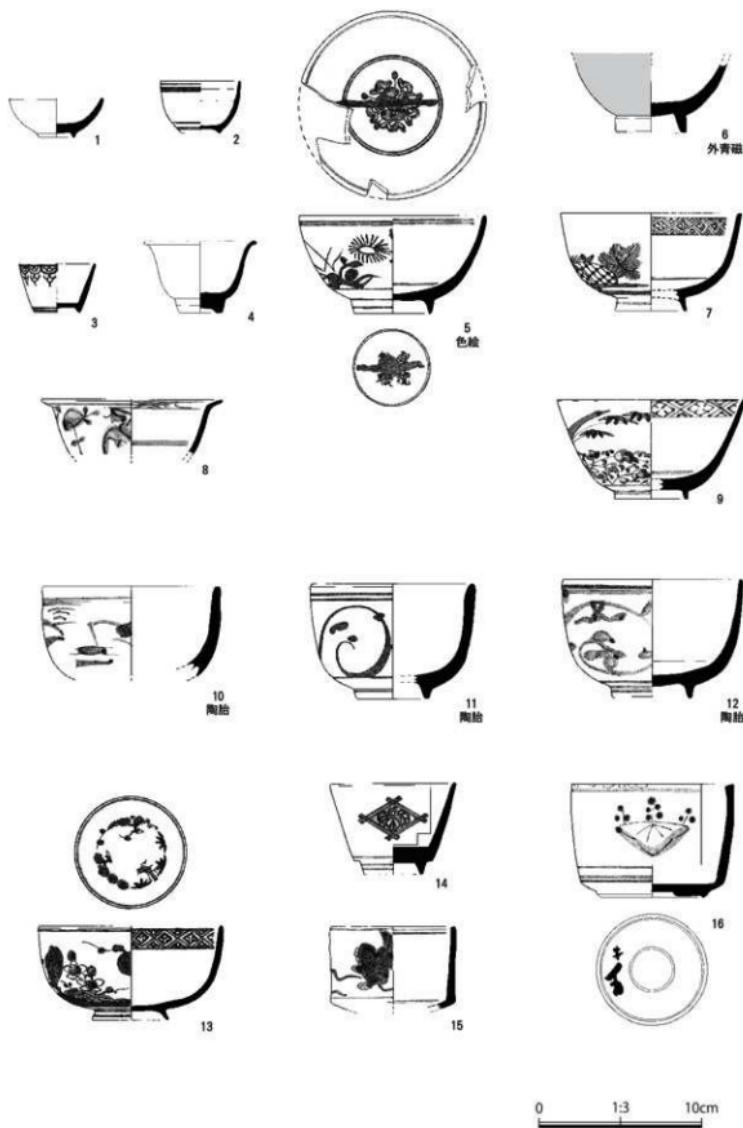
93-10は石製品である。赤瑪瑙製の火打石で、石の側縁部に敲打痕があり使用頻度は少ない。

93-11は銭貨である。寛永通寶で1668年以降に鋳造された新寛永である。

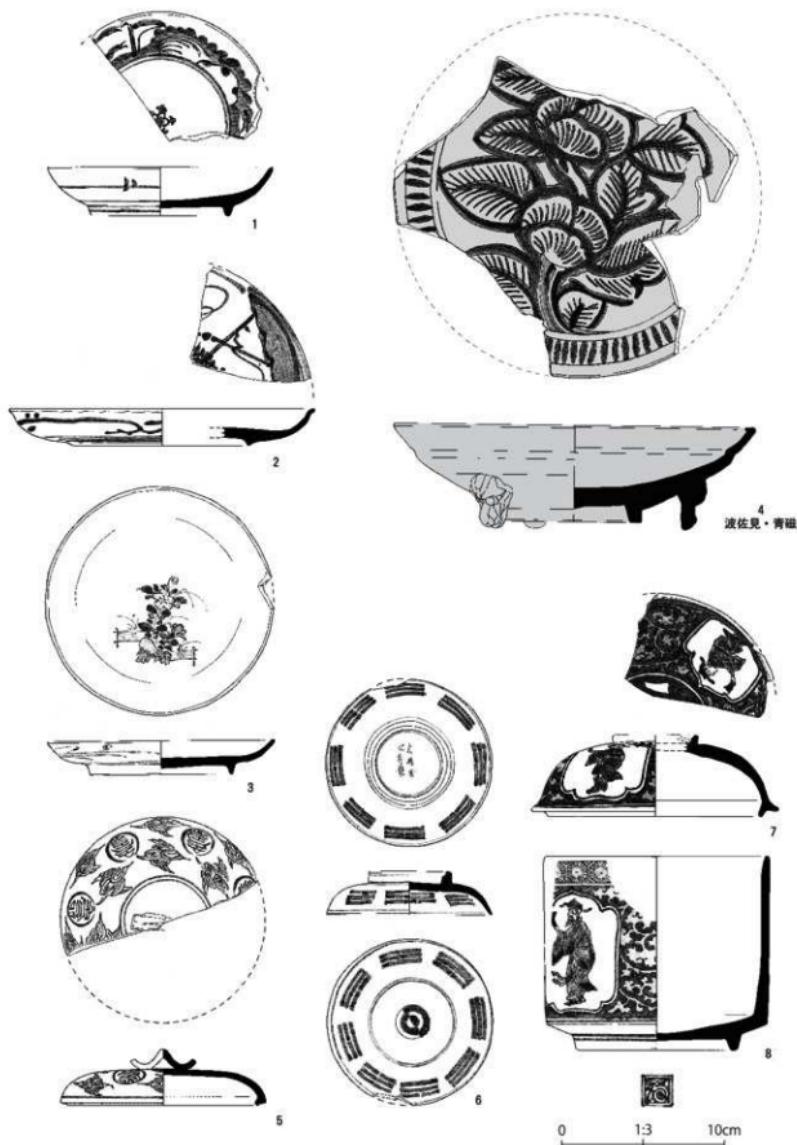
93-12・13は木製品である。93-12は丸型連歛下駄である。木取りは板目、前緒付近には足の指の痕跡が残る。93-13は丸型差込下駄である。木取りは板目、枘穴は前後1箇所ずつである。



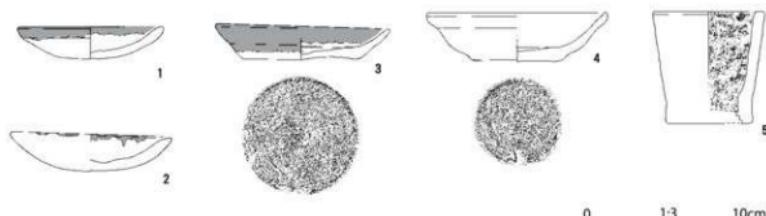
第90図 第5造構面（B型断）造構外出土遺物（1）



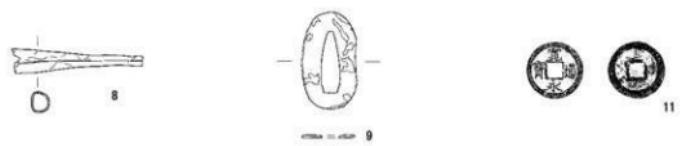
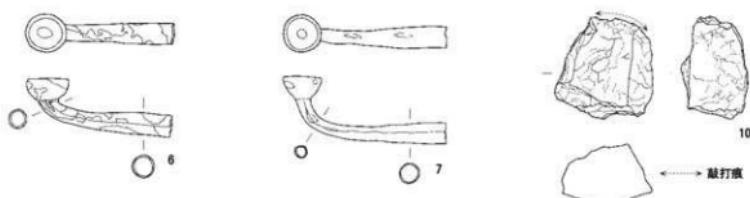
第91図 第5遺構面（B屋敷）遺構外出土遺物（2）



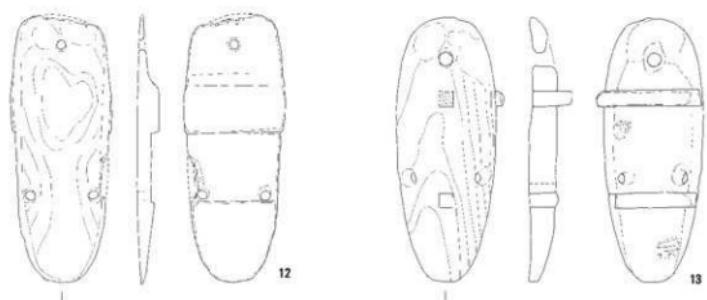
第92図 第5造構面（B型敷）造構外出土遺物（3）



0 1:3 10cm



0 1:2 5cm



0 1:4 10cm

第93図 第5遺構面（B屋敷）遺構外出土遺物(4)

第9節 第6遺構面

第6遺構面の概要（第94図）

第6遺構面は、標高1.30mで検出した遺構面である。遺構は、石列（SS02）を検出した。

この遺構面は、調査区のはぼ全域にわたって一様に搅乱を受けていた。発掘調査で重機掘削により表土～搅乱層を取り除いて露出した遺構面であり、一部に生活面が残っていることは否定しないが、搅乱を免れた遺構を検出している可能性があり、厳密な意味での遺構面ではない。

遺物の概要

遺物は、国産陶磁器・土師器皿・銭貨がある。出土した陶磁器は、すべて国産陶磁器である。国産陶磁器の产地は、肥前・瀬戸・京信系・山口（須佐）、九谷、在地のもので占められる。

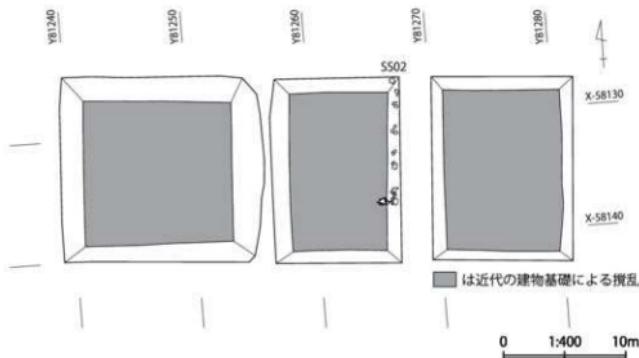
このうち出土量の多い肥前磁器は、九陶IV期（1690～1780年代）のものが少量あり、九陶V期（1780～1860年代）が中心で、広東碗・端反碗などがある。肥前陶器は出土がなくなり、ほとんどが在地系陶器となる。また、瀬戸磁器・在地系磁器が入ってくる。

出土比率は肥前陶磁器の減少が見られ、代わりに在地系陶磁器が増加している。器種構成は、碗・皿類が中心となるが、壺・鉢・瓶類などでバリエーションが様々となる。

土師器皿は在地系のみとなるが、灯明皿として使用されていた土師器皿は、陶器製の灯明皿の出現により減少傾向にある。銭貨は寛永通寶や一錢硬貨が出土している。

遺構面の時期

第6遺構面の年代は、搅乱を免れた遺構を検出している可能性があり、幕末～近代を想定しているが出土遺物の時期幅が広い。以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を報告する。

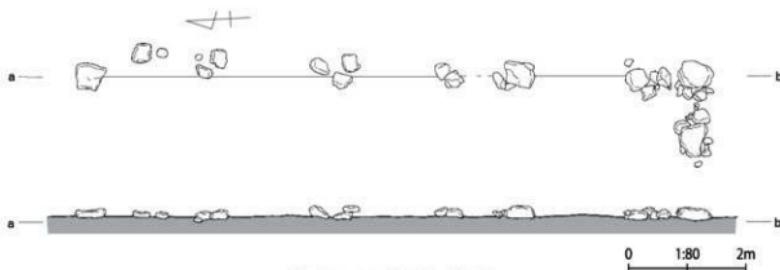


第94図 大橋家与力屋敷第6遺構面全体図

第1項 石列SS02（第95図）

SS02は大橋家与力屋敷調査区（中央部）の東壁で検出した石列である。検出標高は1.30m、規模は東西方向に長さ10.40m、幅0.40mの範囲で検出した。石材は直径20～30cm程度の川原石である。

SS02は検出位置から屋敷境に伴う石列とは考え難い。石列付近から19世紀代後半を示す遺物が出土し、石列は約1間（2.00m）間隔で並ぶことから近代の建物基礎の可能性が考えられるが、その用途は明確ではない。



第95図 SS02平面図・断面図

第2項 第6遺構面遺構外出土遺物（第96図）

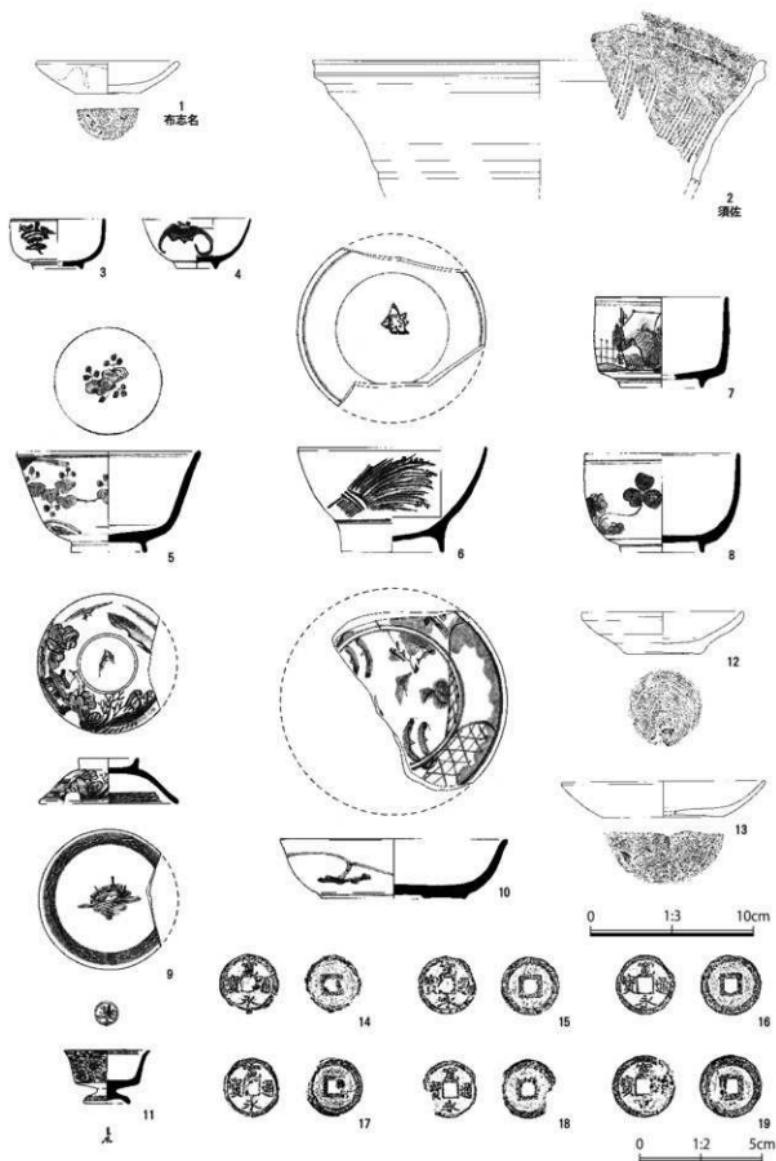
ここでは第6遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。なお、第6遺構面は発掘調査で重機掘削により表土～擾乱層を取り除いて露出した遺構面であり、一部に生活面が残っていることは否定しないが、厳密な意味での遺構面ではない。そのため、出土遺物の時期は18世紀代後半～近代と幅が広い。掲載した遺物は18世紀代後半～19世紀代のものが中心となっている。

96-1・2は国産陶器である。96-1は在地系陶器（布志名）の灯明皿である。内外面に飴釉を施し、高台は回転糸切りである。19世紀代。96-2は須佐の描鉢である。口縁部～体部のみ残存し、スリ目単位は11本である。

96-3～11は国産磁器である。96-3は肥前磁器の小壺である。丸形で外面に昆虫文を施す。九陶V期。96-4は肥前磁器の小壺である。丸形で外面に蝙蝠文を施す。九陶V期。96-5は肥前磁器の碗である。無稜杉形で外面に樹木文、見込みに草花文と圈線を施す。九陶V期。96-6は肥前磁器の広東碗である。外面に稻束文、見込みに雀文と圈線を施す。九陶V期。96-7は肥前磁器の半筒碗である。外面に山水文を施す。口縁端部に欠けた部分が見られることから、火入に転用された可能性がある。九陶V期。96-8は肥前磁器の碗である。深丸形で外面に草花文を施す。九陶V期。96-9は肥前磁器の端反碗の蓋である。外面に樓閣文を施す。九陶V期。96-10は肥前磁器の丸形底広皿である。内面に蛇籠文を施し、高台は蛇ノ目凹形高台である。九陶V期。96-11は九谷の小壺である。脚付の小壺で外面に唐草文を施す。脚部底部に「九谷」の銘をもつ。

96-12・13は在地系土師器皿である。いずれも底部に糸切り痕をもつ。

96-14～19は銭貨である。いずれも寛永通寶で、1638～56年に鋳造された古寛永である。



第96図 第6造構面遺構外出土遺物

註

- (20) 島根県立三瓶自然館サヒメル 中村唯史氏の御教示による。ラミナ層は湿地の堆積層で、植物質の堆積と氾濫などによる粘質土の堆積が交互におこり、層状に堆積していると指摘される。また、何年単位でこのような堆積となるのかについて、宍道湖の中心部では年間2mmの土壌堆積があることを根拠に、湿地である調査地は1年で平均5mm以上は堆積するのではないかとの御教示を得た。
- (21) 中村唯史氏の御教示によると、ラミナ層が不規則な形状で堆積していることから、城下町初期造成時に盛り返されている可能性があると指摘された。
- (22) 森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会『大宰府陶磁器研究』1995年6月
- (23) 河原在一郎「松江城下町遺跡の土質試験」『松江城研究2』2013年3月
- (24) 大橋家与力屋敷出土の陶磁器年代は、佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問 大橋康二氏の御教示による。
- (25) 工業善通『水田の考古学』東京大学出版会1995年
- (26) 土壤分析結果は第6章に詳述。
- (27) 中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1995年
- (28) 大宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編一』2000年12月
- (29) 検出した屋敷境を根拠として、屋敷地1軒分の間口は東西21m（約10間半）となる。本報告では屋敷境の間口を基に、調査区東側からA屋敷、B屋敷、C屋敷と便宜的に区分して掲載している。A～C屋敷は平成22～24年度に調査を実施した大橋家与力屋敷の西側に連続する屋敷地である。平成22～24年度の調査成果は『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書4』2014年3月を参照。
- (30) 『松江藩列士録』(島根県立図書館所蔵)
- (31) 島根県教育庁文化財課 角田徳幸氏の御教示による。
- (32) 松江城下町遺跡(般町287)の発掘調査において、北屋敷第4造構面以下で検出した鍛冶関連遺構である。鍛冶関連遺構では、鉄滓や礪の羽口など鍛冶法を示唆する遺物が出土している。調査が部分的なものであり、遺構の広がりや規模について明確ではないが、屋敷地造成以前の遺構に相当する。調査地は屋敷地造成後に重臣屋敷となるが、松江城の西側隣接地に位置することから、屋敷地造成以前には松江城建設時に関係する鍛冶場が存在していたと報告されている。
- (33) 大橋家与力屋敷第3造構面A屋敷は、平成22～24年度に調査を実施した大橋家与力屋敷第3造構面屋敷地C-1（小崎家）と同じ屋敷地内になることが想定される。本報告では屋敷境のみの検出に留まつたが、A屋敷の建物跡は調査区東側に存在し、その一部を屋敷地C-1で検出している。
- (34) 『松平家々譜並御給帳写 明治四半未三月』(島根県立図書館所蔵)
- (35) 1736～48年に作成された松江城絵図（元文～延享年間絵図）を根拠とした。
- (36) 徳島市教育委員会 勝浦康守氏の御教示による。徳島城下町は湿地で形成された城下町であることが前提である。1585(天正13)年、阿波國の領主となった蜂須賀家は居城を徳島城に定めるとともに城下町の建設を始める。その後、寛永期の阿波九城制の廃止、正保期の城下町の領域拡大を経て、元禄期には藩による武家屋敷の管理帳簿が作成され、近世城下町としての屋敷地の再編は完遂するとされている。徳島城下町の武家屋敷では島状整地が通例的に見られ、屋敷表と裏で異なる土砂の使い分けをされている。島状整地以後は、連続もしくは非連続に周囲の整地が進むとされている。
- (37) 与力屋敷では松平期初頭に比定されるが、平成23～24年度に調査を実施した松江城下町遺跡（母衣町68）松江地方裁判所（建物部分）の発掘調査成果では、城下町初期造成段階である堀尾期から島状整地をおこなっていたことが認められる。
- (38) 小川望「焼塩壺の分類」『焼塩壺と近世の考古学』同成社2008年
- (39) リン酸カルシウムは第三リン酸カルシウムとも呼ばれる。リン灰石として天然に産出し、また土壤中に広く分布して含まれ、植物の生長に必須の成分である。脊椎動物の骨や歯の主成分にもなっている。

主要参考文献

- ・中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1995年
- ・九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』2000年2月
- ・職豊期城郭研究会『職豊期における礎石建物・位置・規模・用途－』2000年9月
- ・大宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編一』2000年12月
- ・九州近世陶磁学会『受容層の違いによる九州陶磁の様相』2004年2月
- ・徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要17』2007年3月
- ・松江市史編集委員会『松江市史 史料編11 紹図・地図』2014年2月
- ・山陰考古学研究集会『山陰の近世城郭と城下町～遺跡調査と遺物組成から～』2014年8月

第5章 立会調査

立会調査を実施した地点は第16ブロックのうち、南田町130-3外地内（武家屋敷調査区）の西側に該当するMJR312、南田町132外地内（大橋家与力屋敷調査区）の南側に該当するMJR381の2箇所である（第97図）。

調査原因は、MJR312は下水道公共軒移設に伴う工事立会、MJR381は電線共同溝埋設に伴う工事立会である。以下、MJR番号に順じて個別に調査成果を詳述する。



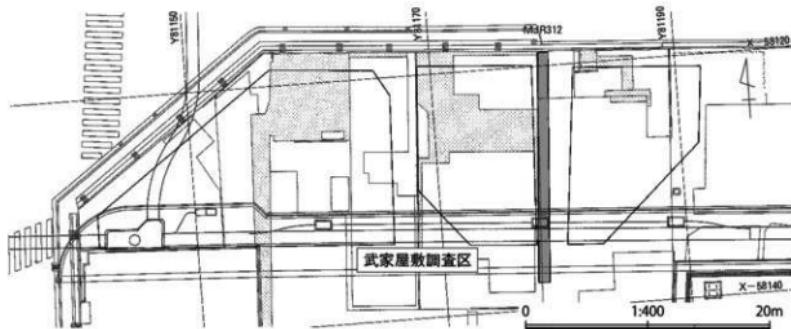
第97図 MJR312・381 立会調査地点位置図

第1節 MJR312（第98図）

調査地点は本調査：南田町130-3外地内（武家屋敷調査区）の西側で、下水道公共軒移設工事に伴う立会調査である。下水管敷設のために重機掘削が生じたことから、工事に伴い立会調査を実施した。

調査範囲は東西0.8m×南北18.9m区画＝調査面積15.1m²で、掘削深度は地表面（標高1.65m）から工事床面（標高0.36m）までの1.29mである。

調査の結果、南北方向の屋敷境石垣SW03を1条検出した。



第98図 MJR312 立会調査地点位置図

屋敷境石垣SW03（第99図）

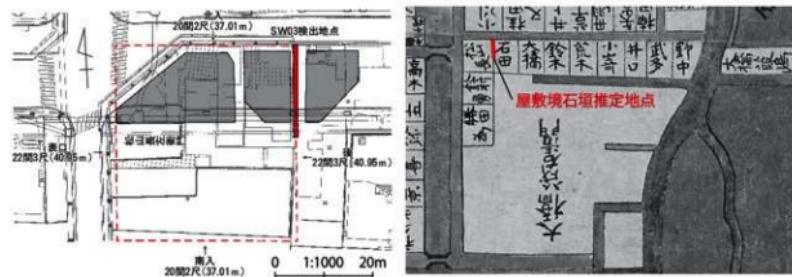
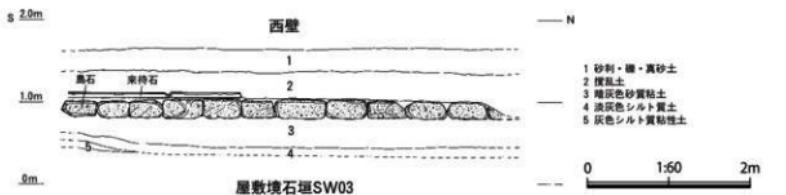
SW03は調査区西壁の一部区間で南北方向に検出した。石垣の検出天端は標高1.12m、規模は南北長さ5.20m以上、高さ0.32mを測る。石垣は2段の積込みで、石材は上段に来待石（砂岩）、下段に島石（玄武岩）を使用している。上段の来待石は直径1.20m、幅15cmで長方形を呈し、外面に鑿工具による加工痕を留める。来待石は天端を揃えて南北方向に直列に据えられている。

下段の島石は差し渡し30~40cmを測る。屋敷境の位置は変わらないが、上段と下段で石材が異なるという点から石垣は二時期ある可能性が考えられる。

南北の短い規模でしか検出してないが、SW03は文政～嘉永年間絵図から西側松山家と東側石田家の屋敷境石垣と考えられ、このことは文献からも看取できる。松江城下武家屋敷明細帳によると、絵図に記載される「松山長左衛門」の屋敷の向きは西向きて、表口は22間3尺（40.95m）、南入は20間2尺（37.01m）、後は22間3尺（40.95m）、北入は20間2尺（37.01m）と記される（第99図左下）。

これを現在の地図に整合すると、表口から後までの距離（37.01m）は、表口地点にあたる市道北田大橋線の東端を基点とした場合、検出したSW03までの距離（約37m）と一致する。よって、SW03は松山家屋敷の後の境界地点に位置する江戸時代後期から幕末にかけて存在した屋敷境石垣と推定される。また、石垣の面は東向きに揃えられていることから、松山家に付属する屋敷境石垣と捉えられる。

SW03は南北方向に一直線に延びていたものと思われるが、調査範囲内では検出した部分以外で他に石垣は見つかっておらず、石垣のない部分は後世の掘削および擾乱等で消失しているものと考えられる。また、調査範囲が東西に狭いためかSW03の対となる東側の石垣は今回の調査では検出していない。遺物は擾乱層中から19世紀代前半の陶磁器片が4点出土しているが、いずれも細片のため図化できるものではなかった。

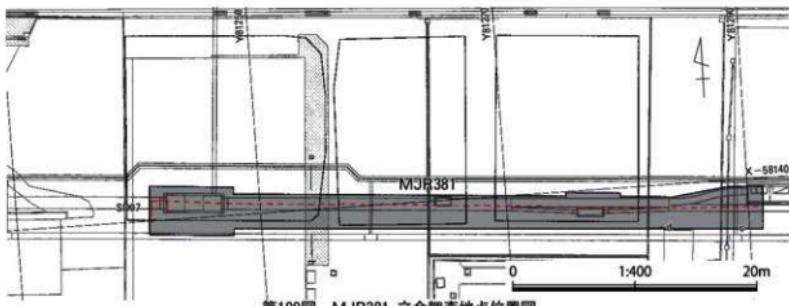


第99図 SW03 断面図（上図）・屋敷境推定地点（下図）

第2節 MJR381（第100図）

調査地点は本調査：南田町132外地内（大橋家与力屋敷調査区）の南側で、電線共同溝埋設工事に伴う立会調査である。本調査の段階で壁面の崩落を防ぐために安全帯を設けていた部分と重複する位置にあり未調査地となっていたことから、工事に伴い立会調査を実施した。調査範囲は東西50.4m×南北2.8m区画=調査面積141.2m²で、掘削深度は地表面（標高1.68m）から工事床面（標高-0.34m）までの2.02mである。工事は西から東に向かって順に掘削し、床掘りが深いためあらかじめ矢板が打ち込まれた管路を重機により掘り下げた。

調査の結果、東西方向の溝SD07を1条検出した。以下にMJR381西側と東側の土層断面をもとに調査成果を詳述する。



溝SD07（第101～103図）

MJR381西側

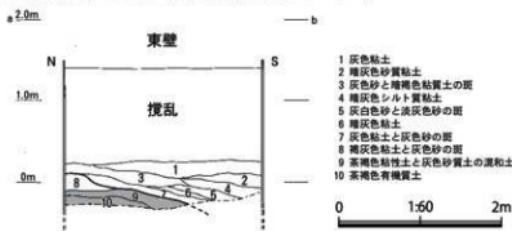
調査区西側で南に向かって落ち込む素掘の大溝SD07を検出した。立会調査では溝埋土を確認した状況であり、溝は東西方向に延びる様相を示すが全容は不明である。

南北方向の断面で、北側検出端部の標高は0.10m、南側検出端部の標高は-0.34mを測る。当該工事の掘削深度では溝の底は見えておらず、さらに南側へと続く。溝の一部には草植物が敷き詰められていたが、その用途は不明である。また、溝底部では自然堆積層を検出しておらず、溝底部と埋土の境が噴砂のように立ち上がっている状況を確認した。これは地震の痕跡ではなく、溝を人為的に埋める際に軟らかい底部の地盤を固めるため粘土の塊を投げ入れたことによる土圧の痕跡と考える。

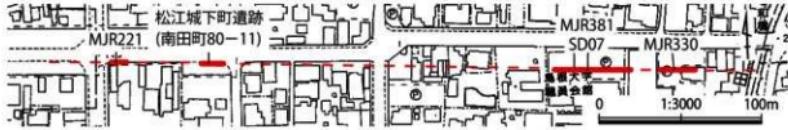
SD07はI b層を切り込んでいるが、立会調査の範囲ではこの溝の掘り込み面がどこにあたるのか判断としなかった。掘り込み面が北側の本調査区（南田町132外）内である可能性も考えられるが、第101図の土層堆積状況をみると、旧地表面の直上に堆積しているA層がI b層とIII層の混和土で構成されていることが分かる。このことから、溝は旧地表面から掘り込まれ、その残土を側に積み上げることで初期造成土として活用した様子が看取できる。よって、SD07は松江城下町初期造成段階に見られる素掘の大溝として機能していた可能性が高い。

第102図は調査地周辺の素掘の大溝検出地点を示す。今回の立会調査でSD07を検出したことにより、

松江城下町初期造成段階において東西方向に一直線に延びる区画割の意味合いを含む大溝が存在していた可能性がより強くなったと言える。このことは、南田町の鉤型路がいつ形成されたのかという問題と関わってくる。殿町・母衣町で道路の両脇から大溝を検出している調査事例を踏まえ、仮に城下町建設が道路の配置を念頭に置いて進められていたなら、南田町の大溝は鉤型状に掘削されているはずである。しかし、現時点では東西方向に一直線に存在すると考えられるので、南田町の鉤型路は城下町建設段階に計画はされていたが実際はまず一直線の溝を掘って区割りをおこない、その後の初期造成完了とほぼ同時に形成された可能性が考えられる。遺物は17世紀代前半の陶磁器片が出土しているが、重機掘削のため出土層位は特定できていない。



第101図 MJR381 西側土層断面図（東壁）



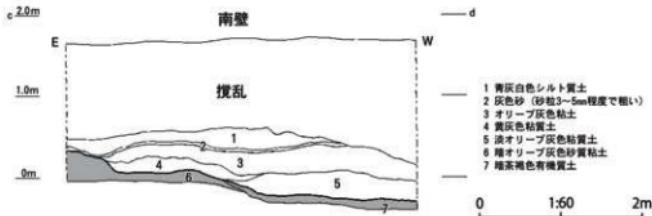
第102図 調査地周辺の素振の大溝検出地点と推定ライン

MJR381 東側

調査区東側では明確な遺構を確認していないが、南壁を精査した際に東西方向の断面で西へ向かう落ち込みを検出した（第103図）。

東側の検出端部は標高0.36mであるが、掘り込み面の標高は擾乱による影響を受けているため不明、落ち込み底部の標高は-0.32mを測る。この地点は屋敷境が想定された箇所であり、落ち込みはそれに関係する溝の可能性を考えられるが、立会調査の範囲では性格を明らかにすることはできなかった。

当該調査でも1b層を標高0m付近で検出しておらず、この箇所も調査区西側で検出したSD07内にあたると推察される。よって、南壁で確認した落ち込みはSD07覆土の一部と捉えている。



第103図 MJR381 東側土層断面図（南壁）

第6章 自然科学分析

渡辺正巳・古野 裕・奥中亮太（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

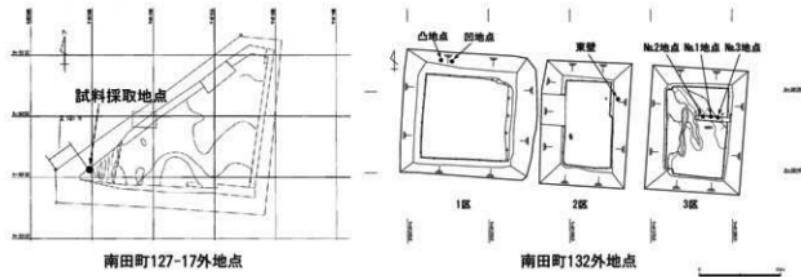
本報告は、文化財調査コンサルタント株式会社が公益財団法人松江市スポーツ振興財団の委託を受け、下記の目的で実施・報告した業務報告書を再編したものである。

- ①南田町132外地点3区で認められた堆積層変形の原因を解明する。
- ②南田町132外地点（第3遺構面：B屋敷掘立柱建物跡）で検出した柱の樹種と配置を明らかにする。
- ③南田町132外地点で認められた堆積物について堆積環境を明らかにする。
- ④南田町127-17外地点（第1遺構面）で検出した大溝（松江城下町造成初期に掘削されたと考えられる）の堆積物を対象に造成初期の古植生などを推定する。
- ⑤南田町132外地点（第2遺構面：畠跡）で検出された耕作遺構での作物を明らかにする。

採取試料について

各種分析試料は公益財団法人松江市スポーツ振興財団との協議の上、文化財調査コンサルタント側が採取した。また、各図面は公益財団法人松江市スポーツ振興財団より提供を受けた原図をもとに作成した。

報告対象とした2地点のトレンチ平面図及び試料採取地点を第104図に示す。また、各地点の堆積相・試料採取層準は、各地点の花粉ダイアグラム・軟X線写真観察結果に示す。



第104図 調査区平面図及び試料採取地点

第1節 分析方法

(1) 軟X線写真観察

試料採取・調整及び軟X線写真撮影は、渡辺（2009）に従って実施した。撮影写真は「ネガ」に相当する。撮影写真を基にスケッチを行うとともに「土壤記載薄片ハンドブック（久馬・八木：訳監修、1989）」に準じて記載を行った。併せて各種分析試料を分取した。

(2) 樹種同定

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺（2010b）に従い作成した。

作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント株式会社にて保管・管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4～600倍の倍率で行った。

同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

(3) 花粉分析

渡辺（2010a）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また、中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）とイネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

(4) 植物珪酸体分析

藤原（1976）のグラスピース法に従い行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。同定に際して、南田町132外地点1区では栽培植物との対応が明らかなイネ亞科の機動細胞を中心とした分類群を、2区では母植物との対応が明らかなイネ亞科の機動細胞を中心とした分類群を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスピースの個数が300を超えるまで計数を行った。

第2節 分析結果

(1) 軟X線写真観察

南田町132外地点の土壤観察結果を本節第105図に示す。

(2) 樹種同定

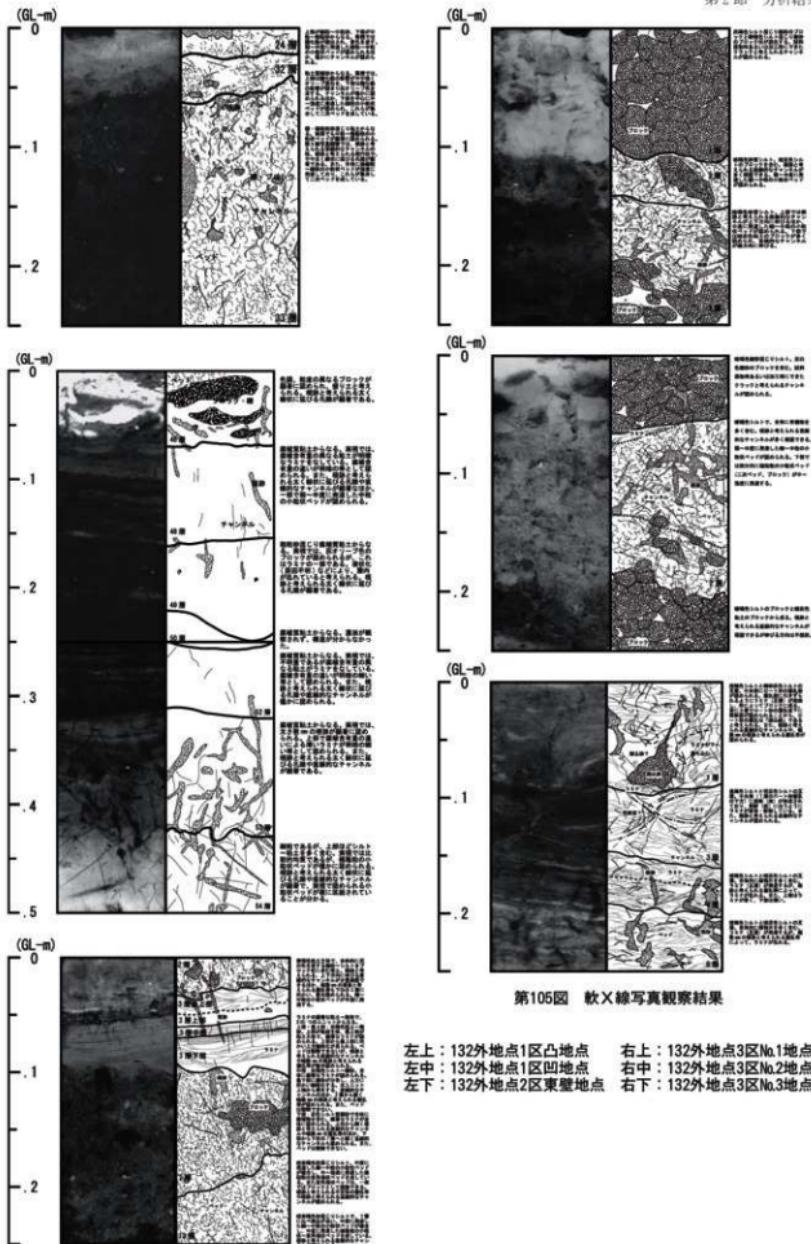
第4節第106図に平面図上の柱材配置を示し、樹種同定結果を表7に示す。

(3) 花粉分析（分析図版1）

分析結果を第5節第107・108図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本（針葉樹）花粉、木本（広葉樹）、草本・藤本花粉、胞子の区分でスペクトルの色を変えて示した。統計処理に十分な量の木本化石が検出できなかった試料では、検出できた種類を「*」で示した。また左端の花粉総合ダイアグラムでは、区分ごとの累積百分率を示した。右端の含有量グラフでは、1g当たりの花粉と胞子の含有量を対数目盛りで示した。

(4) 植物珪酸体分析（分析図版1）

分析結果を第5節第109図の植物珪酸体ダイアグラムに示す。植物珪酸体ダイアグラムでは、1gあたりの含有数に換算した数を検出した分類群ごとにスペクトルで示した。



第105図 軟X線写真観察結果

左上：132外地点1区凸地点 右上：132外地点3区No.1地点
 左中：132外地点1区凹地点 右中：132外地点3区No.2地点
 左下：132外地点2区東整地点 右下：132外地点3区No.3地点

第3節 地層の乱れについて(南田町132外地点3区No.3地点)

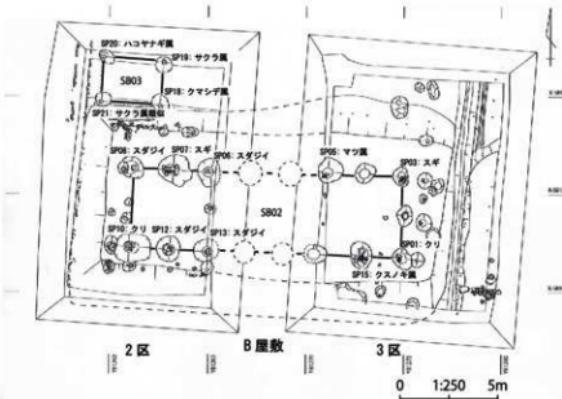
軟X線写真観察結果で示したように、上部の1層中に踏込跡と推定されるロート形の擾乱部が認められた。この擾乱部に引きずられるようにラミナが湾曲し、更に下位の3層では剪断が生じ、3層中のラミナも変形し剪断を受けている。これらのことから、以下のような事柄が推定できる。

1. 人間（あるいは動物）が湿地に入り込み、ラミナの発達する1層を踏み抜いた。
 2. この際1層のラミナは変形を受ける。
 3. 同時に下位の3層は上位からの圧密で圧縮され、水平方向へ伸張する剪断応力が生じ、剪断破壊が起こった。
 4. このため3層中のラミナは剪断面に沿って変形し断裂した。
 - 1.の作用によって、2～4の現象が一瞬に起こったと考えられる。
 5. 足を引き抜いた際にできた空隙の上部は狭まり、張り付くようになる。
 6. 空隙の下部はしばらくそのままで存在するが、地下茎の伸展や枯死によって周囲の崩落などが起り次第に充填される。
- 一方現地では、(地震による)液状化による地層変形の可能性が指摘されていた。しかし、ロート型の擾乱部には液状化に伴うラミナが認められていない。また、周囲のラミナがロート形の擾乱部に接して下方に引きずられるような様相を示す(液状化によりロート形に変形する場合、吹き上がる過程と推定される。この結果、周囲の堆積物は上方に引きずられることになり、今回の変形とは逆方向の変形が推定できる)。また、1層が吹き上げられると下位の3層は伸張され、剪断方向が今回と逆(上下に伸びる方向)になる。以上のように、1層及び3層に認められた地層の変形が、液状化による変形とは考え難い。

第4節 柱材について

南田町132外地点第3遺構面：B屋敷で検出した掘立柱建物跡について、樹種同定資料とした柱材の出土地点を平面図上に記載して樹種の配置を示した(第106図・分析図版2)。

柱材の樹種同定結果は渡辺・中川(2013)によると、島根県下で249試料の記載があり、そのうちおよそ半数の115試料がクリである。今回の年代測定値の江戸時代以降に限ると59試料の内、41試料とおよそ2/3をクリが占める。針葉樹ではマツ属(3)があるのみで、クリを除く広葉樹ではシノキ属・ムクノキ(2)・クスノキ科(3)・サカキ・トネリコ属(3)・ケヤキ(2)・カエデ属類似・ヤナギ属・散孔材と多種にわたる。このように柱材の樹種同定が成されることは多いが、その配置を記録した例は多くない。島根県下では、出雲国府(渡辺・古野, 2004)、青木遺跡(伊東ほか, 2006)で記載されているが、近世以降の報告例はなかった。今回の調査結果では、SB02の10本が5種類、SB03では4本が全て異なる樹種で建てられていた。柱材へのクリの用例は多く、スタジイがクリの代用とされる事例も少なくない。また、古い時期ではスギも柱材の主要な用材である。しかし、SB03で用いられた4種類中3種類は初出である。建物の規模も小さく、特異な例となることも予想される。



第106図 南田町132外地点第3遺構面：B屋敷 柱材の分布

表7 樹種同定結果一覧

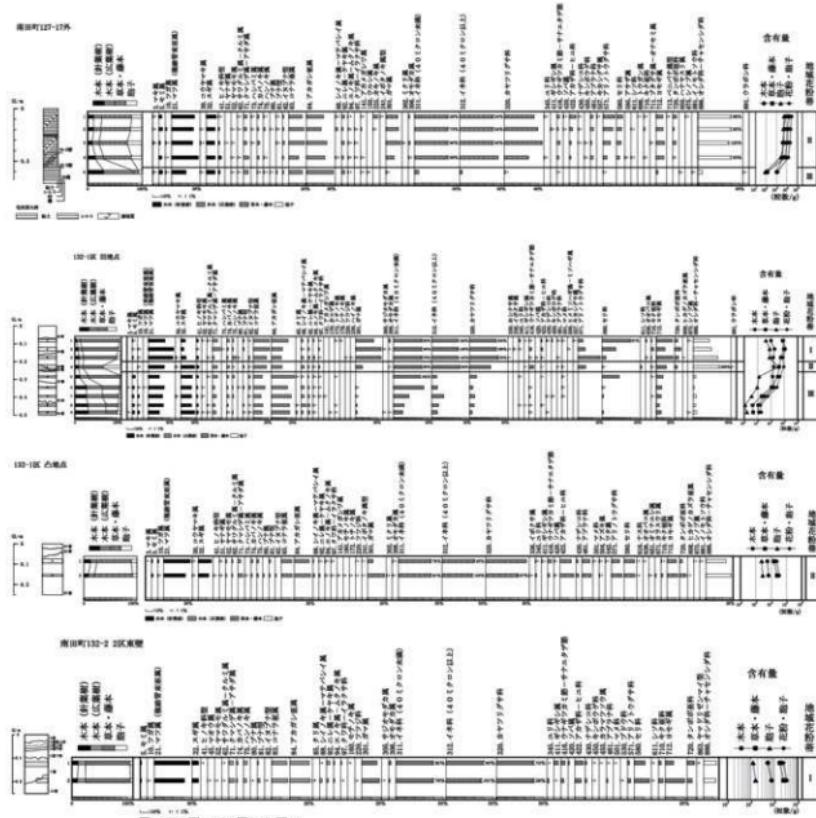
試料No.	整理番号	樹種	種類名	調査区	遺構	時代
SP01	W14070401	クリ	柱根	南田町132外3区	SB02	江戸時代
SP03	W14070402	スギ	柱根			江戸時代
SP05	W14070403	マツ属	柱根			江戸時代
SP06	W14070404	スダジイ	柱根			江戸時代
SP07	W14070405	スギ	柱根			江戸時代
SP08	W14070406	スダジイ	柱根			江戸時代
SP10	W14070407	クリ	柱根	南田町132外2区	SB02	江戸時代
SP12	W14070408	スダジイ	柱根			江戸時代
SP13	W14070409	スダジイ	柱根			江戸時代
SP15	W14070410	クスノキ属	柱根			江戸時代
SP18	W14070411	クマシテ属	柱根	南田町132外2区	SB03	江戸時代
SP19	W14070412	サクラ属	柱根			江戸時代
SP20	W14070413	ハコヤナギ属	柱根			江戸時代
SP21	W14070414	サクラ属類似	柱根			江戸時代

第5節 局地花粉帯の設定

松江城下町遺跡では渡辺・瀬戸（2011）以降、花粉分析などの自然科学分析が行われ、局地花粉帯が設定されている（渡辺・瀬戸、2014ほか）。今回得られた花粉化石群集と既知の局地花粉帯を比較し、各地点の局地花粉帯を明らかにする。また、幾つかの地点（層）を除いて、分析試料は堀尾期以降に堆積したものと考えられている。局地花粉帯の対比結果と実際の年代に違いがあることは、多くの場合古い時期の堆積物を盛り土したことによる起因と考えられる。このほか127-17外地点では、盛土が崩れて溝に流入した可能性が指摘できる。以下に、局地花粉帯の特徴を示す。

① III带（南田町127-17外地点、132外地点1区凹地点、132外地点3区No.3地点）

城下町遺跡の地下には、縄文時代晚期以前の汽水成堆積物が分布していることが知られている（渡辺・瀬戸；2012, 2013, 2014）。M130でIII带、IV带とされた花粉化石群集（渡辺・瀬戸、2014）がそれである。花粉化石含有量が数千粒/gと低いこと、草本・藤本花粉の割合が低く、木本花粉の割合



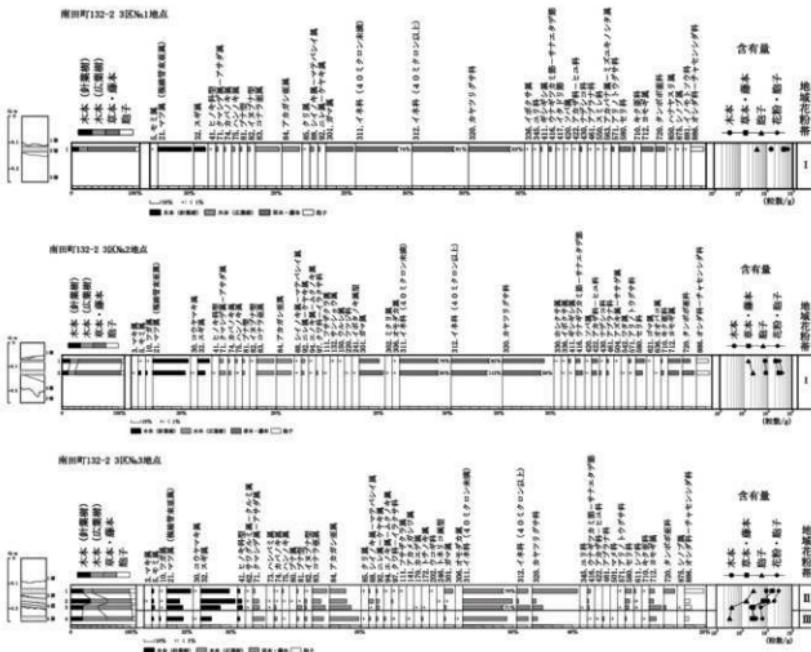
第107図 花粉ダイアグラム(1)

上位より南田町127-17外地点、132外地点1区凹地点、132外地点1区凸地点、132外地点2区東壁

が高いことで上位のI、II带と明瞭に区別される。また、花粉化石群集の詳細では、アカガシ亞属が他の種類に比べ高率で、マツ属（複雑管束亞属）・スギ属・コナラ亞属を伴うことである。またIII带ではマキ属の出現が断続的で、針葉樹種の割合も低い。一方IV带では、マキ属が連続して出現するほか針葉樹種の割合が高い傾向にある。今回127-17外地点下部、132外地点1区凹地点、132外地点3区No.3地点下部で得られた花粉化石群集ではアカガシ亞属が他の種類に比べ高率で、マツ属（複雑管束亞属）・スギ属・コナラ亞属を伴い、針葉樹の割合も低いことなどIII带の特徴と一致し、対比できる。

132外地点3区No.3地点では、軟X線写真観察で示したように下部（III带）から上部（II带）への層相変化も花粉化石群集の変化も漸移的で、不整合は認められなかった。

今後この層準を分析することによって、III带からII带への移行年代が明らかにできる。



第108図 花粉ダイアグラム(2)

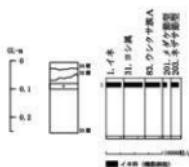
上位より南田町132外地点3区No.1地点、132外地点3区No.2地点、132外地点3区No.3地点

(2) II带(南田町127-17外地点、132外地点1区凸地点、132外地点1区凹地点、132外地点3区No.3地点)

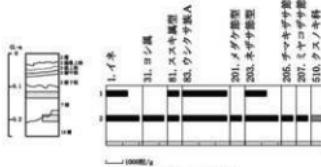
M134では数度にわたり局地花粉帯の見直しが行われているが、年代測定値から、最上部のI帯が中世以降、II帯が古墳から古代の後半以降中世まで、III帯が古墳から古代の前半以前の植生を示すと考えられる(渡辺・瀬戸、2015)。ここでは花粉化石含有量が数千粒/gと低い。特にII帯では草本・藤本花粉が増加傾向を示す。木本花粉化石群集ではマツ属(複雑管束亞属)・スギ属・コナラ亞属・アカガシ亞属が特徴的に検出され、アカガシ亞属の出現率がコナラ亞属を上回る。今回127-17外地点上部、132外地点3区No.3地点上部で得られた木本花粉化石群集はII帯に類似し、対比できる。ただし、今回の分析結果では草本・藤本花粉の割合がM134に比べて高く、花粉化石含有量も1~3万粒/gとやや多い。

132外地点1区凹地点では、マツ属(複雑管束亞属)が他の種類に比べ高率を示している。このような傾向は、II帯からI帯への移行期を示している可能性がある。一方、分析層準は作土(盛土)であり、本来II帯の時期の堆積物が盛り土されていたが、耕作時にマツ属(複雑管束亞属)が付加された可能性もある。

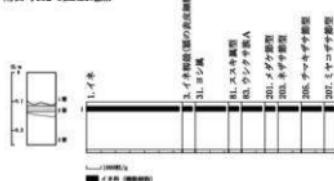
132地点 1区凸地点



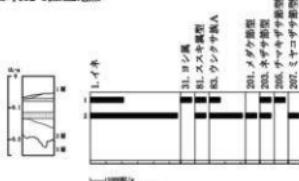
南田町132 2区東壁



南田町132 3区No.1地点



南田町132 3区No.2地点



第109図 植物珪酸体ダイアグラム

左上：132地点1区凸地点 右上：132地点2区東壁 左下：132地点3区No.1地点 右下：132地点3区No.2地点

③ I 帯(南田町132外地点 1区凹地点、132外地点 2区東地点)

堀尾層盛り土の直下に分布しており、マツ属(複維管束亞属)・コナラ亞属・アカガシ亞属が特徴的に検出される。草本・藤本花粉の割合が高く、ガマ属・イネ科(40ミクロン以上)・イネ科(40ミクロン未満)・カヤツリグサ科の出現率が特に高い。今回132外地点1区凹地点で得られた木本花粉化石群集はI帯に類似し、対比できる。

第6節 古環境推定

(1) III帶期(縄文時代晩期以降、古墳時代～古代以前まで)

① 地形及び堆積環境

当時の松江平野東北部は末次砂州背後の潟湖内に位置していた。潟湖内では朝酌川、東奥谷川や奥谷川によってもたらされた堆積物によって洲が形成されつつあった。127-17外地点、132外地点1区～3区共に水域であったが、徐々に埋まっていき水深が浅くなり、岸辺が近づいてきた。

② 古植生

木本花粉化石群集から、調査地西方の亀田山から北東に続く丘陵や背後の北山山地には、カシ類を主要素とする照葉樹林にアカマツやコナラ類を主要素とする林がバッヂ状に分布していたと考えられる。またこれらの林には、モミやヒノキなどの温帯針葉樹が混交していたと考えられる。一方谷筋や扇状地端部には、スギ林が分布していたと考えられる。潟湖の岸辺近くにはアシ類やカヤツリグサ類が生育し、陸域にはヨモギ類やタデ類が生育していたと考えられる。

(2) II帶期(古代後半以降～中世まで)

① 地形及び堆積環境

潟湖は徐々に埋まり、湿原の様相を呈していた。潟湖には多くの洲が形成され、分流する川筋が間

を流れていた。132外地点1区～3区共に水深のごく浅い水域で、岸辺が近かった。

② 局地花粉帯（花粉化石群集）の示す時期と堆積時期のギャップについて

II带に対比される花粉化石群集は、127-17外地点の大溝内堆積物、132外地点1区凸地点、132外地点1区凹地点、132外地点3区No.3地点で得られている。これらのうち127-17外地点の大溝内堆積物、132外地点1区凸地点の堆積物は松江城下町造成初期のものと考えられる。

前述のように自然状態でII带は、古墳から古代の後半以降中世までの植生を示すと考えられており、時期差が生じている。一方、132外地点1区凸地点、132外地点3区No.3地点は自然の堆積物で、従来通りの層序で矛盾がない。

127-17外地点の大溝内堆積物で分析対象とした16-2層内には明灰色のラミナが認められ（上位の埋土（15層）の影響で変形を受ける）、ブロックが認められないなど自然に堆積したと考えられ、その層厚は観察される範囲で50cmを超える。この厚さの泥層が、大溝が機能した数年で堆積するためには年間5cm以上の堆積速度を示さなくてはならず、一般には考えにくい。

仮に数年で堆積したとすれば、大量の泥の供給源が大溝の近くに必要となる。大溝を掘削した土が大溝の縁に盛られ、これが流れ出したとすれば、50cmを超える厚さの泥層が、大溝が機能した数年で堆積するかもしれない。しかし、掘削された部分の大半は29層に相当する青灰色の堆積物で、暗色を示す層準は今回の調査地点でせいぜい30cmほどである。土量が合わないことから、周辺で掘削された粘土も調査地近辺に集められていた可能性が示唆される。

「大溝の近辺に盛られた中世以前（II带の時期）の堆積物」が流れ出し、大溝内に堆積したと仮定すると花粉化石群集の時期が合わないことの説明が付く。つまり、得られた花粉化石群集は「大溝の近辺に盛られた中世以前（II带の時期）の堆積物」に含まれていた花粉粒に、堆積時に供給された花粉粒が付加したと考えられ、同様の事柄は132外地点1区凸地点についても想定できる。

③ 古植生

前述のように、127-17外地点、132外地点1区凸地点の分析結果をII带の時期の花粉化石群集として取り扱うことはできない。このことから、自然堆積物を対象とした132外地点1区凹地点、132外地点3区No.3地点の花粉化石群集を基に古植生を復元する。

調査地西方の亀田山から北東に続く丘陵や背後の北山山地低所には、アカマツやコナラ類を主要素とする里山（薪炭林）が広がるが、カシ類を主要素とする照葉樹林も所々に残存していた。

また、北山山地高所ではIII带の時期同様に照葉樹林にアカマツ・コナラ類からなる遷移林がパッチ状に分布し、モミやヒノキなどの温帯針葉樹が混交していたと考えられる。一方谷筋には、スギ林が分布していたと考えられる。

調査地近くまで開墾が進み、水田耕作が行われるようになった。一方で調査地近辺は湿原状態のままで、ガマ類・アシ類・カヤツリグサ類・セリ類が繁茂し、干上がった場所にはヨモギ類やタデ類が生育していたと考えられる。

(3) I帯期（中世以降～江戸時代前半まで）

① 地形及び堆積環境

潟湖内は更に埋まり、湿原の様相を呈すとともに淡水化していった（渡辺・瀬戸、2012）。潟湖には多くの州が存在し、分流する川筋が間を流れていた。132外地点1区・2区共に水深のごく浅い水域で、岸辺が近かった。

② 花粉化石群集の特異性

132外地点1区凸地点では、自然堆積物内からI帯に対比できる花粉化石群集が得られている。このほか、132外地点1区凹地点、132外地点2区東壁地点では耕作土からI帯に対比できる花粉化石群集が得られている。また前述のように、127-17外地点では大溝内の堆積物（再堆積）として、132外地点1区凸地点では耕作土として、II帯の時期の花粉化石群集にこの時期の花粉が付加された特異な花粉化石群集が得られている。

③ 古植生

調査地西方の亀田山から北東に続く丘陵や背後の北山山地低所には、アカマツやコナラ類を主要素とする里山（薪炭林）が広がる。カシ類を主要素とする照葉樹林も所々に残存していた。II帯の時期に比べ里山内のアカマツの割合が増える。後半では木本花粉含有量が減少しカシ類の割合が増加することから、里山の荒廃が進んではげ山が広がり、北山山地高所に分布したカシ類が相対的に増加したものと考えられる。北山山地高所では照葉樹林・アカマツ・コナラ類からなる遷移林がバッチ状に分布し、モミ・ヒノキなどの温帯針葉樹が混交していたと考えられる。一方谷筋のスギ林も縮小したものと考えられる。

127-17外地点の大溝内あるいは水源となる河川沿いにはガマ類やフサモ（アリノトウグサ科）が、河川沿いから湖岸にはアシ類やカヤツリグサ類が生育していたと考えられる。調査地近隣では畠作も行われ、カキ・ソバ・トウガン・ベニバナが栽培されていた可能性がある。またアザは食用にもなるが、調査地に近い大溝内に自生していた可能性が高い。

132外地点1区凸地点での軟X線写真観察から、33層ではベッドの発達が顕著なことが分かり、十分な土壤化を受けていることが明らかになった。一方33層からはソバ属・アズキ属一ササゲ属・ワタ属などの栽培植物由来の花粉が検出された。またイネ科（40ミクロン以上）の出現率も高く、イネ由来の植物珪酸体も検出されている。以上の事柄から、33層を耕作土（歴）として、ソバ・アズキ（ササゲ）・ワタが栽培されていたと考えられる。また、栽培形態が不明であるが、イネも栽培されていた可能性が指摘できる。イネ科（40ミクロン未満）・カヤツリグサ科・ガマ属・セリ科などの水田雑草に含まれる湿性植物の割合も高いことから、水稻が栽培されていた可能性が指摘できる。しかし、これらは客土された33層に本来含まれていた可能性もあり、イネが陸稲であった可能性も残る。また、イネの植物珪酸体の検出密度はやや低く、耕作期間が短かった可能性がある。一方、アカザ科・ヒュ科・アブラナ科・セリ科には畠作物（アカザやナタネなど）の可能性があるが、出現率、含有量がやや低く、雑草由來の可能性も否定できない。

132外地点2区東壁の軟X線写真観察では、7層中に比較的大きなブロックが認められたが、7層・

13層共にベッドに弱～中度の発達が認められた。現地観察では、7層が耕作土、13層はブロックが混在することから埋土と考えられていた。今回の試料採取地点に関して13層には明瞭なブロックは観察できず、ベッドが発達している。逆に、7層にはブロックが認められるが、花粉分析結果やベッドの発達から両層ともに耕作土であったと考えられる。また7層についてはブロックが認められることから、耕作期間が比較的短かったと考えられる。13層ではイネ植物珪酸体の検出密度がやや低いものの、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率を示す。また、7層ではイネ植物珪酸体の検出密度は更に低い値であるが、イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率は高い。更に7層では、ソバ属花粉も検出されている。また132外地点1区凸地点同様に、ガマ属やイネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科などの湿地性植物由来花粉の出現率が高い。これらのことから、7層ではソバが栽培されていたと考えられる。また、132外地点1区同様に一時的な水稻栽培や、陸稻栽培の可能性も指摘できる。

132外地点3区No.1地点が畠、No.2地点が畠間に相当する。軟X線写真観察では両地点とも、分析試料を分取した2層はベッドが弱～中度に発達し二次ベッドも認められるなど、土壤化の痕跡が強く認められた。一方、上下の1層・3層はブロックが顯著で、埋土と考えられる。両地点ともイネ科（40ミクロン以上）花粉は高率を示し、イネ植物珪酸体の検出密度も高い傾向にある。また、No.1地点ではイネ穀穀由来の植物珪酸体も検出された。更に畠間のNo.2地点では低率であるがソバ属・アズキ属・ササゲ属・ワタ属・ゴマ属が検出された。また、他地点同様に、ガマ属・イネ科（40ミクロン未満）・カヤツリグサ科などの湿地性植物由来花粉の出現率が高い。これらのことから、ソバ・アズキ（ササゲ）・ワタ・ゴマなど栽培されていたと考えられる。一時的な水稻栽培や、陸稻栽培の可能性も指摘できる。

第7節 小結

- 軟X線写真観察、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定の結果、以下の事柄が明らかになった。
- (1)南田町132外地点3区No.3地点で認められた地層の乱れ（第105図右下）は踏み込みによるものであり、地震などによる「液状化」跡ではない。
 - (2)南田町132外地点で検出された2棟の建物について、多様な樹種が用いられていることが分かった。柱材として樹種を選択したようには考えられなかった。江戸時代の柱の樹種についての資料は決して多くなく、今後の資料の蓄積によって今回の例が特異なものなのか、あるいは建物の種類によるものかという点が明らかになろう。
 - (3)従来の局地花粉帶との比較・対比を行った結果、II带の時期の堆積物が、堀尾期の耕作土として客土されていたことが分かった。I带の時期の堆積物にも同様の可能性があるが、堀尾期もI带に含まれている可能性があり断定はできない。
 - (4)III带からI带に至る時期の遺跡周辺から北山山地にかけての古植生を推定した。また、調査地内の畠ではソバ・アズキ（ササゲ）・ワタ・ゴマが栽培され、遺跡周辺ではカキ・トウガン・ベニバナも栽培されていた。また、イネも栽培された可能性があるが陸稻か水稻かの判断はできない。

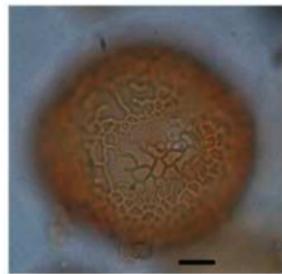
参考文献

- 伊東隆夫・渡辺正巳・古野 穎 (2006) 柱材・木製品の樹種同定、青木遺跡II (弥生～平安時代編) -国道431号道路改築事業 (東林木バイパス) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III- 第3分冊 (奈良・平安時代), 511-527, 島根県教育委員会,
- 久馬一剛・八木久義証監修 (1989) 土壌記載薄片ハンドブック, p.176, 博友社, 東京,
- 島地 謙・佐伯 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造, p.276, 文永堂, 東京,
- 中村 純 (1974) イネ科花粉について、特にイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197,
- 藤原宏志 (1976) プラント・オーパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪穀体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, 15-29
- 渡辺正巳 (2009) 五丁遺跡・庵寺遺跡における堆積相の歴X線観察。五丁遺跡 庵寺遺跡 I 於才道遺跡一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書, 2, 145-160, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会,
- 渡辺正巳 (2010a) 花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法, 174-177, ニュー・サイエンス社,
- 渡辺正巳 (2010b) 木質遺物 (埋没樹木) 樹種同定、必携 考古資料の自然科学調査法, 194-198, ニュー・サイエンス社,
- 渡辺正巳 (2014) 調査1区・調査2区発掘調査に伴う土壤分析、城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 (松江市文化財調査報告書) -松江城下町遺跡第16ブロック(東側)(南田町134-11外)・(南田町136-13外)・(南田町137-13外)・4 (157), 134-151, 松江市教育委員会・(公財)松江市スポーツ振興財团, 島根,
- 渡辺正巳・瀬戸浩二 (2011) 中世松江平野の古環境、松江城下町遺跡 (殿町287番地)・(殿町279番地外) 発掘調査報告書- 松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書-(松江市文化財調査報告書, 139) 自然科学分析・写真図版編, 30-36, 島根県松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団, 島根
- 渡辺正巳・瀬戸浩二 (2012) 松江平野の古環境(1)-県道大手前通り発掘調査に連して(1)-, 松江城研究, 1, 49-59, 松江市教育委員会, 島根,
- 渡辺正巳・瀬戸浩二 (2013) 松江平野の古環境(2)-県道城山北公園線 (大手前通り) 発掘調査に連して(2)-, 松江城研究, 2, 35-44, 松江市教育委員会, 島根,
- 渡辺正巳・瀬戸浩二 (2014) 松江平野の古環境(3)-県道城山北公園線 (大手前通り) 発掘調査に連して(3)-, 松江市歴史叢書, 7 (松江市史研究, 5), 87-94, 松江市教育委員会, 島根。
- 渡辺正巳・瀬戸浩二 (2015) 松江平野の古環境(1), 日本地質学会第121年会にて講演。
- 渡辺正巳・中川 寧 (2013) 山陰の木製品の樹種と植生について、木製品から見た古代のくらし, 37-48, 島根県古代文化センター,
- 渡辺正巳・古野 穎 (2003) 出雲国府跡出土柱根・木製品の樹種(1), 風土記の丘内地遺跡発掘調査報告書14 史跡出雲国府跡- 1, 199-208, 島根県教育委員会,
- 木材の構造, 276p., 文永堂, 東京,

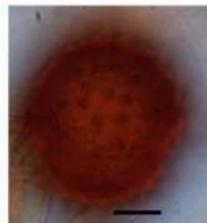
花粉化石顕微鏡写真



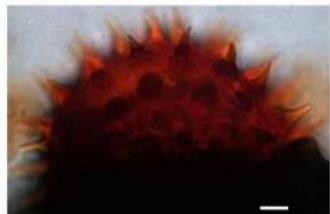
力ノキ属
(127-17外: 試料No1)



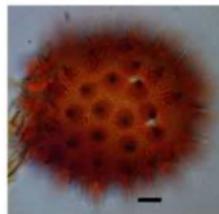
トウガン属
(127-17外: 試料No1)



ペニバナ属型
(127-17外: 試料No1)



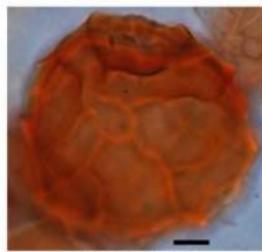
ワタ属
(132外1区: 凸地点試料No1)



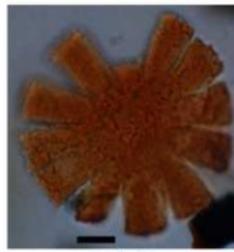
ワタ属
(132外3区: No2地点試料No2)



ソバ属
(132外1区: 凸地点No1)



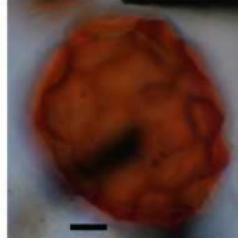
アズキ属-ササゲ属
(132外1区: 凸地点試料No1)



コマ属
(132外3区: No2地点試料No1)

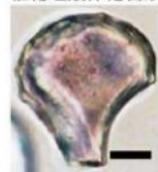


カラスウリ属
(132外1区: 凸地点試料No2)

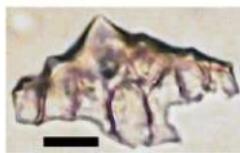


アズキ属-ササゲ属
(132外3区: No2地点試料No1)

植物珪酸体化石顕微鏡写真



イネ
(132外3区: No2地点試料No2)



イネの粉殻 (穎の表皮細胞)
(132外3区: No1地点試料No1)

スケールはすべて 0.01 mm

分析図版2

木質遺物顕微鏡写真（横断面）



マツ属(複維管束亜属)試料NoSP05

南田町132外：大橋家与力屋敷第3遺構面B屋敷出土柱材



スギ試料NoSP03



ハコヤナギ属:試料NoSP20



クマシデ属:試料NoSP18



クリ:試料NoSP01



スダジイ:試料NoSP06



クスノキ属:試料NoSP15



サクラ属:試料NoSP19



サクラ属類似:試料NoSP21

第7章 総括

当調査の詳細については、第3章で武家屋敷調査区（直臣屋敷）、第4章で大橋家与力屋敷調査区（陪臣屋敷）、第5章で立会調査として、3つに区分して述べてきた。いずれの発掘調査においても、松江城下町の変遷を示す上で重要な調査所見がもたらされた。

これらの調査成果を踏まえ、本章では第3～5章で述べた主要な遺構をキーワードとして掲げた上で遺構の変遷を概観し、遺物組成を提示したい。さらに、城下町造成以前の旧地表と造成後の地形、大橋家与力屋敷における建物基礎の地下構造について考察を加えて総括したい。

第1節 遺構の変遷

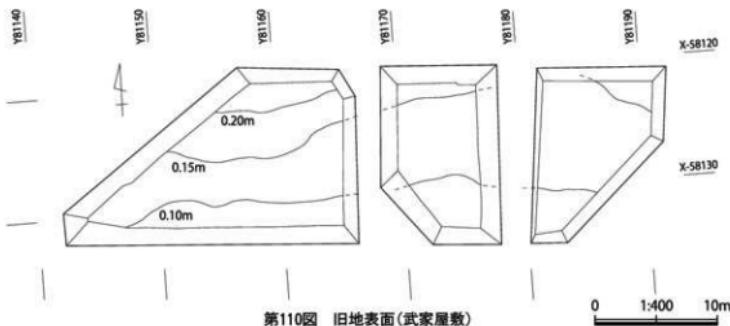
第1項 武家屋敷の変遷

ここでは武家屋敷調査区を、堀尾氏が松江に入部する以前の段階（旧地表面）、堀尾～京極期の段階（第1遺構面）、松平期～近代の段階（第2遺構面）の時期に区分して遺構の変遷を見ていく。

1. 旧地表面（第110図）

松江城下町造成以前の旧地表は、茶褐色有機質土（第18図I b層）上面で調査区内全体に広がっている。地形測量を実施したところ、武家屋敷調査区から約50m東に位置する大橋家与力屋敷では西高東低を示すのに対し、当地では北から南へ向かってやや傾斜していることが明らかとなった。

城下町造成以前の南田町周辺は低湿地であったと考えられており、一般的に「泥炭層」と言われる沼沢地や湖沼などの湿原植物が繁茂する湿地に集積した分解不完全な植物遺体の堆積物が見られる。



2. 第1遺構面（第111図）

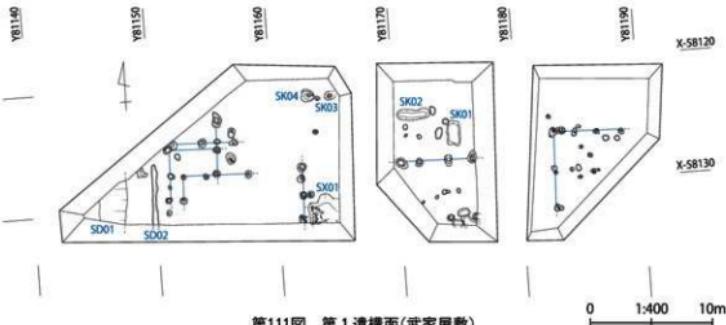
この遺構面の基盤層であるI b層とIII層の混和土（第18図A層）は、城下町造成以前の旧地表面上に盛られた最初の造成土であり、これを基盤層とする遺構面を第1遺構面とした。

時期は、17世紀代初頭に堀尾氏が松江城築城に着手して城下町建設をおこなった段階を想定している。京極期も引き続きこの遺構面を利用した可能性が考えられるが、その時期に該当する遺構・遺物を抽出することは困難であった⁽⁴⁰⁾。

遺構は、素掘溝SD01・02、土坑SK01～04、礫敷SX01を検出した。当地は堀尾期絵図（第10図）に見る「種田弥太夫（150石）」の屋敷地に比定され、数多く検出した柱穴は等距離で柱の並びが通るものもあるが、建物跡なのか塀や柵なのか判然としない。

屋敷地は、鉤型路に隣接する場所に位置することから、当地に屋敷を構える意義は戦略上東側からの攻撃に対する防衛施設を兼ね備えた屋敷地であった可能性が想定されるものの、物見櫓などの遺構は検出しておらず、検証には至っていない。

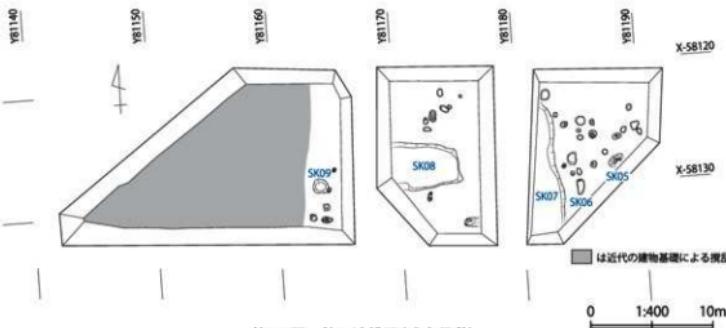
建物の配置は、通りに面した西側が表口となる。調査では建物全体の検出に至っておらず、表口から入って左側の屋敷地北側（側面部分）を調査したこととなり、建物の主体部は調査区の南側に存在していたと思われる。また、南北方向の素掘溝SD01の検出により、絵図に記載される屋敷地と道路の間には大溝があり、大溝掘削をおこなうと同時に屋敷地造成を進めていたことが明らかとなった⁽¹¹⁾。



第111図 第1遺構面(武家屋敷)

3. 第2遺構面(第112図)

第2遺構面は1638年からの松平期を想定しているが、遺物の示す年代は上限が17世紀前半、下限が19世紀後半とかなりの時期幅をもつ。遺構は、柱穴や廃棄土坑SK05～09を検出したが、松平期における機能・廃絶時期は明確ではない。屋敷地縁辺部に廃棄土坑が存在するという点は、これまでの松江城下町遺跡発掘調査成果と整合する。



第112図 第2遺構面(武家屋敷)

第2項 大橋家与力屋敷の変遷

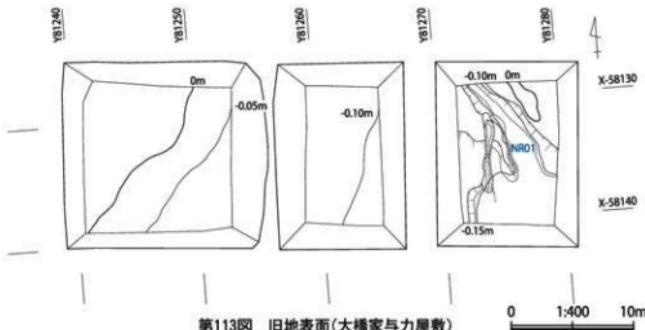
ここでは大橋家与力屋敷調査区を、堀尾氏が松江に入部する以前の段階（旧地表面）、堀尾～京極期の段階（第1～2遺構面）、松平期前半～後半の段階（第3～5遺構面）、松平期後半～近代（第6遺構面）の段階の時期に区分して遺構の変遷を見ていく。

各遺構面の時期区分の詳細については、後述する一覧表（表8）に設定し、調査成果を基に当てる想定パターンを提示してみたい。

1. 旧地表面（第113図）

松江城下町造成以前の旧地表面である。今回の調査では、旧表土として堆積する土層が4層に細分可能となった。旧地表は茶褐色有機質土（第44図Ib層）上面で、この地表面の一部では標高-0.10m付近に苔の繁茂が認められた。地形測量を実施したところ、当地では西から東に向かってやや傾斜していることが明らかとなった。

特筆すべき成果として、ラミナ層直下に堆積する暗褐色土（第45図第4層）から15世紀代後半を示す中国白磁（46-1）の出土が挙げられる。これまで旧地表面以下での出土遺物は皆無であったため、この中国白磁の出土によって、当地周辺に堆積するラミナ層は15世紀代後半を過らないことが指摘できるようになった⁽⁴⁾。



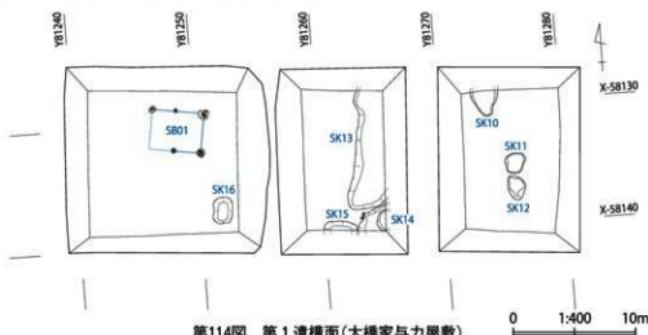
2. 第1遺構面（第114図）

この遺構面の基盤層であるIb層とⅢ層の混和土（第44図A層）は城下町造成以前の旧地表面上に盛られた最初の造成土であり、これを基盤層とする遺構面を第1遺構面とした。時期は、17世紀代初頭に堀尾氏が松江城築城に着手して城下町建設をおこなった段階を想定している。

現存する松江城下町絵図には、堀尾氏が統治を開始して間もない時期を示す堀尾期絵図（第10図）が残されている。この絵図には、武家屋敷として利用されている場所に屋敷と屋敷を区画するための明瞭な界線が引かれ、区割りされた屋敷地には藩士の名前が記載されているが、当地については藩士の名前はおろか界線すら引かれていない。ただ、道路に囲まれた区画の中にあり、城下町として計画的に整備された場所の中であることは間違いない。

遺構は、掘立柱建物跡SB01、土坑SK10～16があり、掘立柱は建物として並ぶものではなく、判然

としない。絵図から結論を導き出すには躊躇もあるが、絵図には記載されない城下町初期造成に関連した飯場の遺構である可能性を想定しておきたい。



第114図 第1遺構面(大橋家与力屋敷)

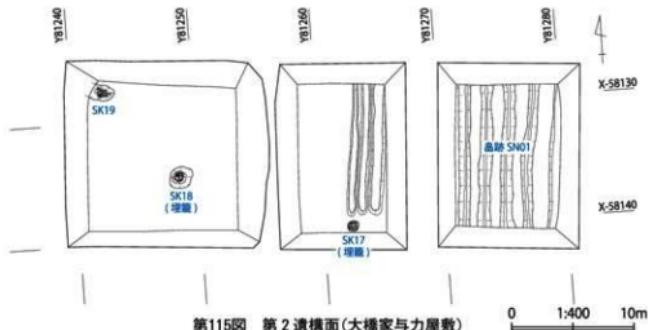
3. 第2遺構面(第115図)

調査区中央部～東側に広がる状況で畠跡SN01を検出したことから、畠地として利用された遺構面を第2遺構面とした。土壤分析(第6章)からソバ・アズキ・ゴマ・ワタを栽培していたとの結果が得られた。時期は、堀尾期(17世紀代初頭以降)～京極期(1634～37年)を想定しているが、「SN01耕作土中出土遺物」としたものは第1遺構面出土遺物と接合関係にある個体が含まれている。そのため、第2遺構面は以下のA～Cの可能性を考えておく必要がある。

- A. 第1遺構面を開墾して新たに畠地(第2遺構面)として形成した。この場合、第1遺構面で検出した遺構は搅乱を受け、深い遺構の底部を検出したことになる。遺物は第1遺構面の遺物が搅拌されたものとなり、第2遺構面でもほぼ同じ遺物組成を示す。耕作によって搅拌されていることを積極的に捉えるのであれば、耕作土中から出土した遺物に細片が多いという事実とも符合する。
- B. 第1遺構面を開墾して新たに畠地として形成した。この場合、Aと同じく第1遺構面で検出した遺構は搅乱を受けたものとなる。遺物は陶磁器や瓦があり、瓦に被熱痕跡をもつことから火事場整理で当地に廃棄した。その後の耕作により遺物が搅拌され、畠地として利用された。
- C. 第2遺構面を新たに畠地として形成するため、遺物を含む土壤を搬入した。つまり出土遺物は当地のものではない。瓦に被熱痕跡をもつことから、陶磁器類を含めて火事場整理で当地に廃棄した。遺物組成は第1遺構面では胎土目のみの組成となるが、第2遺構面では古い段階の砂目のものが入る。遺物には時期差があり、遺物の入った土壤を搬入していたことが想定される。この場合、耕作土壤の供給源をどこに求めるかという点が問題となる。土壤分析では調査地周辺の地下に広く分布する旧地表面土層(Ib層)を母材として耕作土に利用したとされる。これを根拠とするなら、当地に近接する地点を土壤の供給源とし、Ib層とA層が搅拌された土壤をSN01に搬入した可能性が高くなる。また、遺物はA層中に混入していたものと捉えられる。

このように、第1遺構面を開墾した場合(A・B)と土壤を搬入した場合(C)とて見解が変わってしまう結果となる。第1遺構面出土遺物と接合関係にある個体が含まれていることを根拠とすると、

第1道構面を開墾した場合（A・B）の可能性が高くなるが、厳密に畠地の機能時期を絞り込むことができない。「堀尾期に開墾して畠地とした」「京極期に開墾して畠地とした」「堀尾期に開墾して京極期まで畠地として利用した」ということが想定されることから、第2道構面は堀尾～京極期の間に機能していた道構面として幅をもって考えておきたい。

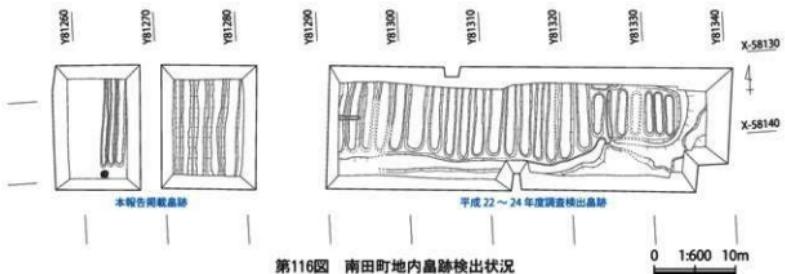


第115図 第2道構面(大橋家与力屋敷)

現在までに検出した南田町周辺の畠跡（第116図）

第2道構面とした畠跡は、平成22～26年度にかけて調査を実施した南田町において広範囲にわたって確認されており、検出標高から同一道構と考えられることから、現在までに検出した畠跡について紹介しておきたい。畠跡の畝はこれまでに31条検出し、畝頂部の標高は西側で0.30m、東側で-0.10mを測る。東西70.15m×南北11.50m以上の807m²の規模で畠の畝・畝間溝を検出している。

畠の耕作土は、上位から淡茶褐色有機質細礫粘土、黄茶色礫質粗砂、灰色有機質細砂の3層で構成される（第54図）。過去の調査成果を含めた土壤分析からソバ、ソラマメ、ササゲ、ゴマ、アズキ、ワタなどを栽培していたことが明らかとなっている。



第116図 南田町地内畠跡検出状況

4. 第3道構面（第117図）

畠を埋め立て造成された道構面を第3道構面とした。ここでは造成手法として「島状整地」を採用していることが明らかとなった（第67・68図）。時期は、松江藩家老大橋茂右衛門が当地に屋敷を拝領されるのは「松江藩列土録」から松平期初頭と明確な点を踏まえ、当地が最初に与力屋敷として利用されるのは1638年に松氏が統治を開始した直前あるいは直後の段階を想定している。

遺構は、鍛冶炉SL01、掘立柱建物跡SB02～05、屋敷境SD03・04、柵SA01がある。

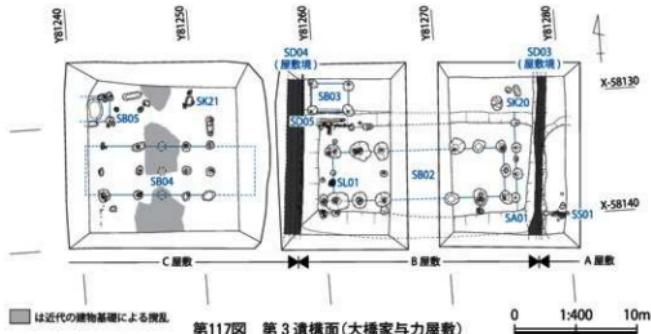
B屋敷で検出した鍛冶炉SL01（第64図）は、掘立柱建物SB02・03を構築する際に使用する目的で、現地で釘などの鉄製品を制作するために設置されたものと捉えられ、機能時期は島状整地以後、建物構築前の短期間に該当することが考えられる。

屋敷地の規模は、調査成果から東西21m×南北40mが推定され、元文～延享年間絵図（第13図）からすると南北長方形に展開する屋敷地の北側半分程度を調査したこととなる。ひとつの与力屋敷地として捉えた場合、さらに南側へ屋敷地が展開しているものと思われる。

屋敷の配置は、通りに面した北側が表口となる。B屋敷を例に挙げると、調査区中央部に7間×2間の規模でSB02があり、その北西側に1間×1間のSB03を付設している点が特徴的である。

屋敷境は、SD03・04がある。いずれも素掘溝で溝の東側肩部に木杭を顕著に打ち込み、杭列を構築して溝に排水ができないような構造となっている。反対側の西側肩部に杭列は認められない。このことは屋敷境の管理・所有を示すことが考えられ、SD03はB屋敷が、SD04はC屋敷が管理していたという見解に至っている。屋敷境は片方の屋敷が管理・所有するという点で興味深い事例となった。

屋敷地の北側間口は、2条の屋敷境SD03～04間から東西21m（約10間半）と復元できる。平成22～24年度調査において検出した当調査区東側に連続する与力屋敷2軒分の屋敷地間口と比較すると、屋敷地はいずれも東西21mの等間隔に配置され、与力屋敷の間口は均等に割り当てられていたことが看取できる。



第117図 第3造構面(大橋家与力屋敷)

松江城下町遺跡における島状整地について

「島状整地」とは、まず造成初期段階に屋敷地の建物を構築する部分にマウンド状の高まり（島状盛土）をもたせ、屋敷の周囲は低く造成する。その後の段階で、高まり周囲の低位部に土砂を投入することにより屋敷地の平坦化をおこなう造成手法である。

この造成手法は徳島城下町で提示されたものであり、16世紀代後半以降の武家屋敷において通例的に見られる造成手法として紹介されている。また、徳島城下町では屋敷の表と裏で整地に伴う土砂の使い分けがなされ、島状整地以後は連続もしくは非連続に周囲の整地が進むとされている⁽⁴⁵⁾。

松江城下町では、これまでに確認している島状整地の事例として堀尾期の初期造成段階に比定する

ものが3例、松平期の屋敷地造成段階に比定するものが1例ある⁽⁴⁰⁾。当地で確認した島状整地は与力屋敷が構築される松平期初頭に該当することから、松江城下町では時期を問わない造成手法であった可能性が考えられる。堀尾期の島状整地における採土方法は、屋敷境の縁辺部に大きな土取穴を掘削して土壌を採取していることが分かっているが、松平期の採土方法はどのようにおこなっていたのかという点が今後の検討課題として残る。

5. 第4遺構面（第118図）

第4遺構面においても大橋茂右衛門の与力屋敷として利用されていたことに変わりはない。大きな変化として、掘立柱建物から礎石建物へと建物基礎構造が移り変わることや、素掘溝の屋敷境から石垣の屋敷境に造り替わることが挙げられる。

時期は、第3遺構面の掘立柱建物が廃絶した後に礎石建物が構築された遺構面であり、出土遺物の年代観を考慮して松平期前半～中頃（1650～1700年代）を想定している。

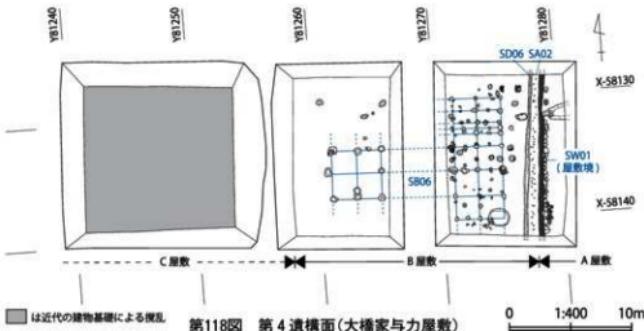
遺構は、礎石建物跡SB06、屋敷境石垣SW01、杭列SA02、溝SD06がある。

SB06は5間以上×7間以上の規模で、南北方向を主軸としている。屋敷の配置は、第3遺構面と同様に通りに面した北側が表口となる。B屋敷を例に挙げると、礎石建物は屋敷地内のやや東寄りに位置する。建物は全体を検出しておらず、調査区外の南側へ広がることが考えられる。

屋敷境の位置は、第3遺構面で検出した素掘溝の屋敷境を踏襲しており、大幅な移動は見られない。A・B屋敷の屋敷境周辺の状況は、A屋敷では屋敷境石垣SW01があり、B屋敷では素掘溝SD06が境界となっている。SW01とSD06の間には、杭列SA02が存在している。SA02は遮蔽物である柵と考えられ、この時期の屋敷境は石垣・柵・溝が混在する状況を示す。

類例として高松城下町⁽⁴¹⁾では、17世紀代中頃～18世紀代前半には素掘溝・柱穴列・土塀が混在する時期があり、18世紀代後半以降には土塀・石組溝が普遍化し、同様な状況が幕末まで続くとされる。

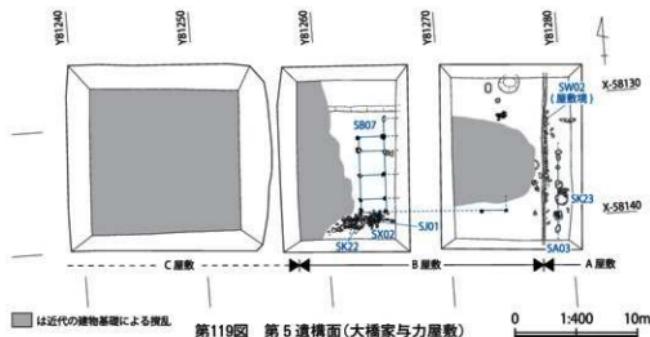
与力屋敷では、17世紀代前半は素掘溝の屋敷境であり、17世紀代中頃には石垣・柵・溝が混在する。18世紀代前半以降には石垣が普遍化し、幕末まで続くという変遷を辿る。屋敷境の形態が混在する時期があるという観点のみではあるが、高松城下町の事例と類似しているものと捉えている。



6. 第5遺構面(第119図)

第5遺構面としたのは、第4遺構面で検出した礎石建物跡SB06を建替えあるいは改築した時期で、松平期中頃～後半(1700年代以降)を想定している。当地は文政～嘉永年間絵図(第14図)に記載されているように、幕末に至るまで与力屋敷として利用されていた。この遺構面を形成する基盤層は黄褐色粘性土の山土造成土だが、上層からの擾乱を受けて遺構の遺存状況は散漫であった。

遺構は、礎石建物跡SB07、屋敷境石垣SW02、柵SA03、土坑SK22・23、埋甕SJ01である。SB07は擾乱のため一部未検出だが、5間以上×6間以上の規模で南北方向を主軸とする。第4遺構面の土層断面の一部では焼土や炭が認められることから、SB06が火災などの災害によって消失した後にSB07を構築したと考えられ、礎石の天端はSB06に比べて20～25cmほど高い位置で検出している。

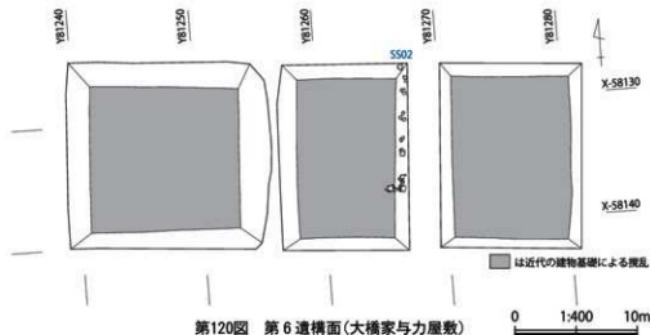


第119図 第5遺構面(大橋家与力屋敷)

7. 第6遺構面(第120図)

第6遺構面としたのは松平期に大橋家与力屋敷として利用されていた段階が終焉に向かい、明治維新後の近代へ入った段階(1800年代中頃以降)を想定している。

第6遺構面として掲載している遺構は、擾乱層を除去した段階で検出した遺構であり、石列SS02を検出したが、その他は一様に擾乱を受けていた。遺構面から出土した遺物は19世紀代中頃～近代のものが中心となり、幕末～近代にかけての遺構面と考えられる。



第120図 第6遺構面(大橋家与力屋敷)

8. 大橋家与力屋敷における遺構面の時期区分

ここでは各遺構面で想定される時期区分を一覧表（表8）にして、「検出遺構」「絵図」を基に大橋家与力屋敷調査区の各遺構面がどの時期に当たるのか考えてみたい。

城下町造成以前に位置づけられる旧地表面は、当地では自然状態のままの低湿地である。今回の調査では、旧地表面直下に堆積する土層から15世紀後半を示す中国白磁が出土したことによって、旧地表面はこれよりも新しい時代のものであることが分かった。

第1遺構面は旧地表面（低湿地）に盛土を施して造成された最初の遺構面であり、堀尾期絵図（第10図）から城下町として計画的に整備された区画の中であることは間違いない。しかし、絵図には屋敷地名義の記載は無く、屋敷地を区画する界線すら引かれていない場所である。このため当地で検出した掘立柱建物跡や土坑などの遺構は、城下町初期造成に関連した飯場の遺構と考えることができる。

第2遺構面は基本的に畠地として利用されていた時期である。京極期絵図（第11図）を参考にすると、堀尾期絵図には見られなかった屋敷地を区画する界線が引かれているが、屋敷地名義は記されていない。可能性として屋敷地造成前の土地利用計画の状況を描いている、あるいは造成以後の状況を描いていることが考えられる。

第3遺構面は畠を埋め立てて盛土造成された遺構面であり、続く第4～5遺構面の間に屋敷の形態を変えながら大橋家与力屋敷として利用される。元文～延享年間絵図（第13図）を参考にすると、道筋に面して短冊状に与力屋敷が建ち並んでいる状況を看取できる。

以上のことを踏まえ、表8に提示した各遺構面の時期区分を見ていきたい。第3遺構面以降に与力屋敷が展開し、松平期の間に存続していたことはほぼ確定的と考えられることから太線で区分した。

旧地表面～第2遺構面に至る当地での時期区分は、以下に示したA～Iのパターンが想定される。堀尾期絵図から絵図には記載されない飯場や畠地が展開していた可能性が考えられる。京極期絵図には屋敷地を区画する界線が引かれていることから、松平期造成以前の土地利用計画図の可能性が考えられ、さらに空閑地であることを積極的に評価するのであれば、飯場や畠地が展開していたとも捉えられる。このように旧地表面～第2遺構面の時期区分は、何を根拠とするかによって様々な想定ができる結果となる。表8に提示した想定パターンのうち、A・Bの可能性が最も高いものと考えるが、旧地表面から堀尾期の生活面が存在していた可能性を否定できず、厳密な結論が導き出せない⁽⁸⁾。

表8 大橋家与力屋敷遺構面の時期一覧表

設定根拠	旧地表面を中世、第1～2遺構面を堀尾・京極期とした場合			旧地表面を中世・堀尾期とした場合			旧地表面を堀尾期とした場合		
	A	B	C	D	E	F	G	H	I
旧地表面	中世	中世	中世	中世・堀尾	中世・堀尾	中世・堀尾	堀尾	堀尾	堀尾・京極
第1遺構面	堀尾	堀尾	堀尾・京極	堀尾	堀尾・京極	京極	堀尾	堀尾・京極	京極
第2遺構面	京極	堀尾・京極	京極	京極	京極	京極	京極	京極	京極
第3遺構面	松平	松平	松平	松平	松平	松平	松平	松平	松平
第4遺構面	松平	松平	松平	松平	松平	松平	松平	松平	松平
第5遺構面	松平	松平	松平	松平	松平	松平	松平	松平	松平
第6遺構面	松平・近代	松平・近代	松平・近代	松平・近代	松平・近代	松平・近代	松平・近代	松平・近代	松平・近代
可能性	高い←			→低い					

※堀尾期 17世紀初頭～1633年、京極期 1634～1637年、松平期 1638～1871年

第2節 遺物組成 一大橋家与力屋敷（B屋敷）の出土遺物—

松江城下町遺跡（16ブロック）の調査では多くの遺物が出土し、これらの遺物は概ね江戸時代17世紀初頭から19世紀後半までの時期を示す。このうち、層位的に細分して取り上げることのできた大橋家与力屋敷調査区（B屋敷）の遺物組成を提示したい⁽¹⁷⁾。

ここで提示した遺物組成表は、大橋家与力屋敷（B屋敷）における第1遺構面～第6遺構面の出土遺物を取り扱った（表9～16）。

データ化に際して、遺構面ごとに土師器皿・陶磁器を抽出し、遺物数は破片数を1点とカウントした。土師器皿は京都系・在地系に分類し、陶磁器は中国産・国産に区分してさらに产地・器種別に分類をおこなった。

陶磁器の変遷と該当する時期

本章第1節では遺構面ごとの様相を述べたが、ここでは各遺構面での陶磁器の使用の変化に着目して、九陶編年を基準とした大橋家与力屋敷の陶磁器の編年と松江藩主の時期区分（堀尾～松平期）との年代に該当するものか検討したい。

第1遺構面は、九陶I-2期（1594～1610年代）にあたる肥前陶器が主体で、瀬戸・美濃陶器や山口（萩）が入る。磁器は中国磁器のみである。遺構面の年代は17世紀初頭を想定し、堀尾期（1600年代初頭～1633年）に該当するものと考える。

第2遺構面は、九陶I-2期とII期にあたる肥前陶器が主体で、I-2期のものが若干多くの割合を占める。磁器は中国磁器のみである。遺構面の年代は17世紀代前半を想定し、堀尾～京極期（1600年代初頭～1637年）を想定している。

第3遺構面は、九陶II期にあたる肥前陶器が主体で、砂目皿が比較的多く見られる。磁器は中国磁器が数点ほどに減少し、この段階で国産の肥前磁器が出現する。肥前磁器は九陶II-2期（1630～1650年代）のものが中心となる。遺構面の年代は17世紀代前半～中頃を想定し、松平期初頭（1638～1650年）に該当するものと考える。

第4遺構面は、九陶II～III期にあたる肥前陶磁器が主体となる。肥前陶器は九陶II期の溝縁皿が目立つ。肥前磁器は九陶III期（1650～1690年代）ものが増加している。遺構面の年代は17世紀代中頃を想定し、松平期前半（1650～1700年）に該当するものと考える。

第5遺構面は、九陶IV期（1690～1780年代）とV期（1780～1860年代）にあたる肥前陶磁器が主体となるが、肥前陶器が減少し、代わりに在地系陶器が増加する。磁器はすべて国産磁器となるが、肥前磁器とともに瀬戸磁器が入ってくる。遺構面の年代は18世紀代前半～19世紀代中頃を想定し、松平期中頃～後半（1700年代以降）に該当するものと考える。

第6遺構面は、擾乱を受けているために混入品が多く、明治以降の遺物も含むことから、遺構面の年代は幕末～近代以降（1800年代中頃以降）を想定している。

以下、第1遺構面～第6遺構面の遺物組成について詳述する。

第1遺構面 [堀尾期：17世紀代初頭]

検出標高=0.10m

主な遺物=中国磁器、肥前陶器（胎土目）、瀬戸・美濃陶器

遺物組成

遺物組成は、九陶I~2期の肥前陶器が中心である。肥前陶器がほとんどを占める状況で、唐津や福岡（上野・高取）がある。その他に瀬戸・美濃陶器が入っており、灰釉折縁皿で見込みに印花をもつもの、灰釉内禿皿、志野の菊花皿が出土している。

土師器皿を含む出土遺物のうち、国産陶磁器は表9のとおり出土総数の72.7%を占めており、このうちの68.8%が肥前陶器となっている。出土した肥前陶器の器種は碗・皿類が多く、皿類ではなぶり口の口縁をもつものが目立つ。肥前陶器はいずれも胎土目のものである。

磁器は、国産磁器である肥前磁器の出土は無く、中国磁器が出土している。中国磁器は出土総数の6.5%を占め、景德鎮窯あるいは漳州窯産の青花碗である。中国青磁・白磁は出土していない。中国磁器の器種構成は、碗が100%を占める。

土師器皿は京都系のみで、出土総数の20.8%を占める。在地系は出土していない。

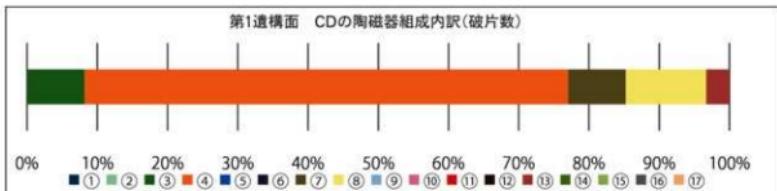
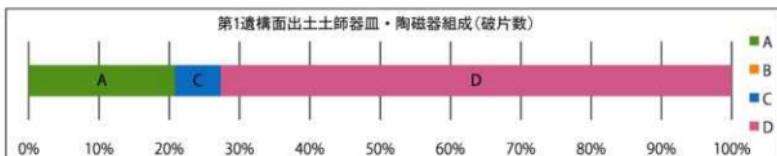
表9 第1遺構面出土陶磁器組成一覧表

名 称	破片数	割合%
A 土師器皿 京都系	16	20.8
B 土師器皿 在地系	0	0.0
C 中国産陶磁器	5	6.5
D 国産陶磁器	56	72.7
合 計	77	100.0

CDの内訳	破片数	割合%
① 中国青磁	0	0.0
② 中国白磁	0	0.0
③ 中国青花	5	8.2
④ 肥前系陶器	42	68.8
⑤ 肥前系磁器	0	0.0
⑥ 肥前系磁器(陶胎染付)	0	0.0
⑦ 福岡(上野・高取系)	5	8.2
⑧ 瀬戸・美濃陶器	7	11.5
⑨ 瀬戸磁器	0	0.0
⑩ 京・信系	0	0.0
⑪ 備前	0	0.0
⑫ 山口(須佐)	0	0.0
⑬ 山口(萩)	2	3.3
⑭ 在地系陶磁器	0	0.0
⑮ その他の国産陶磁器	0	0.0
⑯ 瓦質土器	0	0.0
⑰ 土器	0	0.0
合 計	61	100.0

組別	破片数	割合%
碗	12	21.4
皿	43	76.6
小坪	0	0.0
團餅	0	0.0
鉢・片口	1	1.8
火入	0	0.0
瓶	0	0.0
土瓶	0	0.0
壺・巻	0	0.0
その他の	0	0.0
合計	56	100.0

組別	破片数	割合%
碗	5	100.0
皿	0	0.0
小坪	0	0.0
團餅	0	0.0
鉢・片口	0	0.0
火入	0	0.0
瓶	0	0.0
土瓶	0	0.0
壺・巻	0	0.0
水滴	0	0.0
瓶	0	0.0
壺	0	0.0
その他の	0	0.0
合計	5	100.0



第2遺構面 [堀尾～京極期：17世紀代前半]

検出標高=0.20～0.30m

主な遺物=中国磁器、肥前陶器(胎土目中心で砂目も少量含む)、瀬戸・美濃陶器、備前、山口(萩)

遺物組成

遺物組成は、九陶I-2期とII期の肥前陶器が中心だが、I-2期が若干多くの割合を占める。肥前陶器が高い割合を占める状況は第1遺構面と変わらず、瀬戸・美濃陶器、備前、山口(萩)が入る。瀬戸・美濃陶器は灰釉折縁皿で印花をもつものや志野織部の向付などがある。

国産陶磁器は表10のとおり出土総数の78.3%を占めており、このうち80.3%が肥前陶器となっている。肥前陶器は碗・皿類が多く鉄絵の絵唐津が目立ち、古い段階の砂目皿を3点含む。

磁器は、第1遺構面に引き続き国産磁器である肥前磁器の出土は無く、中国磁器が出土している。中国磁器は出土総数の7.8%を占め、景德鎮窯あるいは漳州窯産のいずれも精製の青花碗・皿、白磁等である。龍泉窯青磁碗が1点出土しているが、伝世品の可能性がある。中國磁器の器種構成は、碗が59.3%、皿が40.7%を占める。

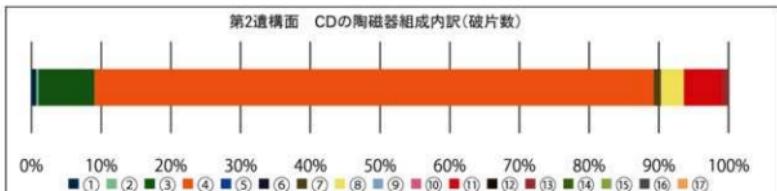
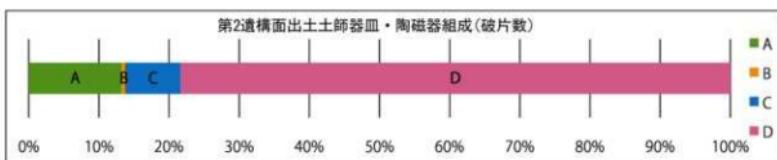
土師器皿は京都系の割合が圧倒的で、出土総数の13.3%を占め、在地系は少量ながら0.6%出土している。

表10 第2遺構面出土陶磁器組成一覧表

名 称	破片数	割合%
A 土師器皿 京都系	46	13.3
B 土師器皿 在地系	2	0.6
C 中国産陶磁器	27	7.8
D 国産陶磁器	272	78.3
合 計	347	100.0

CDの内訳	破片数	割合%
① 中国青磁	2	0.7
② 中国白磁	1	0.3
③ 中国青花	24	8.0
④ 肥前系陶器	240	80.3
⑤ 肥前系磁器	0	0.0
⑥ 肥前系磁器(陶胎染付)	0	0.0
⑦ 福岡(上野・高取系)	3	1.0
⑧ 瀬戸・美濃陶器	10	3.3
⑨ 瀬戸磁器	0	0.0
⑩ 京・信系	0	0.0
⑪ 備前	16	5.4
⑫ 山口(須佐)	0	0.0
⑬ 山口(萩)	3	1.0
⑭ 在地系陶磁器	0	0.0
⑮ その他国産陶磁器	0	0.0
⑯ 瓦質土器	0	0.0
⑰ 土器	0	0.0
合 計	372	100.0

器種	破片数	割合%
碗	50	18.4
皿	192	70.6
小杯	0	0.0
團扇	3	1.1
鉢・片口	17	6.3
火入	0	0.0
瓶	2	0.7
土瓶	0	0.0
香・塵	8	2.9
その他	0	0.0
合計	272	100.0



第3遺構面 [松平期初頭：17世紀代前半～中頃]

検出標高=0.50～0.70m

主な遺物=肥前陶器（砂目）、備前、山口（須佐）、肥前磁器（伊万里の出現期）

遺物組成

遺物組成は、九陶II期の肥前陶磁器が中心である。肥前陶器は砂目の溝縁皿が比較的多く見られ、肥前磁器が出始めの頃に比定されるものが主体となっている。

磁器は、中国磁器が数点ほどに減少し、この遺構面から国産磁器である肥前磁器が出現する。肥前磁器は九陶II-2期が中心で初期伊万里が多く、その他に青磁釉や鉄釉のものが見られる。この時期に1640年代を中心に生産されたイゲ縁皿が入ってくるのが特徴的である。

国産陶磁器は表11のとおり出土総数の57.2%を占めており、このうち肥前陶器が39.6%、肥前磁器が45.1%となり、肥前陶器と肥前磁器の占める割合は概ね半々となる。

土師器皿はこの遺構面から在地系が増加する。京都系は出土総数の3.4%、在地系は36.0%を占め、京都系と在地系の割合が逆転する。このことは、17世紀代中頃から後年にかけ、しだいに土師器皿の使用の主体が在地系へ切り替わることを示している。

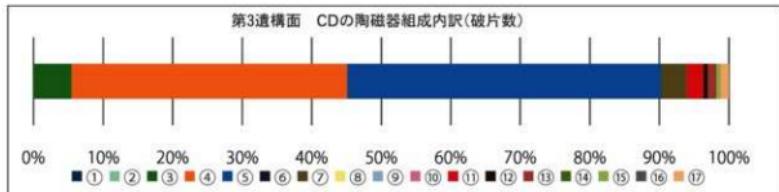
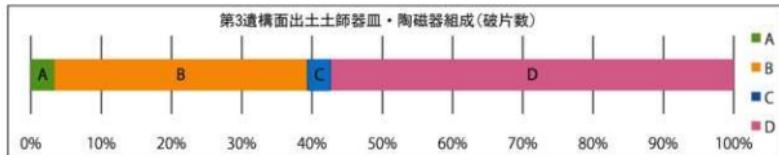
表11 第3遺構面出土陶磁器組成一覧表

名 称	破片数	割合%
A 土師器皿 京都系	9	3.4
B 土師器皿 在地系	96	36.0
C 中国産陶磁器	9	3.4
D 国産陶磁器	153	57.2
合 計	267	100.0

CDの内訳	破片数	割合%
① 中国青磁	0	0.0
② 中国白磁	0	0.0
③ 中国青花	9	5.5
④ 肥前系陶器	65	39.6
⑤ 肥前系磁器	74	45.1
⑥ 肥前系磁器(陶胎染付)	0	0.0
⑦ 福岡(上野・高取系)	6	3.7
⑧ 潟戸・美濃陶器	0	0.0
⑨ 潟戸磁器	0	0.0
⑩ 京・信系	0	0.0
⑪ 備前	4	2.5
⑫ 山口(須佐)	1	0.6
⑬ 山口(萩)	2	1.2
⑭ 在地系陶磁器	0	0.0
⑮ その他国産陶磁器	1	0.6
⑯ 瓦質土器	0	0.0
⑰ 土器	2	1.2
合 計	164	100.0

組合	破片数	割合%
施	14	17.7
田	41	51.9
小坪	0	0.0
鹿蹄	5	6.3
林・戸口	7	8.9
火入	0	0.0
重	0	0.0
土瓶	0	0.0
香・塵	12	15.2
その他	0	0.0
合計	79	100.0

組合	破片数	割合%
施	41	49.4
田	30	36.2
小坪	7	8.4
林	1	1.2
火入	0	0.0
鹿蹄	0	0.0
重	0	0.0
土瓶	0	0.0
香	2	2.4
その他	1	1.2
合計	83	100.0



第4遺構面 [松平期前半：17世紀代中頃～後半]

検出標高=0.80m

主な遺物=肥前陶器（砂目）、京信系陶器、山口（須佐）、肥前磁器

遺物組成

遺物組成は、九陶II～III期が中心となるが、第3遺構面の遺物組成とあまり大きな変化がない。そのため、時期差があまり生じていない可能性が考えられる。肥前陶器の皿は内野山窯産のものが多くII期の溝縁皿が目立つが、碗はIII期の玉子手の呉器手碗が主体をなす。皿は砂目積みのものが見られるが、1640年代以降の灰釉の後のグループのものが多い。その他の陶器では、京信系陶器や山口（須佐）の捕鉢などが少量入る。

磁器は、九陶II-2期の肥前磁器が減少してIII期が中心となるが、IV期のものも少量入る。碗は網目文をもつものが目立ち、皿は青磁釉や型打成形のものが比較的多く出土している。

国産陶磁器は表12のとおり出土総数の40.5%を占めており、このうち肥前陶器が31.9%、肥前磁器が51.0%となり、肥前陶器に比べて肥前磁器の占める割合が多くなる。

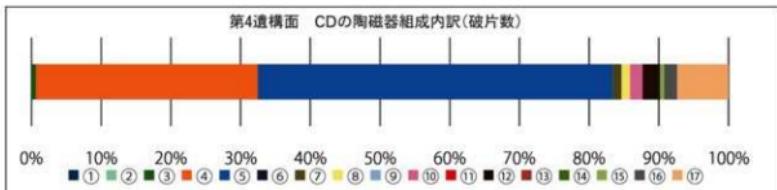
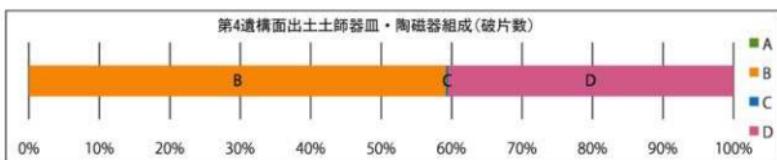
土師器皿は京都系が出土せず、在地系が出土総数の59.2%を占める。

表12 第4遺構面出土陶磁器組成一覧表

名 称	破片数	割合%
A 土師器皿 京都系	0	0.0
B 土師器皿 在地系	237	59.2
C 中国産陶磁器	1	0.3
D 国産陶磁器	162	40.5
合 計	400	100.0

CDの内訳	破片数	割合%
① 中国青磁	0	0.0
② 中国白磁	0	0.0
③ 中国青花	1	0.6
④ 肥前系陶器	52	31.9
⑤ 肥前系磁器	83	51.0
⑥ 肥前系磁器(陶胎染付)	0	0.0
⑦ 福岡(上野・高取系)	2	1.2
⑧ 濑戸・美濃陶器	2	1.2
⑨ 濑戸磁器	0	0.0
⑩ 京・信系	3	1.8
⑪ 備前	0	0.0
⑫ 山口(須佐)	4	2.5
⑬ 山口(萩)	0	0.0
⑭ 在地系陶磁器	0	0.0
⑮ その他国産陶磁器	1	0.6
⑯ 瓦質土器	3	1.8
⑰ 土器	12	7.4
合 計	163	100.0

組成	破片数	割合%
皿	21	25.6
皿	45	53.6
小坪	6	7.1
捕口	0	0.0
縁	0	0.0
火入	1	1.2
舟押	1	1.2
仏龕器	0	0.0
水滴	3	3.6
瓶	0	0.0
壺	2	2.4
その他	5	6.0
合計	84	100.0



第5遺構面 [松平期中頃～後半：18世紀代]

検出標高=1.10m

主な遺物=在地系陶器、京信系陶器、山口（萩・須佐）、肥前磁器（陶胎染付を含む）、瀬戸磁器
遺物組成

遺物組成は、九陶IV～V期の陶磁器が中心となる。陶器は、肥前陶器が減少し、代わりに在地系陶器、京信系陶器、山口（萩・須佐）が増加する段階となる。

磁器は、中国磁器の出土が無くなり、すべて国産磁器で占められるようになる。肥前磁器は九陶IV～V期に見られる碗・皿類が多く、IV期とV期の占める割合はIV期が59.9%、V期が40.1%である。このうち外青磁・筒形碗などは少ないが、陶胎染付碗が認められる。その他の磁器では、この遺構面から瀬戸磁器が少量入る。

國產陶磁器は表13のとおり出土総数の78.2%を占めており、このうち肥前陶器が6.5%、肥前磁器が41.4%となり、肥前陶器が減少し、肥前磁器が圧倒的に多くなる。在地系陶磁器は20.8%を占め、18世紀代後半の布志名焼が入る。

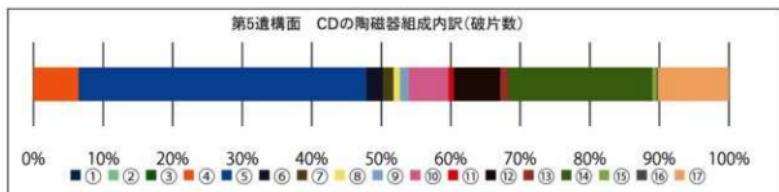
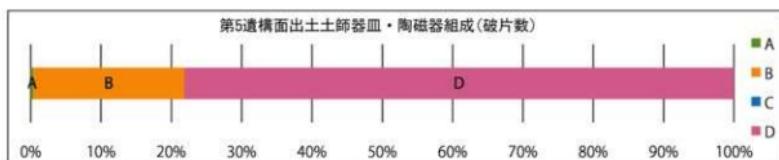
土師器皿は、京都系が出土総数の0.4%、在地系が21.4%を占める。在地系に使用の主体がほぼ移行する。

表13 第5遺構面出土陶磁器組成一覧表

名 称	破片数	割合%
A 土師器皿 京都系	3	0.4
B 土師器皿 在地系	177	21.4
C 中国産陶磁器	0	0.0
D 国産陶磁器	645	78.2
合 計	825	100.0

CDの内訳	破片数	割合%
① 中国青磁	0	0.0
② 中国白磁	0	0.0
③ 中国青花	0	0.0
④ 肥前系陶器	42	6.5
⑤ 肥前系磁器	267	41.4
⑥ 肥前系磁器(陶胎染付)	15	2.3
⑦ 福岡(上野・高取系)	10	1.6
⑧ 瀬戸・美濃陶器	6	0.9
⑨ 瀬戸磁器	8	1.2
⑩ 京・信系	37	5.7
⑪ 備前	5	0.8
⑫ 山口(須佐)	43	6.7
⑬ 山口(萩)	7	1.1
⑭ 在地系陶磁器	134	20.8
⑮ その他国産陶磁器	4	0.6
⑯ 瓦質土器	1	0.2
⑰ 土器	66	10.2
合 計	645	100.0

組合	破片数	割合%
織	172	59.3
皿	68	23.5
小壺	17	5.9
鉢	7	2.4
火入	3	1.0
舟形	3	1.0
仏龕器	3	1.0
水滴	3	1.0
瓶	0	0.0
壺	2	0.7
その他	6	2.1
合計	290	100.0



第6遺構面 [松平期後半(幕末)～近代：19世紀代中頃以降]

検出標高=1.30m

主な遺物=在地系陶器、肥前磁器(広東碗・端反碗を含む)

遺物組成

遺物組成は、在地系陶器と九陶V期の肥前磁器を中心となる。陶器は、肥前陶器が出土せず、在地系陶器で占められる。その他の陶器では、京信系陶器や山口(須佐)が入る。器種構成は碗・皿類のほか、擂鉢・鉢類、土瓶、壺・甕類などでバリエーションが増加する。

磁器は、すべて国産磁器で占められる。肥前磁器は九陶IV期のものも含むが、九陶V期に見られる碗・皿類が多く、IV期とV期の占める割合はIV期が25.5%、V期が74.5%である。この遺構面から広東碗・端反碗などが入ってくる。その他の磁器では、瀬戸磁器や九谷が少量入る。

國產陶磁器は表14のとおり出土総数の80.2%を占めており、このうち肥前陶器が0%、肥前磁器が46.8%となり、肥前陶器の出土が無くなり、肥前磁器で占められるようになる。在地系陶磁器は37.6%を占め、肥前陶器に取って変わり、布志名焼の碗・皿・鉢類が増加する。

土師器皿は、京都系が出土せず、在地系が出土総数の19.8%を占める。

表14 第6遺構面出土陶磁器組成一覧表

名 称	破片数	割合%
A 土師器皿 京都系	0	0.0
B 土師器皿 在地系	84	19.8
C 中国産陶磁器	0	0.0
D 国産陶磁器	340	80.2
合 計	424	100.0

CDの内訳	破片数	割合%
① 中国青磁	0	0.0
② 中国白磁	0	0.0
③ 中国青花	0	0.0
④ 肥前系陶器	0	0.0
⑤ 肥前系磁器	159	46.8
⑥ 肥前系磁器(陶胎染付)	0	0.0
⑦ 福岡(上野・高取系)	0	0.0
⑧ 瀬戸・美濃陶器	0	0.0
⑨ 瀬戸磁器	4	1.2
⑩ 京・信系	16	4.7
⑪ 備前	0	0.0
⑫ 山口(須佐)	14	4.1
⑬ 山口(萩)	0	0.0
⑭ 在地系陶磁器	128	37.6
⑮ その他国産陶磁器	0	0.0
⑯ 瓦質土器	0	0.0
⑰ 土器	19	5.6
合 計	340	100.0

組合	破片数	割合%
碗	111	66.1
皿	36	22.1
小坪	2	1.2
擂鉢	1	0.6
鉢	0	0.0
火入	4	2.5
舟形	0	0.0
仏龕	0	0.0
水滴	0	0.0
瓶	0	0.0
壺	3	1.8
甕	6	3.7
合計	163	100.0

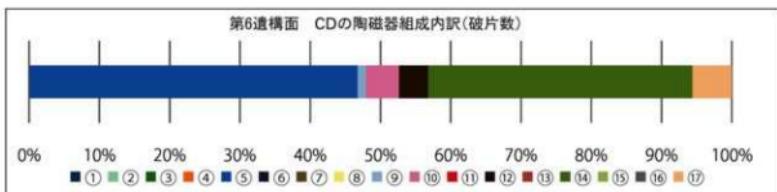
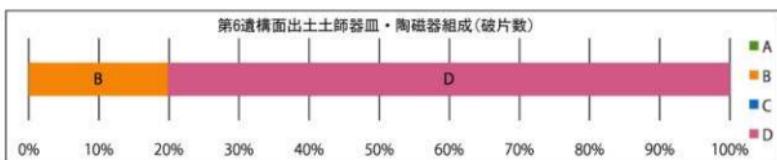


表15 大橋家与力屋敷(B屋敷)出土 土師器皿・陶磁器組成一覧(破片数／%)

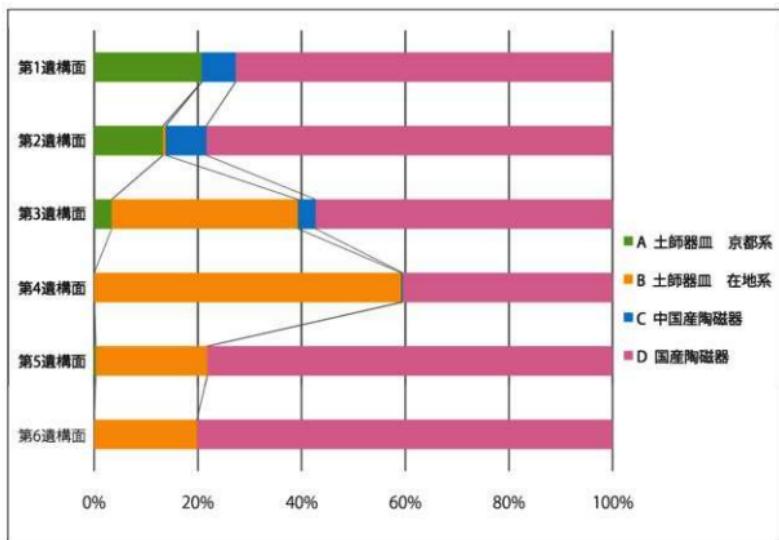
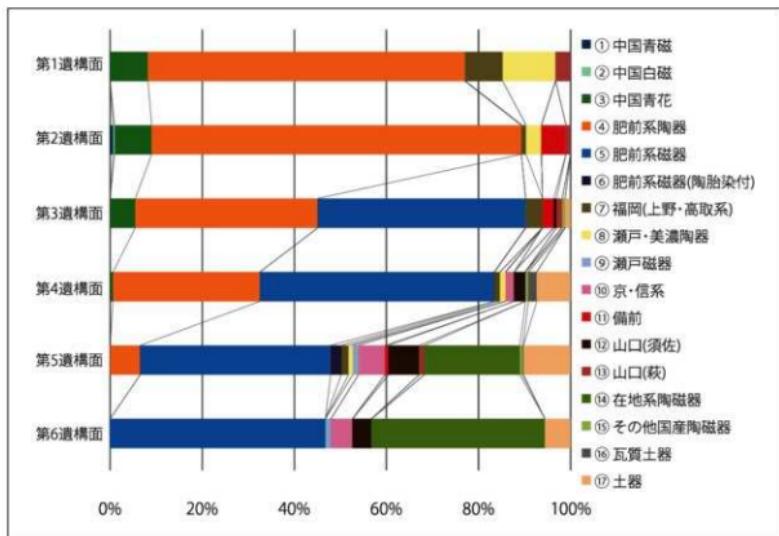


表16 大橋家与力屋敷(B屋敷)出土 陶磁器产地別組成



肥前磁器に見る遺物組成 一大橋家与力屋敷：B屋敷の遺物組成一

ここでは大橋家与力屋敷（B屋敷）の遺物組成のうち、出土量が多かった肥前磁器の細分を試みる。大橋家与力屋敷（B屋敷）における松平期初頭（1638年）以降から出現する肥前磁器について、九陶編年を基に各遺構面の特徴と傾向を示す。

遺構面別肥前磁器の遺物組成（表17）

旧地表面～第2遺構面

貿易陶磁である中国磁器（景德鎮・漳州窯産）で占められ、国産の肥前磁器は出土していない。

第3遺構面

肥前磁器の出現期。九陶II-1期が2点入るが、九陶II-2期の占める割合が高い。この遺構面から中国磁器が減少し、肥前磁器が主体となる組成に移り変わっていく段階となる。

第4遺構面

九陶III期の占める割合が高い。九陶II-1期が見られなくなり、九陶IV期が出現する。

第5遺構面

九陶IV期の占める割合が高い。肥前陶器と肥前磁器の出土点数が逆転する。第4遺構面と第6遺構面の遺物組成の特徴から18世紀代の遺構面を想定しているが、年代指標となる外青磁や筒形碗が少ない。陶胎染付碗を含むが、広東碗は含まない。

第6遺構面

九陶V期の占める割合が高い。第5遺構面では出土していない広東碗や端反碗が出現する。1820～60年代の遺物が中心となり、幕末～近代にかけての遺構面と考えられる。

表17 大橋家与力屋敷（B屋敷）出土肥前磁器組成表

	九陶編年	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120	130	140	150
第3遺構面	II-1	2															
	II-2																44
	III																12
74点	IV																0
	V																0
	時期不明																16
	肥前以外の磁器																0
第4遺構面	II-1																0
	II-2																9
86点	III																54
	IV																14
	V																0
	時期不明																9
	肥前以外の磁器																0
第5遺構面	II-1																0
	II-2																2
283点	III																15
	IV																142
	V																78
	時期不明																38
	肥前以外の磁器																8
第6遺構面	II-1																0
	II-2																0
163点	III																4
	IV																28
	V																82
	時期不明																45
	肥前以外の磁器																4

第3節 城下町造成以前の旧地形と造成後の地形

ここでは松江城下町において、城下町造成以前とその後の造成過程でどのような地形の変遷が見られるかについて触れてみたい（第121・122図・表18）。

城山北公園線を基に松江城下町を東西軸で見た場合、現在の地表面は第121図に示す松江城に近い西側の地点①（殿町）では標高2.00mであるのに対し、東側の地点⑧（南田町東端）では標高1.50mを測る。その比高差は東西約930m区間で0.50mとなる。また、旧地表であるI層（黒褐色～茶褐色有機質粘土）の検出標高は、地点①で標高0.80mであるのに対し、地点⑧では標高-0.73mを測る。その比高差は東西約930m区間で1.53mとなる。現地表と旧地表を比較すると標高が西から東に向かって徐々に低くなっていくのは同じであるが、地点①～⑧間における比高差には約1.00mもの開きがあり、現地表に比べ旧地表のほうが東に向かって低くなる落差が大きいということが分かった。

統いて、城下町における造成過程の中でどのように地形が形成されているのか、特にA層について見ていくたい。A層はI層の直上に盛られていることを根拠に城下町初期造成土として捉えられる土層で、その検出標高は殿町で高く、母衣町でやや低くなる。そして米子町から南田町にかけてはほぼ平坦だが、外堀である米子川を挟んだ米子町・南田町では母衣町より少し低い状態にある。これは旧地表の土層堆積に起因するものと考えられ、第122図に示すように旧地形に沿った造成がおこなわれている様子が看取できる。A層の層厚が殿町から母衣町の地点①～⑨では約30cm～45cm、米子町から南田町の地点⑩～⑯では約20～35cm、地点⑰～⑲では約55cm～75cmと、旧地形が急激に落ち込む地点⑮～⑯を除いてはI層の上に上級武家地と下級武家地で若干の差はあるが、同じような厚さでほぼ均一に盛土されていることが分かる。さらにI層とA層が地点⑧～⑨間で標高が急に下がっている点に注目すると、城下町造成以後の外堀石垣敷設による地盤沈下の可能性も考えられるが、人々このような地形の落ち込んでいる場所を利用して堀（米子川）を開削し、町割をおこなっていたと思われる。以上を踏まると城下町を形成するにあたって、まず旧地形を念頭におき、それに基づいた町づくりを視野に入れて城下町建設を進めていたことが考えられる。

次に屋敷地造成土として使用されるA層土壤の違いについて触れておく。A層は基本的にI+II+III層の混合土で構成されているが、城下町を通して一様な土層ではない。例えば地点①では松江城内堀の掘削土と推定される砂岩を初期造成土として使用し、地点①北側の松江歴史館にあたる重臣屋敷（北屋敷）では当地から北西に位置する宇賀山の土と推定される山土を初期造成土として使用するなど⁽¹⁰⁾、場所によって異なる造成土を使用している。さらに南田町のA層には細粒分・有機分が多いI層が含まれており、南田町周辺で見られるI層の特徴と類似していることから現地付近で採取された土が多くの割合で利用されていたと言える。このことから、城下町形成初期段階に掘削した堀や区画溝（大溝・屋敷境溝等）の残土をそのまま付近の屋敷地造成土として使用していたことが窺える。

B層についてはC層による擾乱を受けているため、調査地点で検出標高が統一的ではない。B層内で土層の細分は可能であるが、各調査地において堆積状況が異なることから、松江城下町共通の土層認識は図れていない。その理由として屋敷地ごとに造成を施している可能性が考えられ、地点によっ

では山土やシルト質土を使用するなど状況が様々である。また、地点②（南田町）では地盤の不等沈下を防ぐために造成土直下にシダを敷いている場所もある。よって城下町初期造成以後に施された嵩上げ造成の過程ではどのように地形が変化していくのか明確に提示できていない。ひとつの屋敷地という狭い範囲では把握できるものの、広く町単位或いは階層区画単位でどのように造成土が異なるのか、またそれによって明確な界線が引けるのかという点が課題として残る。

現段階では1層とA層で土層の共通認識がなされているのみだが、西高東低の旧地形を生かした城下町形成がおこなわれていた様子を窺い知ることができた。

今回は城山北公園線を基にした東西軸について地形の変遷を見てきたが、今後の調査・研究で城下町の南北軸、さらに城下西側の中原地区や南側の末次・白潟地区（町人地）等の旧地形が明らかになることにより、松江城下町全体を含めた町づくりの実態が見えてくるであろう。



第121図 松江圏都市計画図での比較地点(1:7500)

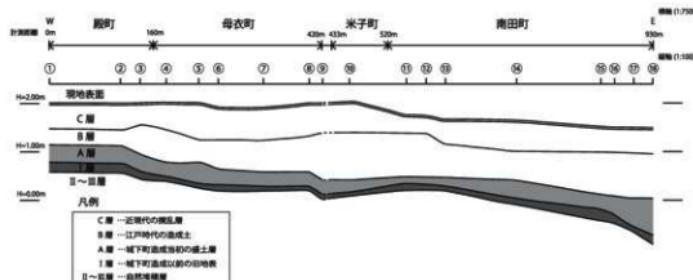
第122図 城下町造成以前の旧地表と造成後の地形(横軸1:7500・縦軸1:100)
[城山北公園線東西土層横断図]

表18 城下町造成以前の旧地表と造成後の地形標高一覧

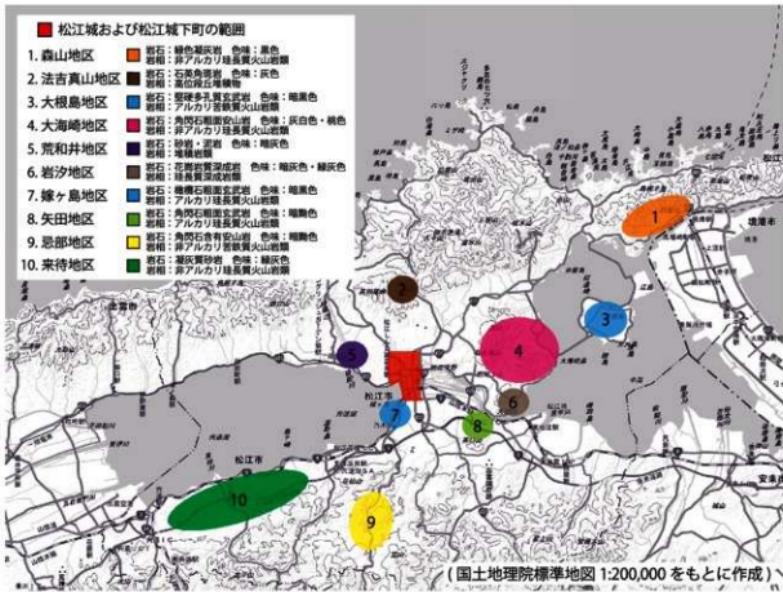
地点	①町181-13番	②町198-26	③町234番	④母衣町40番	⑤母衣町45番	⑥母衣町68	⑦母衣町88	⑧母衣町180-26	⑨母衣町180-29
現地表	2.005m	2.080m	2.052m	2.050m	2.043m	1.920m	1.920m	2.000m	2.000m
B層	1.473m	1.452m	1.564m	1.468m	1.233m	1.240m	1.235m	1.326m	1.410m
A層	1.150m	1.120m	0.920m	0.767m	0.792m	0.624m	0.586m	0.582m	0.425m
I層	0.798m	0.764m	0.584m	0.498m	0.320m	0.305m	0.288m	0.260m	0.120m
II～Ⅲ層	0.580m	0.586m	0.420m	0.405m	0.268m	0.184m	0.182m	0.210m	0.020m
基準からの距離	0m	110m	140m	180m	230m	260m	330m	400m	470m
引用文献	城下町造成地図 第170枚・第146枚	城下町造成地図 第170枚・第128枚	城下町造成地図 第170枚・第54枚						
地点	⑩母衣町56番	⑪母衣町80-10番	⑫母衣町82-25番	⑬母衣町86-11番	⑭母衣町127-17番	⑮母衣町132番外	⑯母衣町134-11番	⑰母衣町136-13番	⑲母衣町137-13番
現地表	2.070m	1.760m	1.740m	1.650m	1.652m	1.520m	1.520m	1.500m	1.500m
B層	1.412m	1.380m	1.386m	1.160m	1.024m	0.985m	0.990m	1.000m	0.970m
A層	0.424m	0.482m	0.486m	0.462m	0.403m	0.160m	0.100m	0.050m	0.040m
I層	0.191m	0.350m	0.324m	0.297m	0.041m	(-0.150m)	(-0.250m)	(-0.520m)	(-0.730m)
II～Ⅲ層	0.120m	0.202m	0.212m	0.200m	(-0.152m)	(-0.425m)	(-0.450m)	(-0.600m)	(-0.900m)
基準からの距離	470m	550m	560m	610m	720m	850m	870m	900m	930m
引用文献	城下町造成地図 第170枚・第54枚	城下町造成地図 第170枚・第54枚	城下町造成地図 第170枚・第54枚	城下町造成地図 第170枚・第54枚	城下町造成地図 第170枚・第54枚	城下町造成地図 第170枚・第54枚	城下町造成地図 第170枚・第54枚	城下町造成地図 第170枚・第54枚	城下町造成地図 第170枚・第54枚

第4節 大橋家与力屋敷における建物基礎の地下構造（石材・柱材）

第1項 石材 [松江市周辺の主な石材産地]

松江市域における主な石材産地は、第123図に示した1~10地区である。これら10地区には松江城石垣や城下町建設などに使用する石材の石切場が存在していたとされるが、信憑性の高い文献史料は存在していない⁽⁴⁰⁾。大海崎地区(4)と来待地区(10)の石切場だけはほぼ特定されているが⁽⁴⁰⁾、他の石切場は未だ確定されていないのが現状である。

石材の運搬には陸路と海路が想定されるが、松江市域の石材産地は中海・宍道湖沿岸に集中していることから、両側から往来可能な大橋川を経由する海路が石材運搬の主要ルートと思われる。



第123図 松江市周辺の主な石材産地分布図



松江市大海崎地区産出の大海崎石：安山岩
(大橋家与力屋敷 第4遺構面出土)



松江市大根島地区産出の島石：玄武岩
(大橋家与力屋敷 第5遺構面出土)

さて、ここでは大橋家与力屋敷における石材使用の状況を示し、今回の調査で出土した石材を基に造構面ごとの特徴をまとめておきたい。

第1造構面…掘立柱建物の柱穴の基礎石として大海崎石を使用。

第2造構面…建物は検出していないが、埋籠の底部に大海崎石を使用。

第3造構面…掘立柱建物の柱穴の基礎石として大海崎石・川原石・島石を使用。石材の出土比率（根石は含まない）を百分率で見ると、大海崎石・川原石が総数24個で86%、島石が総数4個で14%となっている。

第4造構面…礎石建物の基礎石として大海崎石・川原石・島石を使用。石材の出土比率（根石は含まない）を百分率で見ると、大海崎石・川原石が総数34個で83%、島石が総数7個で17%となっている。

第5造構面…建物や屋敷境石垣に島石や川原石の使用が顕著に見られ、大海崎石の使用は減少する。

第6造構面…島石の使用が増加し、この段階から来待石の使用が見られるようになる。来待石は建物基礎の土台や道路側溝の縁石などに使用される。

平成22～24年度調査で検出した、大橋家与力屋敷第3造構面の掘立柱建物跡では、島石しか使われていない。また、第4造構面の礎石建物跡では、石材の出土比率は大海崎石・川原石が42%、島石が58%となっており、島石の使用割合がやや優勢である。これらの状況から、第3・4造構面の段階では建物に使用する石材は屋敷地によって異なり、限定的ではないと考えられる。

大橋家与力屋敷では、17世紀代初頭の堀尾～京極期の段階には大海崎石の使用が主体となり、松平期以降から島石の使用が認められる。来待石の使用は19世紀代以降に増加するという状況である⁽¹¹⁾。

第2項 柱材 [大橋家与力屋敷第3造構面：B屋敷出土の柱材]

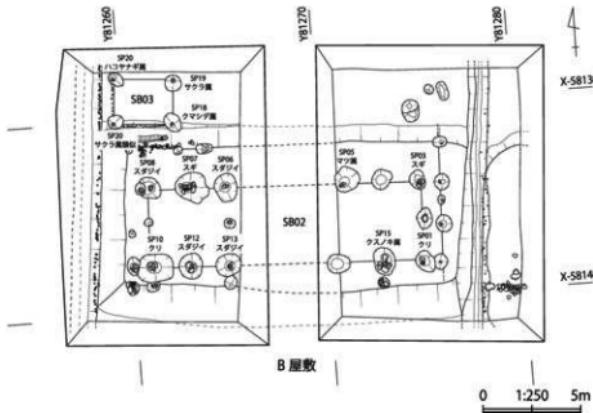
大橋家与力屋敷第3造構面（B屋敷）において検出した掘立柱建物跡SB02・03では、柱穴に遺存する14本の柱材について樹種同定を実施した（第124図）。その結果、柱材にはクリ・スギ・マツ・スダジイ・クスノキ・クマシデ・サクラ・ハコヤナギの8種を使用していることが明らかとなった（柱材の樹種・寸法・加工の詳細は表19に示し、資料とした柱材実測図を第125・126図に掲載）。

古代の建物では柱材としてクリの用例は多く、スダジイがクリの代用とされることもある。江戸時代以前にはスギも主要な用材となっているが、ここでは多様な樹種が柱材に用いられている。

柱材は直径11～20cm、長さ26～109cmを測り、14本中13本が丸柱で、角柱は1本である。いずれも下端部には手斧や鑿などの工具によるケズリやハツリ加工が見られる。下端部の加工は、基部外面を面取りして底面を平坦に加工するもの（柱根1・2・6・7・8・9）、底面を凸状に加工するもの（柱根3・4・10）、先端を円錐状に尖らすもの（柱根5・11・12・13・14）の3種類がある。

また、SP07（柱根5）とSP15（柱根10）は地下構造が特殊なもので、柱材に横木を施して補強し、さらに横木の下に根石を置くといった建物に対して耐荷重を考慮した構造となっている。

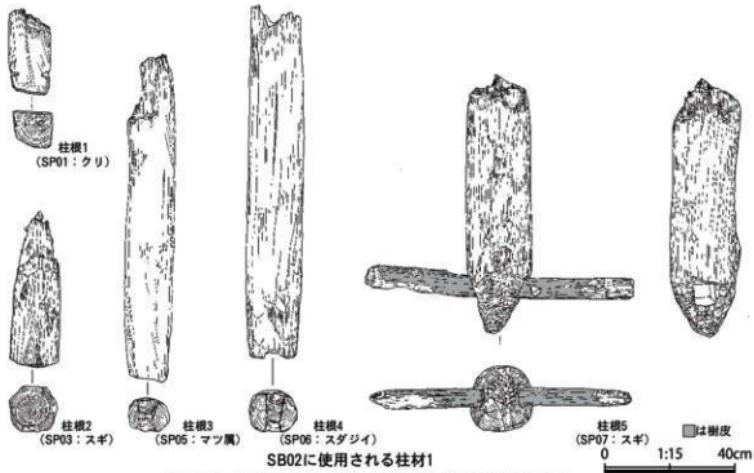
島根県下では、現在までに近世における建物柱材の樹種同定の報告例は少なく、今回提示した事例が通例的なものとなるか、あるいは特異なものとなるか、今後更なる資料の蓄積を待ちたい。



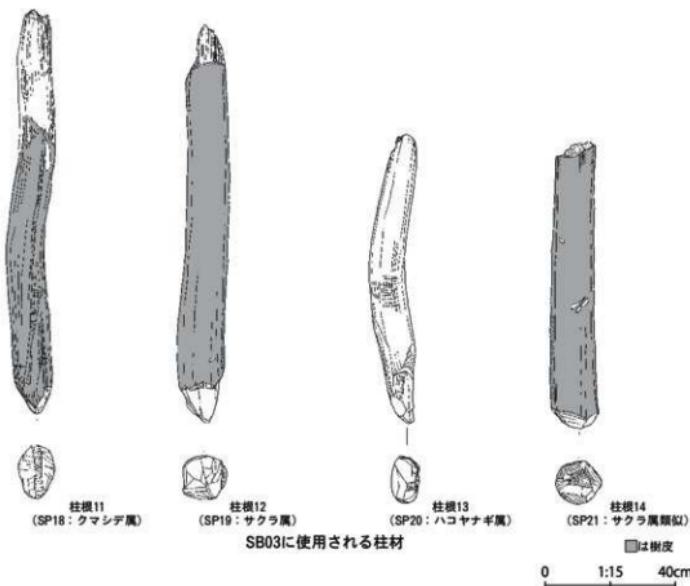
第124図 大橋家与力屋敷調査区第3遺構面：B屋敷 柱材分析地点

表19 柱材観察表

出土遺構	柱穴	断面名	樹種	寸法(cm)	備考(加工など)	図
SB02	SP01 柱根1 クリ	直さ26.0・底部径11.4・上部径12.7	丸柱、上部ワレ、下部に3箇所の加工あり(幅0.8cm×1.8cmの溝)	125-柱根1		
	SP03 柱根2 スギ	直さ26.0・底部径15.0・上部径13.7	丸柱、上部ワレ、底部ハリリ4箇所	126-柱根2		
	SP05 柱根3 マツ属	直さ10.9・底部径13.0・上部径14.2	丸柱、上部ワレ、底部ハリリ4箇所	126-柱根3		
	SP09 柱根4 マツジ	直さ26.0・底部径15.0・上部径14.0	丸柱、上部ワレ、底部ハリリ2箇所(底面を凸ぼ)	126-柱根4		
	SP10 柱根5 クリ	直さ26.0・底部径15.0・上部径14.0	丸柱、上部ワレ、底部ハリリ4箇所	126-柱根5		
	SP06 柱根6 スタジイ	直さ66.4・底部径17.7・上部径15.0	丸柱、上部ワレ、側面ハリリ4箇所、底部ハリリ4箇所	126-柱根6		
	SP10 柱根7 クリ	直さ54.5・底部径15.3・上部径14.5	丸柱、上部ワレ、側面ハリリ6箇所、底部ハリリ4箇所	126-柱根7		
	SP12 柱根8 スタジイ	直さ65.4・底部径18.8・上部径18.5	丸柱、上部ワレ、2方面から側面ハリリ、巻の切削痕跡あり	126-柱根8		
	SP13 柱根9 スタジイ	直さ76.0・底部径21.5・上部径20.2	丸柱、上部ワレ、底部ハリリ4箇所	126-柱根9		
SB03	SP15 柱根10 クヌノミケ	直さ10.2・底部径17.3・上部径16.4	丸柱、上部ワレ・上部加工あり、底部ハリリ2箇所(表面形凸ぼ)、樹皮残存	126-柱根10		
	SP18 柱根11 クマシテ属	直さ174.9・底部径10.9・上部径10.2	丸柱、上部ワレ、ハリリ2箇所、樹皮残存	126-柱根11		
	SP19 柱根12 サクランボ属	直さ122.3・底部径13.5・上部径13.4	丸柱、上部ワレ、ハリリ5箇所、樹皮残存	126-柱根12		
	SP20 柱根13 ハコヤナギ属	直さ88.4・底部径10.3・上部径10.2	丸柱、上部ワレ、柱材弯曲、ハリリ4箇所	126-柱根13		
	SP21 柱根14 サクラ属類	直さ87.9・底部径13.0・上部径13.6	丸柱、上部ワレ、ハリリ5箇所、樹皮残存	126-柱根14		



第125図 大橋家与力屋敷立柱建物跡出土柱材実測図(1)



第126図 大橋家与力屋敷立柱建物跡出土柱材実測図(2)

第3項 大橋家与力屋敷における建物地下構造タイプ別分類集成

大橋家与力屋敷では、建物地下構造の遺存状態が良好な地点がある。調査成果を基に建物地下構造を分類し、その類型を示すこととしたい。以下に示した13類型により、松江城下町遺跡における建物地下構造を概ね把握できると思われるが、今後の調査事例によっては補正・追加が必要となる。

地下構造の類型（第127図）

A類 磁石建物に伴う地下構造

- 〔A-1類〕 単独で磁石を置くもの。
- 〔A-2類〕 磁石を安定させるために、石の下に根石（小礫）を敷くもの。
- 〔A-3類〕 高さ調整のために磁石の上に石を据えるもの。柱材の根腐れにより、石をかませたもの。

B類 挖立柱建物に伴う地下構造

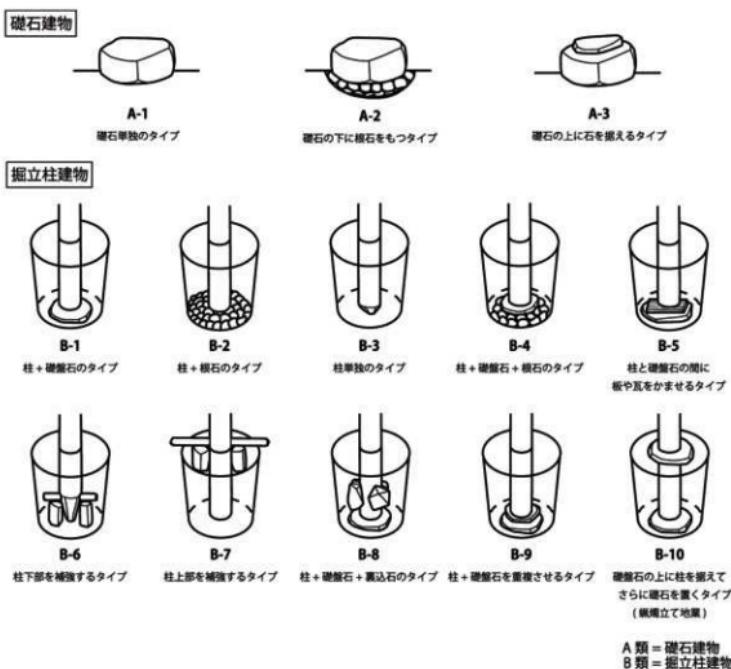
- 〔B-1類〕 磁盤石の上に柱を据えるもの。柱穴床面に磁盤石を置き、その上に柱を据える。
- 〔B-2類〕 根石の上に柱を据えるもの。柱穴床面に根石を置き、その上に柱を据える。
- 〔B-3類〕 単独で柱を据えるもの。柱基部に先端加工を施すものが多い。
- 〔B-4類〕 根石の上に磁盤石を置き、その上に柱を据えるもの。
- 〔B-5類〕 磁盤石の上に木板や平瓦を置き、その上に柱を据えるもの。高さ調整の可能性がある。
- 〔B-6類〕 柱基部を横木や根石（栗石）で補強するもの。横木は門状に柱を貫通する。
- 〔B-7類〕 柱上部を横木や根石（栗石）で補強するもの。柱が傾かないように補強する。
- 〔B-8類〕 磁盤石の上に柱を据え、柱基部周囲を裏込石で固めるもの。
- 〔B-9類〕 磁盤石を2つ以上重複させて、その上に柱を据えるもの。
- 〔B-10類〕 磁盤石の上に柱を据え、さらに磁石を置くもの。蟻燭立て地業。

大橋家与力屋敷（B屋敷）における蟻燭立て地業の可能性について（第128図）

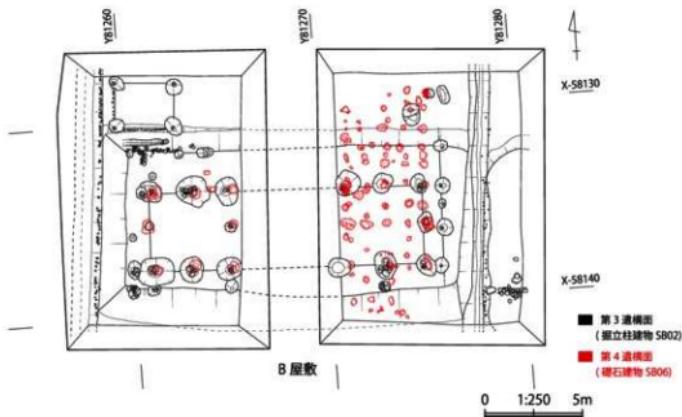
本報告では大橋家与力屋敷（B屋敷）第3遺構面で検出した掘立柱建物跡SB02と第4遺構面の磁石建物跡SB06を別々の遺構として取り扱ったが、検出位置が一部重複することから、磁石建物に伴う沈下防止のための地下構造（蟻燭立て地業）の可能性が指摘される。

以下に示す1～4の理由から、意図的に蟻燭立て地業を施したのではなく、屋敷地造成土が軟弱地盤であるため、磁石建物を構築する際に抜けない柱は残しておいたことが考えられる。そのため、第4遺構面機能面直下で柱材の上端部がほぼ同じレベルで切断されているものと推察する。

1. すべての磁石の下に柱材が残っていない。また、柱穴と磁石が重複しないところがある。
2. ひとつの建物に対して蟻燭立て地業をするのであれば、すべての磁石の下に同様の地下構造をもたせていないと不自然である。
3. 松江城下町は低湿地に形成された城下町であることを前提に、このような場所では柱材がすぐに水を吸い上げて腐敗することから、掘立柱建物は長く機能していなかったのではないか。
4. 富田川河床遺跡では、17世紀代初頭以前までは掘立柱建物が多く、17世紀代初頭には掘立柱建物と磁石建物が混在する。その後、17世紀代前半～後半にはほとんどが磁石建物となる⁽³⁰⁾。松江城下町が同様の変遷を辿るとは言い難いが、当地では17世紀代中頃に建物の転換期がある。



第127図 大橋家与力屋敷における建物地下構造模式図



第128図 大橋家与力屋敷調査区SB02・SB06合成図：B層数

第5節 結語

今回報告した武家屋敷調査区と大橋家与力屋敷調査区の発掘調査では、重要な調査所見がもたらされることとなった。

本章第1～2節では遺構・遺物を詳細に検討し、本遺跡の位置づけをおこなった。ここでは、そこから導かれる成果を基に城下町造成以前・堀尾期・京極期・松平期（前半）・松平期（後半）に区分して各期の様相を要約し、今後の課題について触れることで本書の結語としたい。

第1項 各期の様相

1. 城下町造成以前

城下町造成以前の旧地表面がこの時期にある。大橋家与力屋敷調査区では、旧地表面以下の土層から15世紀代後半を示す中国白磁皿が出土した。この遺物の出土により当地では旧地表面に堆積する茶褐色有機質土（ラミナ層）は15世紀代後半を過らないことが指摘でき、重要な調査成果と言える。

松江城下町遺跡発掘調査成果では、母衣町・北田町で水田畦畔が検出されており、城下町造成以前の環境を考える上で貴重な調査所見となっている。

2. 堀尾期の様相

A層は城下町造成以前の旧地表面上に盛られた最初の造成土であり、これを基盤層とする第1遺構面を堀尾期とした。

武家屋敷調査区では城下町初期造成段階に比定する素掘溝SD01を検出している。この素掘溝は、松江城下町遺跡のうち調査例の多い殿町・母衣町において数多く検出されており、町割りの道路に沿って掘削されている素掘の大溝である。南田町でも道路に沿って掘削されている状況が明らかとなり、城下町（武家地）全域に大溝が存在する可能性が高くなったものと捉えている。

大溝の性格は不明な点が多く、現段階で明確な結論は導き出せないが、明瞭な屋敷区画割り・屋敷地造成土の採掘・屋敷地造成時の排水など複合的な性格が想定される。この大溝掘削によって、地盤の排水をおこなうと同時に屋敷地造成を進めていたことが、城下町初期造成段階において基本となる事業であったことが考えられる。

大橋家与力屋敷調査区では、掘立柱建物跡や土坑を検出しており、これらは城下町初期造成に関連した飯場の遺構を想定している。

3. 京極期の様相

武家屋敷調査区では、明確に京極期のものと提示できる遺構・遺物の検出には至っていない。

大橋家与力屋敷調査区の第2遺構面を京極期と考えているが、基本的に畠地として利用された時期であり（耕作土中に京極期に廃棄された遺物が含まれている可能性も否定できず）、遺構面からこの時期の遺物を抽出することは困難であった。そのため、検出した畠跡は堀尾～京極期の間に機能していた遺構面として幅をもって考えている。

大橋家与力屋敷調査区で出土したこの時期の遺物組成は、「肥前陶器は胎土目と砂目が共伴して出土するが、肥前磁器（伊万里）の出土は認められない」という点が特徴的である。

4. 松平期（前半）の様相

武家屋敷調査区では、遺構の遺存状態が散漫で明確な松平期前半の遺構を提示するのは難しい。

大橋家与力屋敷調査区では、与力屋敷の建物が展開する第3遺構面以後の遺構を松平期のものと考えている。松平期前半としたのは、「掘立柱建物跡を検出した第3遺構面」と「礎石建物跡を検出した第4遺構面」である。第3遺構面以降から肥前磁器（伊万里）の出土が認められる点が特徴的で、松平期前半の上限は松江藩主である松平直政が松江に入部した1638年だが、下限となる第4遺構面の廃絶時期は定かではない。第4遺構面出土遺物の生産地年代は1690年代が最も新しいものとなる。

第3遺構面では、造成手法として「島状整地」が用いられている。松江城下町遺跡において、現在までに確認した島状整地は5例あり⁽³³⁾、時間的な位置づけは堀尾期初頭～松平期初頭となっている。今後の調査の進展によって類例が増加することにより、松江城下町では通例的な造成手法となり得る可能性を含んでいる。

さらに、島状整地直後の段階に位置づけられる鍛冶炉SL01を検出し、建物を構築する段階で敷地内において鉄鍛冶をおこなっていたことが判明した。拝領した屋敷地内で鉄鍛冶をおこなっていたという点が重要な意味をもつものと捉えている。

第4遺構面では、出土遺物に被熱痕跡をもつものがあり、土層断面の一部では焼土や炭が認められた。これらは火災の痕跡と思われ、第4遺構面～第5遺構面の間に屋敷の建替えをおこなっていたことが想定される。

5. 松平期（後半）の様相

武家屋敷調査区では、陶磁器類・瓦・建築部材などを含む大形土坑があり、幕末～近代の武家屋敷解体に伴う一括廃棄土坑と考える。大橋家与力屋敷調査区では、第5遺構面・第6遺構面として遺構面ごとの調査がおこなわれているが、搅乱のため遺構面の遺存状態が散漫である。

遺構面出土遺物として取り上げられている遺物の中には、明らかに後世の遺物や混入品があり、当遺跡の調査成果のみでの分類は難しい。更なる整理が必要であり、今後の調査成果に期待したい。

第2項 今後の課題

武家屋敷と大橋家与力屋敷の発掘調査によって明らかとなった事実も多いが、本報告を作成する中で様々な問題点や今後の課題とすべき点も見えてきた。これらを提示しておわりの言葉としたい。

まず、遺構の観点から武家屋敷で確認した「素掘の大溝」、大橋家与力屋敷で確認した「島状整地」の2点である。現段階において素掘の大溝の存続期間と廃絶時期、そして機能目的が定かではない。その理由として調査区に制約があり、全容を把握することが困難なことが挙げられる。今後の調査によって城下町初期造成時の屋敷地・道路面との切り合い関係を明確にすることが求められる。

島状整地については、屋敷地の表側では良質なシルト質粘土と砂を互層状に堆積させて版築状に固く叩き締めて整地するということが明らかとなったが、屋敷地の側面・裏側の状況については更なる検証が必要となる。また、与力屋敷では現在までに実施した調査成果から、各屋敷における整地のあり方が複雑であり、島状整地以後の段階には屋敷ごとに多様な造成をおこなっていることが考えられ

る。広義に松江城下町として捉えた場合、島状整地は堀尾期の城下町初期造成段階から施されている造成手法であることが明らかとなっており、松平期においても同様な造成手法が用いられている。松江城下町では時期を問わない造成手法となっていたものと捉えられるが、連続性・非連続性を含め、この地域にとって屋敷地造成の通例的な基本事業となるのかどうか、今後の事例を待ちたい。

次に、遺物の観点からである。本報告において大橋家与力屋敷の遺物組成を提示したが、この組成は陪臣屋敷の組成であり、大橋家本体である家老屋敷の遺物組成は解明できていない。今後の発掘調査の進展によって明らかとされるべき点ではあるが、大橋家家老屋敷と与力（陪臣）屋敷の出土遺物を対比させることによって、松江城下町遺跡における階層性の比較を提示する際の一助となることが期待される。

註

- (40) 京極氏の統治期間自体が1634~37年のわずか3年余りほどしかなく、松江城下町遺跡（殿町287：松江歴史館）の調査例のように墨書き木簡の出土で時期が特定できない限り、明確に京極期と位置づけて提示することは難しい。
- (41) 松江城下町遺跡では、城下町造成当初に位置づけられ、町割りの道路に沿って掘削される素掘の大溝である。
- (42) 松江城下町遺跡（母衣町180-28・29外）では旧地表面形成土（Ia層）を水田耕作土・畦畔として使用しており、城下町造り以前に位置づけられている。
- (43) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要19』2009年3月
- (44) 現在までに屋敷地の造成手法として島状整地を確認した地点は、松江城下町遺跡（母衣町68）で堀尾期の北西屋敷・南西屋敷、松江城下町遺跡（母衣町180-28・29外）で堀尾期の屋敷、松江城下町遺跡（南田町136-13外）で松平期の与力屋敷の4例がある。本報告に掲載した松江城下町遺跡（南田町132外）の松平期の与力屋敷は5例目となる。
- (45) 四国城下町研究会『近世の屋敷境とその周辺』2006年 第7回四国城下町研究会のうち高松城下町の事例報告による。
- (46) 表8に示した想定パターンはこれ以外にも考えられるが、主だったものについて掲載した。旧地表面は城下町造成以前に位置づけているが、これは城下町初期造成土をA層とした上で成り立つ考え方であり、現段階で明確に結論を導き出せないことからD～Iの可能性を提示している。
- (47) A屋敷・C屋敷は搅乱部分を含むことから、ここでは遺存状態が良好なB屋敷のものを取り扱った。
- (48) 松江城下町遺跡（殿町287）の北屋敷では、山を削って運び込まれた黄色の松江層の軟砂岩が造成土に使用されている。
- (49) 松江城石垣について、昭和26年に島根大学文理学部教授 山口鎌次氏が岩石について調査報告書を提出している。
- (50) 大崎海地区の石切場は、岡崎進二郎・飯塚康行『松江城の石垣と産地』『日引』第10号2007年による。来待地区的石切場は、島根県教育委員会『来待石石切場遺跡群』1998年3月による。
- (51) 来待石は、古くは古墳時代の石室などに利用され、江戸時代前半には灯籠・石仏・五輪塔などに使用されている。
- (52) 島根県教育委員会『富田川一飯塚川河川改修に伴う富田河床遺跡発掘調査報告書(4)』1984年3月
- (53) 註(44)と同じ。

主要参考文献

- ・大手前通りの歴史を調べる会『大手前通りの歴史を調べる会調査結果報告書』2004年3月
- ・松尾 寿『城下町松江の誕生と町のしくみ－近世大名堀尾氏の描いた都市デザイナー』2008年11月
- ・山根正明『堀尾吉晴－松江城への道』松江市ふるさと文庫6 2009年1月
- ・関西近世考古学研究会『関西近世考古学研究18－消費地からみた国産陶磁器の出現と展開－』2010年12月
- ・島根県松江市教育委員会 松江市教育文化振興事業団 松江市文化財調査報告書 第139集
『松江歴史館整備事業に伴う松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）発掘調査報告書』2011年3月
- ・島根県松江市教育委員会 松江市教育文化振興事業団 松江市文化財調査報告書 第148集
『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書1』2012年3月
- ・島根県松江市教育委員会 松江市教育文化振興事業団 松江市文化財調査報告書 第154集
『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書2』2013年3月
- ・島根県松江市教育委員会 松江市教育文化振興事業団 松江市文化財調査報告書 第156集
『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書3』2014年3月
- ・島根県松江市教育委員会 松江市教育文化振興事業団 松江市文化財調査報告書 第157集
『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書4』2014年3月

遺物 番号	面	遺構名	種類	形態	文様	装飾	法量: cm(標準値)			生産地	九胸 編年	生産 年代	備 考		
							口径	底径	高さ						
40-11	2面	遺構外	罐	丸形	施子文	染付	(9.2)	—	(5.7)	肥前	B	1650~1690	口縁部~胴部のみ残存。施付無地。		
40-12	2面	遺構外	罐	丸形	—	透印文	—	(4.6)	(5.2)	肥前	B	1650~1690	胴部~底部のみ残存。施付無地。		
40-13	2面	遺構外	罐	楕	—	草花文	染付	(9.7)	—	(4.5)	肥前	B	1600~1780	口縁部~胴部のみ残存。	
40-14	2面	遺構外	罐	楕	—	鳥文	染付	8.4	3.6	5.7	肥前	B	1600~1780	底部。	
40-15	2面	遺構外	罐	楕	—	透印文	染付	(11.4)	6.2	6.6	肥前	V	1780~1860	見込みに焼成化された千鳥文。	
40-16	2面	遺構外	罐	楕	広葉形	施文	染付	(9.4)	—	(3.4)	肥前	V	1780~1860	口縁部~胴部のみ残存。	
41-1	2面	遺構外	罐	楕	手形	西方繪	染付	10.4	6.0	7.5	肥前	V	1780~1860	見込みに焼成化された千鳥文。	
41-2	2面	遺構外	罐	楕	透印文	草花文	染付	10.7	8.6	3.3	肥前	V	1780~1860	見込みに草花文と、垂葉文。	
41-3	2面	遺構外	罐	楕	平形	幼鳥草文	染付	(11.0)	(7.2)	1.8	肥前	V	1600~1780	軸ノリの跡有り。見込みに意匠文。	
41-4	2面	遺構外	罐	楕	—	文文	染付	—	—	4.5	3.3	肥前	V	1780~1860	杏叶形。
41-5	2面	遺構外	罐	楕	—	風文	染付	(10.0)	—	(2.2)	肥前	V	1600~1780	口縁部から腰窓の裏。	
41-6	2面	遺構外	罐	楕	—	透印文	染付	(11.6)	—	(3.2)	肥前	V	1600~1780	外縁のひみ鉢輪、扇花形のつまみ。染付の裏。	
41-7	2面	遺構外	罐	大人	半円形	透印文	染付	9.6	6.5	6.2	肥前	V	1600~1780	口縁部。	
41-8	2面	遺構外	土鍋	楕(小)	灯明形	—	—	8.2	5.9	2.2	肥前	—	—	吹き墨で口縁部全面とモチーフ。底部は削除。	
41-9	2面	遺構外	土鍋	楕(小)	—	—	—	—	5.3	(1.0)	肥前	—	—	外縁に「口七口」の墨書きあり。底部は削除。	
41-10	2面	遺構外	土鍋	楕(小)	—	—	—	8.2	5.6	1.8	肥前	—	—	底部は削除。	
41-11	2面	遺構外	土鍋	楕(小)	—	—	—	8.0	4.3	1.3	肥前	—	—	底部は削除。	
42-1	2面	遺構上中	陶器	裏出板	円筒形	字文	黄釉	1.7	4.3	7.4	在地	—	19次半瓦降	布志名。外側に一列墨書きのロマーナあり。	
42-2	2面	遺構上中	陶器	楕	浅手彫形	草文	黄釉	10.9	—	(5.0)	在地	—	1867年1月降	布志名。底に墨書き山形のロマーナあり。	
42-3	2面	遺構上中	陶器	蓋	—	竹・文文	黄釉	—	9.4	3.7	在地	—	19次半瓦降	布志名。竹に彫られたつまみ。蓋物の裏。	
42-4	2面	遺構上中	ガラス瓶	瓶	—	エンボス	1.0	2.3	0.8	—	—	朝前半	側面に「ヨウムト」焼(静井焼)のエンボス。		
42-5	2面	遺構上中	ガラス瓶	瓶	日墨瓶	—	エンボス	1.6	2.6	5.8	—	—	1899年1月降	側面に「大吉堂窯」、「大学日墨」のエンボス。	
42-6	2面	遺構上中	ガラス瓶	瓶	—	—	エンボス	2.4	6.8	16.1	—	—	明治~大正	側面に「船江製陶」のエンボス。	

表21 武家屋敷 錢貨観察表

遺物 番号	面	遺構名	種類	形態	材質	法量		備 考
						大きさ(cm)	重量(g)	
33-8	2面	SK07	銭貨(銀両)	—	真鍮	長2.64/L幅1.4/C厚0.9	7.46	古銭(古宮本)。

表22 武家屋敷 金属製品遺物観察表

遺物 番号	面	遺構名	種類	形態	材質	法量		備 考
						大きさ(cm)	重量(g)	
33-6	2面	SK07	櫛	—	真鍮	長2.64/L幅1.4/C厚0.9	7.46	火薙の跡後方に火薙銀の穿孔あり。

表23 武家屋敷 石製品遺物観察表

遺物 番号	面	遺構名	種類	材質	法量		備 考
					大きさ(cm)	重量(g)	
33-7	2面	SK07	火打石	石英	長さ5.4/L幅3.7/C厚2.1	49.00	石の側縁部に斜打があり。使用頻度が少ない。

表24 武家屋敷 木製品遺物観察表

遺物 番号	面	遺構名	種類	材質	法量		備 考			
					大きさ(cm)	高さ(cm)				
33-9	2面	SK07	漆器	漆	10.3	—	内:赤色、外:黒色。外側に菊花文。			
33-10	2面	SK07	漆器	楕	11.5	6.7	内:赤色、外:黒色。外側に赤帯地で七輪足。			
33-11	2面	SK07	下駄	丸型込込下駄	22.7	10.9	6.7	2.9	絹目	表面7cm、指の紋跡あり。ホゾ穴駄底側面ぞつ。
33-12	2面	SK07	下駄	角型込込下駄	20.5	12.5	6.8	2.6	絹目	表面6.8cm、指の紋跡あり。ホゾ穴駄底側面ぞつ。
33-13	2面	SK07	油物	被蓋	16.0	17.0	—	0.5	絹目	連通地。丸、孔、本打あり。
33-8	2面	SK07	漆器	蓋	10.2	—	3.0	—	—	内:赤色、外:黒色。再漆に舟形地。
33-9	2面	SK07	漆器	楕	14.2	6.8	3.6	—	—	内:赤色、外:黒色。外側に舟形地。
33-10	2面	SK07	油物	被蓋	10.7	—	—	1.0	板目	練皮迹あり。
33-11	2面	SK07	木箱	—	17.3	17.3	13.8	—	絹目	絹道穴開側面。
33-5	2面	SK07	枝	—	4.6	3.3	—	φ3.1	板目	円柱で枝根の跡状。
33-6	2面	SK07	枝	—	7.8	2.5	—	φ2.3	絹目	圓盤狀。
33-7	2面	SK07	枝	—	21.9	0.8	—	φ0.6	—	白木。
33-8	2面	SK07	青	—	22.8	0.9	—	φ0.2	—	白木。
33-9	2面	SK07	青	—	26.2	0.7	—	φ0.5	—	白木。
33-10	2面	SK07	下駄	丸型込込下駄	21.8	7.5	—	2.4	絹目	漆底欠損。指の紋跡あり。ホゾ穴駄底側面ぞつ。左足尾。

大橋家与力屋敷遺物觀察表

表26 大橋家与力屋敷 錢貨觀察表

番号	面	遺物名	種類	面積(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	残存率(%)	質地/表面	備考	
										大きさ(cm)	重量(g)
75-13	2面	遺構外	銭文通貫	24.27	6.44	1.29	3.11	100	0.13	北宋998年(開鉄局)。	
83-9	4面	遺構外	銭文通貫	31.86	5.57	1.35	3.49	100	0.14	×日貫(古貫通)。	
83-10	4面	遺構外	銭文通貫	24.22	5.77	1.08	3.00	100	0.12	×日貫(古貫通)。	
95-11	5面	遺構外	銭文通貫	23.50	6.54	1.22	3.04	100	0.13	×日貫(古貫通)。	
96-11	6面	遺構外	銭文通貫	24.82	5.94	1.23	2.66	95	0.10	×日貫(古貫通)。	
96-15	6面	遺構外	銭文通貫	24.61	5.52	1.21	2.35	100	0.10	×日貫(古貫通)。	
96-16	6面	遺構外	銭文通貫	24.91	6.08	1.67	2.73	100	0.11	×日貫(古貫通)。	
96-17	6面	遺構外	銭文通貫	24.36	5.22	1.46	2.23	90	0.09	×日貫(古貫通)。	
96-18	6面	遺構外	銭文通貫	24.46	5.47	1.62	2.17	85	0.09	×日貫(古貫通)。	
96-19	6面	遺構外	銭文通貫	25.71	6.05	1.43	3.20	100	0.12	×日貫(古貫通)。	

表27 大橋家与力屋敷 金属製品遺物觀察表

番号	面	遺物名	種類	形状	材質	法 番		備考
						大きさ(cm)	重量(g)	
62-1	2面	SN01	鎌倉(銀百)	一	真鍮	長さ4.7/幅1.6/厚口0.8	5.10	大皿はや大きさ。肩を斜めにわざめる。
62-2	2面	SN01	鎌倉(銀百)	一	真鍮	長さ5.6/幅1.2/口付0.35	3.80	肩は斜状におさめ、首部を口付に向かって細くする。
62-3	2面	SN01	鎌倉(銀百)	一	真鍮	長さ5.5/幅1.0/口付0.45	3.20	肩は斜やかに傾きをもち、斜状におさめる。口付を丸く加工する。
62-4	2面	SN01	納付	小判形	真鍮	長さ4.2/幅1.1/厚0.9	10.00	刀銅鏡。側面に鋸をもたせる。
62-5	2面	SN01	其の金具	一	真鍮	長さ3.6/幅0.6/厚0.7	1.80	中心に方形の丸をもち、その両側も穿孔する。
62-6	2面	SN01	釘	丸釘	真鍮	長さ4.5/幅0.5/厚0.4	3.90	蝶形の頭。L字形に曲がる。
62-7	2面	SN01	釘	丸釘	真鍮	長さ3.5/幅0.6/厚0.5	2.90	コの字状の頭。
62-8	2面	SN01	小柄	方形	真鍮	長さ9.3/幅1.1/厚0.5	10.45	刀刃部に鋸の模様。刃部は一字文字。片側外側に羽根状。
75-12	2面	遺構外	鎌倉(銀百)	一	真鍮	長さ4.5/幅0.6/厚0.5	4.60	大皿は欠損。火打下の複数体が残す。
95-6	6面	遺構外	鎌倉(銀百)	一	真鍮	長さ8.1/幅1.7/口付0.8	6.60	肩を大きく、斜めに向かってやや細くする。
95-7	6面	遺構外	鎌倉(銀百)	一	真鍮	長さ6.5/幅0.6/厚0.8	19.50	肩は坂やかに傾きをもち、斜状におさめる。
95-8	6面	遺構外	鎌倉(銀百)	一	真鍮	長さ8.1/幅0.6/厚0.8	4.20	小口は欠損。直線的な形状。
95-9	6面	遺構外	刀刃	小判形	真鍮	長さ8.6/幅2.2/厚0.1	5.52	外縁部はイケ目状。

表28 大橋家与力屋敷 石製品遺物觀察表

番号	面	遺物名	種類	材質	法 番		生産地	備考
					大きさ(cm)	重量(g)		
62-9	2面	SN01	火打石	麻理	長さ3.4/幅2.9/厚さ1.3	7.00	石の側面部に錆斑あり。使用頻度が多い。	
62-10	2面	SN01	火打石	石英	長さ3.9/幅3.6/厚さ2.9	46.08	石の側面部に錆斑あり。使用頻度は少ない。	
95-10	5面	遺構外	火打石	赤瑪瑙	長さ3.2/幅1.0/厚0.1	48.42	石の側面部に錆斑あり。使用頻度は少ない。	

表29 大橋家与力屋敷 土製品遺物觀察表

番号	面	遺物名	種類	形状	胎土	施釉	法 畑		生産地	備考	
							大きさ(cm)	重量(g)			
83-7	4面	遺構外	土製瓦具	土人形	火神	褐色	透明	19.33/幅4.7	18.21	—	堅厚成形。外側に露れ残存。
83-8	4面	遺構外	土製瓦具	土人形	火神	褐色	無釉	長55.7/幅2.6	34.00	—	外側に露れ残存。底部に孔あり。

表30 大橋家与力屋敷 木製品遺物觀察表

番号	面	遺物名	種類	各部位	法 畑		本取り	備考	
					大きさ(cm)	重量(g)			
52-10	5面	遺構外	漆器	漆底板	—	7.9	9.9	1.1	漆張り。組合高台内に朱漆で「[工]中や」の文字。
52-11	5面	遺構外	漆器	漆	18.6	10.4	6.6	1.0	組合版面で刷り出し。蓋付の跡。
52-12	5面	遺構外	下軸	向型前盾下軸	21.7	10.3	6.0	1.7	寶刀
73-3	5面	SK01	漆器	漆	9.1	—	—	—	内赤色/外黒色。外側に赤絵。
73-4	5面	SK01	漆器	漆	—	4.7	—	—	内黒色/外黒色。外側に赤絵仕切。
73-5	5面	SK01	漆器	漆刀	21.4	3.6	—	0.4	寶刀。
75-14	5面	遺構外	漆器	漆	—	6.5	7.6	—	—
75-15	5面	遺構外	漆器	漆底	14.9	—	—	0.6	寶刀。
81-11	4面	遺構外	漆器	蓋	8.7	—	—	—	内赤色/外黒色。外側に丸文。
81-12	4面	遺構外	漆器	漆	—	5.8	5.4	—	内赤色/外黒色。外側に赤絵仕切。
81-13	4面	遺構外	漆器	底板	15.2	—	—	1.0	丸つくり。
81-14	4面	遺構外	漆器	漆	7.3	4.4	—	1.0	内赤。一度欠點。
95-12	5面	遺構外	下軸	丸型前盾下軸	22.0	8.3	1.8	1.1	板口
95-13	5面	遺構外	下軸	丸型底込下軸	21.7	8.7	3.2	2.3	板口
									高さ7.0cm。物の取扱あり。
									高さ3.2cm。+六面後1箇所ずつ。物の取扱あり。右足用か。

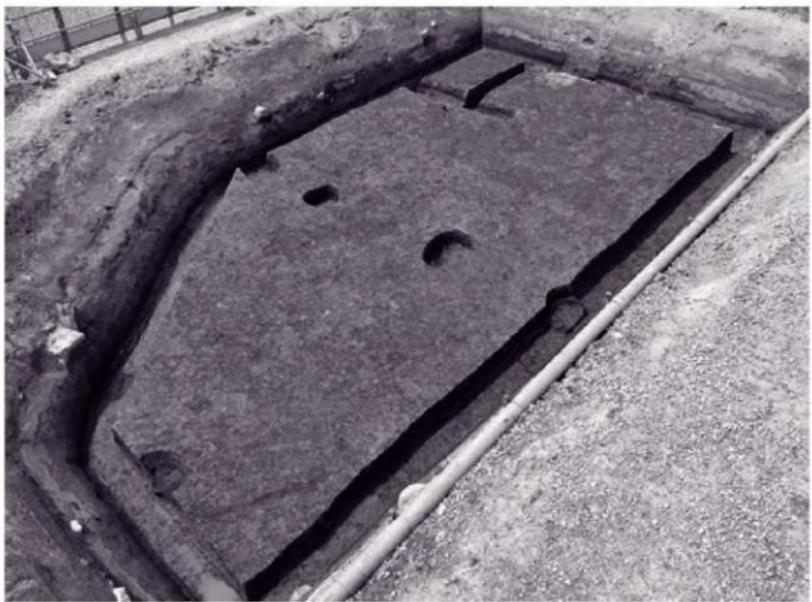
表31 大橋家与力屋敷 瓦製品遺物觀察表

番号	面	遺物名	種類	形状	胎土	文様	法 畑		本取り	備考
							大きさ(cm)	重量(g)		
62-11	5面	SN01	新丸瓦	—	灰陶	連珠・巴	外径10.6/内径9.6/厚52.1	141.5	連珠二巴文。左毛。	
62-12	5面	SN01	新丸瓦	—	灰陶	連珠・巴	外径10.6/内径9.6/厚52.0	80.0	連珠二巴文。左毛。被焼鉄跡あり。	
62-13	5面	SN01	平瓦	—	灰陶	—	長31.0/幅16.6/厚51.8	283.0	被焼鉄跡あり。	
62-14	5面	SN01	彫込瓦	—	灰陶	—	長51.0/幅12.0/厚53.4	464.3	コビレ・巴。右目印。	
62-15	5面	SN01	丸瓦	五瓣式	灰陶	—	長32.7/幅16.0/厚52.1	1370.0	五瓣式丸瓦。コビレ・巴。右目印。	

写 真 図 版



武家屋敷調査区（西側） 城下町造成以前の旧地表面（南東から）

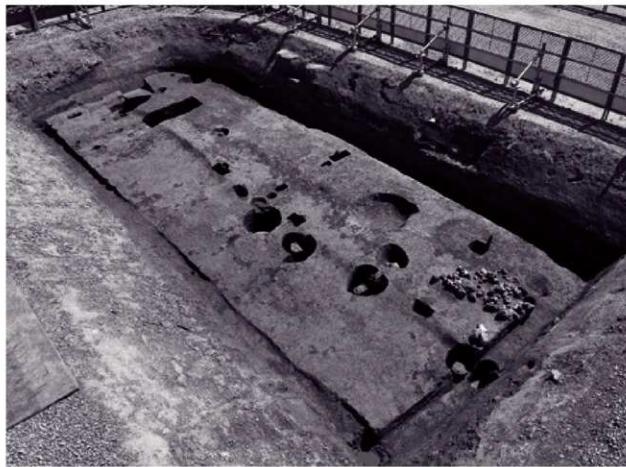


武家屋敷調査区（中央） 城下町造成以前の旧地表面（南東から）

図版2 武家屋敷



武家屋敷調査区（西侧） 第1遺構面（南東から）



武家屋敷調査区（西侧） 第1遺構面（南西から）



武家屋敷調査区（中央）第1遺構面（南東から）



武家屋敷調査区（東側）第1遺構面（南西から）

図版 4 武家屋敷



武家屋敷調査区(西側) 第1遺構面 素掘溝 SD01(南から)



城山北公園線道路の鉄型路と SD01(東から)



SD01 土層断面(南西から)



SD01 埋土中のシダ敷き(東から)



第1遺構面 柱穴 1



第1遺構面 柱穴 2



第1遺構面 柱穴 3(柱の当たり痕跡)



第1遺構面 柱穴 4(柱穴半截)



第1遺構面 柱穴 5



第1遺構面 柱穴 6(柱と礎盤石)



第1遺構面 柱穴 7



第1遺構面 柱穴 8

図版 6 武家屋敷



第1遺構面 SK01
(西から)



第1遺構面 SK02
(南から)



第1遺構面 磚數 SK01
(北から)



図版 8 武家屋敷



第2遺構面 SK05(南西から)



第2遺構面 SK06(南から)



武家屋敷調査区(東側) 第2遺構面 SK07(南から)



SK07出土 溝切折敷底板



SK07出土 角型差込下駄(第33図-12)



武家屋敷調査区(中央) 第2遺構面 SK08(南西から)



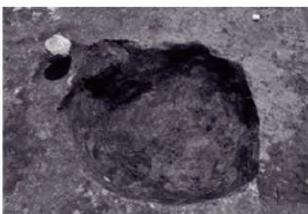
SK08 埋土中の木材・木片(西から)



SK08 出土 陶器・木箱(西から)



SK08 精査状況



第2遺構面 SK09(北から)

図版 10 大橋家与力屋敷



大橋家与力屋敷調査区(東側) 城下町造成以前の旧地表面(南東から)



旧地表のラミナ状堆積と盛り返される土層



旧地表と旧地表以下の土層堆積状況



旧地表面上の植物相(地衣類)



旧地表面直上出土 陶器(第46図-2)



大橋家与力屋敷調査区(東側) 第1遺構面(南東から)



第1遺構面 SK14(南東から)



第1遺構面 SK16(南東から)



第1遺構面出土 肥前陶器皿(第52図-5)



第1遺構面出土 瀬戸・美濃陶器皿(第52図-8)

図版 12 大橋家与力屋敷



大橋家与力屋敷調査区（東側） 第2遺構面 岩跡 SN01(南東から)



第2遺構面 SN01 欠・畝間溝（南東から）



第2遺構面 埋籠 SK17(南から)



第2遺構面 埋籠 SK18(南から)

図版 14 大橋家与力屋敷



第3遺構面 鍛冶炉 SL01(南から)



鍛冶炉 SL01 断ち割り状況(南東から)



大橋家与力屋敷調査区(中央) 第3遺構面 B屋敷 : SB02(西側半分)、SB03、SD04(北西から)



B屋敷 : SB02(東側半分)、SD03(南東から)



B屋敷 : SB03(北東から)



島状整地：表口側の版築状土層堆積（北西から）



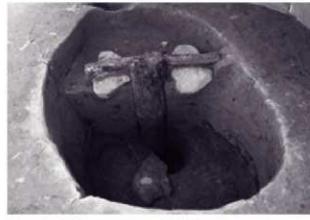
島状盛土部分台形状の土層断面（南西から）



第3遺構面 SB02 の北側柱穴 SP03(西から)



第3遺構面 SB02 の北側柱穴 SP07(南から)



第3遺構面 SB02 の南側柱穴 SP15(北から)



柱穴 SP15 断ち割り状況（北西から）



第3遺構面 柱穴 SP13 の柱と礎盤石（東から）



第3遺構面 SK20(西から)

図版 16 大橋家与力屋敷



第3遺構面 屋敷境 SD03(南から)



屋敷境 SD03 素掘溝土層断面(南から)



屋敷境 SD03 に付属する石列 SS01(南東から)



第3遺構面 屋敷境 SD04(南から)



屋敷境 SD04 溝東側肩部の杭列 1(西から)



屋敷境 SD04 溝東側肩部の杭列 2(北東から)



大橋家与力屋敷調査区(東側) 第4遺構面 B屋敷:SB06(東側半分)、SW01(北西から)



B屋敷:SB06(西側半分)(北東から)



屋敷境石垣 SW01 近景(南西から)



第4遺構面 屋敷境石垣 SW01(南から)

図版 18 大橋家与力屋敷



大橋家与力屋敷調査区(東側) 第5遺構面 B屋敷:SB07(東側半分)、SW02(南西から)



B屋敷:SB07(西側半分)(南東から)



第5遺構面 磚敷 SX02(南東から)



第5遺構面 屋敷境石垣 SW02(南から)



第5遺構面 埋桶 SK22(北から)



埋桶 SK22 完掘状況(西から)



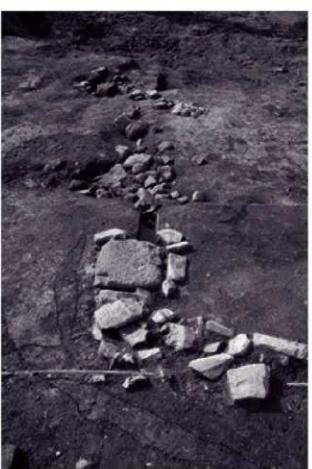
第5遺構面 埋甕 SJ01(西から)



埋甕 SJ01 完掘状況(東から)



第6遺構面 石列 SS02(北から)



石列 SS02 南側(東から)

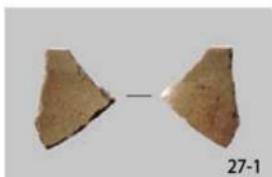
図版 20 立会調査



立会調査 MJR312 SW03 石垣近景(北から)



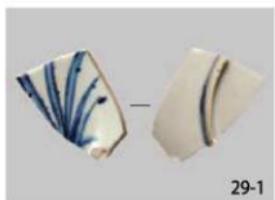
立会調査 MJR381 調査区西側土層断面(東から)



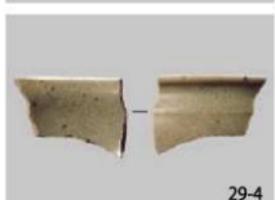
第1遺構面 SK01 出土遺物



第1遺構面 SK02 出土遺物



29-1



29-4

29-2

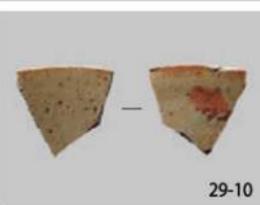
29-5



29-6

29-7

29-8



29-9

29-10

29-11

第1遺構面遺構外出土遺物 (1)

図版 22 武家屋敷



第1遺構面遺構外出土遺物 (2)



第2遺構面 SK07 出土遺物 (1)



第2遺構面SK07出土遺物(2)

图版 24 武家屋敷

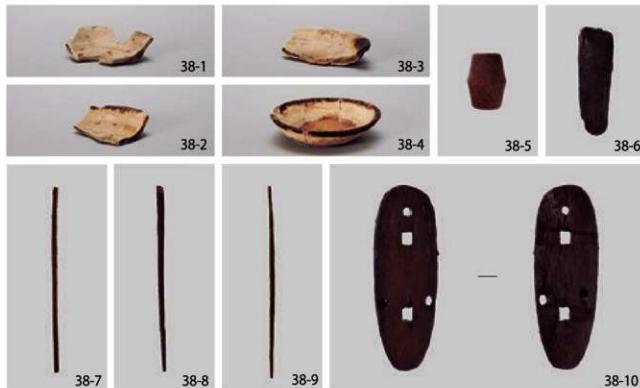


第 2 遗構面 SK08 出土遺物 (1)



第2遺構面 SK08 出土遺物(2)

図版 26 武家屋敷



第2遺構面SK09出土遺物



第2遺構面遺構外出土遺物(1)



第2遺構面遺構外出土遺物(2)

図版 28 武家屋敷



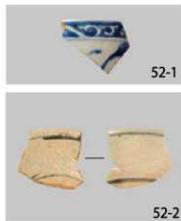
第2遺構面遺構外出土遺物(3)



近現代の遺物



旧地表面以下・直上出土遺物

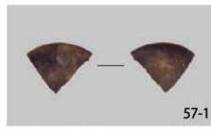


第1遺構面 SK13 出土遺物

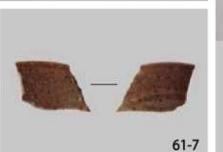
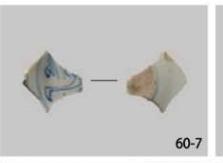
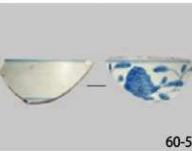
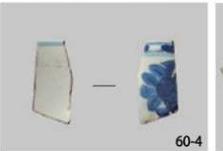
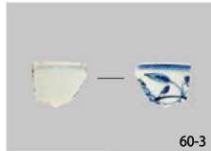
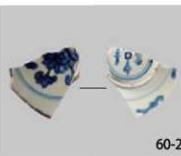


第1遺構面遺構外出土遺物

図版 30 大橋家与力屋敷



第2遺構面埋籠 SK17 出土遺物

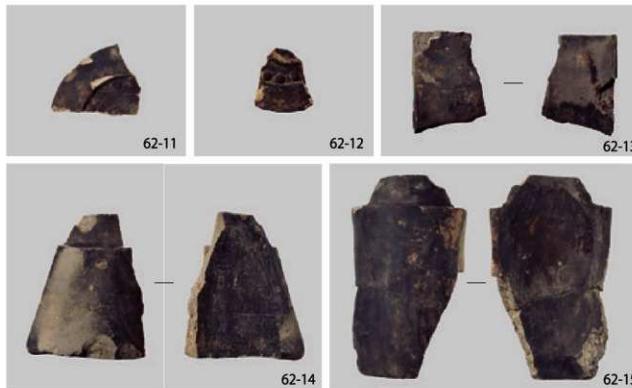


第2遺構面 5N01 耕作土中出土遺物 (1)



第2遺構面 SN01 耕作土中出土遺物 (2)

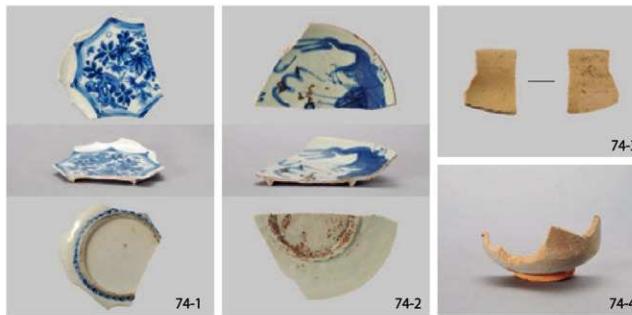
図版 32 大橋家与力屋敷



第2遺構面 SN01 耕作土中出土遺物(3)



第3遺構面 SK20(B 屋敷) 出土遺物



第3遺構面(A+B屋敷) 遺構外出土遺物(1)



第3遺構面(A・B屋敷) 遺構外出土遺物(2)

図版 34 大橋家与力屋敷



第3 遺構面 (A・B 屋敷) 遺構外出土遺物 (3)



第4 遺構面 (B 屋敷) 遺構外出土遺物 (1)

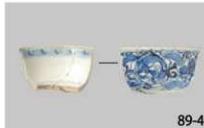


第4 遺構面(B屋敷)出土遺物(2)

图版 36 大橋家与力屋敷



第 5 遺構面埋桶 SK22・埋甕 SJ01 出土遺物



第 5 遺構面 SK23 出土遺物



第 5 遺構面 (B 屋敷) 遺構外出土遺物 (1)

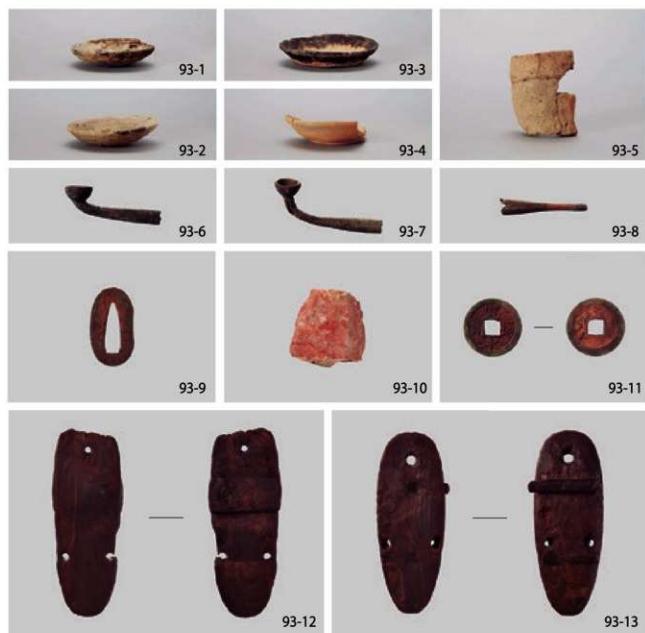


第5 遺構面(B 屋敷) 遺構外出土遺物(2)

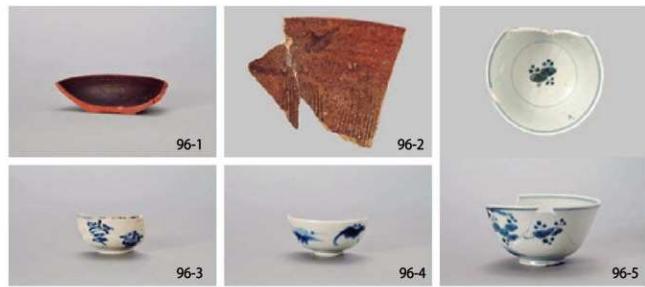
图版 38 大桥家与力屋敷



第 5 遺構面 (B 屋敷) 遺構外出土遺物 (3)



第5 遺構面(B屋敷) 遺構外出土遺物(4)



第6 遺構面遺構外出土遺物(1)

图版 40 大桥家与力屋敷



第 6 遺構面遺構外出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	じょうぎんきたこうえんせんとしけいかくがいいろじょうにともなうまえじょうかまちいせきはっくつちょうさほうこくしゃ5まつえじょうかまちいせきだい16ぶろくぶけやしき(みなみたまち127-17ほか)(みなみたまち127-14ほか)(みなみたまち130-3ほか)おおしけよりきやしき(みなみたまち132ほか)						
書名	城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書5 松江城下町遺跡第16ブロック 武家屋敷(南田町127-17外)(南田町127-14外)(南田町130-3外) 大橋家与力屋敷(南田町132外)						
副書名							
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第163集						
編著者名	小山泰生、門脇祐介						
編集機関地所 在地	島根県松江市教育委員会(松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL: 0852-55-5284 公益財團法人松江市スポーツ振興財団(埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月	2015年3月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
松江城下町遺跡 (南田町127-17外)	松江市 南田町 127番地17外	32201	D1026-87	35° 28' 21" 133° 03' 39"	20130401 ~ 20130705	261.4m ²	城山北公園線 都市計画 街路事業
松江城下町遺跡 (南田町127-14外)	松江市 南田町 127番地14外	32201	D1026-64	35° 28' 21" 133° 03' 40"	20130710 ~ 20130809	132.7m ²	"
松江城下町遺跡 (南田町130-3外)	松江市 南田町 130番地3外	32201	D1026-83	35° 28' 21" 133° 03' 41"	20130822 ~ 20130920	120.7m ²	"
松江城下町遺跡 (南田町132外)	松江市 南田町 132番地外	32201	D1026-97	35° 28' 22" 133° 03' 43"	20131119 ~ 20140711	582.1m ²	"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
松江城下町遺跡 (南田町127-17外)	城下町遺跡	江戸時代 ~ 明治時代	素掘溝 柱穴 土坑	陶器、磁器 土器、木製品 瓦、金屬製品 石製品	近世武家屋敷の一部を調査し、素掘溝・ 柱穴・土坑などを検出した。		
松江城下町遺跡 (南田町127-14外)	城下町遺跡	江戸時代 ~ 明治時代	柱穴 土坑	陶器、磁器 土器、木製品 瓦、金屬製品 石製品	近世武家屋敷の一部を調査し、柱穴・土坑などを検出した。		
松江城下町遺跡 (南田町130-3外)	城下町遺跡	江戸時代 ~ 明治時代	柱穴 土坑	陶器、磁器 土器、木製品 瓦、金屬製品 石製品	近世武家屋敷の一部を調査し、柱穴・土坑などを検出した。		
松江城下町遺跡 (南田町132外)	城下町遺跡	江戸時代 ~ 明治時代	畠跡 鍛冶炉 掘立柱建物跡 礎石建物跡 屋敷境	陶器、磁器 土器、木製品 瓦、金屬製品 石製品	近世武家屋敷(与力屋敷)の一部を調査し、 畠跡・鍛冶炉・掘立柱建物跡・礎石 建物跡・素掘溝と石垣の屋敷境・土坑など を検出した。		

松江市文化財調査報告書 第163集

城山北公園線都市計画街路事業に伴う
松江城下町遺跡発掘調査報告書5
松江城下町遺跡 第16ブロック
武家屋敷

(南田町127-17外)(南田町127-14外)(南田町130-3外)

大橋家与力屋敷

(南田町132外)

平成27(2015)年3月

発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

印刷 有限会社 松陽印刷所
島根県松江市学園南2-3-11